

55-3/8
1200701664330



始



17
30

№ 1120/1310



醫科大學助教授甲野斐譯

歌氏眼科學全

行餘堂藏版



歌氏眼科學目次

曲光裝置	一丁
視力檢查	二丁
光神檢定	四丁
周邊視力檢定	五丁
色神檢查	七丁
硝子眼鏡	十丁
屈折機及調節機檢查	十四丁
斜照法	二十二丁
檢眼鏡	二十三丁
眼緊張檢查法	四十四丁
眼球運動計法	四十五丁
近視眼	五十六丁
遠視眼	七十丁
亂視眼	七十七丁
不同視眼	八十五丁
調節機異常	八十七丁
角膜解剖要領	九十二丁
角膜炎	九十四丁
水泡性角膜炎	九十九丁
角膜匐行疹	百四丁
パンダス	百六丁
角膜實質炎	百八丁

外傷性角膜炎
 化膿性角膜炎
 角膜翳
 角膜葡萄腫
 虹彩解剖要領
 虹彩先天異常
 瞳孔散大
 虹彩充血
 成形性虹彩炎
 梅毒性虹彩炎
 漿液性虹彩炎
 化膿性虹彩炎
 虹彩新生物
 虹彩切除法
 脈絡膜解剖要領
 脈絡膜先天異常
 脈絡膜老人變化
 脈絡膜組織ノ孤立斷裂
 脈絡膜剝離
 脈絡膜充血
 脈絡膜出血
 單純脈絡膜炎
 漿液性脈絡膜炎

百十二丁
 百十五丁
 百二十六丁
 百二十九丁
 百三十一丁
 同丁
 百三十二丁
 百三十三丁
 同丁
 百三十五丁
 百三十九丁
 百四十一丁
 百四十二丁
 百四十四丁
 百四十五丁
 百四十七丁
 百四十九丁
 百五十一丁
 同丁
 百五十二丁
 百五十三丁
 同丁
 百五十四丁
 百五十五丁

成形性脈絡膜炎
 化膿性脈絡膜炎
 脈絡膜新生物
 虹彩脈絡膜炎
 前鞏膜脈絡膜炎
 後鞏膜脈絡膜炎
 毛樣體解剖要領
 成形性毛樣體炎
 單純毛樣體炎
 漿液性毛樣體炎
 化膿性毛樣體炎
 虹彩毛樣體炎
 水晶體解剖要領
 水晶體年齡的變化
 假性水晶體白內障
 前極白內障
 後極白內障
 水晶體損傷
 水晶體囊炎
 紡錘狀白內障
 斑點狀白內障
 星狀白內障
 層狀白內障
 全部先天性白內障

同丁
 百六十丁
 百六十四丁
 百六十八丁
 百七十二丁
 百七十三丁
 百七十五丁
 百七十七丁
 百七十八丁
 同丁
 百七十九丁
 同丁
 百八十八丁
 百九十一丁
 百九十二丁
 同丁
 百九十三丁
 同丁
 同丁
 百九十四丁
 百九十四丁
 同丁

水晶体軟化 百九十五丁
 乳様白内障 百九十六丁
 膜様白内障 同丁
 虹彩震盪症 同丁
 核白内障 百九十七丁
 蜜尿性白内障 同丁
 老人白内障 百九十八丁
 モルガニ1氏白内障 百九十九丁
 續發白内障 二百一丁
 外傷性白内障 二百二丁
 水晶体脱位 二百五丁
 浮游性白内障 二百六丁
 白内障手術 二百七丁
 白内障手術歴史 同丁
 白内障撥下法 二百九丁
 白内障切開法 同丁
 白内障線狀摘出法 二百十一丁
 瓣狀切法 二百十二丁
 周邊線狀摘出法 二百十三丁
 水晶体缺亡症 二百二十丁
 硝子体解剖要領 二百二十一丁
 硝子体老人變化 二百二十二丁
 硝子体潤濁 同丁
 硝子体潤濁 二百二十四丁

飛動蚊虻 二百二十七丁
 硝子体融解症 二百二十八丁
 網膜ヨリ硝子体ノ剝離 二百二十九丁
 硝子体血管新生 同丁
 硝子体囊蟲 同丁
 網膜解剖要領 二百三十一丁
 網膜損傷 二百三十三丁
 網膜充血 同丁
 網膜出血 二百三十四丁
 化膿性網膜炎 二百三十七丁
 蔓延性網膜炎 二百三十八丁
 出血性網膜炎 二百四十三丁
 蛋白尿性網膜炎 二百四十四丁
 蛋白尿性網膜炎 二百四十七丁
 白血性網膜炎 同丁
 脈絡膜網膜炎 二百五十丁
 色索性網膜炎 二百五十三丁
 網膜動脈栓塞 二百五十六丁
 網膜剝離症 二百五十九丁
 網膜之神經結締織瘤 二百六十三丁
 視神經損傷 二百六十五丁
 視神經乳頭充血 二百六十六丁
 視神經幹之炎症 同丁
 視神經幹之炎症 二百六十九丁

視神經萎縮症	二百七十七丁
視神經之腫瘍	二百八十一丁
弱視及黑內障	二百八十二丁
解剖要領	同丁
視中心	同丁
先天性弱視	二百八十四丁
廢視ニ基ク弱視	同丁
網膜知覺鈍麻	二百八十五丁
夜盲	二百八十七丁
先天性色盲	二百八十八丁
后天性單純色盲	二百九十丁
鎌狀光紋暗點症	同丁
半視症	同丁
一眼弱視ノ詐偽	同丁
○ 鞏膜解剖要領	二百九十三丁
鞏膜炎	二百九十五丁
鞏膜穿創	二百九十六丁
鞏膜葡萄腫	二百九十八丁
綠膜腫瘍	同丁
綠內障	三百一丁
○ 緣內障	三百二丁
單純緣內障	三百十二丁
炎性緣內障	三百十五丁
真性眼球勞	三百二十三丁
眼筋麻痺	三百二十五丁

眼筋及眼筋神經解剖要領	同丁
外轉神經麻痺	三百二十七丁
動眼神經麻痺	三百三十一丁
滑車神經麻痺	三百三十三丁
聯合眼筋麻痺	三百三十六丁
內直筋作用不全	三百三十七丁
斜視	三百三十九丁
輻湊斜視	同丁
開散斜視	三百四十五丁
斜視手術	三百四十六丁
○ 眼球振盪症	三百五十二丁
結膜解剖要領	三百五十三丁
眼球結膜下溢血	三百五十五丁
結膜脂肪斑	三百五十六丁
結膜翼形贅片	同丁
結膜痕瘡	三百五十七丁
結膜囊內異物	三百五十八丁
眼球結膜浮腫	同丁
水泡性結膜炎	三百五十九丁
眼瞼結膜充血	三百六十丁
單純結膜炎	三百六十二丁
膿漏性結膜炎	三百六十七丁
實布的里性結膜炎	三百七十五丁
濾胞性結膜炎	三百七十九丁

顆粒性結膜炎	三百八十一丁
結膜新生物	三百八十九丁
○眼窩解剖要領	同丁
眼窩充血及浮腫	三百九十二丁
眼窩綠炎	同丁
眼窩綠膜炎	三百九十四丁
麥粒腫	三百九十五丁
霰粒腫	三百九十六丁
硝子樣水泡	三百九十七丁
眼窩外翻症	同丁
眼窩內翻症	四百二丁
眼瞼癒着症	四百三丁
睫毛亂生症	四百四丁
瞼球癒着症	四百九丁
眼若クハ前頭ノ帶狀匱行疹	四百十一丁
眼瞼丹毒	四百十三丁
梅毒性眼瞼潰瘍	同丁
眼瞼新生物	四百十四丁
眼瞼脂腺分泌過多	四百十五丁
眼瞼痙攣症	四百十六丁
眼瞼下垂症	四百十九丁
眼瞼輪匝筋麻痺	四百二十丁
眼瞼成形術	同丁
眼瞼缺損	四百二十一丁

歌氏眼科學目次終

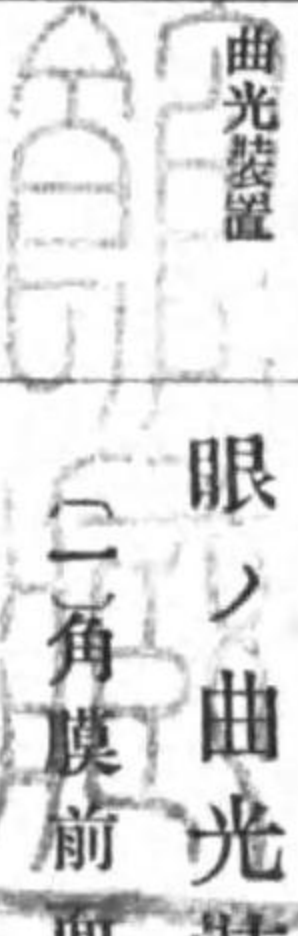
○內眥上贅皮	四百二十一丁
○淚器解剖要領	四百二十二丁
淚腺炎	四百二十三丁
淚腺囊腫	四百二十四丁
淚腺瘻	四百二十五丁
淚液導誘障害	四百二十五丁
淚囊炎	四百二十八丁
淚囊瘻	四百三十一丁
○眼窩解剖要領	四百三十三丁
○眼窩結締織及脂肪組織ノ炎症	四百三十四丁
眼窩突出症	四百三十八丁
パセドニ氏病眼窩突出症	四百三十九丁
眼窩新生物	四百四十一丁
眼病及全身病	四百四十三丁
附錄	
眼病及盲目表	四百五十八丁
ハッチンソン氏ノ齒	四百六十二丁

歇氏眼科學

獨乙國繆兒方仙府眼科醫 歇兒真虞著
日本帝國醫科大學助教授醫學士 甲野 葉譯

第一章
總論

眼ノ曲光裝置ハ左ノ三屈折面ヲ以テ構成セラレ



七六ナリトス
(リスチンケル氏)

- (一) 角膜前面 横徑線ニ於テハ其彎曲半徑七、八、ミルリメートルニシテ縱徑線ニ於テハ七、七、ミルリメートルナリトス
- (二) 角膜後面 角膜前面ノ後方三、六、ミルリメートルノ所ニ位シテ其彎曲半徑ハ幾ント七、ミルリメートルナリトス
- (三) 水晶体後面 前角膜面ノ後方七、二、ミルリメートルノ所ニ位シテ其彎曲半徑ハ六、ミルリメートルナリトス
- 水晶体ノ厚サハ三、七〇「ミルリメートル」ニシテ其各層合算ノ最大屈折係數水晶

目録
第一章 總論
第二章 角膜
第三章 水晶体
第四章 網膜
第五章 視神經
第六章 眼瞼
第七章 泪器
第八章 眼肌
第九章 眼病
第十章 眼手術
第十一章 眼藥水
第十二章 眼病預防
第十三章 眼病治療
第十四章 眼病検査
第十五章 眼病治療法
第十六章 眼病治療法
第十七章 眼病治療法
第十八章 眼病治療法
第十九章 眼病治療法
第二十章 眼病治療法

体ノ屈折力ハ皮質ヨリ核ハ一、四五五ナリトス「リスチ」氏水様液及ヒ硝子体ノ屈折ニ至ルニ從フテ増多ス

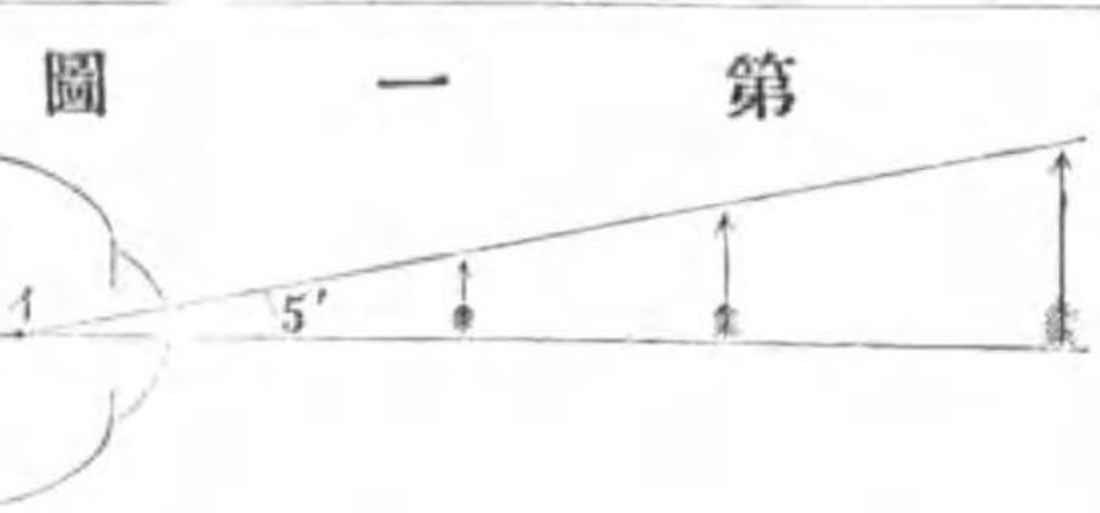
力ノ如キハ角膜ノ屈折力ト同視スルヲ得可シ
今併行光線再言スレハ無限遠隔ノ距離(∞)ヨリ射來スル光線角膜ニ向フテ來ルキハ先ツ此屈折体ニ依リテ屈折セラレ而シテ眼軸平常ノ長サヲ有スルニ於テハ「ドンデル」氏ノ省略シタル「リスチ」氏ニテ網膜ノ一點ニ結合セラル、者トス

視力検査

○視力検査 *Idiopathic* 凡ソ物体ヲ明視スルニハ管ニ物体ヨリ射出スル光線眼ノ曲光装置ヲ通過シテ網膜面ニ鮮明ノ像ヲ形成スルノミナラス兼テ此像又ハ像ヲ形成ハ一定ノ大サヲ有セサル可ラス故ニ一定大ノ物体ヲ一定ノ距離ニ於テ明視スルヲ得ル網膜機能ノ度ヲ名ケテ視力 *Sensitivität* ト云フ

一般ニ五分ノ視角ニ相當スル物体ノ大サ及ヒ距離ヲ以テ尙明視スルヲ得ル至小ナル者ト假定スルヲ得可シ 視角トハ物体ノ兩極端ヨリ眼ノ結合點ヲ貫キテ直線ヲ引キ之レニ依リテ形成セラレタル角度ヲ云是故ニ凡ソ視角ヲ變セサルニ於テハ物体眼ノ結合點ヲ離在スルニ从フテ愈々増大セサル可ラス 圖第一

「ステルレン」氏表ハ即チ此理ニ基キテ製スル者ニシテ表中大小各異ノ記號若クハ羅旬文字ヲ方形ニ畫キ常ニ其距離ヲ明記セリ即チ此距離ニ於テハ彼ノ



記號若クハ文字ハ五分ノ視角ニ相當スル者トス凡ソ患者ノ視力ヲ檢スルニハ先ツ患者ヲシテ此表ニ對シテ坐セシム可シ但シ表ハ光線ノ稍、併行ニ射來スル所ノ距離(即チ六「メ」ニ懸ケ置ク)ヲ要ス然ルキハ患者ハ此距離ニ於テ少クモ其六號ヲ明視セサル可ラス若シ其六號ヲ六「メ」ニテ「メ」ノ距離ニ於テ明視スル能ハサルキハ即チ其視力ノ度ヲ示スニ分數(d/D)ヲ以テス即チ分數中其分子(d)ハ患者ノ眞ニ明視スル距離ニシテ其分母(D)ハ通常明視スヘキ番號ノ數ナリ例之今第六號ノ文字ヲ三「メ」ニテ「メ」ノ距離ニ於テ視得ルキハ其視力ハ $\frac{3}{6}$ 即チ $\frac{1}{2}$ ナリ又六「メ」ニテ「メ」ノ距離ニ於テ漸ク十八號ヲ視得ルキハ其視力ハ $\frac{6}{18}$ 即チ $\frac{1}{3}$ ナリトス此「ステルレン」氏視力表ハ尙之ヲ微少ノ距離ニ於テ使用スルヲ得ル爲メニ半「メ」ニテ「メ」ノ距離マテ算定セリ通常年齢ノ増加スルニ从フテ各機官ハ老人性變化ヲ起シ

下條ヲ參 考スヘシ 視力モ亦从フテ減少スル者ナリ即チ五十年ニ至レハ其視力 $\frac{4}{6}$ 六十年ニハ $\frac{3}{4}$ 又七十年ニハ $\frac{2}{3}$ トナリ九十年ニ至レハ終ニ $\frac{1}{2}$ トナル
今若シ視力甚シク減少シテ如何ノ距離ニ於テモ「ステルレン」氏表ノ文字ヲ認

知スルヲ能ハサルキハ尙左法ヲ以テ之ヲ定ムルヲ得可シ即チ先ツ黑色ノ地
 色ノ上衣ニ指ヲ置キ之ヲ幾何ノ距離ニ於テ數ヘ得ルヤヲ以テ尋常眼ニテ
 ハ尙之ヲ六十[メーテル]ノ距離ニテ視ルヲ得ル者ナリ
 今又患者ヲシテ最小ノ文字ヲ六曲光力ノ凸面眼鏡ヲ以テ讀マシムルキハ屈
 折機及ヒ調節機ノ異常アルニ關セズハ水晶体缺亡症皆能ク明視スルヲ得ル者
 ナリ此法ニ從フキハ略シ患者ノ視力ヲ速カニ知ルヲ得且ツ患者ノ文字ヲ眼ヨ
 リ隔離スル距離ヨリシテ其屈折態ヲ察スルヲ得可シ

光神檢定

○光神檢定 *Photopometrie* 凡ソ物体ノ其像ヲ網膜面ニ鮮明ニ結合スルニハ
 尙此物体ノ一定ニ輝照セラル、ヲ要ス抑モ尋常ノ視力〔 $\frac{1}{1}$ 〕ハ只之ヲ充分
 ノ日光ノキニ於テ得可ク「アウベ」尙ホ之ヲ得ヘキ最小ノ光度ハ十丁ノ「メーテ
 ル」蠟燭ノ光ニ等シク「コ」氏光度減少スレハ視力モ亦從フテ減少シ電氣光ヲ用
 エルキハ視力尋常ヨリ佳良〔 $\frac{1}{5}$ 〕トナル是故ニ視力ヲ定ムルニハ管ニ視角ノミ
 ナラス尙視力表ヲ認知スルキノ光度ヲ確定スルヲ要ス此目的ニ各異ノ裝置
 ナヲ製セリ即チ「フォオン、ヒッセル」氏裝置ハ石油「ランプ」ノ光ヲ數多ノ乳色硝子
 板ニテ隨意ニ減少スルヲ得可ク又「シミット、リンプレル」氏裝置ハ日光ヲ眼前ニ

周邊視力檢定

保持スル烟色硝子板ニテ隨意ニ減少シ且ツ光線ヲ一樣ニ曇暗トナスヲ得可
 シ「フォオン、ヒッセル」氏ニ從ヘハ厚サ二[ミルリメーテル]ノ乳色硝子板六板ヲ燈
 前ニ置クキハ視力〔 $\frac{1}{1}$ 〕ニ對シテハ充分ノ光度ナリト云フ然レモ光神ヲ定ムル
 ニ一般使用ス可キ便法ハ當今ニ至ルマテ猶缺如セリ
 若シ一眼全ク物体ノ形狀ヲ認知スルヲ能ハサルキハ則チ猶區別スルヲ得可
 キ極小ノ光量ヲ定ムルヲ要ス其最モ單一ノ法ハ暗室ニ於テ燭火ヲ各異ノ距
 離ニ置キ手ヲ以テ交番ニ掩蔽シ又開放スル是レナリ「フォオン、グレーフ」氏ハ
 一層詳細ニ之ヲ定ムル爲メニ一筐ヲ製シ中ニ燭火ヲ貯置キ隨意ニ其大サヲ
 變スヘキ方形ノ孔口ヨリ射出スル光線ヲ以テセリ

○周邊視力檢定

Periophometrie

周邊視力トハ即チ中心視力ノ反對ニシテ

總テ黃斑部以外ノ網膜部ヲ以テ瞻視スルヲ云フ而シテ一般ニ尙光線ヲ感ス
 ルヲ得可キ全領ヲ名ケテ **視野** *Gezichtsfeld* ト云フ

今大略視野ノ大サヲ檢スルニハ患者ヲシテ其一眼ヲ以テ他眼ハ掩蔽セシム醫師ノ右眼若ク
 ハ左眼ヲ着視セシメ患者ノ眼ト醫師ノ眼トノ中間ニ於テ手或ハ二三指ヲ各方向ニ
 運動ス此法ニ依リテ一ハ手動ヲ知り及ヒ指數ヲ數フルノ境界ヲ定メ兼テ又同時ニ
 患者ノ視野ヲ自己ノ視野ト比較スルヲ得可シ
 詳細ニ視野ヲ摸畫スルニハ先ツ患者ヲシテ直立セル黑板ニ對シ之レニ印スル白點又

一層其ナルハ之ニ糊着セル深青色ノ紙片ヲ其一眼ヲ以テ一定ノ距離ヨリ着視セシム但シ前額ヲ二十五センチメートルノ桿ニテ黒板ニ壓セシムルヲ佳トス次テ一片ノ白壁若クハ白色ノ小球ヲ各方向ニ於テ周圍ヨリ固視點ノ方ニ移動シテ白壁若クハ小球ヲ最終ニ見得ル部ニ於テ一線ヲ畫ス通常視野ハ白壁ノ中心ヨリ周圍ニ運動スルニ當リテ少ク増大スル者ナリ既ニシテ各方向ノ視野ノ大サヲ摸寫シ或ハ全圖ヲ其儘ニ保存ス

尙一層詳細ニ視野殊ニ其缺損ヲ檢定スルニハ「フオルステル」氏視野計 Perimeter ヲ稱用セリ之レニハ視野ヲ度目ヲ付セル弓輪ニ摸寫シテ之レヲ上法ノ如ク平面ニ於テセズ又「シメルク」氏裝置ハ全半球面ニシテ其形狀後部ノ眼球彎曲ニ類似セリ

今着視點弓ノ中心ニ在リ且ツ盲點ヨリ算出スルキハ尋常ノ視野ハ上方四十五度内方六十度下方六十五度外方七十度外上方六十五度内上方六十五度内下方五十五度外下方七十五度ナリトス「フオルス」氏「アルド」氏此ノ如ク各方向ニ於テ視野ノ大小アルハ畢竟網膜ノ解剖的關係ヨリス「アルド」氏即チ網膜ハ鼻側ニ於テハ顛顚側ヨリ多ク前方ニ突出ス故ニ視野ハ外側ニ於テハ内側ヨリ大ナラザル可ラス又上方ニハ突出セル上眼窩縁ノアルアリ其他視野ハ近視眼ニハ小ニノ遠視眼ニハ大ナリ又甚シク近所ニ調節スルニ當リテハ網膜ノ前進スルニ依リテ遠所ヲ瞻視スルキニ比スレハ一五度乃至二五度増大スト云フ「エンメ」氏視野ノ缺損ヲ名テ暗點 Scotoma ト云フ而シテ患者自ラ暗黒ノ點ヲ認知スル

キハ之ヲ自覺性暗點 Positive Scotoma ト云ヒ之レニ反シテ若シ視野ヲ檢スル

ノ后初テ其缺損ヲ證スルヲ得ルキハ之ヲ他覺性暗點 Negative Scotoma ト云フ

今着視點ヲ弓ノ中心ヨリ少ク側方若クハ上方及ヒ下方ニ移動スルキハ其反對側方ニ於テ視野常ニ増大ス然レモ是レ種々ノ眼位ニ於ケル眼瞼及顔面各部ノ位置ニ關シテ一様ナラス凡ソ患者ノ能ク注意スルニ當リテハ視野ニ於テ盲點モ亦能ク定ムルヲ得ヘシ抑モ此盲點ハ管ニ視神經穿入部ノミニ限畫セラレスシテ兼テ大血管ノ中心部モ之カ形成ニ關與ス「ウオイルカ」故ニ稍犬牙狀ヲ呈ス又其大サハ人々若クハ屈折態ニ從フテ各異ナリ近視眼ニ在リテハ既ニ后葡萄腫ノ爲メニ増大セリ網膜ノ有髓纖維モ又同シク盲點ヲ増大スル者ナリ

視野ヲ檢スルニハ管ニ其視力ノミナラズ兼テ又其光神及ヒ色神ヲ檢セサル可ラス

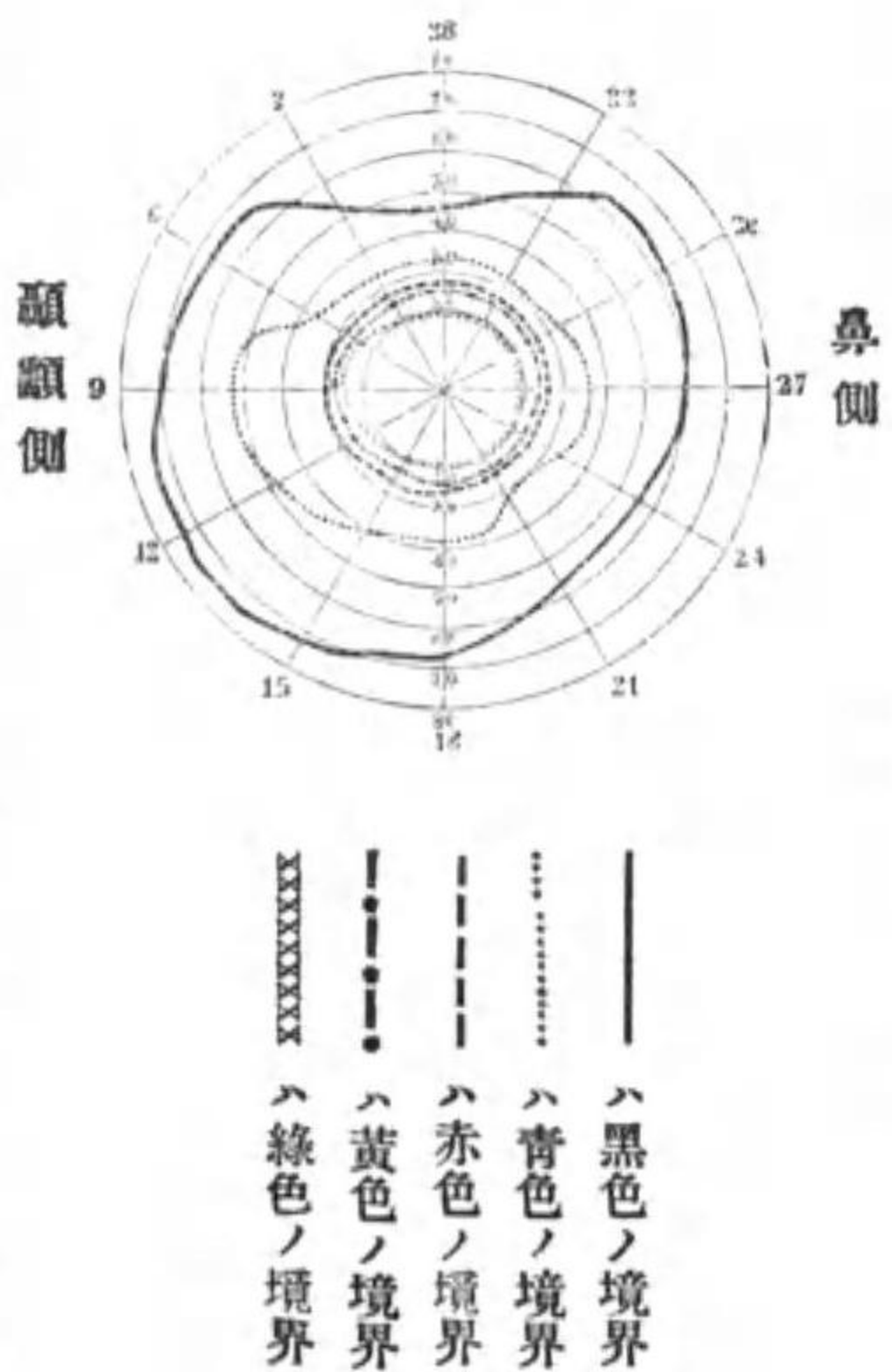
○色神檢査 Chromatophotometrie

色神ハ赤色、綠色、紫色ノ三原色ノ感覺ニ歸スル者ニシテ此原色ニハ各特種ノ神

色神檢査

經纖維アリテ只一定ノ色ニ依リテ興奮セラル、チ得ル者ナリ而シテ原色ニ異ナル諸他ノ色覺ハ畢竟三種ノ神經纖維同時ニ不同ノ興奮ヲ受クルヨリ發起スル者トス故ニ今若シ一原色ノ感覺缺亡スルキハ患者ハ只殘餘ノ原色ヨリ成ル所ノ色ノミチ正確ニ辨スルチ得ルノミ

圖 二 第



色ニシテ互ニ相關係スル者ナリ此說ニ从ヘハ只赤綠盲及ヒ青黃盲ノ二色盲チ區別スルノミ

色覺力ハ輝照ノ異ナルニ从テ甚タ差アリ明カナル日光ニテハ五[メートル]ノ距離ニ於テ綠色ハ直徑二[ミリ]メートル赤色ハ三[ミリ]メートル青色ハ八[ミ

又ヘーリング氏ニ

从ヘハ黑白二色ノ他尙四種ノ原色アリ即チ赤色及ヒ綠色、黄色及ヒ青色、是レナリ而シテ毎二色ハ補色即チ反對

ルリメートル[黄色ハ二半]、ミリメートル[マデ]辨知スルチ得可シ、^ド光線甚シク減少スルキハ色皆チ無色トナリ只其濃淡ニ依リテ相區別ス而ノ最モ暗黒ナルハ赤色ニシテ青色、綠色、黄色、白色之ニ順次ス

色覺ハ視野ノ中心ニ於テ最モ純粹ニシテ周邊ニ至ルニ从テ變達ス然レトモ各色チ正シク辨知スルチ得ル境界ニ就テハ諸家ノ所說一定ナラズ今アウベルト氏ニ从ヘハ中心ヨリ周邊ニ至ルニ从テ先ツ綠色ノ感覺消失シ黄色赤色之レニ次キ青色ハ最モ后ニ消失ス凡ソ色片愈、大ナレバ視野ノ中心ヨリ愈、遠隔ノ部ニ於テ之チ感スルチ得可シ又タ諸色ノ境界線ハ網膜ノ各部ニ於テ固視點ヨリ各異ノ距離ニ存ス然レモ若シ輝照ノ度チ増多スルキハ周邊ノ色覺ハ更ニ中心ニ異ナルヲナシト云フ、^ラランドン^ドラト^ス氏

色覺チ檢スルノ法甚タ數多アリト雖モ就中ホルムグレーン氏法チ以最モ確實ナリトナス此法ハ即チユング、ヘルムホルツ氏ノ學說ニ基ク者ニシテ最モ概略試驗ニ適當ナリトス然レモ先ツ預メ能ク其方法チ被驗者ニ説明セサル可ラス

今可及的種々ノ色及ヒ濃淡種々ナル夥多ノ毛絲中ヨリ鮮綠色ノ者チ選出シ被驗者

ナシテ色ノ濃淡ニ關セズ總テ綠色ニ屬スル者ヲ採集セシム而シテ彼レ若シ綠色ト異ナル色例之灰白色或ハ玫瑰色ヲ採擇スルキハ是レ色神變常スルノ徵ナリ宜シク只玫瑰色(赤色加青色)ノ毛絲ノミヲ遺殘シ置キテ第二ノ試驗ヲ施スベシ然シテ患者若シ緋色ノ種屬ノミヲ採集スルキハ不全色盲ヲ患フルノ徵ナリ之レニ反シテ若シ緋色ノ他ニ尙青色若クハ紫色ヲ採集スルキハ全赤色盲タルヲ疑ヒナシ若シ綠色或ハ灰白色ヲ採集スルキハ綠色盲又赤色若クハ橙黄色ヲ採集スルキハ青色盲タリ此試驗ヲ施スニ或ハ先ツ玫瑰色ヲ以テ初ムルモ亦可ナリ抑モ玫瑰色ハ赤青ノ二色ヨリ成ルヲ以テ赤綠色盲ハ其赤色又々青黃盲ハ其青色ヲ辨スルヲ得ズ此方法ニ從フキハ蓋シ亦「ヘーリソン」氏學說ノ旨意ヲ全フスルヲ得可シ「コー」氏同シク色覺ノ概略檢査法トシテ「プフリユール」氏ノ稱用スル法ハ「マイエル」氏ノ補色發現ニ基ク者ナリ今色紙ノ上ニ灰白色ノ紙片ヲ置キ蓋フニ薄紙ヲ以テスルキハ紙片ハ則チ補色ヲ呈スル者ナリ「プフリユール」氏ハ灰白色ノ文字ヲ色紙ニ糊着シ薄紙ヲ以テ被蓋シ而シテ被檢者ヲ之ヲ讀過セシム而シテ彼若シ一色ニ盲ナルキハ其補色モ亦固ヨリ之ヲ辨スル能ハサルヲ以テ之ヲ讀ムヲ能ハズ然レモ彼若シ之ヲ讀得ルキハ尙其文字ノ色ヲ毛絲ヲ以テ指示セシム可シ

其他尙稱用スルハ「スチルリソング」氏表「コー」氏ノ製スル所ニシテ各色ノ或ハ有色ノ影ヲ以テ檢シ或ハ「スペクトロスコープ」ニ就キ檢スル等ナリ總テ此等ノ試驗ヲ施スニ當リテハ決シテ色ヲ名シメヌシテ必ス毛絲ヲ以テ之ヲ示サシムヘシ

○硝子眼鏡 其種三アリ(一)球面眼鏡(S)ハ兩面球形ヲナス(二)圓柱鏡(C)ハ一

面圓柱形ヲナス(三)稜眼鏡是レナリ

(一)球面眼鏡 ハ復タ分ツテ二トナス(イ)凸面又集光[レンズ]ハ併行ノ光線ヲ集合ス(ロ)凹面又開散[レンズ]ハ併行光線ヲ開散ス而シテ集光[レンズ]ハ光線ヲ其反對側ニ在ル燒點ニ集合セシム 第三 然レモ開散[レンズ]ハ光線ヲ開散シテ之ニ恰モ其射來スル同側ノ近部ヨリ來ル如キ方向ヲ與フ 第四 是故ニ集光[レン

ス]ノ燒點ハ眞ニシテ開散[レンズ]ニ在リテ假ナリ爰チ以テ彼レニハ(十)是ニハ(一)ノ章ヲ附ス

一面凸ニシテ他面凹ナル者ハ之ヲ凸凹眼鏡 perisopische Glaser ト名ク其凸面割合ニ強ク彎曲スルキハ集光眼鏡ノ用ヲ爲シ其凹面割合ニ強ク彎曲スルキハ開散眼鏡ノ用ヲ爲ス

第三圖



[レンズ]ノ燒點ハ其彎曲中心ニ相當シ[レンズ]ヨリ此中心マテノ距離即チ[レンズ]ノ燒距ハ其彎曲半徑線ニ等シ 併行光線[レンズ]ヲ通リテ屈折スレハ其燒點ニ集合シ燒點ヨリ來ル光線ハ屈折ノ後チ併行光線トナリテ進行ス又光線〇ト[レンズ]ノ燒點トノ間ニ在ル一點ヨリ來ルキハ屈折ノ後チ像點ニ集合スル者ニシテ光源愈々燒點ニ近接スレハ從テ像點ハ愈々[レンズ]ヲ遠隔ス若シ光源燒點ト[レン

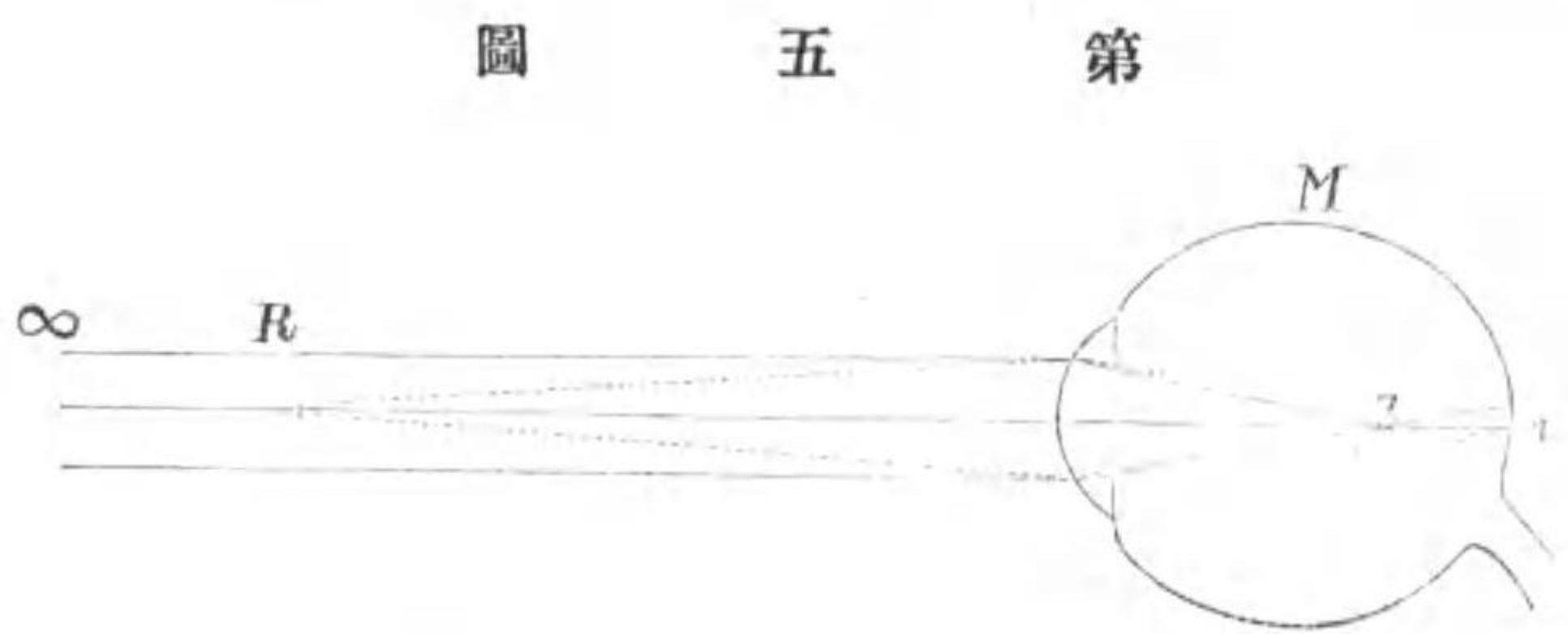
ヲ以テ示セル「レンス」ノ價值ヲ曲光力ニ改算セント欲セハ分數ノ分子ニ三十七「メ
 ーテル」ハ三十七「ツオール」ニ同シ「ヲ」ヲ乘算シ若シ曲光力「レンス」ノ價值ヲ「ツオール」ニ改
 算セント欲セハ其番號ヲ三十七ニテ除算スヘシ例之ハ $\frac{1}{15} = 37 \times \frac{1}{15} = 2.25 D \cdot 4D = \frac{4}{5}$
 ナルカ如シ

(二) 圓柱眼鏡ハ通常一面平ニノ一面圓柱形ヲナス而シテ此眼鏡ハ圓柱軸ノ向
 キニ於テハ更ニ光線ニ作用セスノ恰モ平面鏡ニ異ナラスト雖モ圓柱軸ト直
 角ノ向キニ於テハ其凸面若クハ凹面圓柱形ナルニ从テ光線ヲ集合若クハ
 開散ス而シテ此向キニ於ケル光線屈折力ハ恰モ球面眼鏡ノ如ク曲光力ヲ以テ
 名ツク此圓柱眼鏡ハ只角膜ノ一徑線ニ於テ穹窿ノ異常(亂視)アルヲ補正スル
 ニ使用スル者トス

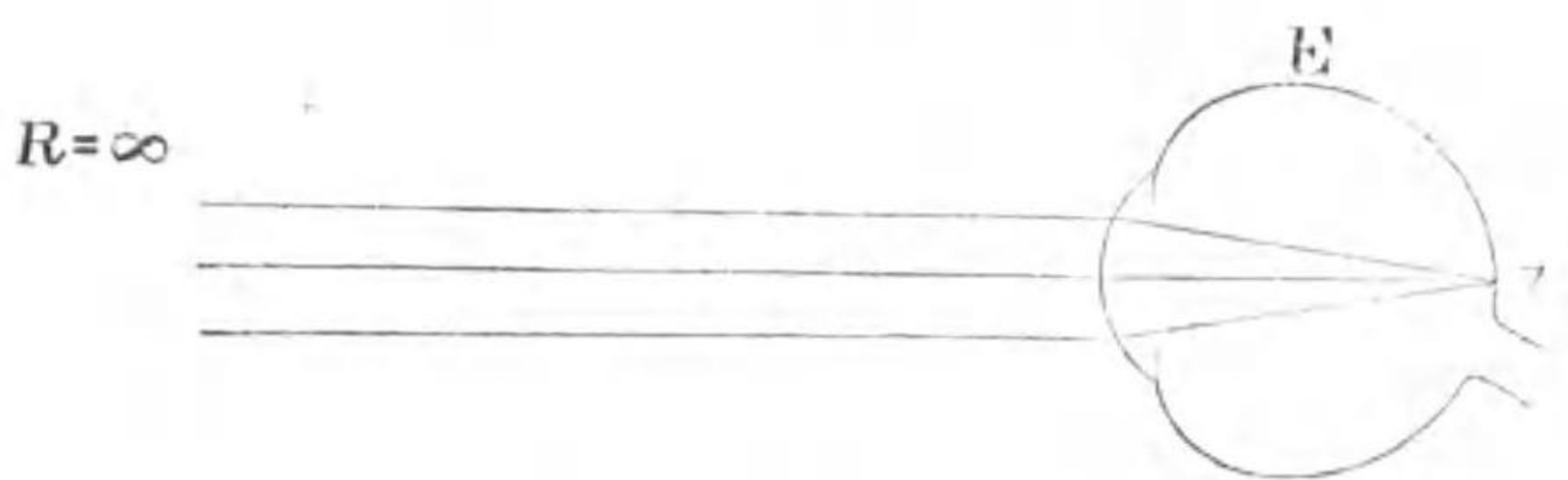
(三) 三稜眼鏡ハ視線ヲ其基底ノ方ニ傾斜シ之ヲ着視スル物体ノ外ニ變向
 セシム而シテ三稜鏡ノ番號ハ變位ノ度ヲ示ス者ナリ

屈折機及ヒ調
 節機之檢査

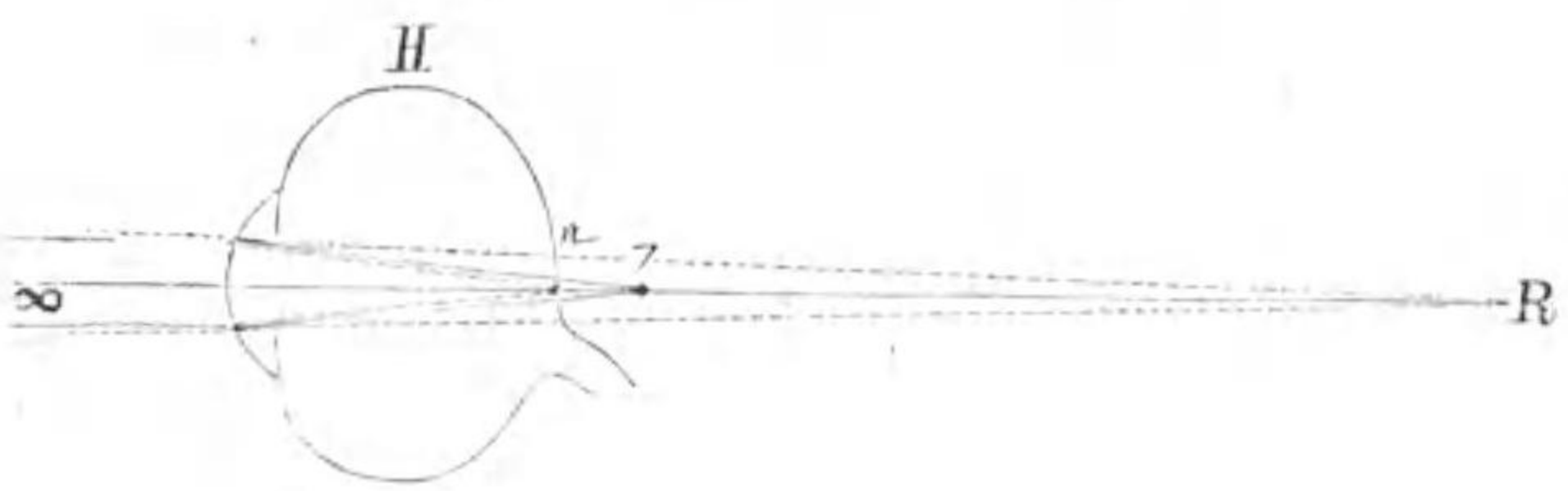
○ 屈折機及調節機之檢査 屈折機 Refraction トハ眼球ノ解剖的構
 造ニ基ク所ノ定位即チ曲光裝置ノ燒距ト眼軸ノ長サトノ關係ヲ謂フ故ニ屈
 折機ハ眼ノ遠點ニ對向セル時ノ定位ナリトス調節機 Accommodation トハ近
 部ヲ瞻視スルニ當リテ眼ノ曲光裝置ニ起ル變化ヲ謂フ而シテ此變化ハ主トシ



第五圖



第六圖



第七圖

水晶体ノ前面其穹窿ヲ増加スルニ原シ又此穹窿ノ變化ハ毛様筋ノ輪狀纖維
 収縮シテ「チン」
 氏帶ヲ弛緩ス
 ルニ因ル是ニ
 依リテ之ヲ觀
 ルニ屈折機ハ
 眼ノ靜態ニシ
 調節機全ク停
 止スルノ時ナ
 リ
 今若シ解剖的
 ニ眼軸ノ長サ
 屈折裝置ノ燒
 距ト同一ニ構
 造セラル、ハ

ハ二十「ミル」其屈折態ハ正視眼(Emmetropie)ナリトス是レ併行ノ光線ヲ網膜面ニ結合セシムル者ナリ第六圖然レモ若シ其眼軸屈折装置ノ燒距ヨリ長若クハ短ナルキハ其屈折態ハ則チ不正視眼(Ametropie)ナリトス

眼軸ノ長サ屈折装置ノ燒距ヨリ大ナルキハ則チ併行ニ角膜面ニ向フテ射來スル光線既ニ網膜ノ前方ニ於テ結合シ而シテ網膜面ニハ圈暈ヲ生ス是レ則チ

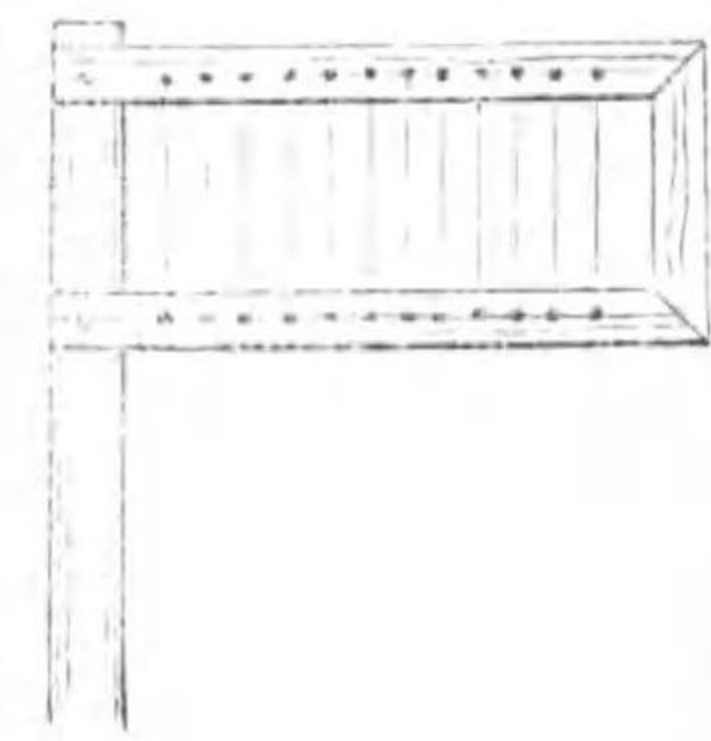
近視眼 Myopia ナリ第五圖之レニ反シテ眼軸短小ナルキハ併行ノ光線初メテ網膜ノ後方ニ於テ結合シ網膜面ニハ同ク圈暈ヲ生ス是レ則チ**遠視眼** Hypermetropie ナリ第七圖爰チ以テ凡ソ光線近視眼ノ網膜面ニ結合シ得ルニハ常ニ角膜ニ向フテ開散シ來ラサル可ラス再言スレハ無限ノ距離ヨリハ遙ニ近部ヨリ射來スルヲ要ス又遠視眼ノ網膜面ニ結合シ得ルニハ角膜ニ向フテ集合シ來ラサル可ラス再言スレハ無限ノ距離ヨリ尙遠所ヨリ射來スルヲ要ス是故ニ近視眼ノ遠點ハ無限ヨリ近所ニ在ルモ遠視眼ノ遠點ハ之ヨリ尙遠所ニ在リ夫レ無限ハ遠隔ノ最モ甚シキ者ニシテ之ヨリ遠隔ノ距離亦有ルヲナシ而シテ遠視眼ニ在リテハ光線苟モ眼ノ屈折力ニ依リテ網膜面ニ結合スルニハ其後方ニ位スル一點ニ向フテ集合スルヲ要ス第七圖ルカ故ニ此點ヲ**遠視眼ノ**

遠點ト云フ故ニ是レ消性ナリ

消性及ヒ積性遠點ノ距離ハ近視眼若クハ遠視眼ノ度ヲ示ス者ナリ今近視眼ニノ無限ヨリ來ル光線ヲ其角膜面ニ結合スルヲ得ルニハ先ツ凹面眼鏡ヲ以テ光線ヲ開散シ遠視眼ニ在リテハ之ニ反シテ凸面眼鏡ヲ以テ之ヲ集合セサル可カラス

視力ヲ最良ニスル最弱ノ凹面眼鏡ハ近視眼ノ度ヲ示シ又視力ヲ減少セズノ猶堪フルヲ得ル最強ノ凸面眼鏡ハ遠視眼ノ度ヲ示ス者ナリ最遠ニノ尙明視スルヲ得ル點ヲ**遠點** R (punctum remotum) ト云フ而シテ此點ハ眼ノ屈折態ニ从フテ各異ナリ即チ正視眼ニ在リテハ無限ニ不正視眼ニ在リテ近視眼及

第八圖



ノ部位ヲ調節領 A (Accommodationsbreite) ト云フ

ヒ遠視眼ノ度ニ依リテ異ナリ又最近ニノ猶明視スルヲ得ル點ヲ**近點** P (punctum proximum) ト云フ而シテ此點ノ見出法ハ細小ノ文字若クハ格子形計眼器第八圖ノ絲ヲ以テ猶明視スルヲ得ル最近ノ距離ヲ計定スルニ在リ近點及ヒ遠點間

抑モ遠點(R)ヲ明視セントスルコハ水晶体ノ穹窿最弱ナルヲ要シ近點(P)ニ於
 テハ之ニ反シテ可及的の最大ナラサル可ラス今近點(P)ニ調節スルニ當リ眼ノ
 水晶体(L)第九ヲ強ク彎曲スルヲ廢止シ之ニ代フルニ凸面(L₁)ヲ以テス
 ルヲ得可シ而シテ此レノハ視學上近點ニ向フテ要スル強度ノ穹窿ト同價ノ
 者ニノ从フテ該點ヨリ射來スル光線ヲ併行トナスヲ以テ其光線ハ乃チ變化
 セサル眼ノ水晶体ヨリシテ直ニ網膜面ニ結合セラル、ヲ得可シ然ルキハ遠
 點ニ對スル視學的定位ハ(L)ニ近點ニ對スル者ハ(L₁及L₂)ノ和ナリ就中(L₁)ノ
 價ハ毛様筋ノ發動ヲ示スモノニ遠點ヨリ近點ヲ瞻視スルニ當リテ發起ス
 ル眼ノ視學的定位ノ變化調節ノ大サニ相當ス是レ即チ圖中ノ(A)ニ同シ今眼
 ノ遠點ニ對向セル時ヲ(R)トシ近點ニ對向セルキヲ(P)トシ又(R)ヨリ(P)ニ調節
 スル力ヲ(A)トスルキハ(P)ハ則チ(R)ト(A)トノ和ニ同シ或ハ(A)ハ(P)ヨリ(R)ヲ減
 スルニ同シ故ニ調節力ハ $A = P - R$ ナル算式ニ从フテ之ヲ定ム今若シ(R)ハ
 無限ニ在リ而シテ(P)ハ0、10[メートル]ニ在リ而シテ(L)ニ水晶体ヨリ隔離スルト假定スルキ
 ハ則チ無限ヨリ0、10[メートル]ノ距離ニ要スル調節力再言スレハ眼ノ水晶体
 (L)ニ必要スル強度ノ穹窿ヲ調節スル爲ニ十曲光力ノ凸面(L₁)ヲ要ス

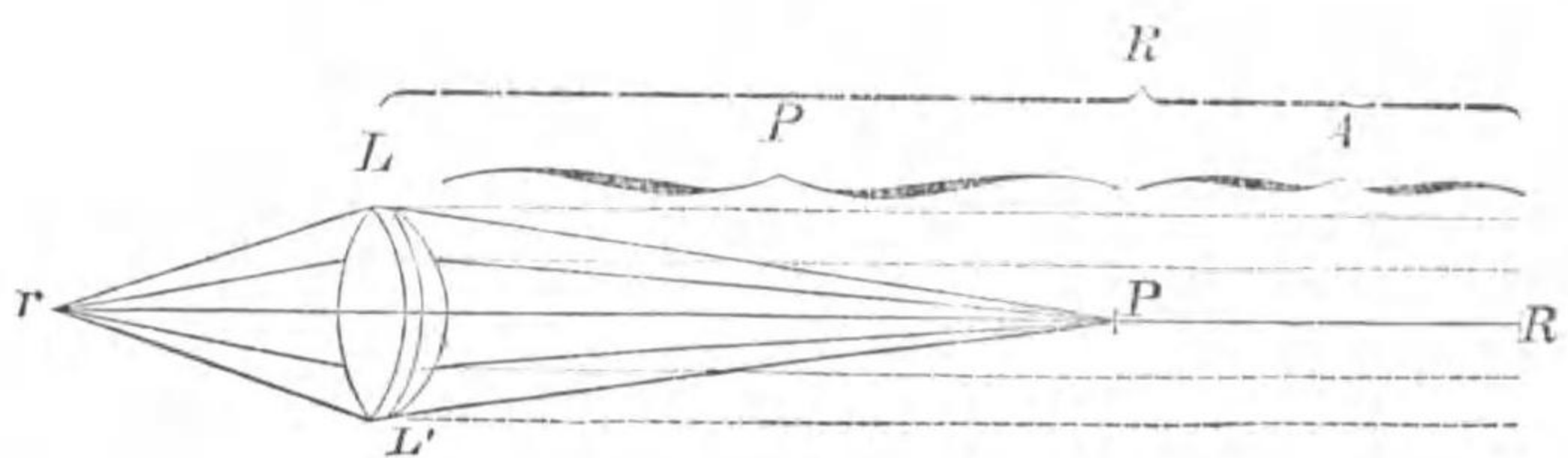
即チ前ノ算式ニ數字ヲ交換スレハ左ノ如シ

$$A = 10 - 8 = 10.$$

若シ遠點ハ0.5[メートル]ニ在リト假定スルキハ其算式ハ左ノ如シ $A = 10 - 0.5 = 9.5$ 然レハ遠視眼ニ在リテハ其遠點無限ヨリ尙遠
 隔ノ距離ニ在ルヲ以テ先ツ無限マテ調節シ后チ再ヒ
 無限ヨリ近點ニ向フテ調節セサル可ラス故ニ遠視眼
 ニ在リテハ此ニ價ヲ加フルヲ要ス例之茲ニ一曲光力
 ノ遠視者^{即チ遠點ハ網膜ノ后方アリテ其近點ハ0.2}
 〇[メートル]五曲光力ニ在リト假定スルキハ其算式ハ
 $A = 5 - (-1) = 6$ 再言スレハ一曲光力ノ遠視者ノ二
 〇センチメートルニ調節スル力ハ六曲光力ノ凸面レ
 ンスニ相當セリ

各調節機ノ使用ニハ必ス一定ノ視軸ノ輻輳運動
 相當セリ即チ無限ニ眼ヲ正定スルキハ其視軸併行ニ

第九圖



ノ又〇、二〇「メートル」ニ調節スルキハ其視軸モ亦〇、二〇ノ距離ニ輻輳スルノ類ナリ故ニ調節機ト視軸ノ輻輳トハ常ニ密着ノ關係ヲ有スル者ニ今一定ノ距離ニ調節スルキハ不隨意ニ亦視軸ヲ茲ニ輻輳シ或ハ之ニ反スル者ナリ所謂兩眼性近點トハ一點ニ向テ視軸ヲ輻輳シ同時ニ猶此點ニ調節スルヲ得ル最近ノ點ヲ云フ然レハ調節機緊張ノ極度即近點^{チ眞}ハ只一眼ヲ以テ着視スルキニ當リテ達スルヲ得ルノミ

然レハ調節機ノ使用ト視軸ノ輻輳トノ關係ハ必スシモ不變ノ者ニ非ラス即チ視軸ノ輻輳度ヲ變セスシテ遠近自在ノ距離ニ調節スルヲ得可シ而ノ之ヲ行フヲ得可キ部位ヲ關係調節領^{relative Accomodationsbreite}ト云フ是レ即チ不變ノ輻輳角ニ當リテ尙存スル者ナリ是故ニ調節力ニ左ノ三種ヲ區別ス

- 〔一〕眞調節領ノ算式ハ $A = P - R$
 - 〔二〕兩眼性調節領ノ算式ハ $A_2 = P_2 - R_2$
 - 〔三〕關係調節領ノ算式ハ $A_1 = P_1 - R_1$
- 第一ノ調節領ハ各眼各箇ニ又第二ノ者ハ兩眼同時ニ其近點及ヒ遠點ヲ定メ而ノ其兩點ノ差ヲ見出ス既ニ陳述スル如ク一眼性ノ近點ハ兩眼性ノ者ニ比

スレハ眼ニ接近セリトナス又關係調節領ヲ定ムルニハ患者ヲシテ微細ノ視力表^{例之格子形計眼器}ヲ隨意ノ距離ニ於テ移動スルヲナク固定セシメ而ノ尙此視力表ヲ明視スルヲ得ル最強ノ凸面及ヒ最強ノ凹眼鏡ヲ定メ后チ眼ノ其都度調節セシ點ノ距離ヲ計算ス

視軸ノ輻輳度同一ナルニ當リ^{二十三「センチメートル」}關係近點ニ調節スルニ眼ハ一、六四秒時ヲ要シ再ヒ輻輳點ニ復歸スルニハ〇、七八秒時ヲ要ス又關係遠點ニハ一、六六秒時之ヨリ再ヒ輻輳點ニ歸復スルニハ一、〇八秒時ヲ消過ス故ニ關係遠點ヨリ關係近點ニ調節スルニハ二、七二秒時反對ノ方向ニ於テハ二、四四秒時ヲ消過スト云フ^{「シムット、リッパ」レル氏ノ説}

關係遠點ト固視點トノ間ニ在ル關係調節領ノ一部ハ業既ニ使用セラル即チ**消性**^{ネガティブ} *negativ* ナリ之ニ反シテ固視點ヨリ關係近點ニ至ルノ一部ハ未タ使用セラレサル者ニ尙之ヲ使用ニ供用ス可シ即チ**積性**^{ポジティブ} *positiv* ナリ是故ニ關係調節領ヲ積部及ヒ消部ノ二部ニ分ツ「ドンテルス」氏ノ試驗ニテ左ノ件ヲ確定ス

〔一〕視軸ヲ併行スルニ當リテハ關係調節領ハ全ク積性ナリトス^{正眼鏡ハ遠所ニ於テモ亦猶凹面}

眼鏡ヲ以テ明視スルヲ得而ノ幼年ノ者ハ十然ノ毛様筋ハ弛緩スルヲ能ハサルモ
三曲光力ノ凹眼鏡ヲ以テスルヲ得ルナリ
猶之ヲ緊張スルヲ得可シ

(二)輻輳增多スルニ當リテハ關係調節領ノ消部同比例ニ增多シ其積部ハ減少
ス

(三)兩眼性近點ニ輻輳スルニ當リテハ關係調節領ハ全ク消性ナリトス故ニ毛
様筋ハ緊張スルヲ能ハサルモ猶弛緩スルヲ得可シ

(四)通常讀書等ヲナス所ノ距離即チ〇、二〇乃至〇、七〇メートルニ調節スルニ
當リテハ關係調節領ノ積部ハ消部ヨリ過大ナリトス若シ其距離之ヨリ減少
シ關係反對ナルニ當リテハ疲勞セスノ久時調節機ヲ固定スルヲ能ハス

○眼球各部之検査 角膜、前房水、虹彩、水晶体及硝子体ノ前部ヲ細密ニ檢
スルニハ斜照法 フォーカレ
ベイルンク focale Beleuchtung ノ使用ヲ要ス此ノ法ハ暗室ニ於テ施行ス
ル者ニ凡ソ〇、三〇メートル隔離セルランプヨリ射來スル光線ヲ第二十番

ノ凸面レンズヲ以テ檢ス可キ物体上ニ集合セシメ而シテ若ク形成スル所ノ焰
光像ヲ彼此ニ移動シテ以テ其表面ヲ輝照ス
凡ソ焰光像ノ存スル部分ハ甚ク輝照セラル、ヲ以テ微細ノ變化モ亦之

眼球各部之検査
斜照法

角膜計

ヲ檢出スルヲ得可シ而シテ若シ同時ニ増大ヲ要スルキハ尙第二ノ凸面レンズ
十ヲ副用シ之ヲ檢者ノ眼ト被檢者ノ眼トノ中間ニ保ツ可シ又角膜穹窿ノ異
常ヲ容易ニ認知スルニハ「アラシド」氏角膜計 ケラトスコプ Keratoscop ヲ使用スルヲ便トナ
ス此器ハ黑白二様ノ同心性ノ輪ヲ具有スル圓板ニ之ヲ角膜ニ反射セシメ
以テ之ヲ計ル者トス

眼底、硝子体、脈絡膜及網膜ノ微細ノ検査法ハ檢眼鏡ノ發明以來初メテ之ヲ施
スヲ得タリ

檢眼鏡

檢眼鏡 ハ一千八百五十一年ニ於テ「ヘルムホルツ」氏初メテ之ヲ發明セリ同氏ノ檢
眼鏡ハ三枚ノ硝子板ヲ相合セシ者ニ器械ノ視學上軸ト五十六度ノ角ヲ形成ス然
レモ同氏ハ后直ニ後面ニ銀ヲ置キ中央ニ穿孔スル眼鏡ヲ製出セリ「ユート」氏ハ一
千八百五十二年ニ於テ凹眼鏡ヲ製シ倒像検査法ヲ施行セリ
各異ノ輝照力ヲ使用スルヲ得ル爲メニ「コク」氏「ウ」氏檢眼鏡ヲ稱用セリ是レ或ハ單
ニ其平面鏡ノミ或ハ之ヲ凸面、凹面、レンズト合併シテ使用スルヲ得ル者ナリ又「イ」氏
「ル」氏檢眼鏡ニ在リテハ平面鏡凹面鏡及ヒ「ヘルムホルツ」氏反射板ヲ挿入スルヲ得可
シ而シテ此檢眼鏡ニハ補正眼鏡ヲ檢者ノ視軸ニ直角ニ之ヲ鏡ノ後面ニ附加スルヲ
得可シ甚ク簡便ニシテ世上一般使用スル者ハ「リ」氏「イ」氏檢眼鏡是レナリ是レ
鑲製ノ凹面鏡ニ中央ニ穿孔セラレ尙其後面ニ於テ凸面及ヒ凹面、レンズヲ挿入可
キ装置ヲ具有ス一千八百五十四年「チ」氏「ロ」氏「ロ」氏兩眼檢眼鏡ヲ製出セリ又近
來ニ至リ「コ」氏「フ」氏「ウ」氏「ケ」氏「ナ」氏「プ」氏諸氏ハ所謂屈折檢眼鏡ヲ直像検査ノ

際風折懸ヲ檢定スルニ使用セリ此鏡ハ其後面ニ數多ノ補正眼鏡ヲ備フル圓板ヲ有シ而シテ其圓板ハ速カニ交換シ鏡ノ孔口ニ現出セシムルヲ得ル者ナリ又シミツト、リ
ンブレル氏ハ倒像檢査ノ際風折懸ヲ檢定スルニ甚タ簡便ニ使用ス可キ裝置ヲ製
セリ

今眼ノ透明体ヲ眼軸ト同長ノ燒距ヲ有スル一箇ノ集光「レンズ」ト看做シ且ツ被檢者ノ眼正視眼ナリト假定スルキハ調節機ノ休止スルニ當リテハ反射鏡ヲ以テ眼内ニ射入スル第十圖ヲ參併行ノ光線ハ蓋シ其眼底面ニ於テ結合セラル、ヲ得可シ此光線ノ一部ハ固ヨリ眼底ノ色素ニ吸収セラル、モ他ノ一部ハ廣ク反射セラレ而シテ其殘餘ノ一部ハ瞳孔ヨリ再ヒ併行トナリテ眼外ニ射出シ遂ニ檢眼鏡ノ孔口ヨリ其後方ニ存スル檢者ノ眼ニ射入ス何トナレハ此光線ハ曲光裝置ノ燒點ヨリ射來スルヲ以テナリ今若シ檢者ノ眼モ亦正視眼ニ其調節機全ク弛緩スルキハ此併行光線ハ其網膜面ニ於テ結合シ被檢者ノ眼底直像ヲ見ルヲ得可シ而シテ此直像ハ眼ノ曲光裝置増大「レンズ」ト同ニ依リテ増大セリ

直像檢査法

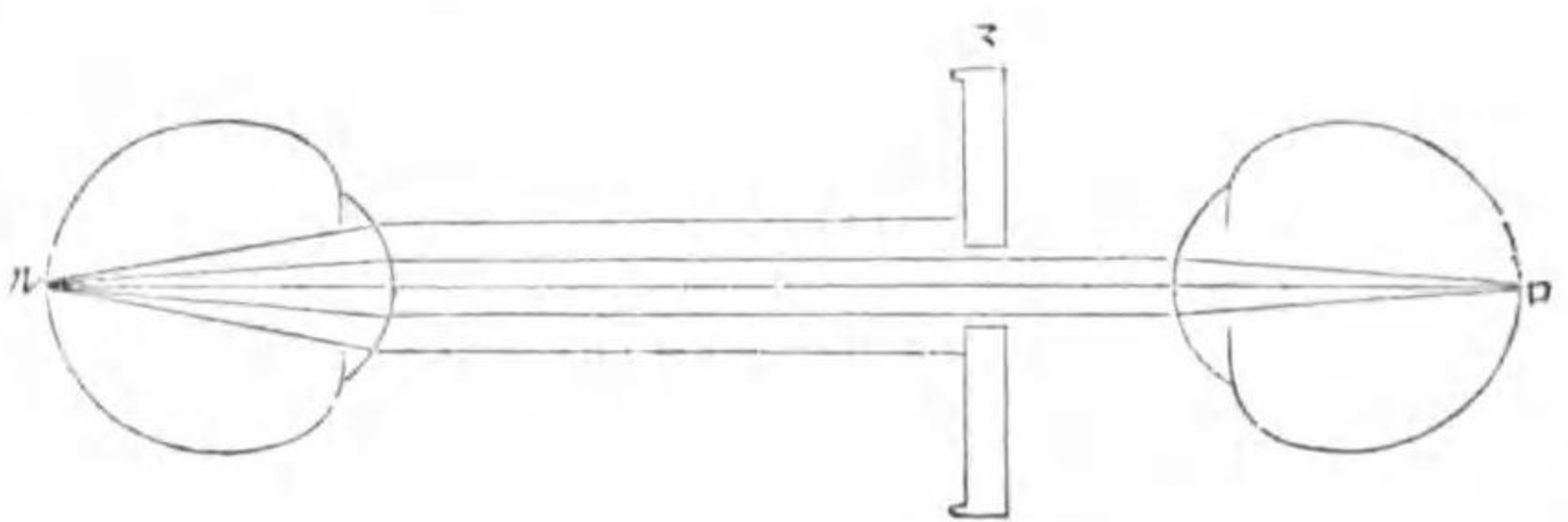
此種ノ檢査法ヲ直像檢査法ト云フ而シテ施行スルニハ光源即チ「ランプ」ヲ被檢者ノ側方及ヒ後方ニ置キ或ハ又閉鎖セル窓戸ノ孔隙ヨリ射來スル日

光ヲ使用スルヲ得可シ但シ太陽ノ直光ハ不可ナリ直像檢査法ニ於テ眼底ノ大部ヲ認視セント欲セハ可及的自己ノ眼ヲ以テ増大「レンズ」檢ス可キ部位ハ其燒距ニ存ス則チ此際ニテハ風折ニ接近スルヲ要ス今若シ此増大「レンズ」ヨリ離在スルキハ視野ノ

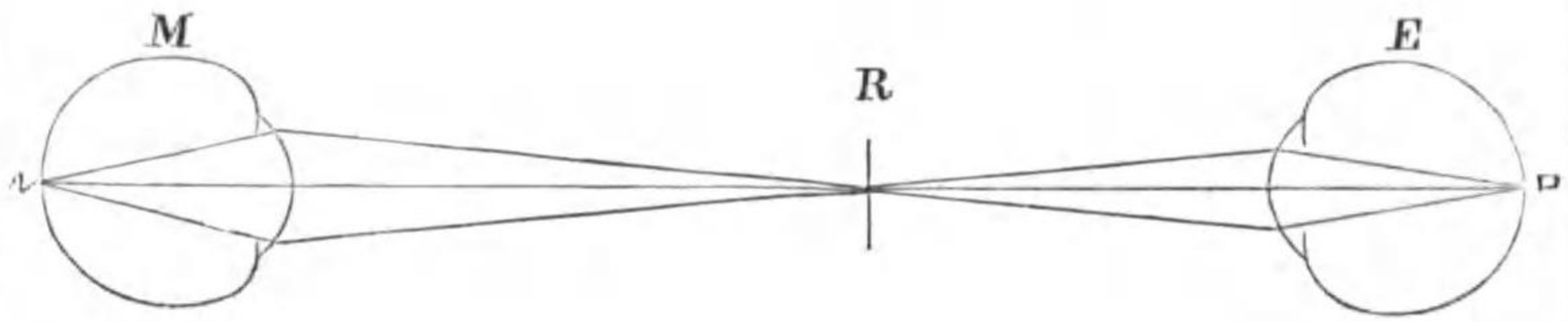
大サ漸々減却シ遂ニ甚タシク狭少ノ唯一條ノ血管ヲ以テ被覆セラル、ニ至ル然ルキハ眼底ノ全軀ヲ明カニ見ルヲ固ヨリ甚タ難シ

今檢眼鏡ヲ以テ光線ヲ眼内ニ射入スルキハ瞳孔先ツ一樣ニ紅色トナリ次テ全ク調節機ヲ弛緩スルニ當リテ初メテ各部ノ形狀ヲ認知ス可シ既ニ陳述スル如ク檢者及ヒ被檢者ハ其ニ併行ノ光線ニ其眼ヲ正定セサル可カラス再言スレハ調節機休止ノ態ニ在ルヲ要ス若シ「アトロピン」ヲ使用セスノ其目的ヲ達セント欲セハ被檢者ニハ遠隔ノ物体ヲ固視セシムルヲ以テ足ルト雖モ檢者ハ之ヲ爲スヲ甚タ難シ然レモ物体甚タシク眼ニ近接スルキハ眼ハ則チ併行ノ光線ニ正定スル

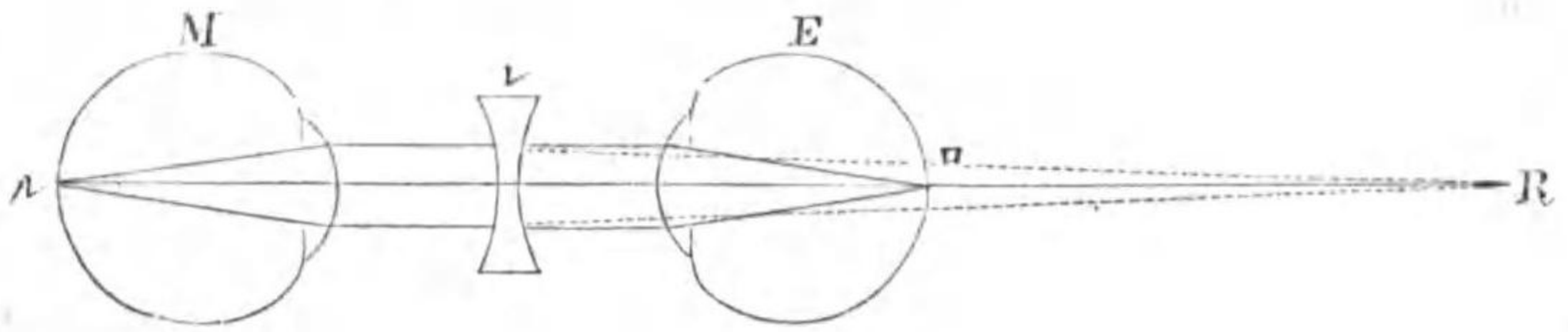
第十圖



第十圖



第十一圖



ヲ得ル者ナリ夫レ調節機ハ隨意ニ全ク弛緩スルコト能ハサル者ナルヲ以テ寧ロ被檢者ノ眼ヨリ射來スル所ノ光線ヲ凹面[レンズ]ニ依リテ開散セシムルノ可ナルニ如カス檢者若シ不正視眼ナルキハ併行光線ニ其眼ヲ正定スルニハ固ヨリ其不正視ヲ補正セサルヲ得ス而シテ此補正眼鏡ハ鏡ノ后面ニ裝置スル廓ニ挿入スルヲ最モ便ナリトス

直像檢査ニ當リ眼底像ノ増大ハ之ヲ詳細ニ定ムルコト難シ何トナレハ此際得ル所ノ像ノ大サハ直チニ計ルコト能ハサレハナリ今之ヲ十四ト三分ノ二倍ト假定ス

若シ被檢者ノ眼、近視第十一圖ナルキハ其網膜面ヨリ射出スル所ノ光線眼外ニ出ルノ後チ併行セス却テ集合シ其遠點第十一圖Rニ於テ結合ス故ニ被檢者ノ眼ハ其遠點ニ於テ増大セル眼底ノ倒像ヲ形成ス而シテ檢者第十一圖被檢者ノ眼ヲ隔離シ之ヨリ射來スル光線既ニ結合スルノ後再ヒ開散シ其調節力ニ依リテ網膜面ニ結合セシメ得ルニ至ルキハ此像ヲ見得ル者ナリ再言スレハ檢者若シ光線ノ結合點ヲ隔ツルノ距離自己ノ近點ニ同一ナルキハ見得ル者トス然シテ若シ之ニ接近スルキハ眼底ノ像不明トナル

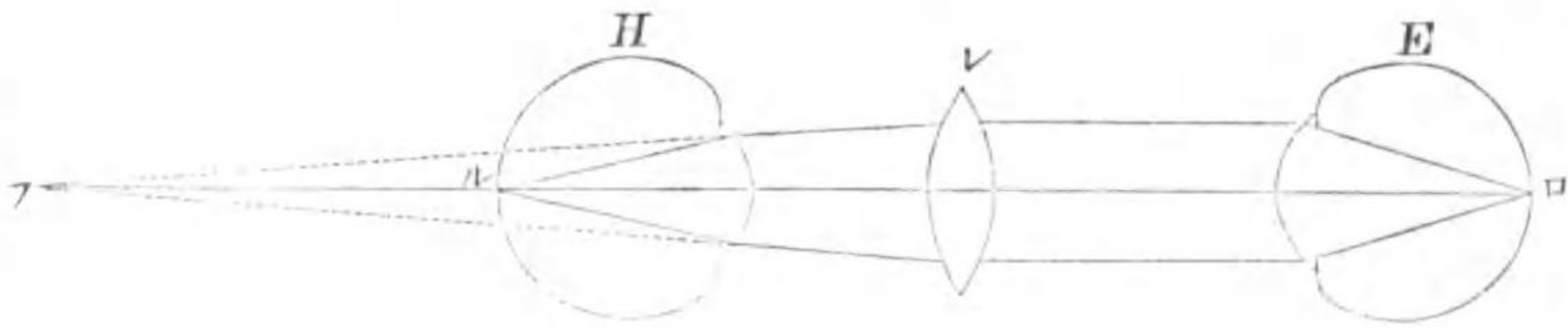
之ニ反シテ若シ近視眼ノ眼底ノ直像ヲ見ント欲セハ宜シク先ツ近視眼ノ遠點ト同長ノ燒距ヲ有スル凹面[レンズ]ヲ以テ之ヲ補正スヘシ何トナレハ檢者ノ眼ハ正視ニシテ集合シ來ル光線ニ正定スルコト能ハサルヲ以テナリ第十圖今若シ檢者モ亦近視ナルキハ同ク彼是ノ近視ヲ補正スル凹面[レンズ]ヲ要ス之レニ反シテ檢者ノ眼遠視即チ調節機ノ休止スルニ當リ其眼ヲ集合光線ニ正定スル者ニシテ若シ遠視ノ度畧ホ被檢者ノ近視ノ度ニ同シキキハ凹面[レンズ]ヲ使用セスノ其眼底ヲ見ルヲ得ヘキナリ若シ遠視ノ度近視ヨリ弱キカ或ハ強キキハ弱キ凹面若クハ凸面[レンズ]ヲ要ス又近視者遠視者ヲ檢スルキハ全ク之

ニ反ス

故ニ檢眼鏡上ニ近視ノ度ヲ定ムルニ其法二種アリ(一)先ツ鮮明ノ眼底
倒像ヲ見得ル距離ヲ計定シ之ヨリ自己ノ近點ヲ減スルニ在リ然レモ此法ハ
只強度ノ近視ニ用ユルヲ得ヘキノミ例之今被檢者ノ眼ヲ隔ツル 10 、 20 、 30 メ
ーテルノ距離ニ於テ眼底ノ倒像ヲ鮮明ニ見ルト假定シ之ヨリ自己ノ近點ノ
距離 0 、 1 、 2 、 3 、 4 、 5 、 6 、 7 、 8 、 9 、 10 、 11 、 12 、 13 、 14 、 15 、 16 、 17 、 18 、 19 、 20 メ
ーテルニテ近視ハ即チ十二曲光力ナリ(二)鮮明ニ眼底直像ヲ見ルニ要スル凹面
眼鏡ノ度ニ从フテ近視ノ度ヲ定ムルニ眼ト凹面眼鏡ト然レモ此際自己ノ調節機
及ヒ被檢者ノ調節機ヲ全ク弛緩セサル可ラス又補正スル凹面鏡ハ可及的被
檢者ノ眼ニ接近スルヲ要ス

今若シ被檢者ノ眼遠視ナルキハ網膜ヨリ來ル所ノ光線ハ曲光系統ニ依
リ屈折セラレ恰モ其後方ニ存スル虚性ノ遠點ヨリ射來スル如キ方向ヲ取リ
開散シテ眼外ニ射出ス^{第十圖}夫レ吾人ノ眼ハ容易ニ開散セル光線ニ正定スル
ヲ得ルヲ以テ遠視眼ノ檢眼鏡檢査ニ當リテハ容易ニ鮮明ノ眼底直像ヲ見ル
ヲ猶近視眼及正視眼ニ於ケルカ如シ然ルキハ近視及正視ニ於ケル如ク自己

第三十圖



ノ調節機ヲ弛緩スルノ煩勞ナクノ却テ只遠視眼ノ遠
點ノ距離ニ應ニ其調節機ヲ緊張スルヲ要スルノミ此
際得ル所ノ像ハ遠視眼ニ於テハ眼ノ后方ニ在リ故ニ
其増大ハ微少ナリ何ントナレハ物体曲光裝置ノ燒距
ヨリ増大^レノ^スノ^レ后方ニ接近シ存スルヲ以テナリ然
レモ視望スル所ノ視野ハ却テ大ナリトス又遠視眼ノ
直像檢査ニ當リテハ調節機ノ代用トノ好^レテ^レ凸^レ眼^レ
^ノス^レヲ使用セリ是レ眼ヨリ射出スル光線ヲ併行トナ
ス^{第十圖}而^レ此際要スル所ノ眼鏡ノ度ニ从フテ遠視眼
ノ度ヲ定ム總テ檢眼鏡ヲ以テ簡便ニ屈折態ヲ定ムル
ニハ所謂屈折檢眼鏡ヲ使用ス

若シ被檢者ノ眼亂視ナルキハ即チ眼ノ屈折面各
異ノ燒距ヲ有スル眼ノ増大^レノ^スノ^レ爲メニ生スル増
大ハ短小ノ燒距ヲ有スル經線ノ向キニ於テ甚シトス
是レ通常縱經線ノ向キナリ故ニ視神經乳頭ノ形ハ圓

ナラスシテ短小ノ燒距ヲ有スル經線ノ向キニ於テ橢圓ヲナス倒像檢査ニ當
 リテハ之ニ反ノ視神經乳頭最長ノ燒距ヲ有スル經線ノ向キニ於テ橢圓ヲナ
 ス何ントナレハ此經線ノ向キニ於テ形成スル像ハ他ノ經線ニ於テスル者ニ
 比スレハ凸面レンズヨリ遙ニ隔離シ存スルヲ以テナリ故ニ此向キニ於テモ
 亦タ甚タシキ増大ヲ呈ス然リト雖モ視神經乳頭ハ尋常必スモ眞圓ナラス
 ノ屢諸他ノ向キニ橢圓ヲナスヲアリ故ニ檢眼鏡上ニ亂視ヲ診定スル
 ニハ必ス直像及ヒ倒像兩檢査ノ成績ヲ交互比較セサル可ラス解剖上ノ縱橢
 圓形ノ視神經ハ例之亂視ナルキハ直像檢査ノ際甚タシク縱橢圓形トナリ而
 ノ倒像檢査ニテハ圓形ヲ呈ス之ニ反シテ經線ノ同形ナルキハ彼是ノ檢査法
 ニテ皆縱橢圓形ヲナス

亂視ヲ診定スルニコクチウス氏ハ又左法ヲ稱用セリ即チ先ツ反射鏡ヲ以テ〇、五〇
 乃至〇、六〇メリメートルノ距離ニ存スル廣幅鮮明ノ燭光ノ像ヲ眼底ニ射入シ次テ
 此燭光ノ直前ニ細キ鉛筆ヲ各異ノ位置ニ保チ而シテ此鉛筆ノ像ヲ燭光ト共ニ眼底ニ
 射入ス然レバ若シ鉛筆各異ノ位置(地平鉛直等)ニ於テ同大ニ且ツ判然タルキハ眼底ノ
 光線結合ハ同心性ナリトス之ニ反シテ若シ一方ニ於テ不明ナルキハ經線ノ燒距
 不同アルノ徴ナリ而シテ患者ノ自覺症狀モ亦常ニ此試驗法ノ成績ト符合セリ即チ患
 者ハ檢査ノ先キニ鉛筆像ヲ不明視スル經線ノ向キニ存スル線ヲ同ク不明視スル者
 ナリ

其他亂視ハ角膜計ヲ以テ診スルヲ得可シ上論ヲ參

角膜鏡檢査

Keratologie 「グレイ」氏 網膜鏡檢査 Retinoscopia 「ヘイ」氏 影像檢査 Skia-

或ハ瞳孔鏡檢査

Pupilloscopia 「ランド」氏 凹面反射鏡ヲ以テ「メートル」

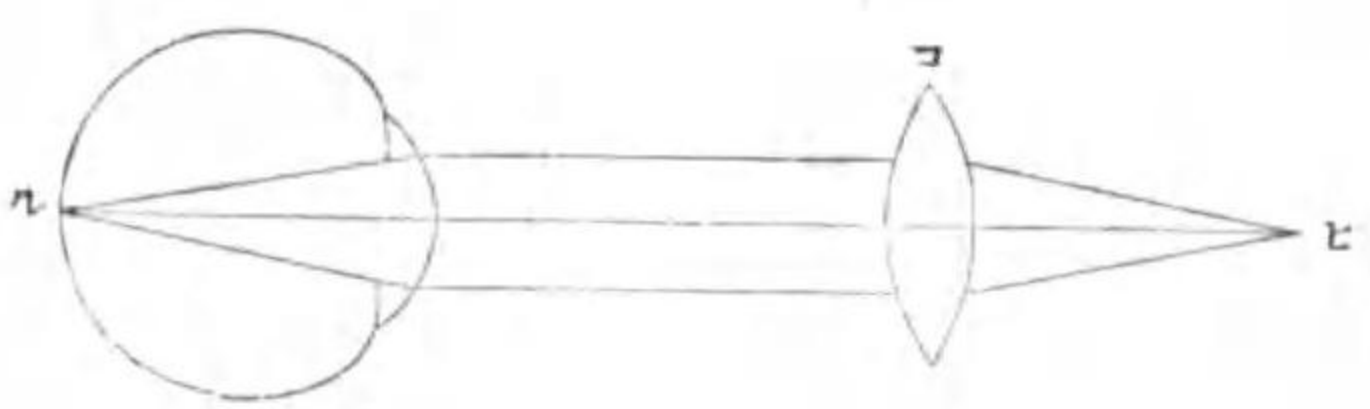
ノ距離ヨリ一眼ヲ照ラスキハ該鏡ハ其燒點ノ彼側ニ光線ノ像ヲ投映シ被檢
 者ノ眼ハ之ヲ光線トシテ視ル可ク今反射鏡ヲ稍瞳孔ノ左縁ニ向ヒテ縱軸ノ
 周圍ニ廻旋スレハ鏡ノ投映セシ像ハ左方ニ廻旋スルモ此像ヨリ發スル光線
 ハ眼ノ結合點ヲ通リテ眼底ノ反對側ニ廻旋ス可シ而シテ被檢眼ノ遠點「メ
 ートル」ヨリ遠ク即チ其眼正視眼及ヒ遠視眼ナルキハ光源ノ位置ニ反對スル
 網膜領ハ輝照セラレ鏡ヲ左方ニ廻轉スレハ瞳孔ノ右半部赤色ヲ呈シ左半部
 影ヲ呈ス又被檢眼ノ遠點鏡ノ燒點ヨリ近ク即チ其眼近視眼ナルキハ光輝ノ
 運動ハ眞ノ運動ニ反對シ鏡ノ廻旋ト側ヲ同フシテ鏡ヲ左方ニ廻旋スレハ瞳
 孔ノ左半部赤色ヲ呈シ右半部影ヲ呈ス又亂視眼ニ在テハ鏡ノ廻旋ヲ或ル經
 線ニ於テ爲スヘシ而シテ被檢者ノ眼前ニ保持シテ瞳孔半部ノ影ヲ他側ニ現
 ハスヘキ最弱ノ凹鏡ハ近視眼ノ度ヲ示シ之ヲ鏡ノ廻旋スル同側ニ現ハスヘ
 キ最強ノ凸鏡ハ遠視眼ノ度ヲ示ス者ナレモ不正視眼ノ度強キニ非ラサレハ

瞳孔半部ノ影判然タラサルナリ又平面ノ反射鏡ヲ用フルキハ此影ハ反對ニ現ハル何者此鏡ノ投映セシ光源ノ用ヲ爲ス所ノ像ハ鏡ノ後方ニ在リテ鏡ノ廻旋ニ反對シテ運動スルカ故ナリ

倒像検査

檢眼鏡上ニ屈折異常ヲ診定スルノ法ハ詐譌或ハ先天又ハ后天ノ視力減少ノ時ニ當リテ甚タ緊要ナリ
眼底ノ倒像検査ニハ宜ク被験者ノ眼前ニ凸面[レンス]ヲ裝置スヘシ然ルキ

第四十圖



ハ眼ヨリ射出スル併行光線ハ凸面[レンス]ノ焦點ニ於テ結合シ而シテ眼底ノ倒像愛ニ現出ス第十圖今此像ヲ見ント欲セハ檢者ハ只像ノ存スル點ニ調節スルヲ要スルノミ故ニ檢者ハ只其眼ヲ以テ像ノ現存スル點自己ノ近點以外ニ存スルニ至ルマテ退却スルキハ直ニ鮮明ノ像ヲ見得ル者ナリ然ノ若シ被験者ノ眼ヨリ射來スル光線凸面[レンス]ニ向フテ集合ノ來ルキハ早ク結合シ又之ニ向フテ開散シ來ルキハ遅ク結合スル者ナリ

眼底像ノ出現スル凸面[レンス]ノ距離ヨリノ同ク眼ノ屈折態ヲ定ムルヲ得可シ倒像検査ニテ屈折ヲ定ムルシミット、リン

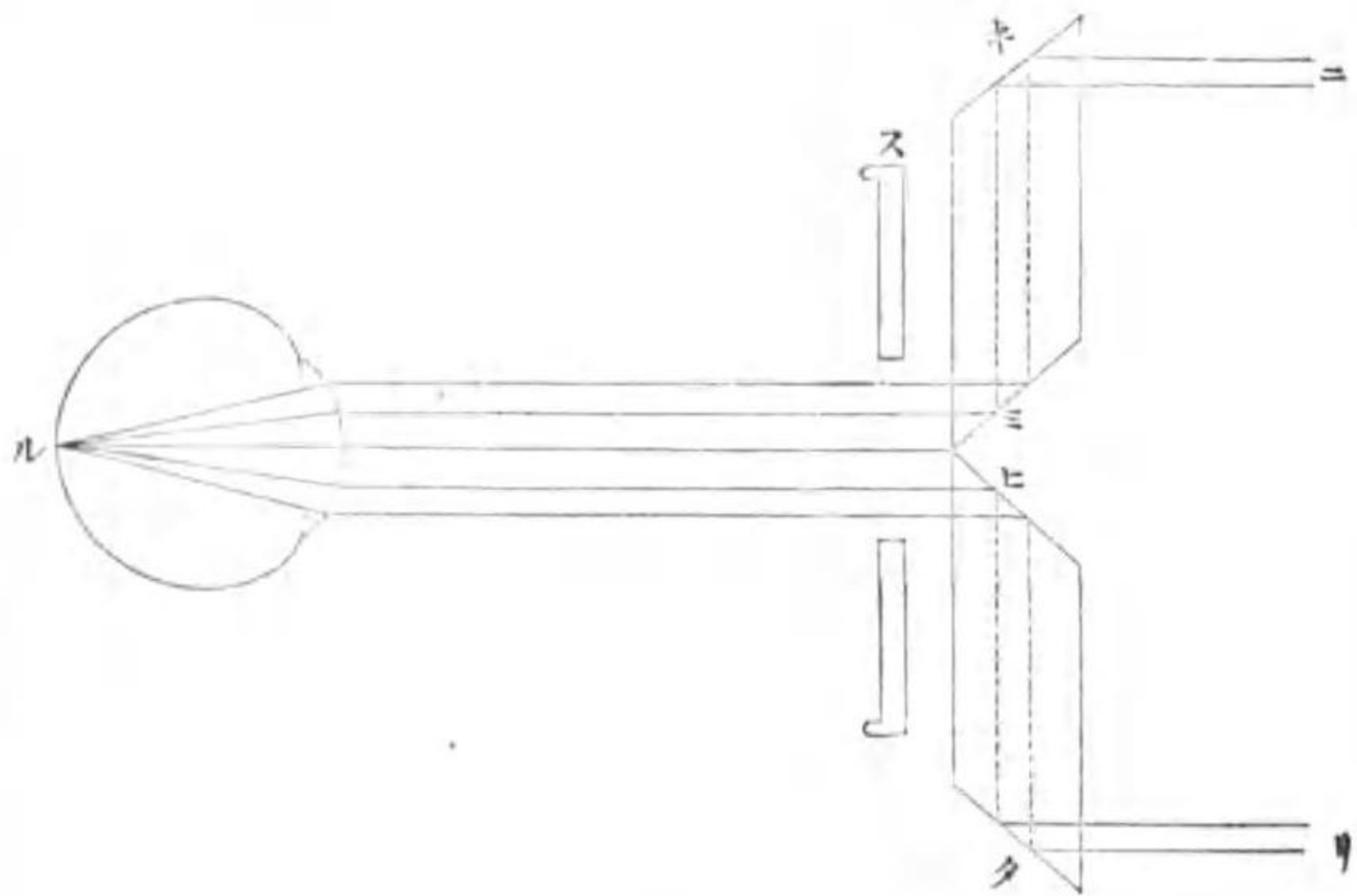
ブレ[氏]法ハ即チ此理ニ基ク者ニシテ檢者ハ其調節機ヲ弛緩スルヲ用ヒス又其各回ノ調節機ノ常態ヲ知ルヲ要セサルノ益アリ此法ニテハ「ランブ」ノ前ニ直立スル格子ノ像ヲ反射鏡ニテ被檢者ノ眼内ニ射入シ其影像ヲ明視シ得ル距離ヨリ屈折ヲ算出ス

倒像検査ヲ施スニ近視者ハ其近視ヲ補正スルヲ要セス何ントナレハ凸面[レンス]ニ依リテ形成セラレタル像ハ之ニ近視スルニ依リテ之ヲ其遠點以內ニ運輸スルヲ得レハナリ之ニ反ノ遠視者ニハ調節機ノ使用ヲ減少セシムル爲メニ檢眼鏡ノ後面ニ凸面[レンス]ヲ挿入スルヲ稱用セリ

凸面[レンス]ハ被檢者ノ眼ヲ距ル其燒距ト同大ノ距離ニ於テ保ツ可シ蓋シ之ニ依リテ可及的瞳孔ノ大像ヲ得且可及的廣大ノ視野ヲ得レハナリ即チ瞳孔若シ凸面[レンス]ノ燒距ニ存スルキハ之ヨリ射來スル所ノ光線ハ凸面[レンス]ニ屈折セラレ、ノ后併行トナリ而シテ此[レンス]ヨリ結合セラレタル像ハ無限ニ存ス故ニ無限ニ増大ス之ニ反シテ[レンス]若シ虹彩面ニ接近スルキハ虹彩假像ヲ形成シ又之ヨリ隔離スルキハ虹彩ヲ呈ス此二者ハ皆視野ヲ縮小スル者ナリ

視野ノ大サハ其他尙瞳孔ノ大サ及ヒ使用スル[レンス]ノ燒距ニ關ス即チ燒距愈短小ナルキハ視野愈大ナリ然レモ各部ノ増大ハ却テ愈減少セリ通

第十圖



常尤モ良ナルハ十二曲光力ノ凸面レン
 スヲ使用スルニ在リ何ントナレハ此際
 直像検査ノ時ト稍同一ノ増大ヲ達スル
 ナ得レハナリ若シ増大少キモ視野ノ擴
 大ヲ欲スルキハ宜シク二十曲光力ノレ
 ンスヲ使用ス可シ
 既ニ論述スルカ如ク被檢者ノ眼凸面レ
 ンス及ヒ檢者ノ眼ノ視學的中心并ニ檢
 眼鏡ノ孔口ハ共ニ一直線ニ存スルヲ
 要ス其他光源ハ患者ノ側方ニ於テ其眼
 ト同高ノ位置ニ置キ而シテ鏡面ニハ眼ヲ
 照ラスニ適當ノ位置ヲ與フ可シ又凸面
 レンスハ他手ノ拇指ト示指トヲ以テ持
 持テ尙小指ヲ以テ之ヲ患者ノ眼窩縁ニ
 固定ス
 初メニハ角膜面及レンス面ノ反射像検査ノ際障害ヲナス故ニ角膜面ノ反射

像ハ之ヲ避ケテ檢ス可シ又レンス面ノ反射像ハレンスヲ纔ニ其軸ノ周圍ニ
 廻轉スルニ依リテ避クルヲ得可シ

眼底ノ高低ヲ確實ニ認知シ得ルニハシャロート、ツーロン氏ノ兩眼檢眼鏡

ヲ要ス此檢眼鏡ニテハ被檢者ノ眼内ヨリ射來スル光線ハ反射鏡第十五ノ孔

ヲ通過スルノ后二箇ノ菱形三稜硝子ニ達ス此硝子ノ側面ハ互ニ四十五度ノ

角度ヲ形成スル者ニシテ光線ハ二箇ノ斜面ミ及ヒヨリ右方及ヒ左方ニ反射セ

ラレ再ヒ斜面キ及クニ達シ之ヨリ遂ニ檢者ノ右眼及左眼ニ達ス

先ツ初メニハ透明体ニ注意シ后ニ眼底ヲ檢スヘシ角膜ノ細微ノ溷濁及ヒ不

平ハ瞳孔一樣ニ紅色ナラスシテ斑狀若クハ雲片樣ノ溷濁ヲ交ユルヲ以テ了

知ス水晶体ノ溷濁及ヒ其脫位ハ同シク檢眼鏡ヲ以テ明ラカニ認知ス可キナ

リ又患者ヲノ上下左右ノ各方向ヲ順テ逐フテ速カニ見セシムルキハ瞳孔ノ

后ニ浮游スル暗影ニテ硝子体溷濁ノ存在及ヒ其性質ヲ審カニスルヲ得可キ

ナリ

眼底ノ色ハ鮮黃紅色ニシテ主トシテ脈絡膜ノ血量及ヒ含色素上皮ノ如何ニ關
 ス網膜ハ殆ト透明ニシテ只僅カニ光線ヲ反射スルノミ其視紅素ホル更ニ眼底

ノ色ニ關涉スルヲナシ又鞏膜ハ只脈絡膜ヲ透過シテ見ルヲ得ルノミ脈絡膜
中色素含有ノ多少ニ從フテ鞏膜ヨリ光線ヲ透入セシメ眼底ノ色ニ混同スル
ヲアリ

上皮ノ色素容量ハ人皆異ナリ鮮褐色ノ人ニ在テハ少量ナルモ黒髮ニシ
テ兼テ虹彩暗色ヲ呈スル者ニハ多量ナリトス又初生兒ニ在リテハ上皮層ノ
色ハ甚タ暗色ナリ其他ハ眼底ノ着色一様ナリ

眼底ハ屢^{カスリ}黒色ノ斑紋ヲ呈シ恰モ廣幅ノ紅線ヨリ成ル所ノ格子形ヲナシ其網
目ハ黒色素ヲ以テ充填セラル、如キ看ヲ呈スルヲアリ此紅線ハ脈絡膜ノ大
血管ニノ色素ニ被覆セラレサル者ナリ而シテ黒色部ハ血管網間所謂脈管間腔
ニ多量ニ充填セラレタル色素ニ依リテ形成セラル此脈管間腔ハ全眼底ニ於
テ色素分佈ノ一様ナルヲ示ス者ニシテ視神經穿入部及ヒ黃斑ノ近傍ニ於テ
ハ隘少且ツ稜角アルモ周圍部ニ在リテハ長形ニシテ經線ノ向キニ併列セラル
若シ脈管間腔ノ色素分佈各所ニ於テ各異ナルキハ之ヲ病的變化ト見做ス
ヲ得可シ然レモ既ニ論述スル如ク脈絡膜少シク斑點ヲ呈スルモ必ス之ヲ病
的ト誤認スル勿レ

上皮層色素ヲ含有スルヲ少キキハ鮮薄黃紅色ノ眼底面ニ明瞭ニ脈絡膜ヲ透
見シ其細小ノ分枝及ヒ鞏膜ニ穿入スル星形靜脈ノ分枝ニ至ルマテ視別スル
ヲ得可シ^{白人}

網膜ハ上論ノ如ク殆ント透明ニシテ其纖維ハ皆篩板ニ於テ髓鞘ヲ脱却シ透明
ノ軸索トナリテ進行ス此膜ハ光線ヲ反射スル甚タ少シ殊ニ上皮層ノ色素ヲ
含有スルヲ少量ナルニ當リテ然リ故ニ網膜ヨリハ只其血管ヲ見ルヲ得ルノ
ミ

之ニ反シテ上皮層若シ色素ニ富饒ナルキハ暗色ノ眼底面ニ網膜ノ微弱ナル光
線反射著明トナリ恰モ脈絡膜面ニ蔓布スル白霧ノ如キ看ヲ呈ス而シテ乳頭ノ
近傍ニ於テハ網膜尤モ厚キヲ以テ殊ニ明カニ了知ス可シ之レカ爲メニ乳頭
ノ周圍及ヒ一二ノ網膜血管ハ各所ニ於テ潛伏スルカ如シ然レモ黃斑部ニ對
スル乳頭ノ緣ハ常ニ此ノ如キ溷濁ナシ何ントナレハ此側方ニ於テハ神經纖
維ノ數網膜中最モ少許ナレハナリ又時トシテハ視神經乳頭ノ周圍ニ於ケル
網膜部視神經纖維及ヒ結締織ノ經過ノ方向ニ一致シテ微ニ線狀ヲ呈スル
アリ

視神經纖維ハ甚ク稀レニ一時裸体ノ軸索トナリ視神經乳頭ニ行走スルノ後再ヒ髓鞘ヲ以テ包括セラレ終ニ復タ之ヲ脱却スルヲアリ然ルキハ乳頭ニ接ノ白灰白色ノ光澤アリテ少ク隆起シ且線狀ヲナス所ノ斑ヲ呈ス此斑ノ境界ハ放線ヲナシ脈絡膜ヲ其部ニ於テ掩蔽ス乳頭自家ハ此白色潤濁ノ部分ノ外ニ在リ

視神經穿入部 即チ視神經乳頭ハ黃斑ノ内方ニ存ス故ニ之ヲ瞻視セント欲スレハ眼ヲ内方及ヒ稍上方ニ向ハシメサル可ラス乳頭ハ鮮明白紅色ノ圓板ニ他ノ眼底ヨリ判然區畫スルヲ得此乳頭ハ多クハ鮮明白色ニシテ廣狹各異ナル輪必スシモ全輪ヲナサス所謂鞏膜輪ヨリ周擁セラル是レ視神經内鞘ト脈絡膜附着部トノ間ニ於テ網膜ヨリ透見スル鞏膜部ナリ其他尙脈絡膜附着部ニ色素ノ積堆ヲ見ル然レモ是レ甚ク稀レニ全輪ヲナス者ニ多クハ只顯露部ニ於テ最モ稠密ナル一二ノ小色素點ニ依リテ之ヲ想像スルヲ得ルノミ網膜ノ中心動脈ハ殆ント乳頭ノ中心ニ於テ少シク其鼻側ニ偏在シテ發生シ通例根起ヨリ直ニ分岐シテ二枝トナリ後チ乳頭面若クハ其近傍ニ於テ再ヒ二枝或ハ數枝ニ分岐スル者ナリ通常乳頭面ニハ各二箇ノ動脈及ヒ靜脈ノ發

生スルヲ見ル是レ主トシテ上方及ヒ下方ニ行走シ次テ其主枝ヲ以テ黃斑ノ周圍ヲ弓狀ニ周擁シ此部ヲ超過スルノ後終ニ數多ノ小枝ニ分岐スル者ナリ然レモ此關係ハ固ヨリ必ス同一ナラスノ人々皆ナ各異ナリ屢々血管ハ既ニ視神經幹内ニ於テ分岐シ乳頭ノ縁ニテ表面ニ達スルコアリ

動脈ハ其大幹ニ於テハ鮮紅色ヲナシ暗色ノ境界線ヲ呈ス是レ其幅ノ中央ニ於テ其長軸ヲ行走スル線ヲナス者ニノ畢竟圓柱狀血管壁ノ反射ニ原由スル者ナリ靜脈ハ暗紅色ニシテ其反射纔ニ著明ナリトス其他動脈ハ直行シ靜脈ハ蜿蜒ス屢々大血管ノ外壁ハ之ニ傍フテ行走スル不透明白色ノ線ニテ認知スルヲ得ル者ナリ

血管深部ニ進入スル部位ニ於テ乳頭面ハ殆ント常ニ靜脈搏動ヲ呈ス此搏動動ハ靜脈末端交番ニ濃淡ノ紅色ヲ呈スルヲ以テ認知スル者ナリ若シ此搏動ヲ認知スルヲ能ハサルキハ宜シク凸面「レンス」ヲ保持スル手ノ指端ヲ以テ眼球ニ輕易ノ壓ヲ加フルキハ直ニ之ヲ發起スルヲ得ヘシ然ルキハ乳頭ノ周圍ヨリ其進入部ニ至ル靜脈ノ末端ハ交番ニ白色トナリ又再ヒ紅色トナル此ノ如ク白色ニ變スルハ橈骨動脈搏動ノ來ラサル前ニ靜脈ノ中心端ニ初マリ而

ノ乳頭線ノ近傍マテ進行ス又紅色ニ變スルハ橈骨動脈搏動ノ后直ニ周圍ニ
 初マリ突衝狀ニ中心ニ進行ス
 心臟ノ收縮期ニ當リテ動脈甚ダシク充實セラル、キハ壓力ノ亢進ヲ來ス者
 ナリ而シテ此壓ハ毛細管及ヒ靜脈ヨリハ速カニ硝子体ニ傳達ス然レモ靜脈ノ
 血壓ハ毛細管ヨリ心臟ニ向フテ減少スルヲ以テ中心ノ靜脈端ハ心臟收縮期
 ニ當リテ亢進セル硝子体ノ壓ニ抗スルノ力甚ダ微弱ナリ之ニ依リテ一時壓
 迫セラレ即白色トナル然レモ此間ニ血液ハ動脈ヨリ毛細管ヲ通過シテ靜脈
 ニ流入シ壓迫ヲ受クル前部ノ靜脈ニ鬱血ヲ來シ先キニ心臟收縮期ニヨリテ
 發起セラレタル動脈及ヒ硝子体内ノ壓力亢進ノ停止スルト共ニ靜脈ノ壓迫
 モ亦タ消失シ鬱積セル血液ハ速カニ還流シ去ル
 乳頭面ノ動脈搏動ハ「フオン」氏¹⁾ニ依リテ只病理的ニ硝子体ノ壓力動脈ノ側壓ヨリ
 強劇ナルニ當リテ發スル者ナリ然ルキハ血液ハ復タ舊時ノ如ク一樣ニ網膜
 血管ニ流入スルヲ能ハス只突衝狀即チ心臟收縮時ニ當リテ動脈血壓ノ卒然
 亢進スルニ依リテ流入スルヲ得ルノミ是故ニ心臟收縮時ニ當リテハ卒然動
 脈端ニ於テ中心ヨリ初マル所ノ紅色ヲ認知スルモ其擴張期ニ至リテハ再ヒ

消失ス

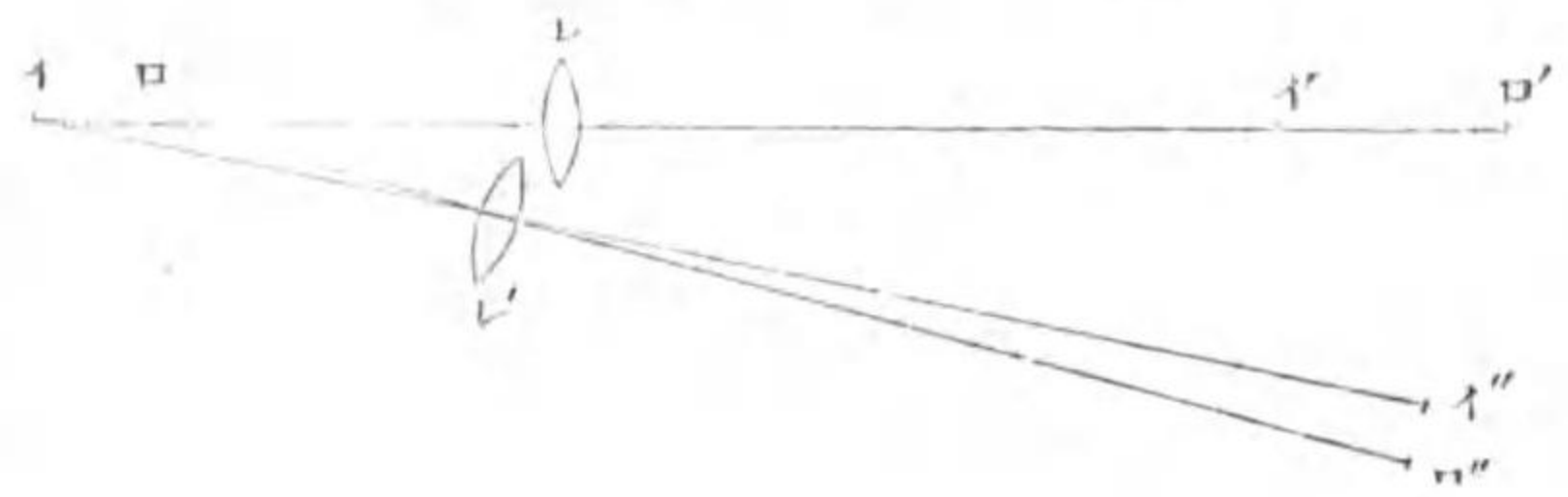
動脈搏動モ亦タ指端ヲ以テ永ク眼球ニ壓チ加フルキハ同シク健康眼ニ誘起
 スルヲ得可シ然ルキハ壓ノ增多スルト同時ニ常ニ視野ノ暗黒ヲ續生ス特發
 ノ動脈搏動ハ大動脈瓣閉鎖不全ニ併發ス下章ヲ參
 視神經ノ纖維ハ篩板ヲ穿貫スルノ后網膜面ニ分佈スルカ爲メニ扇狀ニ開散
 セサルヲ得サルヲ以テ乳頭面ニハ必ス漏斗狀ノ小陷凹ヲ生ス是レ檢眼上ニ
 ハ鮮明ノ斑點トナリテ了知セシムル者ナリ而シテ此斑點中ニ屢小灰白點ヲ見
 ル是レ即チ篩板ノ網口ナリ又此鮮明ノ斑點ハ必ス乳頭ノ中心ニ位セスノ多
 クハ少ク黃斑ノ側方ニ偏在ス
 乳頭面ノ強大ナル皿狀ノ陷凹ハ網膜ノ外層視神經ヨリ漸次增高シ視神經纖
 維ハ則チ淺表ニ分佈スルカ爲メニ發起セラル、者ナリ之ニ反シテ今外層卒然
 增高スルキハ視神經纖維ハ先ツ峻立シテ之ニ舉上シ次テ急ニ屈折セサル可
 ラス然ルキハ漏斗狀ノ陷凹ハ之カ爲メニ微小トナル
 陷凹若シ著明且ツ著大ニシテ明カニ脈絡膜面ヨリ陷沒スルキハ之ヲ生理的陷
 凹ト云フ然ルキハ篩板ノ網目ハ甚ダシク深部ニ出現ス此時ニ當リテハ網膜

ノ血管鈎狀ニ屈曲シ而ノ卒然消失スルカ如ク見ユ何ントナレハ鉛直ニ深部ニ下行スル部位ヲ前方ヨリ只尿管長軸ノ向キニ於テ見得ルヲ以テナリ今若シ陷凹ノ側壁ヲ少シク側方ヨリ見ルキハ往々血管ノ之ニ傍フテ深部ニ進入スルヲ見ルヲアリ卷末眼底ノ圖

生理的陷凹ハ其大サ各異ナリ又其縁ハ或ハ漸次ニ或ハ卒然下行ス然レモ其縁ハ決ノ視神經ノ縁ニ達スルヲナシ是レ生理的陷凹ヲ后章論述スル視神經ノ縁内障性及ヒ萎縮性陷凹ト區別スルニ最モ要件タリ

陷凹ノ度ハ兩眼檢眼鏡ヲ使用スルノ他亦一眼檢眼鏡ヲ以テ直像及ヒ倒像ノ兩檢査法ニ依リテ之ヲ定ムルヲ得可シ例之今被檢者ノ眼正視ナルキハ檢眼鏡檢査ニ當リテ其陷凹部ハ眼ノ屈折体ノ燒距ニ對シテ近視眼ノ眼底ト同一ノ關係ヲ有ス故ニ直像ニテ之ヲ明視シ得ルニハ凹面レンズヲ使用セサル可ラス又他ノ各異ノ屈折態ニ於テ陷凹面ヲ網膜面ノ如ク明視スルニ必ス各異ノ補正眼鏡ヲ要セサル可ラス此際要スル所ノ凹面レンズノ度再言スレハ要スル所ノ補正眼鏡ノ差ハ即チ陷凹ノ度ヲ示ス者ニシテ $HID + HO_2$ ミリメートルノ高低ノ差ニ一致ス

圖 六 十 第



倒像檢査ニ當リテハ像ノ假性移動ニヨリテ陷凹ノ度ヲ定ムルヲ得可シ此移動ハ則チ視神經像ノ一二ノ部位凸面レンズヲ移動スルニ當リテ生スル者ナリ今第十六圖ニ示スカ如ク(イ)(ロ)ハ陷凹ノ側壁ニシテ凸面レンズ(レ)ヲ以テ之ヲ注視シ且其視學的中心ハ(イ)及ヒ(ロ)ト共ニ檢者ノ眼ノ視線ノ向キニ在リト假定スルキハ(イ)及ヒ(ロ)ハ凸面レンズノ燒距外ニ存スルニ於テハ(イ)及ヒ(ロ)ノ所ニ其倒像ヲ形成スヘシ此時ニ當リ凸面レンズ(レ)ノ方ニ移動スルキハ(イ)ハ其倒像ヲ(イ)ニ又(ロ)ハ之ヲ(ロ)ニ形成スヘシ(イ)點ノ像ノ陷凹ハ今ヤ側方視線ヨリニ移動セリ殊ニ此移動ハ網膜血管ノ屈曲部ニ於テ判然見ルヲ得ル者ナリ

黃斑 容易ニ見出スルニハ鏡ノ反射光像ヲ視神經ヨリ徐々ニ外方ニ運動ス可シ黃斑ハ視神經ヨリ凡ソ二乳頭直徑ヲ隔離シテ眼底ノ地平直徑ヨリ稍下方ニ位シ而シ暗褐色ノ橫楕圓ヲ呈シ屢光澤アル輪ニ圍擁セラル此着色ハ新鮮ノ解剖セル眼ノ黃斑ノ色ニ適合セリ舊時

ヨリ傳言シ來ル黃色ハ只是レ死後ノ變化ノミ^{シミツト}、^{ムブレ}氏
 檢眼鏡ノ使用ヲ演習スルニ内面黑色ヲナス所ノ厚紙ノ圓柱ヲ製シ其后端ニ圖書ヲ
 挟ミ又其前端ニハ中隔ノ后ニ圓柱ト同長ノ燒距ヲ有スル凸面「レンス」ヲ挿入ス圖書
 面ヨリ射來スル所ノ光線ハ凸面「レンス」ニ風折セラレ、ノ后正視眼ニ於ケルカ如ク
 併行トナル通常茲ニ十番ノ凸面「レンス」ヲ使用スルヲ得可シ今凸面「レンス」ノ燒距ヲ
 短縮スルカ或ハ「レンス」ノ燒距ヲ變セスシテ圓柱ヲ延長スルキハ各異ノ風折態ヲ顯
 出スルヲ得可シ

又兎ハ甚々檢眼鏡用法ノ演習ニ相當セリ通常兎ノ乳頭ノ兩側ニハ大部ニ蔓延スル
 有髓神經纖維ヲ見ル之ニ依リテ主トシテ人體ノ視神經ト相區別ス

眼緊張之検査
法

○眼緊張之検査法 ^{オフタモトノメーター} Ophthalmotonometrie 眼球ノ緊張ハ指ヲ以テ檢スルヲ得

可シ即チ「コシチウス」氏ニ从ヘハ先ツ患者チノ上方ヲ視望セシメ示指ヲ角膜
 下方ノ鞏膜面ニ置キ以テ其抗抵ヲ檢ス然ルキハ眼ハ輕易ノ壓ニ抗敵スル者
 ナリ又法ハ患者チノ下方ヲ瞻現セシメ兩手ノ示指ヲ以テ上眼瞼ノ上ヨリ軟
 骨ノ上縁ヲ越ヘテ眼球ヲ押ヘ而シテ之ヲ輕易ニ壓迫ス可ク試ム眼球ノ緊張ヲ
 詳細ニ計ルニハ各種ノ裝置ヲ製出セリ之ヲ計壓器 ^{トノメーター} Tonometer ト名シ然レモ
 此等ノ裝置ハ甚々不満足ニ實際ノ用ニ供スルコト能ハス尋常ノ眼球緊張ハ
 付スルニ「」ノ記號ヲ以テシ緊張増加ノ度ハ「 T_1 」+「 T_2 」ノ類ヲ以テシ又減少
 ノ度ハ「 T_1 」-「 T_2 」-「 T_3 」ノ類ヲ以テス

眼球運動ノ検査

○眼球運動之計法 ^{オフタルモトメーター} Ophthalmotopometrie 眼球ハ三對ノ筋ニ依リテ廻轉セラ

ル即チ外及内直筋上及下直筋上及ヒ下斜筋是レナリ此三對ノ筋ノ廻轉軸ハ
 皆チ一點即チ廻轉點ニ於テ結合ス而シテ此點ハ正視眼ニ在リテハ平均視軸
 ノ中央ヨリ后方一七七「ミルリメートル」ノ所ニ存ス近視眼ニ在リテハ之ヨリ
 一層后ニ方存ス然レモ此眼ニ在リテハ其視軸延長ナルヲ以テ亦タ遙カニ后
 壁ヨリ隔離シ廻轉點ノ前后ニ在ル視軸ノ兩部分ハ正視眼ニ於ケルト殆ント
 同一ナリ又遠視眼ニ在リテハ其廻轉點假令ヒ眼ノ後壁ニ接在スルモ角膜ノ
 後方ヨリ甚々シク離在セス^{ドンドン} 此廻轉點ハ眼ノ諸運動ニ當リテ固定シ且
 變位スルコトナシ^{「フオオルクマン」}「フオオルクマン」氏
 固視點ヨリ眼ノ廻轉點ヲ貫通シテ黃斑ニ行ク處ノ線ヲ視線 ^{ブライクライン} Bickline ト云フ
 然レモ獨リ視線ノミニテ眼ノ位置ヲ定ムル者ニ非ラスノ却テ眼球ハ視線ノ
 固着スルニ當リテ尙此視線ヲ軸トシテ其周圍ヲ廻轉スルヲ得ル者ナリ此運
 動ヲ名ケテ滑車廻轉ト云フ何ントナレハ此際虹彩ハ滑車ノ如ク廻轉スレ
 ハナリ
 視線ハ角膜軸ト一角度即チ六〇ヲ形成ス此角ハ各異ノ大サヲ有スル者ニ

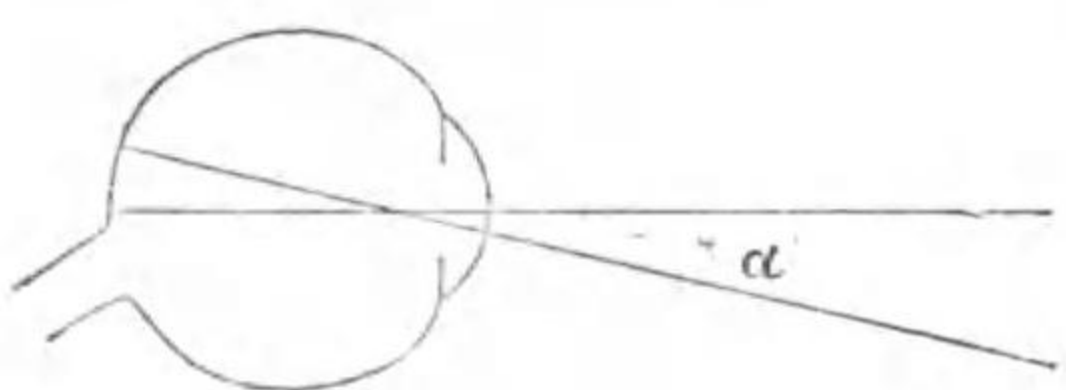
或ハ實性ニノ角膜軸ノ内方ニ位シ或ハ虛性ニノ其外方ニ占位ス而シテ其角異
 常ニ大ニ且ツ實性ノ位置ヲ占ムルキハ視線併行ノ向キヲ取ルニ當リテ眼ハ
 外見上開散スル如ク見ヘ又虛性ノ位置ヲ占ムルキハ輻輳スル如ク見ユ
 正直ノ向キヲ瞻望スルニ當リテハ諸眼筋皆ナ其力ヲ平均ス即チ視線ハ併行
 ニ地平面ニ在リ第一位置地平ノ向キニ内方及ヒ外方ヲ瞻視スルニ當リテ

ハ外及ヒ内直筋ノミ作用シテ眼球ヲ正シク地平ノ向キ
 ニ廻轉ス

之ニ反シテ上及ヒ下直筋ハ眼球ヲ正シク鉛直ニ上方及
 ヒ下方ニ廻轉セズ其筋面ハ眼球ノ縱經線面ニ在ラス
 前外方ヨリ后内方ニ傾向セリ故ニ此兩筋ノ廻轉軸ハ眼
 ノ橫軸ニ符合セスノ殆ト之ト二十度乃至二十五度ノ角
 度ヲ形成ス爰ヲ以テ上直筋ハ角膜ヲ上方ニ廻轉スルノ
 他同時ニ尙之ヲ僅ニ内方ニ於テス又下直筋ハ眼球ノ下

方運動ニ當リテ同時ニ之ヲ内方ニ廻轉ス此兩筋ハ則チ經線ノ向キニ作用ス
 ル者ニノ甲ハ縱經線ノ上端ヲ内方ニ乙ハ之ヲ外方ニ傾欹ス其高低ノ位置ニ

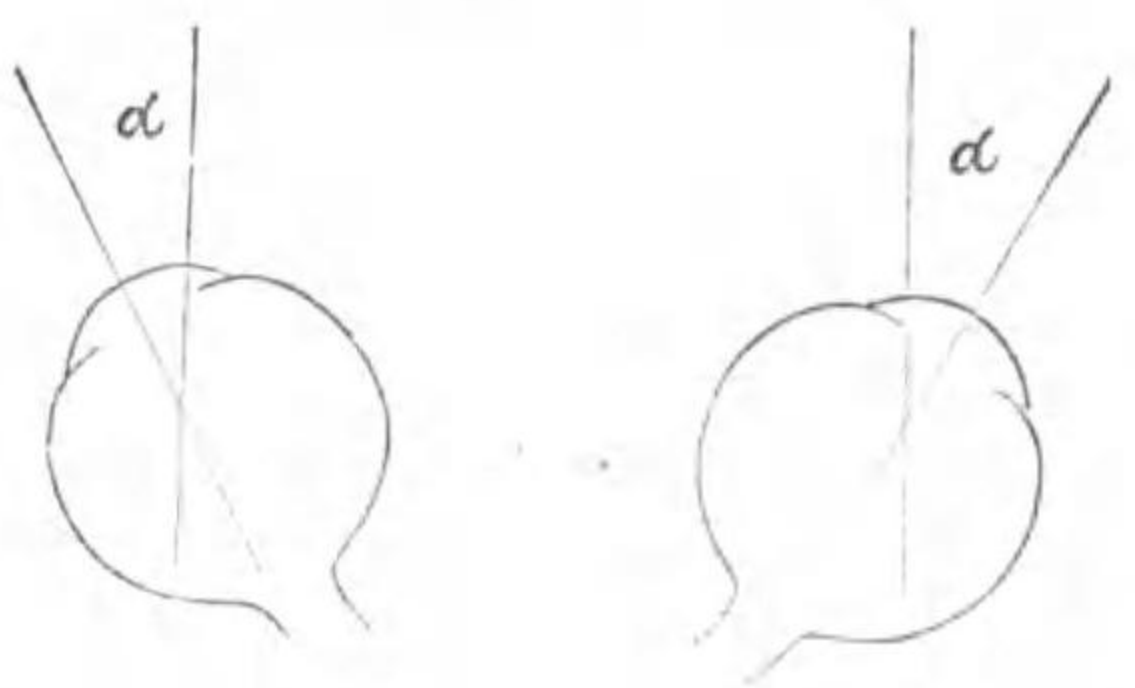
第十圖



作用スル力ハ眼ノ外方ニ向フキニ於テ最モ甚シトス又經線ノ傾欹ニ作用ス
 ル力ハ眼ノ其位置ヲ内方ニ占ムルニ从フテ愈強劇ナリトス

斜筋ノ筋面ハ其前端ヲ以テ眼ノ鉛直橫断面ノ内
 方ニ而シ其后端ヲ以テ之カ外方ニ存ス故ニ此兩
 筋ノ廻轉軸ハ前端ヲ以テ角膜前極ノ外方ニ又後
 端ヲ以テ后極ノ内方ニ位スル一線ニ依リテ形成
 セラレ而シテ眼球ノ矢狀軸ト三十五度乃至四十度
 ノ角度ヲナス爰ヲ以テ斜筋ノ作用ハ對當ノ直筋
 ト反對ス即チ上斜筋ハ先ツ縱經線ノ上端ヲ内方
 ニ欹ケ同時ニ角膜ヲ下外方ニ轉ス下斜筋ハ縱經

第十圖



線ノ上端ヲ外方ニ欹ケ同時ニ角膜ヲ上外方ニ轉ス眼球若シ内方ニ占位スル
 キハ此筋ノ眼ノ高低ノ位置ニ作用スルノ最モ強シ又角膜外方ニ向フニ愈多
 ケンハ經線ノ傾欹ニ作用スルヲ愈強シトス

是故ニ鉛直ニ上方ヲ瞻視スルニ當リテハ上直筋ノ他尙下斜筋ノ作用ヲ
 要ス是レ上直筋ノ副作用及ヒ經線ノ傾欹ヲ其反對ノ方向ニ發働スル作用ニ

依リテ平均スル者ナリ又鉛直ニ下方ヲ瞻視スルニ當リテハ下直筋及ヒ上斜筋共ニ同時ニ發働セサル可ラス是レ下直筋ノ經線ノ傾歛及ヒ副作用ヲ平均スルニハ緊要ナリトス

上外方ヲ瞻視スルニ當リテハ縱經線ハ外方ニ傾歛ス此向キヲ瞻視スルニハ先ツ外直筋及ヒ上直筋ノ作用ヲ要ス其他下斜筋ノ作用モ亦タ缺ク可ラス是レ當ニ上直筋ノ縱經線ヲ内方ニ傾歛スル作用ニ反對スルノミナラス兼テ又縱經線ヲ適度ニ外方ニ傾歛シ以テ兩眼ニ於テ中線ノ併行ヲ完スルノ作用アリ而シテ此際下斜筋ノ縱經線ノ傾歛ニ作用スル力ハ最モ強劇ナリ何ントナレハ眼ハ斜筋ノ縱經線傾歛ニ及ホス作用最モ強大ニ上及ヒ下直筋ノ之ニ及ホス作用最モ微少ナルノ位置ヲ占有スレハナリ

下外方ヲ瞻視スルニ當リテハ縱經線ハ内方ニ傾歛ス既ニ前條ニ陳述スル瞻視ノ向キニ類シテ下直筋外直筋及ヒ上斜筋ノ作用ヲ要ス

上内方ヲ瞻視スルニ當リテハ縱經線内方ニ傾歛ス此瞻視ノ向キハ先ツ上及ヒ内直筋ニ依リテ達セラル、ヲ得可シ然レモ獨リ此兩筋ノミ作用スルニ當リテハ縱經線過強ニ内方ニ傾歛セラレ爲メニ兩眼ノ縱經線傾歛ノ併行

位置ヲ維持スル能ハサルニ至ル是故ニ特ニ下斜筋ニ依リテ上斜筋ノ作用ヲ減殺セサル可ラス固ヨリ此際ノ如ク眼ノ内方位置ヲ占ムルニ當リテハ上斜筋ハ只微少ノ作用ヲ營爲スルノミナリ

下内方ヲ瞻視スルニ當リテハ縱經線ハ外方ニ傾歛ス此瞻視ノ向キニ於テモ亦タ獨リ下及ヒ内直筋ノミ作用スルニ當リテハ縱經線ノ外方ニ傾歛セラル、ヲ著大ニ爲メニ兩眼ノ經線ノ併行位置障害セラル故ニ再ヒ下直筋ノ作用ヲ制限セサル可ラス而シテ之ヲ爲スハ滑車筋ナリ然レモ滑車筋ハ前キニ陳述スル原因ヨリノ過強ノ作用ヲ營ムコトナク从フテ又過多ノ補正ヲ來スコトナシ

眼ノ運轉作用

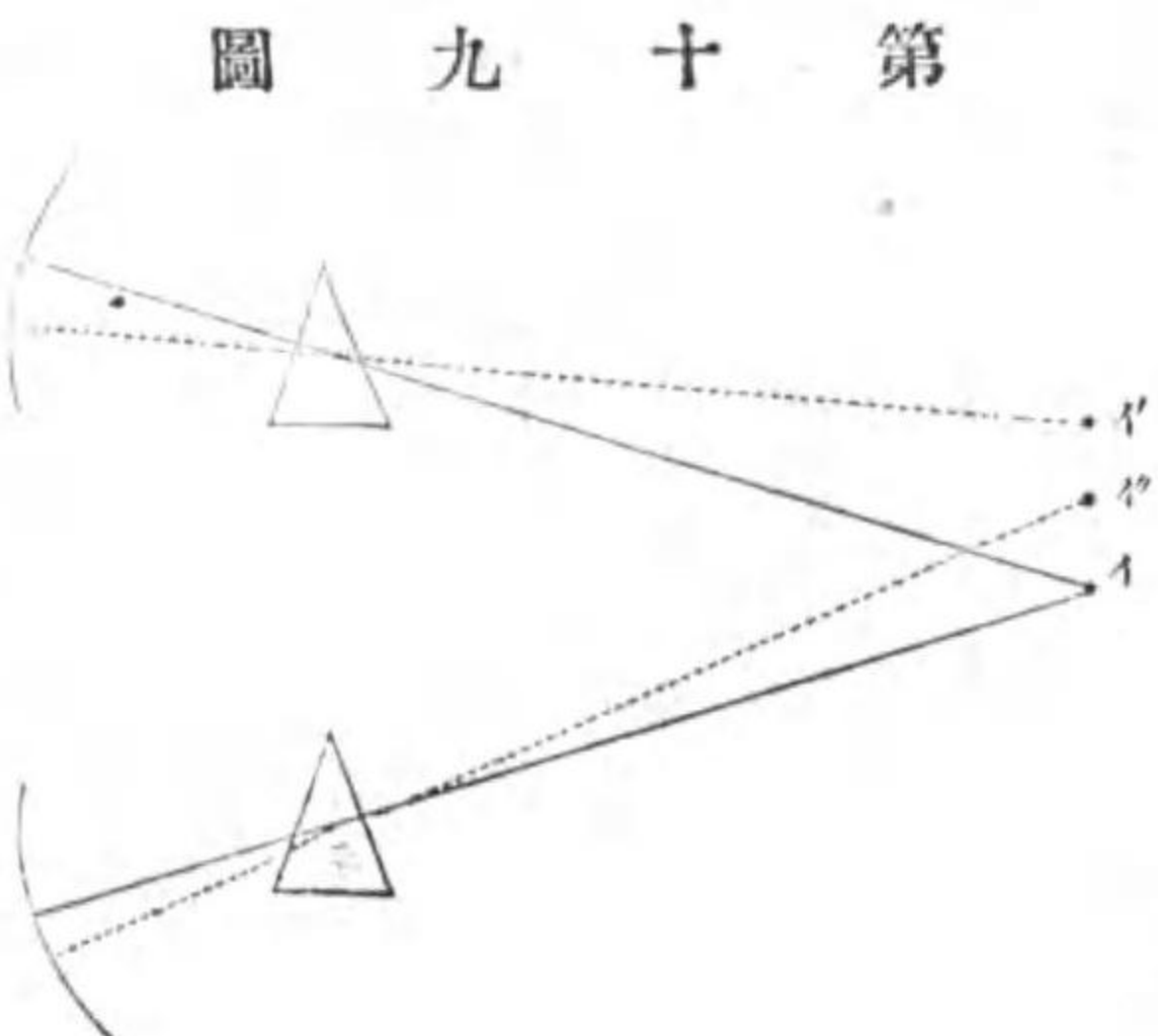
Exursionsfähigkeit

ハ地平ノ向キニハ内方四十二度乃至五十一度ニ達シ而シテ外方ハ四十四度乃至四十九度ニ達ス内方ノ廻轉ハ他眼若シ

外方ニ向フキ即チ併行運動ニ當リテハ輻輳運動ニ當リテ同シク内方ニ向フキニ比スレハ甚ク強劇ナリトス鉛直ノ向キニ於テハ殆ト九十度ナリ然レモ下方ノ運轉領ハ上方ヨリ大ナリトス近所ヲ視ルキハ其運轉領遠所ヲ視ルキヨリ小ナリ通常兩眼ハ同大ノ運動力ヲ有ス年齢ノ増加スルニ从フテ眼

ノ運動減少スル者ナリ
 眼筋ノ神經ハ外轉神經滑車神經及ヒ動眼神經ナリ就中甲ノ二神經ハ同名ノ筋ニ而シ乙ハ殘餘ノ諸眼筋并ニ上眼瞼舉筋ニ分佈ス兩眼ハ常ニ同一ノ神經刺衝ヲ受ク即チ方向ヲ指示スル爲メ正整共同性ノ収縮ヲ營ミ其他尙物体ニ要スル輻湊ヲ達スル爲メニ調節性ノ収縮ヲナス眼球運動ノ神經中樞ハ蓋シ腦ノ四疊体ノ前阜ニ存スルカ如シ「アダミニ」而シ「ツグ」氏而シ右前阜ハ兩眼ノ左方運動又左前阜ハ兩眼ノ右方運動ヲ支配ス而シ輻湊及ヒ調節其他舉上及ヒ垂下ノ中心ハ四疊体前阜ノ中線ニ存スルカ如シ
 筋ノ神經作用ハ常ニ兩眼ノ各箇ニ於テ物体ノ像其網膜一致點即チ中心窩ニ射落スルヲ規正スル者ナリ而シ兩眼單視ハ則チ之レニ原由ス然レモ吾人ノ必ス物体ニ應スルニ黃斑ヲ以テスルハ全ク慣習ニシテ此部ニ於テハ物像最モ鮮明ナルヲ實見セシヨリ來ル者ナリ其他吾人ノ只兩側ノ網膜中心ヲ以テ着視スル物体ノミヲ單視ニ語ヲ換ヘテ言ハハ兩側ノ中心窩ニ受クル刺戟ノミチ其感應ヲ以テ單一ニ融合セシムルヲ得ルハ既ニ小兒時ヨリ練習ニ依リテ領會シ漸々終ニ不滅ノ者トナル所ノ作用ト看做サ、ル可ラス「シユロイ」氏

若シ生理的若クハ病理的ノ關係ヨリノ一眼ノ網膜像黃斑ニ射落セスノ網膜ノ他部ニ於テスルキハ複視 *Diplopie* ディプロピア ヲ發生ス而シ物像若シ黃斑ニ射落セスノ例之右眼ノ鼻側ノ網膜ニ於テスルキハ習慣ヨリノ多少右方ヨリ來ル如ク認了ス故ニ物体ヲ複視ス但シ第二ノ像ハ右側ニ存スルヲ以テ之ヲ同側複視ト名ク物像若シ右眼ノ網膜ノ顛顛半部ニ射落スルキハ之ヲ左方ニ見ル故ニ又狀複視ヲ發生ス何ントナレハ該眼ノ像ハ他眼ノ像ノ左側ニ存スレハナリ是故ニ同側複視ハ視軸物体ノ位置ニ對シテ甚クシク輻湊スルキニ來リ又又狀複視ハ視軸ノ甚クシク開散スルキニ來ル其他固視點ノ像黃斑ノ下方ニ存スル網膜ニ映スルキハ之ヲ物体ノ上方ニ存スル如ク又黃斑ノ上方ニ在ル網膜ニ射落スルキハ之ニ反ス
 今若シ兩眼單視ノ障害セラル、キハ再ヒ單視ヲ回復スル爲メニ運動ヲ營爲スルヲ得可シ但シ此運動ハ正規ノ關係ニ在テハ存セサル者ナリ今若シ兩眼ヲ以テ一物体 第十九 圖ノ「イ」ヲ着視シ一眼ニ裝スルニ角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ヲ以テスルキハ着視セル物体ノ像ハ黃斑ノ内方ニ變位シ之ヲ「イ」ニ於テ見ル爰チ以テ複視ヲ發生ス然レモ是レ一眼ノ強キ開散運動ヲナスニ依リテ自然ニ消



第十圖

如ク三稜鏡ニ依リテ誘發セラレ、複像ヲ合一スルニ要スル眼ノ運動ヲ一二稜鏡ノ過勝ト名ク強劇ノ輻湊ニ依リテ角ヲ内方ニ有スル三稜鏡ヲ過勝スルハ強劇ノ開散ニ依リテ角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ヲ過勝スルヨリ夥多ナリトス、^{「ドンドン」氏}角ヲ内方ニ有スル三稜鏡ヲ過勝スルニ眼ハ稍^二、四六又角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ニハ稍^二、二一秒時ヲ要ス^{「シミット」氏}而シテ一定ノ調節状態ニ在テ三稜鏡ノ過勝シ得ル全領ヲ名ケテ融合領 Fusionbreite ト云フ

是故ニ異常ノ輻湊及ヒ開散ハ同側或ハ又狀複視ヲ發生スト雖^レ亦能ク三稜

失スル者ナリ若シ一眼ニ裝スルニ角ヲ内方ニ有スル三稜鏡ヲ以テスルキハ全ク之ニ反ス然ルキハ該眼ハ固ヨリ強キ輻湊運動ヲ營マサル可ラス此時ニ當リテハ慣習セル眼筋ノ收縮催促セラル、ヲ得ヘシト雖^レ角ヲ上方及ヒ下方ニ有スル三稜鏡ヲ以テ誘發スル複視即チ高低ノ差ヲ合一ニスルニ當リテハ其運動誠ニ不慣習ニノ且違常ナリトス此ノ

鏡ニ依リテ誘發セラレタル同側或ハ又狀複線ヲ合一スル者ナリ之ニ反シテ異常ノ輻湊ニヨリテ誘發セラレタル同側複視ハ角ヲ内方ニ有スル三稜鏡ニヨリテ又異常ノ開散ニヨリテ誘起セラレタル又狀複視ハ角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ニヨリテ再ヒ平均セラル、者ナリ之ト同理由ニテ縱向ニ屈折スル三稜鏡及ヒ高低ノ差ヲ有スル複視ノ間ニハ同一ノ交換關係ヲ生ス

輻輳ノ極度ヲ定ムルニハ兩眼ノ中線ニ物体^{指端、鉛ヲ置キ}筆^類ノ類ヲ置キ漸々之ヲ眼ニ接近シ兩眼ヲ以テ猶之ヲ單視スルヲ得ル最近點ヲ見出スルニ在リ此極點ハ八一^二センチメートルノ距離ニ存スト云フ^{「グレンデルス」氏}又開散ノ極度ハ遠隔ノ物体^燭ヲ猶單視スルヲ得ル最強ノ三稜鏡ニヨリテ確定ス是レ正視眼ニ在リテハ四度ノ三稜鏡近視眼ニ在リテハ五度八分又遠視眼ニ在リテハ二度八分ノ三稜鏡ニ相當セリ^{「シユヌ」氏}此試驗ニ當リテ單視ノ判決ヲ容易ニスル爲メニ他眼ニ裝セシムルニ着色ノ硝子ヲ以テス

今若シ眼ノ變位只外見上ノミナルカ^{性假}或ハ眞成即チ病的ナルヤヲ定メント欲セハ患者ヲノ其兩眼ヲ以テ一物体ヲ固視セシメ而ノ手ヲ以テ其一眼ヲ掩蔽ス今若シ他眼正定運動ヲ營ムキハ視線ノ位置異常ナルノ徵ナリ

變位ノ度ハ左ノ方法ヲ以テ最モ單一ニ定ム即チ先ツ患者チノ中線及ヒ眼ト同等ノ高サニ存スル物体ヲ着視セシメ而シテ着視スル眼ノ角膜中心ノ直下ニ位スル下眼瞼線ニ黒點ヲ付シテ又斜視セル眼ニ就キ同一ノ點ヲ定メ而シテ同ク此眼ノ角膜中心ノ直下ニ位スル下眼瞼線ニ黒點ヲ付ス然レバ此兩點ノ距離ハ計ルニ「ミルリメーター」尺ヲ以テス是レ第一變位ノ度ヲ示ス者ナリ

既ニ手或ハ蔽障ヲ以テ健眼ヲ掩蔽スルノ后斜視眼ヲ以テ強ヒテ物体ヲ着視セシメ爰ニ於テ健眼ニ就キ其舊時ノ位置自ラ着視スルノ時及ヒ現今ノ位置斜視眼ノ着視スルノ時ノ間ノ距離ヲ定ム而シテ此距離ハ第二變位ノ度ヲ示ス者ナリ

斜視ノ度ヲ正格ニ定ムルニハ斜視角再言スレハ變位セル眼ノ視軸尋常ノ視軸ノ向キト形成スル角度ヲ計定スルニ在リ而シテ之ヲ計ルニハ度目ヲ付スル半環ヲ使用ス此半環ノ中心ハ下眼瞼ニ抵當シテ殆ント眼ノ廻轉點ノ下方ニ存シ而シテ其度目ニ依リテ眼軸ノ變位ノ度即チ角頂點ヲ讀過スルヲ得ヘシ其他尙視野計若クハ「ステルレン」氏眼運動計 オプタルモトロポメーター Ophthalmotonometer ヲ使用スルモ亦タ可ナリ

又「ヒルシュベルク」氏ノ稱用セシ法ハ甚タ便利ナリ其法患者チシテ十二ツオートル距離リタル光焰ヲ望マシムルニ正直ノ眼ニハ其光焰ノ像瞳孔ノ中央ニ映シ

偏倚セル眼ニハ中點ノ側方ニ映スヘシ而シテ偏倚ノ多少ハ瞳孔ノ中點ト光焰像トノ距離ニ同シク此距離ハ角膜半徑線ノ長サニ就キテ容易ニ知ルヘシ例之ハ角膜半徑線ノ四分一ハ十二乃至十五ノ角度ニ一致シ二分一ハ二十五度一ハ四十五度乃至五十度ニ一致スルカ如シ

自覺性ニ變位ヲ計ルニハ患者チノ其兩眼ヲ以テ遠隔ノ物体ヲ着視セシメ而シテ變位セサル眼ハ着色硝子ヲ以テ裝セシム然ルルハ複視ヲ發生ス可シ而シテ變位セル眼ノ前ニ置キ此複視ヲ消除スル所ノ三稜鏡ハ即チ變位ノ度ヲ示ス者ナリ

兩眼視ノ存在ヘーリング氏落下試驗法ヲ以テ確定スルヲ得ヘシ即チ患者チノ圓柱管內ヨリ針尖ヲ着視セシメ其前後ニ小球ヲ落下ス而シテ患者ノ兩眼視機能存スルハ小球針尖ノ前方若クハ后方ニ落下スルヲ確言スルヲ得ル者ナリ若シ該機能ノ存セサルニ於テハ之ニ反ス

屈折及調節機違常

第二章 近視眼 Myopia

近視眼(M)ハ角膜或ハ水晶体調節機障ノ穹窿増加シ(由テ發スル者ヲ彎曲近視眼 Krummungsmyopie ト名ク)或ハ水晶体ノ前方ニ脫位スルヨリ透明体ノ屈折力増加スルニ由テ起ルヲ時ニ之レアリト雖凡多クハ眼ノ被膜其後極ニ於テ擴張スルヨリ眼軸ノ延長スルニ原因ス(由テ發スル者ヲ 中軸近視眼 Achsenmyopie ト云フ)ル者トス

〔解剖的變化〕近視ノ眼ハ圓形ヲ變シテ橢圓形トナリ其軸後方ニ延長ス(「ド」氏ニ從ヘハ三三「ミ」ヨリ 鞏膜ハ弱度ノ近視眼ニ在テハ平等ノ厚サヲ有スルモ「メ」ト「ル」ニ至ル「ア」リ 鞏膜ハ弱度ノ近視眼ニ在テハ平等ノ厚サヲ有スルモ強度ノ者ニ在テハ視神經ノ方ニ進ムニ從テ次第ニ其厚サヲ減シテ終ニ紙ノ如キニ至ル如斯キ眼ヲ強ク鼻側ニ廻轉セシムルキハ其橢圓形ナルヲ認メ屢々又後極ノ青色ナルヲ知ルヲ得ヘシ又強度ノ近視眼ハ爾他ノ直徑モ延長スルヲ常トス之ヲ水腫眼 Hydrophthalmie ト名ク「ス」氏「グ」氏「リ」視神經鞘ハ通例視神經ヨリ隔離シ視神經乳頭ハ多クハ多少顯顯側ノ方ニ轉移シ視神經ノ進入スル全鞏膜管モ亦タ側方ニ轉移シテ通例ノ顛倒漏斗形(第十圖)ヲ變シテ圓壙狀(第十一

圖 十 二 第

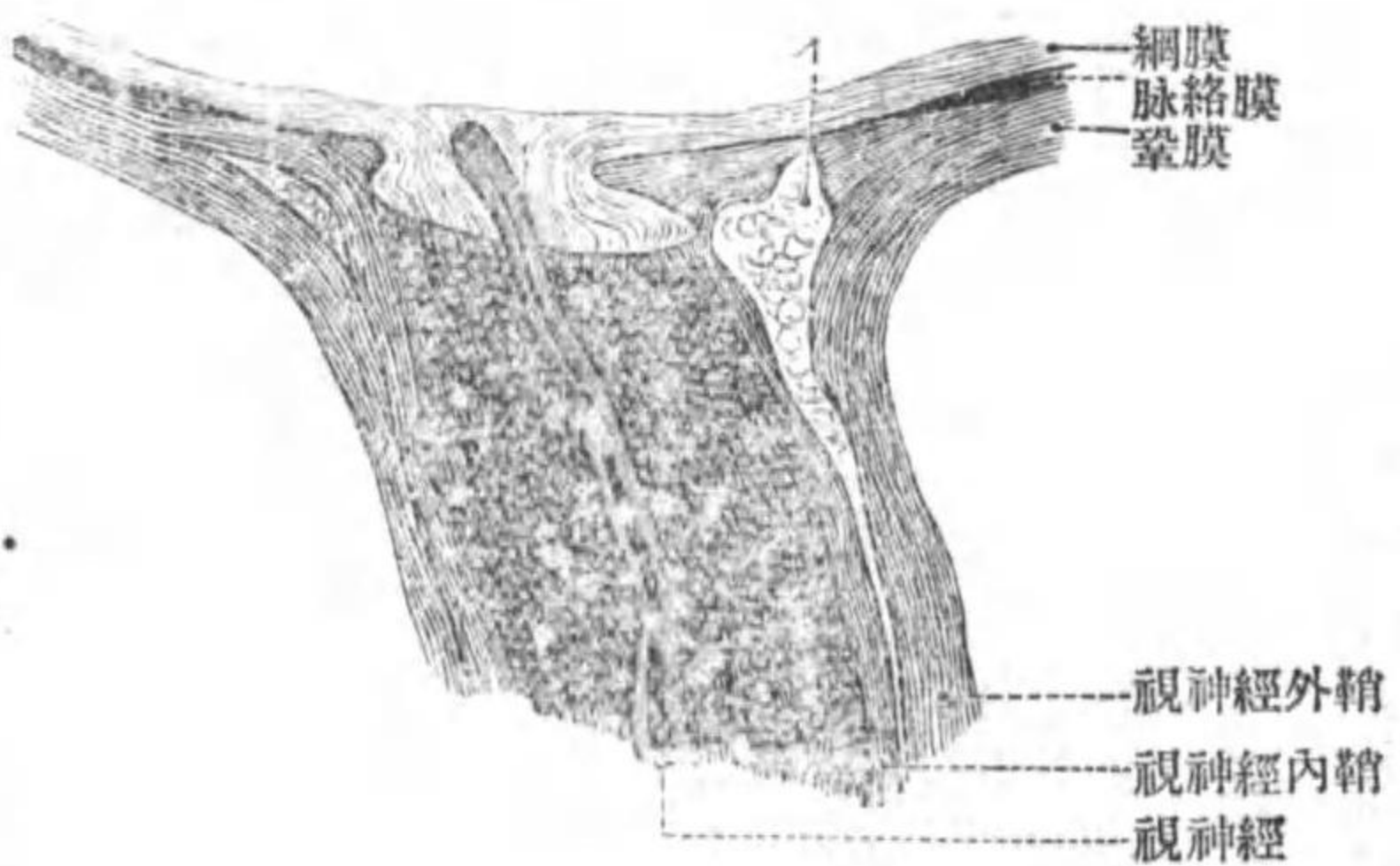


圖 一 十 二 第

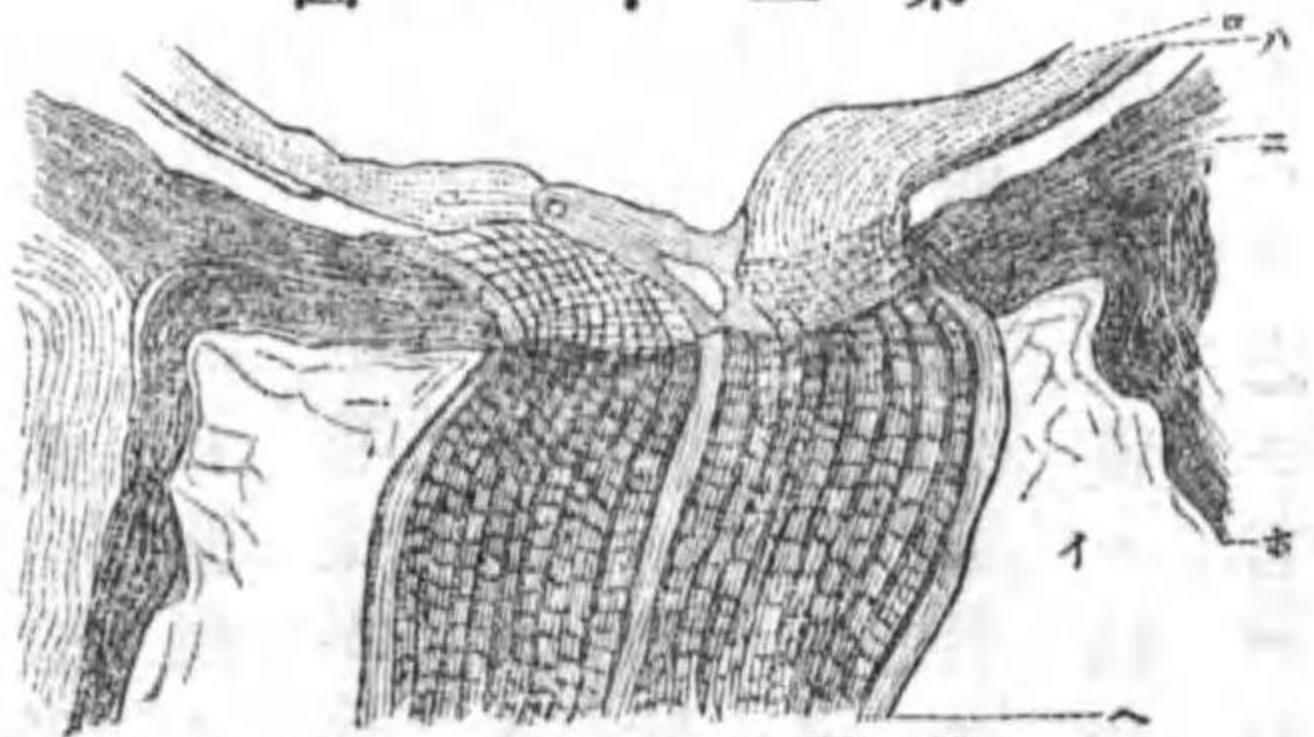
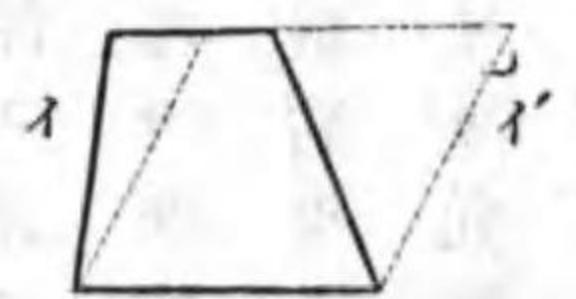


圖 二 十 二 第



〔圖〕スチルリントナル此ノ如ク鞏膜漏斗側方ニ轉移スルカ爲メニ檢眼鏡ニテ檢グ氏ニ從フトナル此ノ如ク鞏膜漏斗側方ニ轉移スルカ爲メニ檢眼鏡ニテ檢スレハ其ノ側壁視神經圓板ニ接シテ半輪(第二十圖)ヲ呈ス或ル醫家ハ此半輪ヲ牽引ニ由テ起ル所ノ脈絡膜萎縮ト看做シテ之ニ後葡萄腫ナル名ヲ附シタリ強度ノ近視眼ニ在テハ鞏膜漏斗大ニ離開シテ通常ニ反對ノ形狀ヲ呈シ(第二

十二圖ノ〔イ〕ハ元形〔イ〕ハ近視眼ノ鞏膜管從テ視神經圓板著シク増大二倍以上ス脈絡膜ノ基質ハ鞏膜管ノ側壁ヲ被覆シ篩狀膜ニ達シテ爰ニ軟膜鞘ニ移ル網膜及ヒ脈絡膜ハ中度ノ近視眼ニ在テハ健全ナレハ強度ノ者ニ在テハ猶ホ脈絡膜ト鞏膜ニ於ケルカ如ク互ニ膠着ス網膜ハ時トシテ所々ニ圓柱体層ノ萎縮ヲ呈シ又時ニ剝離ス脈絡膜ハ強度ノ近視眼ニ在テハ廣部ニ於テ變化シ其色素ヲ失ヒ其上皮及ヒ基質ハ非薄ノ膜トナリ其血管多クハ貧血ス硝子体ハ中度ノ近視眼ニ在テハ其硬度及ヒ層健全ナレハ強度ノ者ニ在テハ多クハ液化シ時ニ剝離ススナチルリ葡萄狀膜ノ前部即チ毛様体及ヒ虹彩ハ水晶体ト共ニ眼ノ後極ニ於ケル擴張ノ爲メニ後方ニ牽引セラル、チ以テ前房其深サチ増ス毛様筋ハ常ニ強ク發育ス殊ニ其放線狀纖維ハ輪狀纖維ヨリ強ク發育セリ

〔近視眼之本性〕延長セル眼軸ニ比例シテ透明体ノ屈折力過強トナリ角膜ニ向テ併行ニ射來スル光線ハ既ニ網膜ノ前方ニ於テ結合シ而シテ網膜面ニハ圈暈ヲ生ス第十五圖ヲ參觀スヘシ故ニ光線近視眼ノ網膜ニ結合セラレ得ルニハ角膜ニ向テ開散シ來ラサル可カラス語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ無限ヨリハ近部ヨリ來ラサル可カラス爰チ以テ近視眼ノ遠點ハ無限ニ非ラスシテ有限ノ所即チ眼

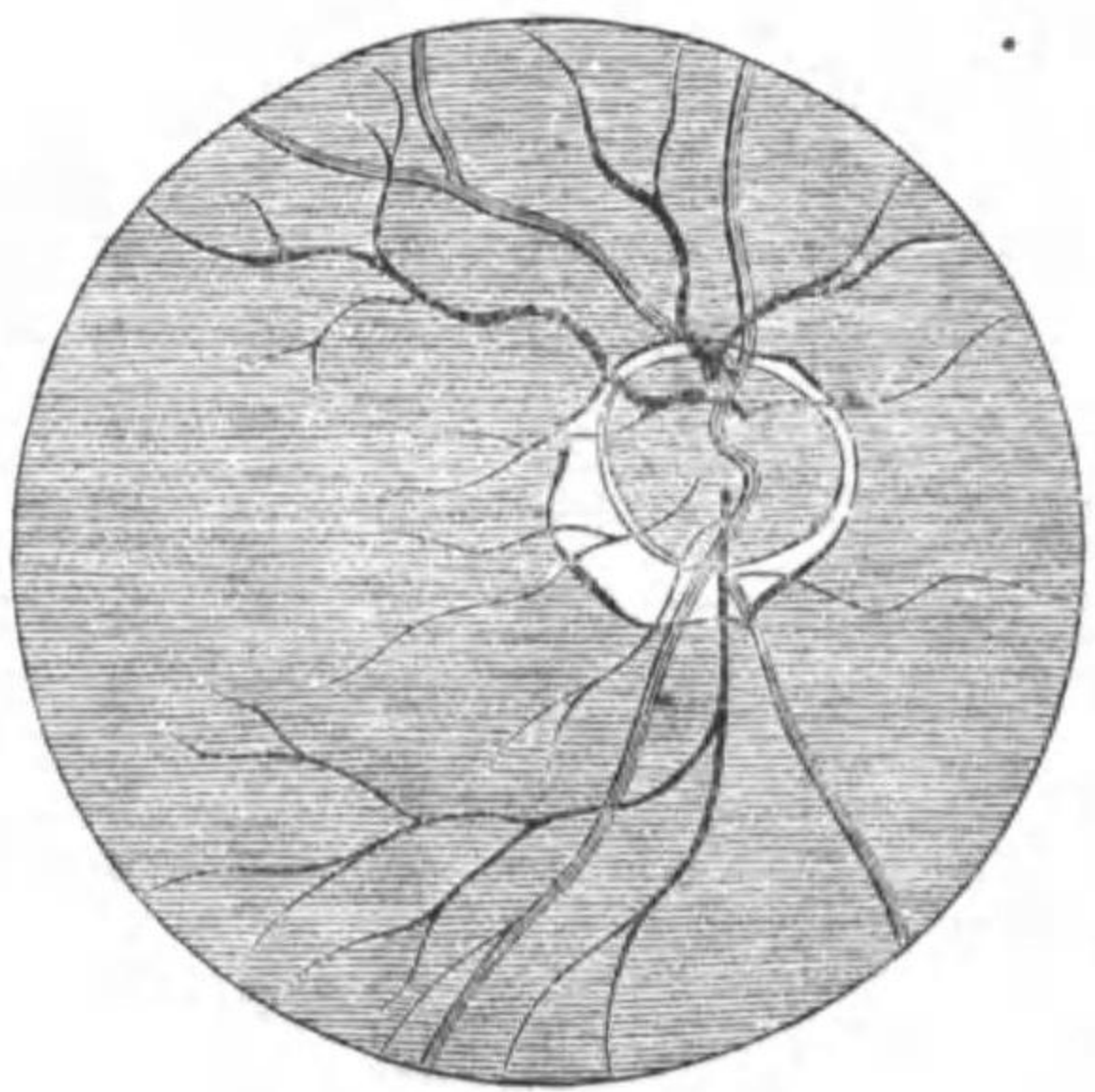
ニ接近スルノ距離ニ在リ

〔發生〕眼軸延長即チ被膜擴張ノ素因ハ視神經穿入部ニ於ケル鞏膜ノ軟弱ニシテ多クハ先天或ハ遺傳ニ之ヲ稟クト雖モ又往々麻疹猩紅熱等ノ如キ急性病ニ由リテ后天ニ之ヲ得ルヲアリ而シテ此軟弱部ハ殊ニ先ツ其黃斑ニ對スル外半部ニ於テ擴張ノ前外兩視神經鞘ノ間腔ヲ前方ニ於テ境界ス第二十圖ノ〔イ〕眼軸ノ延長ハ幼年時ニ於テ起ル者ニシテ其發起ノ方法ニ就テハ種々ノ說アリ調節說ニ據レハ近傍ニ於テ事業ヲ執ルノ際強ク調節機ヲ緊張シテ眼内壓ヲ亢進シ以テ夫ノ軟弱部ヲ擴張スト輻輳說ニ據レハ近傍ニ於テ事業ヲ執ルノ際強ク眼軸ヲ輻湊シ以テ眼球ヲ側方ニ壓迫シドスンテ視神經ノ外側ニ於テ牽引ヲ爲スシユワイカ爲メナリトハスチル、ワイス氏ノ說ニ據レハ近視眼ハ視神經ノ至短死体ヲ解剖シテ知レリナルニ由テ起ル者ニシテ先ツ眼球ヲ廻轉スルノ際至短ナル視神經ニ牽引ヲ受ケテ視神經ト其鞘トノ間ノ連結寬鬆トナリ終ニ其鞘視神經ヨリ剝離シテ眼后極ノ擴張ヲ起シ之レカ爲メニ亦後淋巴道閉塞セラレテ液質神經乳頭ノ前ニ増加シ眼内壓亢進シテ眼球囊ヲ擴張スト「スチルリ」ングハ近視眼チ上斜筋ノ附着模様ニ歸シ說テ曰ク

此筋弓狀ニ附着シテ眼球ニ觸レサルカ或ハ多ク眼球ニ觸接スルカ或ハ突起
 ナ視神經鞘ニ送ルカニ從テ其動作ノ際或ハ弱ク或ハ強ク眼球ヲ壓シ或ハ視
 神經穿入部ヲ牽引シ且ツ書物ノ一行ヨリ他行ヲ見ルノ際爲ス所ノ掣搖狀小
 運動ハ最モ有毒作用ヲ爲ス殊ニ幼年者ニ於テ然リ今斜筋収縮ノ作用ニ由テ
 幼年者ノ眼球長サニ沿フテ發育シ且ツ視神經穿入部ノ牽引ニ由テ鞏膜管互
 ニ隔離ス故ニ近視眼ハ筋壓ニ由テ偏側ニ向ヒ長サニ沿フテ發育シタル眼ニ
 シテ畢竟壓迫ノ爲メ發育期ニ起リタル畸形眼ト謂フヘク其遺傳ハ唯斜筋附
 着模様或ハ頭顔形成ノ遺傳ニ外ナラスト
 故ニ近視眼ノ發起ハ内下方ヲ久シク目視シ或ハ事業ヲ執ルノ際眼ヲ近接シ
 過キ輝照不充分)或ハ頭ヲ前屈ス(學校ニ於テ机卓ノ配置不當)ルニ依リテ虛性
 充血ヲ起シ或ハ臥位ニ於テ(臥床ニ於テ)讀書シテ眼ヲ不正ノ位置ニ保ツ斜筋
 作用等ニ由テ催進セラル、ヲ明ナリ

〔檢眼鏡の所見〕近視眼ニ於テ通例見ル所ノ眼底變化ハ限局セル灰白色或
 ハ黃色ノ半輪ニシテ第二十圖乳頭ノ外側ニ占居シ廣狹一様ナラス其外縁ニ黒
 色ノ色素線ヲ呈シ強度ノ擴張ニ在リテハ不正ノ形狀ヲ呈シテ全乳頭ヲ周擁

第三十二圖



スルモ其大小ハ常ニ必スシモ近視眼
 ノ度ニ一致セス時トシテハ正視眼ニ
 於テ之ヲ見ルヲアリ蓋シ半輪ノ發起
 ニ伴フ所ノ炎症症候ハ充血及ヒ近隣
 脈絡膜ノ色素變化及ヒ擴張部境界ノ
 著シキ色素集積ニ依リテ徴知ス可キ
 后鞏膜脈絡膜炎又后モノニシテ強度ノ
 葡萄腫等ノ名アリ
 近視ニ在リテハ乳頭周圍ノ外尙他ノ
 脈絡膜部ニ於テ萎縮部ヲ見出ス

〔統計〕近視眼ハ主トノ開化セル人民及上流ノ人ニ來リ都人士ニ多クノ田舎
 漢ニハ少シコーン氏ハ一萬人ノ學童ニ就キ百分中十人ノ近視眼ヲ見出セリ
 榮養不良ノ小兒ハ上流ノ小兒ニ比スレハ近視眼ニ罹リ易キカ如シヘルマン
グ氏ハ十一年以下ノ市小學校生徒百人ニ付キ二十二人ノ近視眼高等ノ學生
 百人ニ付十四人ノ近視眼ヲ見出セリ高等學校ニ於テハ近視眼ノ數ハ每級増
 加スル者ナリ

〔症候〕近視者眼鏡ヲ使用セサルニ於テハ其遠點以外ニ存スル物体ヲ盡ク圈
 暈ニ於テ見ル故ニ常ニ其臉裂ヲ狭小ニシ以テ之ヲ避除スルヲ試ム近視眼ノ
 瞳孔ハ通常異大ナルヲ以テ圈暈ハ从テ大ナリトス之ニ反シテ近視眼ハ近
 所ニ於テハ明視シ加之細小ノ物体ハ却テ正視者ヨリ佳良視スル者ナリ是其
 近點近所ニ存スルカ故ナリ故ニ近視者ハ細小ノ物体ヲ眼ニ接近シ之ニ依リ
 テ其網膜像ヲ増大スルヲ得可シ例之今近視眼ノ遠點四十〔センチメートル〕五
 曲光力ニ在リ且其調節力ハ通常正視眼ト同一ナルヲ以テ十一〔センチメートル〕
 近視ル〔即チ九曲光力ト假定スルキハ其近點ハ則チ八、六センチメートル〕ノ處ニ在
 リ何ントナレハ $9+25=11,5D$ ノ一五曲光力ハ則チ八、六センチメートルニ
 相當スレハナリ近視者ハ通常只關係調節力ノ小部分ヲ使用スルノミニシ其
 大部分ハ積性ニ存ス何トナレハ近視眼ノ遠點ハ稍常ニ細小ノ物体ヲ見ルニ
 要スル距離ニ存スルカ否ヲサルモ亦之レヨリ甚ク遠隔セサルヲ以テナリ故
 ニ四、五曲光力若クハ二、五曲光力ノ近視者ニ在リテハ二十二センチメートル
 若クハ二十八センチメートルノ處ニ視軸ヲ輻湊スルニ當リテ之ヲ明視スル
 爲メニ未タ其調節機ヲ緊張スルヲ要セス此理由ヨリシテ近視者ハ正視者ヨ

リ疲勞セズノ長ク細工ヲ近所ニ於テ營爲シ得ル者ナリ
 之ニ反シテ近視眼ニ在リテハ視軸ヲ輻湊スル作用正視眼ニ比スレハ制限セラ
 ル、者ナリ又輻湊作用ハ調節機ニヨリテ補給且興奮セラル、ト甚ク少ナシ
 何ントナレハ近視眼ハ其遠點ニハ全ク調節スルヲナシ又近部ニハ只僅カニ
 之ヲ使用スルノミナレハナリ「フキツク」氏「グ」其他楕圓形ノ近視性ノ眼球ニハ
 「テノン」氏囊内ノ運動球形ノ正視性ノ者ニ比スレハ困難ナリ然レモ間、其原因
 ハ近視眼ノ廻轉點正視眼ヨリ遙ニ鞏膜ノ后面ヨリ遠隔シ存スルニ在リ又近
 視眼ニ在リテハ屢、外直筋ノ作用過強ナルヲアリ即チ正視眼ヨリハ角ヲ外方
 ニ有スル強度ノ三稜鏡ヲ過勝ス加之近視眼ノ視線ハ角膜軸ニ接近シ存シ甲
 ノ乙ト形成スル角度 α 第十 七圖 ハ正視眼ヨリ微小ナリ管ニ微小ナルノミナラ
 ス屢、又虚性ニシテ角膜軸ノ外方ニ存スルヲアリ故ニ近視者其兩視線ヲ近所ノ
 一點ニ交叉スルニハ内直筋ノ過強ニ緊張スルヲ要ス蓋シ諸他ノ方向ニ於テ
 ハ頭部ノ廻轉ニ依リテ能ク眼ノ運動減少ヲ合併ス可シト雖モ輻湊運動ノ困
 難ハ否ラズ之ニ依リテ乙ノ場境ハ比較的ニ微小ニシ且ツ近視眼ノ全運動領
 ハ多ク顛顛側ニ偏在スルノ理由ヲ容易ニ説明スルヲ得可キナリ此續發トシ

テ容易ニ疲勞ヲ來シ遂ニ内直筋ノ作用不全及ヒ外斜視ヲ繼發ス下條ヲ參考ス可シ
近視眼ノ視力ハ一般ニ正視眼ヨリ減少セリ輕度ノ近眼(二曲光力ノ近視眼マテ)ニ在リテハ極テ僅少ニシテ微知ス可ラスト雖モ強度(六曲光力以上ノ近視眼)ノ者ニ在リテハ甚々著明ナリ何ントナレハ網膜ハ其擴張ニヨリテ光像ノ映射スル面ニハ感覺減少スル原質ヲ有スレハナリ
近視眼ノ診斷ハ遠所ノ視力ヲ凹面眼鏡ニ依リテ佳良ニスルニ基ク者ナリ近視眼ノ度ハ遠點ノ位置ニ依リテ之ヲ定ムルヲ得可シ然レモ遠所ニ於テ可及的善良ノ視力ヲ達スルヲ得ル最弱ノ凹面眼鏡ヲ以テスルハ甚々便ナリ此時ニ當リテハ假令ヒ強度ノ凹面眼鏡ニテ猶明視スルヲ得ルモ最弱ノ者ヲ採用セサル可ラス何ントナレハ強度ノ眼鏡ハ其作用ヲ消除スルカ爲メニ調節機ノ興奮ヲ誘起シ而シテ屈折態ハ只調節機ノ全ク弛緩スルニ當リテ定メラル、者ナルヲ以テナリ今假リニ四番ノ凹面眼鏡ハ遠所ニ於テ最良ニ明視スル最弱ノ眼鏡ナリトスルモ其近視ハ則チ四曲光力ニシテ其遠點ハ〇、二五[メートル]ノ距離ニ在リ兩眼檢査ニ在リテハ近視ノ度屢、一眼各箇ニ施行スル時ヨリ減少スルヲアリ檢眼鏡ヲ以テ近視ヲ診スルノ法ハ前章既ニ之ヲ論

述セリ

近視眼ハ多ク二十五年頃マテ急速ニ進行シ然ル后終身停止性トナル老年ニ至レハ其瞳孔縮小シ圈暈微小トナルヲ以テ假リニ近視ノ減少スルガ如キ狀ヲ呈ス然レモ眞ニ近視ノ減少スルハ高老ニ至リ水晶体ノ屈折力減少スルニ依ルナリ

近視眼ノ進行スルヤ既ニ陳スル如ク通常炎症ノ徵候即チ内部ノ充血、網膜刺戟、粟粒狀脈絡膜炎等ヲ伴フ者ニシテ羞明及ヒ眼ノ疲勞就業際等ニ依リテ之ヲ自覺ス可ク屢、又眼内顯象所謂**飛動蚊虻** ムチアキランタ Monchevolantesヲ現ハシ患者ノ想像ニ由テ種々ノ影像ヲ見ル而シテ眼水腫ト看做スヘキ一種ノ近視眼ハ屢々

先天ニ起因シ既ニ幼年ニ於テ高度(十二乃至十五曲光力)ニ達シ生涯進行シテ屢々盲目トナル盲點ハ萎縮部ノ加ハルヲ以テ該部ニ大ナル**視野缺損**ヲ生ス若シ萎縮部ノ擴張黃斑部ニ達スルカ或ハ乙部ニ當ル脈絡膜ノ變化網膜ノ原質ヲ變性スルモ中心視力ヲ障害ス又網膜ノ擴張及ヒ牽引セラル、ヨリノ**變視症** メタモρφωσις再言スレハ物体ヲ歪斜及ヒ彎曲視スル症ヲ發シ往々又網膜剝離ヲ來ス此際網膜ハ結合點ニ向フテ前進スルヲ以テ初ハ遠視

性ノ状態ヲナシ遠所ノ視力爲メニ佳良トナルモ通常纔時ニノ剝離セル網膜ノ萎縮ヲ來タスニ依リテ全ク失明ニ至ラシムル者ナリ近視眼ニ在リテハ又后極白内障ヲ發スルコト甚タ少カラストス加之終ニ稀レ高老ニ及ンテ夫レヨリ綠内障ノ發スルコトアリ

〔療法〕 近視ノ平癒ハ望ム可ラス只其發起ヲ豫防シ其進行ヲ止ムルヲ得ルノミ其方法ハ通常近視ニ要スル輻湊作用ヲ避ケサル可カラズ故ニ小兒ヲノ適當ノ距離ニ於テ讀書及就業スルニ慣習セシメ頭部ヲ前屈スルヲ禁シ且ツ遠隔ノ距離ニ於テ視力表ヲ認知スルヲ習熟セシム可シツエヘン學校ニ於テハ適當ノ机卓ニ注意シテ少ナクモヘフトト書籍トノ間ノ距離ヲ〇三メートルトナシ疲勞ヲ覺フルコト恰好ニ書記シ得ル如クニスルヲ要ス生理上正シキヘフトノ位置ハ所謂斜中位ニシテヘフトチ眼前ノ中央ニ置キ其下緣机卓ノ縁ト右方四十五度ノ角ヲ作ル如クニ爲スニ在リ其他充分ノ輝照ニ注意セサル可カラズ何者光輝不充分ナルキハ書籍ヲ眼ニ近接セサルヲ得サレハナリ故ニ校舍ハ面積五平方メートルニ付キ一平方メートルノ窓面ヲ造ルヲ要ス然レモ小兒ハ學校ニ在ルヨリ自家ニ在テ讀書寫字スルコト多キヲ以テ

父母タル者宜ク注意シテ頭ヲ正保セシメ書籍ヨリ眼ヲ遠隔セシメ充分ノ輝照ニ注意シ決シテ光輝不充分ナル所ニ於テ讀書セシム可カラズ間、又外直筋ノ作用過多ナルニ當リ三稜鏡若クハ此筋ノ切離法ニ依リテ輻湊ヲ容易ニスルヲ得可シ又治療上ノ目的ニテアトロピン點眼チ一二週間持長スルキハ同シク近視ノ進行ヲ防クヲ得可シシイッ是レ一ハ此際存スル所ノ調節機壙擊ノ除却スルニ原シ一ハ眼ヲ遠見ニ慣習セシメ調節機麻痺後ニ至リテハ輻湊既ニ不用ニ屬スルニ由リテナリ若シ炎ノ症狀アルキハ眼ノ灌水法若クハ暗室療法及ヒホイルテルーア氏人工蟻針ヲ貼スルヲ稱用セリ

次テ又近視ノ遠點ニ相當ノ曲光力ヲ有スル凹面眼鏡ヲ以テ近視ヲ中和セサル可ラス然レモ主トシテ遠所ニ於テ充分明視スルヲ得ル最弱度ノ凹面眼鏡ヲ選擇シテ之ヲ使用セシメ而シテ近所ニ於テ就業スルニハ其使用ヲ禁ス可シ然レモ近視ノ度過強ニシテ物体ヲ甚タシク眼ニ接近スルヲ要スルキハ平生弱度ノ凹面眼鏡ヲ使用セシム即チ此眼鏡ハ遠點ヲ甚タ遠隔セサル距離ニ變置シ且ツ通常ノ就業ニハ適當ノ者ナリ例之ハ風琴等然レ遠隔ノ距離ヲ視望スルニハ之ニ尙有柄眼鏡ヲ副用セシム可シ總テ選擇スル凹面眼鏡ノ度ハ現

在ノ調節力ニ从フテ審判セサル可ラス即チ強度ノ眼鏡ハ眼球ノ楕圓形ナル
 ナ以テ間接瞻視ヲ障碍シ而シテ視野ヲ狭小ニス其他物体ヲ縮小スルヲ以テ爲
 メニ之ヲ眼ニ近接シ从フテ強劇ノ調節機緊張及ヒ視軸輻湊ヲ必要ス又近視
 ナ中和シテ正視ニ變セシムルキハ其全調節領ハ遙カニ眼前ヨリ隔離ス故ニ
 先キニ調節機ヲ使用セスシテ見得シ所ノ距離ハ今ハ則チ之カ使用ヲ要スル
 ニ至ル夫レ然リ故ニ此ノ如キ過分ノ作用ヲ毛様筋ニ希望スルニハ^{凹面眼鏡}ニ
 テヨリ先ツ此筋ニノ這般ノ作用ニ堪フルヲ得ルヤ否再言スレハ其調節力ノ
 佳良ナルヤ否ヲ確定スルヲ要ス

眼鏡ノ中心ハ必ス正確ナルヲ要ス再言スレハ其視學的軸ハ眼軸ト適合スル
 ナ要ス故ニ兩眼鏡ノ距離ハ可及的瞳孔ノ距離ニ相當セサル可カラズ然レモ
 強度ノ眼鏡ニ在リテハ其距離ヲ瞳孔ノ距離ヨリ隔離セシムルヲ適當トス然
 ルキハ此眼鏡ハ同時ニ角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ノ如ク作用シ近所ヲ瞻視ス
 ルニ方リテ纔少ノ輻湊ヲ要スルニ至ラシム若シ中和性或ハ過度ノ眼鏡ヲ連
 用スレハ近視眼屢々停止ス^{「フエル」氏ノ説}
 凹面眼鏡ニ依リテ調節領ノ位置變換シ之カ爲メニ該輻湊度ヲ以テ強劇ノ調

節作用ヲ營爲セサル可カラザルヲ以テ先ツ此凹面眼鏡ニ慣習セサル可カラ
 ス是レ幼年ノ人ニ在リテハ老人ヨリ容易ナリトス年齢ノ増加スルニ从フテ
 老視眼ヲ發生スルヲ以テ弱度ノ凹面眼鏡ヲ與ヘサル可カラス且ツ近所ニ於
 テハ却テ凸面眼鏡ノ使用ヲ要ス此際ニハ亦「フランクリン」氏眼鏡ヲ使用スル
 ナ得可シ即チ此眼鏡ノ下半部ハ凸面ニ近所ニ又其上半部ハ凹面ニ遠所
 ニ使用ス可キナリ

内直筋ノ作用不全ニハ其輕度ナルニ當リテハ近所ニ就業スルニ凹面眼鏡ヲ
 與フ可シ但シ此眼鏡ハ遠隔ノ距離ニ於テ就業シ之ニ依リテ微少ノ輻湊ヲ許
 容スル者ナリ強度ノ者ニ在リテハ角ヲ外方ニ有スル三稜鏡ニ依リテ一時姑
 息的ニ之ヲ消除スルヲ得可シ然レモ此眼鏡ハ色光ヲ分散スルヲ以テ強度ナ
 ルヲ禁ス而シテ常ニ之ヲ兩眼ニ分配セサル可カラス這般ノ三稜鏡ハ唯近所ヲ
 瞻視スルニ裝用スルヲ得ルノミ^{下章ヲ參}脈絡膜硝子体及ヒ網膜病等ノ合併
 症ノ如キハ宜シク其條下ニ就キ見ル可シ

遠視眼ノ關係調節力ハ視軸ノ併行ナルニ當リテ其一部既ニ消性ニ屬セリ故ニ通常就業ニ要スル近所^{二十乃至二十五センチメートル}ニ其視軸ヲ輻湊スルニ當リテハ其大部ハ消性ニ屬ス既ニ此ノ如ク比較的ニ緩少ノ調節力ヲ以テ就業スル爲メニ遠視眼ハ強度ノ視軸輻湊ニヨリテ調節機ヲ容易ニスルヲ務メ而シテ物体ヲ一眼視ス蓋シ遠視眼ノ内直筋ハ其發育強良ニシテ正視眼ヨリ強劇ノ輻湊ヲナシ角ヲ内方ニ有スル強度ノ三稜鏡ヲ過勝スルヲ得ルハ職トノ之ニ是レ由ルナリ其他遠視性眼球ノ全運動領ハ正視眼ヨリ大ナリ何ントナレハ甲ハ其小形ナルヲ以テ容易ニ運動スルヲ得レハナリ

遠視眼ノ視力 ハ通常只其強度ナルニ當リテ正視眼ヨリ微少ナリトス

遠視眼ノ診斷 ハ眼球ノ小形前房ノ淺狹及ヒ縮小ノ瞳孔等ヲ見テ既ニ爲スヲ得可シ其他遠視眼ニ在リテハ^ハ角正視眼ヨリ過大ニシテ視軸ノ併行ナルニ當リテ角膜軸外見上恰モ開散スルカ如シ^{假性外斜視ナリ上然レモ若シ}凸面眼鏡ヲ以テ遠所ヲ明視スルキハ其診斷誠ニ確實ナリトス然リ而シテ遠視眼ノ度ヲ定ムルコハ調節筋ノ關係^{毛様筋ノ輪狀纖維}ニモ亦注目セサル可カラス

前條既ニ論スルカ如ク遠視眼ニ於テハ其調節筋遠所ヲ視望スルニ當リテ作

用スルヲ要スルヲ以テ終ニ永久性ノ緊張所謂**潜伏性調節機緊張**ヲ來シ爲メニ隨意ニ之ヲ弛緩スルヲ能ハサルニ至ル

遠視眼ハ其虛性遠點ノ位置再言スレハ併行ノ光線ヲ眼ノ後方ニ存スル遠點ニ向フテ集合セシムル凸面眼鏡ニ依リテ診定スルヲ得ヘシ抑モ屈折態ハ調節機ノ全ク弛緩スルニ當リテ定メサル可カラサルヲ以テ調節機ヲ最モ多ク弛緩スル凸面眼鏡再言スレハ遠所ニ於テ尙明視スルヲ得ル最強ノ凸面眼鏡ハ遠視眼ノ度ヲ示ス者ナリ然レモ潜伏性調節機緊張ノ存スルヲ以テ是亦遠視ノ全部ヲ示ス能ハス而シテ全遠視ヲ定ムルニハ先ツ^{アトロピン}ニ依リテ毛様筋ヲ麻痺セサル可カラス故ニ左ノ遠視ヲ區別ス

(一)發現遠視是レ^{アトロピン}點入前ニ發現シ存スル遠視ナリ

(二)潜伏遠視是レ調節機緊張ノ爲メニ伏在セル遠視ニ^{アトロピン}點入ノ后ニ至リテ初メテ發現シ來ル者ナリ

全遠視 ハ即チ發現及ヒ潜伏ノ兩遠視ノ和ニ同シ而シテ若シ^{アトロピン}ノ作用消失スルキハ再ヒ潜伏性ノ調節機緊張ヲ發スル者ナリ兩眼同時ニ檢スルキハ一眼各箇ニスルキヨリ屢現在部ノ増大スルヲアリ又檢眼鏡上ニ遠視ヲ

診定スルノ法ハ宜シク上條ヲ参照スヘシ
 其他又調節領ノ位置及ヒ大サニ从フテ遠視眼ニ左ノ名稱ヲ付ス
眞遠視ハ全調節領即チ遠點及ヒ近點皆ナ無限外ニ存スル者ナリ再言スレ
 ハ假令ヒ最強ノ調節機緊張ヲ以テスルモ凸面眼鏡ヲ使用スルニ非サレハ更
 ニ遠所ヲ明視スルヲ能ハサル者ナリ尙語ヲ換ヘテ言ヘハ遠視ノ度調節力ヨ
 リ過大ナル者ナリ
關係遠視ハ併行及ヒ開散ノ光線ニ調節スルヲ得ルモ只其視軸關係的ニ強
 度ノ輻湊ヲナスニ當リテ之ヲ爲スヲ得ルノミ再言スレハ調節ス可キ點ヨリ
 尙近所ニ輻湊スルニ當リテ即只一眼視スルニ當リテ之ヲ爲スヲ得ルノミ
不全遠視ハ甚シキ接近ノ距離ニ非サルニ於テハ凸面眼鏡ヲ使用スルト否
 ラサルトニ關セス皆物体ヲ明視スルヲ得ル者ナリ
 抑モ調節力ハ年齢ト共ニ減少スルヲ以テ幼年ノ者ニハ多ク不全遠視存ス可
 シ而シテ調節力ノ年齢ト共ニ減少スルト同比例ニ先ツ關係遠視トナリ終ニ之
 ヨリ眞遠視ヲ發生ス
 然レモ關係調節力ノ關係ヨリノ近所ニ於テ就業スルニ當リ甚タ容易ニ調節

筋ノ疲勞ヲ生ス之ヲ調節性眼疲勞

accomodative Asthenopia ト云フ而シテ遠視

者ハ通常之カ爲メニ醫士ノ診ヲ乞フニ至ル者ナリ即チ視力完全ナルモ近所
 ニ於テ讀書筆記裁縫等ノ業ヲ執ルキハ直ニ眼上ニ緊張及ヒ疲勞ヲ覺エ且ツ
 不明視ヲ來ス既ニノ暫時休止シ手ヲ以テ前頭及ヒ眼瞼ヲ少ク摩擦スルノ後
 再ヒ前業ニ就クキハ初メハ平常ノ如クナルモ復タ直ニ前症一層強劇ニ來リ
 眼上ノ緊張ハ眞ノ頭痛ニ變シ甚シキニ至リテハ眼ノ紅潮ヲ來シ加之一時遠
 所モ亦朦朧トナリ患者ヲシテ失明スルニ非サルヤノ疑ヲ生セシムルニ至ル
 此調節性眼疲勞ハ遠視ノ度愈々強クハ愈々速カニ發生ス總テ筋力ヲ減少スル
 原因係身體ヲ衰弱セシムル類ハ皆能ク調節性眼疲勞ノ發生ヲ促スヲ得
 其他永續性ノ調節機緊張ヨリシテ眞ノ輪狀筋痙攣ヲ發生スルヲ得然ル
 キハ水晶体其穹窿ヲ增多スルニ依リテ假性近視ニ變スルヲアリ
 間、強度ノ遠視眼ニテ殊ニ先天弱視若クハ亂視等ヲ合併スルニ於テハ物体ヲ
 明視スル爲メニ特ニ之ヲ五乃至十センチメートルノ近所ニ接近スルヲ認ム
 然ルキハ之ヲ圈暈ニ於テ見ルモ其大サハ網膜像ノ比例ニ增多セサル者ナリ
 前條既ニ陳述スル視軸輻湊ト調節機トノ關係ヨリノ屢、永久性ノ内直筋作用

過多及ヒ内斜視 Strabismus convergens フアハクニス 發生ス而ノ其發生ハ尙左ノ條件ニヨリ促進セラル即チ Δ 角ノ過大ナルニ當リ視軸ヲ併行ニ保ツニハ外直筋ノ作用ニ著大ノ望ヲ属スル是レナリ此ノ如クニ容易ニ此筋ノ作用不全ヲ發生ス

遠視ニ依リテ發スル困難即チ調節性眼疲勞ハ大抵適當ノ凸面眼鏡ニヨリテ全ク除却スルヲ得ル者ナリ此困難ヲ除却スルニハ凸面眼鏡ニテ其現在部ヲ補正スルヲ以テ多クハ充分ナリトス而ノ患者若シ關係調節力ノ變化ヨリノ眼鏡ニ慣習スルヲ能ハズ從フテ視軸幅湊ニ應メ比較的ニ弱キ調節機緊張ヲ要スルキハ固ヨリ弱度ノ眼鏡ヲ與ヘサル可カラズ然レ老視眼ト合併シ來ルキハ強度ノ凸面眼鏡ヲ要ス

屢又調節性ノ困難アルモ或ハ遠視ナラサルカ或ハ只輕度ノ遠視ナルカ或ハ又近視ナルヲアリ然ルキハ「アトロピン」點入ノ后ニ於テ其潜伏遠視ヲ定メサル可カラズ然レ後其現在部及ヒ其潜伏部ノ四分ノ一ヲ中和スルヲ得又遠所ヲ見ルニハ只真遠視ノミ凸面眼鏡ノ裝用ヲ要ス何ントナレハ此眼鏡ハ近所ヲ見ルニハ甚タ弱度ナレハナリ真遠視ヲ有スル幼年者ニ在リテハ多クハ遠

用ノ眼鏡ヲ近所ニ使用スルモ充分ナリト雖凡既ニ老視眼ヲ發スル老年ノ人ニ在リテハ近用ニハ強度ノ眼鏡ヲ要ス

第四章


亂視眼 Asigmatismus


眼球ノ矢狀軸尋常ノ長サヲ有スルニ當リ角膜ニ向テ併行ニ射來スル光線正サニ網膜ノ一點ニ結合セサルヲアリ是レ殊ニ眼ノ透明体角膜或ハ水晶体ノ穹窿面球形ヲ取ラスノ其方向及ヒ某經線ニ於テ強ク或ハ弱ク穹隆スルキニ然リトス「トーマス、ユング」氏此症ヲ初テ自己ノ眼ニ就キ實見セリニ從フテ此症ヲ亂視眼 Asigmatismus (A)ト名シ


殆ト各眼皆其屈折力ノ經線不同ヲ有ス即チ曲光裝置ヲ單一ノ屈折面ト看做スキハ縱經線ハ極小ノ半徑即チ最短ノ燒距又橫經線ハ最大ノ半徑即チ最長ノ燒距ヲ有ス故ニ今調節機ノ使用ヲ廢止シ近所ノ一點ヲ着視スルキハ橫經線ノ向キニ於テ網膜ハ圈暈ニ出會セサル可カラズ第二十圖(一)何トナレハ獨リ縱經線ノミ此經線ハ最強ニ開散セル光線即チ近接ノ點ヨリ射來スル光線ヲ網


亂視眼


膜面ニ於テ結合シ得ルヲ以テナリ之ニ反ノ今遠隔ノ點ヲ瞻視スルキハ鉛直ノ向キニ於テ圈暈ヲ呈出ス何ントナレハ併行即チ遠隔ノ點ヨリ射來スル所ノ光線ハ只橫徑線ニ依リテ網膜面ニ結合セラル、チ得レハナリ第二十四圖然ノ

三  若シ點ノ像縱及ヒ橫徑線ノ燒點間ノ部位ノ中間ニ存スル

第 二  キハ該像ハ各方向ニ於テ不明ナリトス第二十圖像若シ愈、縱

十  愈、橫徑線ノ燒點ニ接近スルキハ地平ノ向キニ於テ愈、鮮明ニ又

四  ナリトス故ニ地平ノ線地平ノ向キニ點列ト云フモ亦同シルハ其像縱徑

一  線ノ燒距ニ存スルキ即チ近所ニ於テ瞻視スルキハ最モ著

明ナリトス何トナレハ此際地平ノ圈暈ハ皆各自ニ相被蓋

スレハナリ又鉛直ノ線ハ之ヲ遠所ヨリ瞻視スルニ當リ最モ著明ナリトス何

ントナレハ此際其網膜像ハ橫徑線ノ燒距ニ射落シ且ツ鉛直ノ向キニ生スル

圈暈互ニ相被蓋スレハナリ

此最強及ヒ最弱ノ穹窿ヲ有スル兩徑線ヲ **主經線** Principal Meridian ト云フ而ノ

此主經線ハ必スシモ鉛直及ヒ水平ノ向キヲ取ラスシテ多少之レヨリ異ル

アリ且屢反對ナルコアリ

若シ獨リ各異ノ經線ノ燒距ノミ各異ノ長サヲ有スルキハ之ヲ **正亂視** Astigmatismus regularis ト云フ之ニ反ノ若シ同一ノ經線ニ於テ燒距各異ニノ爲メニ

穹窿不同ノ存スルキハ之ヲ **不正亂視** Astigmatismus irregularis ト云フ不正亂

視ノ原因ハ角膜及ヒ主トノ水晶体ノ穹窿不正ナルニ在リ而ノ一眼多視ハ其

固有症候ナリ

正亂視ノ原因 ハ主トノ角膜ニ存ス即チ前條既ニ論スル如ク最強ノ穹窿

ハ鉛直又最弱ナル者ハ橫徑線ニ在リ此角膜ノ不同形ハ多少反對ニ作用スル

類似ノ水晶体ノ不同形ニ依リテ中和セラル、者ナリ然レモ角膜ノ不同形ハ

過分ニ常ニ少ク遺殘シ存ス故ニ亂視眼ノ原因ハ先天性ナリトス若シ此經

線ノ不同甚シクノ實ニ瞻視ヲ妨クルキハ之ヲ病的ト看做ス可シ爰チ以テ眼

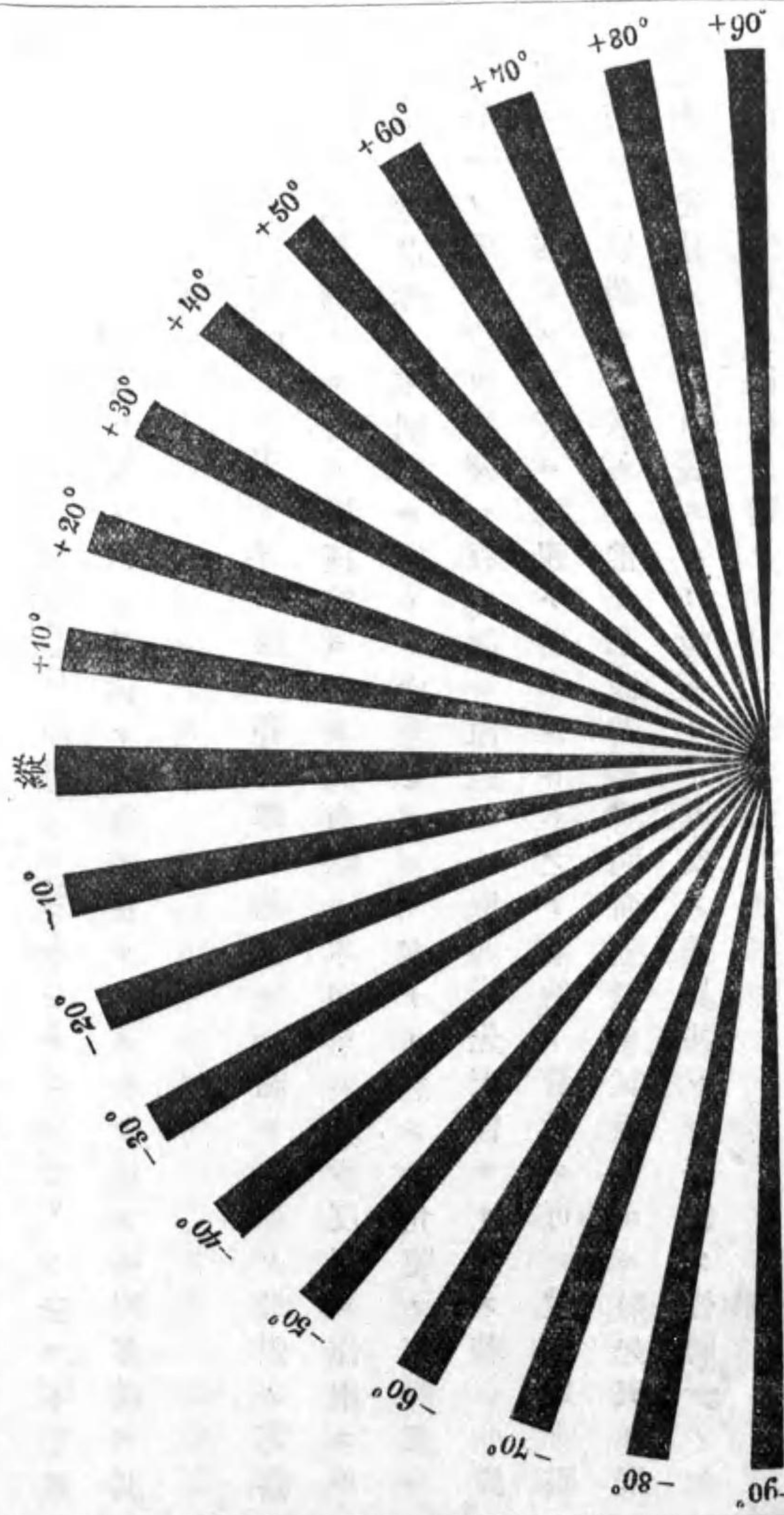
ノ尋常ノ構造ヲ有スルニ當リ凸面若クハ凹面眼鏡ヲ試用スルモ猶先天ノ弱

視ヲ充分ノ視力ニ變スルコト能ハサルカ又ハ差異甚シキ眼鏡ヲ皆同一ノ如

ク説明スルキハ亂視ノ疑アリ

亂視者ハ每常物体ヨリ著明ノ像ヲ得ルコトナク只圈暈ヲ得ルノミ而シテ像若シ

第二十五圖



横徑線ノ燒距ニ當ルキハ縱楕圓ニ又縱徑線ノ燒距ニ存スルキハ横楕圓ニ而
ノ其兩間ノ中央ニ存スルキハ眞圓ナリトス第二十圖夫レ然リ故ニ只主經線ニ

併行ノ線ノミ能ク著明ノ像ヲ形成スルヲ得爰ヲ以テ簡便ニゲルロイ氏法主經線
ヲ定ムルニハ先ツアトロピンヲ點入ノ調節機ヲ弛緩セシメ次テ視力ヲ最モ
善良ニスル凸面若クハ凹面眼鏡ヲ裝用セシメ患者ヲ其頭部ヲ眞直ニシ一
眼ヲ以テステルレン氏放線表第二十圖ヲ瞻視セシム此際最モ鮮明ニ見ル所ノ
線ハ則チ主經線ノ向キニ符合スル者ナリ而シテ其鉛直ヨリノ隔離ハ表中ニ記
スル角度ニテ定ムルヲ得但シ此角度ハ右方ニハ(+)又左方ニハ(-)ノ章ヲ付ス
爰ニ於テ最良ニ明視スル線ノ向キニ透明ノ板ニ設ケタル細狭ノ裂孔ドナル
孔ス氏狭ス孔裝置ヲ眼前ニ置キ而シテ視力表ヲ瞻視セシメ常法ヲ以テ凸面及凹面眼鏡ヲ
應用シ此經線ノ屈折態ヲ定ム次テ又裂孔ヲ九十度廻轉シ再ヒ此經線ニ於テ
其屈折態ヲ定ム然レバ此兩主經線ノ屈折ノ差ハ則チ亂視ノ度ヲ示ス者ナリ
(ドナルス)氏ニ从ヒ左ノ亂視ヲ區別ス

(一)單純近視性或ハ遠視性亂視 (A_B)及ヒ(A_H)是レ一經線ニハ正視眼而
ノ之ニ鉛直ノ者ニハ近視眼若クハ遠視眼ノ存スル者ナリ
通常近視性經線ノ向キハ鉛直ニシテ遠視性ハ地平ナリトス

(二)複合近視性或ハ遠視性亂視 (M+A_B)及ヒ(B+A_H)是レ兩經線ニ於テ近

視若クハ遠視各異ノ度ヲ存スル者ナリ

(三)錯雜亂視是レ一經線ニハ近視而シテ他ノ經線ニハ遠視ノ存スル者ニシテ或ハ近視ノ過強ナルアリ(Amb)或ハ遠視ノ過強ナルアリ(Ahm)

亂視眼ノ障害ハ視力減少ノ他尙疲勞ヲ來スニ在リ而シテ此疲勞ハ亂視ノ他尙遠視ノ存スルニ當リテ特ニ發生スル者ナリ故ニ近視性亂視ハ却テ之ヲ發スルコト少ナシ甲症ニ於テ疲勞ノ發スルハ患者若シ網膜像ノ不明ヲ其増大ニヨリテ代償スル爲メニ特ニ接近ノ距離ニ於テ就業スルキハ愈々容易ナリトス若シ主經線ノ向キ正シク地平及ヒ鉛直ナラサルキハ亂視者ハ就業スルニ當リテ容易ニ頭部ヲ斜ニ保持スルニ習慣ス是レ畢竟瞻視ニ適當ノ經線ニ適當ノ位置ヲ與フルガ爲メ不隨意ニ發起スル者ナリ

後天性ノ正亂視ハ白內障摘出后ニ來リ壓著シ殊ニ瓣狀摘出后ニ於テハ線狀摘出后ヨリ甚タシトナス此際鉛直ノ經線即チ創口ノ中央ニ當ル部分ハ僅カニシテ而シテ地平ノ經線ハ強ク穹窿スウオア此亂視ハ二三月ノ後ニ於テ減少スル者ナリ

抑モ近視眼及ヒ遠視眼ニ在リテハ其燒距眼軸ノ比例ニ甚タ短若クハ長ナル

カ故ニ一樣ニ凸面或ハ凹面ヲナス所ノ眼鏡ヲ以テ之ヲ延長若クハ短縮セサルヲ得スト雖モ亂視眼ニ在リテハ只之ヲ一經線ニ於テ要スルノミ故ニ只一經線ニ於テ燒距ヲ延長若クハ短縮スル所ノ眼鏡即チ球面ノ一部ニ在ラスノ圓柱ノ一部ヲ形成スル者ヲ要ス

亂視眼ヲ補正スルニハ先ツ適當ニ選定セル圓柱眼鏡ニヨリ兩主經線ニ

於テ同一ノ屈折態ヲ誘起スルニ在リ例之今二曲光力ノ近視性亂視橫經線ニハ縱經線ハ二曲光力ノ近視ナリ即チ $A = \frac{1}{2} - \frac{1}{8} = \frac{3}{8}$ ナリアランニ軸橫ノ二番ノ凹面圓柱眼鏡(-2.0)ニヨリ縱

經線ニ存スル近視ヲ中和スルキハ兩經線ニ於テ正視眼存ス可シ又爰ニ四曲光力ノ複合遠視性亂視 $H2.5 + A1.4$ 縱經線ニハ二五曲光力ノ遠視橫經線ニハ六五曲光力ノ遠視存ス故ニ $A = \frac{1}{6} - \frac{1}{2.5} = \frac{1}{15}$ ア

ランニ軸縱ノ四曲光力ノ凸面圓柱眼鏡(+0.5)ヲ裝シ以テ橫經線ニ存スル六五曲光力ノ遠視ヲ二五曲光力ニ減シ縱經線ニ存スル二五曲光力ノ遠視ト其度

ヲ同フスルニ至ル然ルキハ之ヲ正視トナスニハ只二五曲光力ノ凸面球眼鏡ヲ要スルノミ此眼鏡ハ或ハ有柄眼鏡トノ與ヘ或ハ又圓柱眼鏡ト複合ノ與フ

而シテ左ノ如ク記ス即チ $+4.0$ (次ノ眼鏡ト) $+2.5$ 今又爰ニ五曲光力ノ錯雜近遠性亂視 $Amb5(=M3.5+H1.5)$ アランニ軸橫ノ五曲光力ノ凸面圓柱眼鏡ヲ以

テ三、五曲光力ノ近視ヲ一、五曲光力ノ遠視ト爲スチ得可シ然ルキハ全ク之ヲ補正スルニハ尙一、五曲光力ノ凸面球眼鏡ヲ要スルノミ(-50) + 1.50 其他五曲光力ノ錯雜遠近性亂視 $A_{hm}5 = H_{3.5} + M_{1.5}$ ニハ先ツ適當ノ軸向チ有スル五曲光力ノ凸面圓柱眼鏡ヲ以テ三、五曲光力ノ遠視ヲ一、五曲光力ノ近視トナシ加之尙一、五曲光力ノ凹面球眼鏡ヲ要ス(+3.50) - 1.50

錯雜亂視ニ在リテハ又各經線ノ屈折態ヲ各箇ニ補正スルチ得可シ然ルキハ軸チ直角ニ交叉スル複圓柱眼鏡ナル者ヲ要ス而シテ此眼鏡ノ作用ヲ示スニハ直角「形」ヲ以テス例之今縱經ニ三、五曲光力ノ近視又橫經線ニ一、五曲光力ノ遠視アルキハ此般ノ亂視ハ左ノ複圓柱眼鏡 + 1.50 - 3.50 以テ補正セラル然リト雖正亂視ト共ニ又屢甚ダシキ不正亂視若クハ先天弱視ヲ合併シ圓柱眼鏡ヲ使用スルモ視力ノ善良トナルヲ誠ニ少小ナルヲアリ然レモ該眼鏡ハ猶調節性眼疲勞ニ向フテ効アリ總テ圓柱眼鏡ハ球眼鏡ノ如ク凹面ニハ最モ視力ヲ善良ニスル最弱ノ番號又凸面ニハ最強ノ番號ヲ選擇セサル可カラス

第五章

不同視眼

Anisometropie

不同視眼トハ兩眼ノ屈折態各異ナルノ症ヲ謂フ

各種ノ屈折態相混ソ來ルチ得可シ即チ一眼ハ正視ニシテ他眼ハ近視若クハ遠視ナルアリ或ハ一眼ハ近視ニシテ他眼ハ遠視ナルアリ或ハ兩眼ニ於テ近視及ヒ遠視ノ度差異アルアリ「屈折差」 Refraktionsdifferenz 「ベルシヤ」 或ハ一眼ノミ亂視ナルヲアリ但シ一眼ノ近視性亂視ニハ他眼近視ニシテ一眼ノ遠視性亂視ニハ他眼ハ遠視ナルチ常トス一眼ノ錯雜亂視ハ通常他眼ノ正視ト結合シ來ル者ナリ其他一眼ノ白内障手術ニ依リテ不同視眼ヲ來ス者ナリ

抑モ調節筋ハ兩眼ニ於テ同強ニ作用スルチ以テ不同視眼ニ在リテハ只一眼ノミ著明ノ像ヲ受容ス例之一眼正視ニシテ其近點十「センチメートル」ニ在リ而シテ他眼ハ四、五曲光力近視ニシテ其調節力同一ナルキハ其近點ハ六、八「センチメートル」ニ在ル可シ故ニ十六「センチメートル」ノ距離ニ存スル點ハ各眼各自ニスルキハ明視スルヲ得ルモ兩眼同時ニスルヲ能ハス何ントナレハ近視眼ハ正視眼ニ比スレハ微少ノ調節力ヲ使用スレハナリ故ニ一眼ノ像ハ常ニ不

明ニシテ從フテ兩眼ノ共有像モ亦不明ナラサル可カラス若シ一眼遠視ニシテ他眼近視ナルキハ這般ノ關係ハ尙一層甚シトナス今一物ヲ着視スルニ當リテ鉛直ニ屈折スル三稜鏡ヲ一眼ニ裝スルキハ只一眼ノ像ノミ鮮明ナルヲ確証スルヲ得可シ

這般ノ關係ニ於テハ通常正視性若クハ遠視性眼ハ只遠望ニシテ又近視性ノ者ハ只近所ニシテ使用セラル此症ヨリノ交換性外斜視ヲ發生スル者ナリ

今一眼ニハ遠視又他眼ニハ正視ノ存スルキハ調節機衝動ハ唯正視性眼ニ傾向スル者ナリ又兩眼近視ニシテ其度異ナレハ外斜視又兩眼遠視ニシテ其度異ナレハ内斜視ヲ發生スルヲ得可シ然ルキハ多クハ弱度ノ近視性若クハ遠視性ノ眼ニシテ是レ通常最良ノ視着視ニ需用スル者ナリ

屈折態ノ差異纔少ナルニ當リテハ各眼ニ適當ノ眼鏡ヲ裝用スルヲ得可シ之ニ反シ若シ其差異甚クシキキハ最良ノ視力ヲ有シ且ツ纔少ノ屈折異常アル眼ヲ適當ノ眼鏡ヲ以テ補正シ而シテ同一ノ眼鏡ヲ以テ他眼ヲ裝ス可シ然レモ若シ視力善良ナル眼ニシテ屈折異常甚クシキキハ固ヨリ他眼ニハ弱度ノ眼鏡ヲ裝セシメサル可カラス若シ兩眼ヲ交換シ用ユルキハ眼鏡ヲ要セス

第六章

調節機異常 Anomalien der Accommodation

老視眼

(一)老視眼 Presbyopia 凡ソ調節力ノ大サハ其人ノ年齢ニ關スル年齢ノ増加スルニ從フテ其近點ハ隔離シ二十年ニ至レハ平均十センチメートル三十一年ニハ稍十二乃至十六センチメートル四十一年ニハ二十センチメートルトナル故ニ正視眼ニ在リテハ其調節力二十年ニハ十曲光力三十年ニハ八乃至六曲光力又四十年ニハ五曲光力ナリトス是レハ輪狀筋ノ收縮力減少スルニ原由スト雖モ主トシテ水晶体ノ硬度増加及ヒ其彈力減少シ毛様筋ノ收縮スルニ當リテ充分其穹窿ヲ増加スルヲ能ハサルニ依ル但シ這般ノ變化ハ既ニ舊時ヨリ其徵ヲ呈スル者ナリ「ベック」氏今若シ高年ニ至リテ近點非常ニ隔離シ通常近所ニ於テ執業スルニ要スル距離以外ニ去ルキハ則チ障害ヲ生ス此障害ヲ名テ老視眼ト云フ

故ニ老視眼トハ調節力ノ制限ニシテ水晶体ノ老人性變化ニ原由スル者ナリ此老視眼ハ正視眼ニ在リテハ四十五年乃至五十年ノ間ニ發スル者トス此際近

點ハ通常二十七乃至三十三センチメートルノ距離ニ在リ然レ遠視眼ニ在リテハ其來ルヤ早ク又近視眼ニ在リテハ或ハ遅キカ或ハ全ク之ヲ發セサルヲアリ其症狀ハ近所ニ於テ讀書スルヲ能ハサルニ在リ何ントナレハ物体圈暈ヲ帶フレハナリ今若シ物体ヲ隔離スルキハ圈暈ハ消失スルモ網膜像从フテ細小トナリ長ク之ヲ見ルキハ網膜爲メニ疲勞ス是故ニ老視眼ハ其初期ニ於テ強光ヲ好ミ或ハ物体ヲ光源ノ後方ニ保テ以テ瞳孔ノ縮小ニ依リテ圈暈ヲ細小ニスルヲ務ムル^ドン^テ一層高老トナルキハ變硬スル皮質漸^ル核ノ屈折力ヲ取リ水晶体ノ屈折能減少ヲ來シ而シ今ヤ殆ト一樣ノ層ヨリ成立ス故ニ其遠點モ亦从フテ隔離シ終ニ后天性遠視眼ヲ發ス

治法ノ要ハ毛様筋ノ營爲スルヲ能ハサル水晶体ノ強穹窿ヲ凸面眼鏡ニテ補翼スルニ在リ而シ此眼鏡ハ通常患者ノ就業スル距離ニ从フテ選擇ス即チ距離少キキハ強度ノ眼鏡又距離大ナルキハ弱度ノ眼鏡ヲ與フ年齢ノ増加スルニ从フテ強度ノ眼鏡ヲ使用セサル可カラズ通常正視眼ニハ年齢ニ从フテ左ノ眼鏡ヲ適當ナリトス

四十二年 ○、二五曲光

四十七年	〇、七五
五十年	一、五〇
六十年	二
七十年	四
八十年	五

調節機麻痺

(一) 調節機麻痺

Accommodationslahmung

ハ先ツ動眼神經麻痺ニ來リ又他ノ動眼神經枝ノ疾患ナク獨立症トノ來ルヲアリ而シ麻痺ハ或ハ不全ナルアリ或ハ完全ナルアリ咽頭實扶的里后ニ於テ他筋殊ニ咽頭筋ノ麻痺ト合併シ來リ又梅毒ノ末期ニ起リ又眼球ノ打撲ニ原シ其他癩麻質斯又歐魯巴、虎列拉、急性發疹病并ニ一般急性病ノ後ニ來リ^ウク^チ又肉中毒ニ續發ス^リヒ^氏手^婦家^婦人^ノ及ヒ神經性ノ婦人ニ來ルヲアリ^ムレ^氏又他ノ原因ナクノ調節機ノ麻痺ヲ來ス^クハ^アト^ロビ^ンニ^ホム^アト^ロビ^ンニ^ヂユ^ボア^シン^ニ及ヒ^ヒオ^スチ^アミ^ン溶液ノ點眼ニ依テ發起セラル、者ナリ

症候ハ近所ノ視力減衰スルニ在リ但シ遠所ノ視力ハ他ノ合併症ヲ除クキ

ハ屈折態ニ相當セリ故ニ其症狀ハ殆ント老視眼ト同一ナリトス此際多クハ虹彩括約筋モ亦麻痺シ之カ爲メニ瞳孔^正ニ散大ス(瞳孔散大症 Mydriasis)是レ疑シキ症ニ於テ老視眼ト鑒別スルノ用ナラス

調節機麻痺ハ或ハ偏側ニ來リ或ハ兩側ニ發ス而シテ其障害ハ該眼ノ遠點ノ距離ニ从テ各異ナリ近視眼ニ在リテハ正視眼及ヒ遠視眼ヨリ少ク抑モ吾人物体ノ大サヲ判決スルニハ管ニ網膜像ノ大サノミナラス兼テ又物体ノ存スル距離ヲ以テシ又物体ノ距離ヲ判斷スルニハ使用セル視軸輻湊ノ他尙茲ニ必用スル調節機ノ緊張ノ度ヲ以テスルカ故ニ調節機ノ不全麻痺若クハ完全麻痺ニ罹ル所ノ患者ハ物体接近スル如ク從テ細小ナルカ如ク感受ス何ントナレハ此物体ヲ明視スルニハ尙遺殘セル調節力ヲ非常ニ強ク緊張セザル可カラサルヲ以テナリ此症ヲ名ケテ小視症 Microptie ト云フ

预后 ハ動眼神經麻痺ト結合シ來ル症ニ在リテハ其原因頭蓋内若クハ頭蓋外若クハ全身性ナルニ从テ不定ナリ 動眼神經麻痺ノ條ヲ參照スハシ梅毒性ノ者ハ稀ニ治愈シ咽頭實扶的里後及ヒ其他枚舉セル原因ニ依リテ發スル症ニ在リテハ佳良ナリトス

治法先ツ一般ニ電氣ヲ稱用セリ梅毒ニハ特ニ水銀軟膏ノ塗擦法實扶的里后及ヒ急性病ノ後ニ發スル症ニハ強壯療法ヲ施シ僂麻質斯性ノ者ニハ撒里矢爾酸那篤留母ヲ用ヘシ硫酸[ストリヒオン]ノ溶液 〇.〇〇ニヲ顯顯部ノ皮下ニ注入シテ著効ヲ見シヲアリ[エゼリン]或ハ[ピロカルピン]ノ點眼ハ亦タ一時ノ効アリ若シ諸他ノ療法皆無効ニ屬スルキハ宜シク適當ノ凸面眼鏡ヲ以テ視力障害ヲ補正スルヲ務ム

(三)調節機痙攣

Acomodationskrampf

ハ強ヒテ調節機緊張ヲ持長スルニ續發

ス殊ニ夜中光線ノ不充分ナルカ又ハ遠視眼ナルキニ發スト云フ然レモ近視眼及ヒ正視眼モ亦之ニ罹ルヲアリ間他ノ顔面ノ神經痛ト共發シ并ニ中樞病ノ症候トノ來ル其他子宮病^{ムレ}及ヒ毛様体部ノ損傷后ニ來ルヲアリ

症候ハ瞳孔ノ縮小(瞳孔縮小症)

Myosis 就業ノ際疲勞及ヒ發痛シ并ニ水晶

体其穹窿ヲ增多スルカ爲メニ急ニ假性近視ヲ發スル等ナリ而シテ此症ハ[エゼリン] [ピロカルピン] 若クハ[ムスカリン] 溶液ノ點眼ニ依リテ人工的ニ之ヲ誘發スルヲ得ヘキナリ但シ此諸藥ハ亦[アトロピン]ノ反對藥トノ作用ス故ニ恰モ[アトロピン]ノ小視症ヲ發スルカ如ク亦能ク大視症^{Macropie}ヲ發スル者ナリ

治法眼ヲ休憩シ久時「アトロピン」ヲ點眼ス時宜ニ依リテ「ハ」ホイルテルー「ブ」氏
人工蟻針ヲ貼スルモ可ナリ遠視者ニハ調節機痙攣ヲ除却スルノ后宜シク適
當ノ凸面眼鏡ヲ裝用セシムヘシ

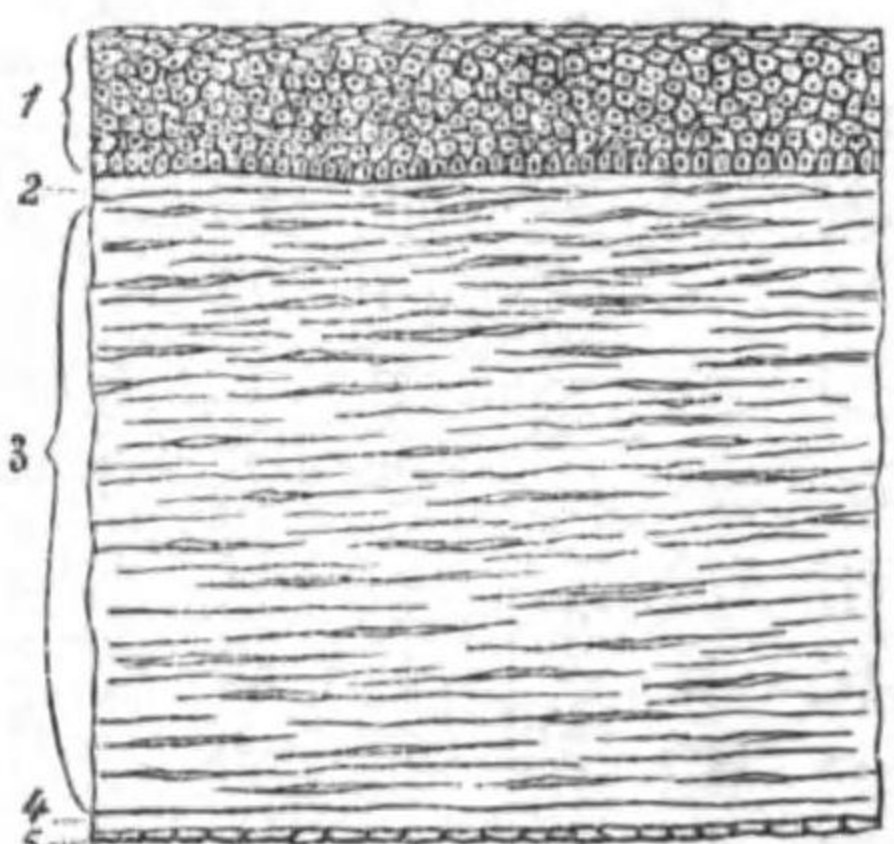
眼球諸病

第七章

角膜 Cornea

解剖要領 角膜ハ眼球ノ前部ニ位スル透明ノ被膜ニシテ其縁「Limbus corneae」ヲ以テ不透明
ノ鞏膜ト接着ス但シ鞏膜ハ少シク角膜上ヲ超過シ殊ニ其上下ニ於テハ廣幅ノ縁ヲ
以テ之ヲ被覆スルカ故ニ前面ヨリ角膜ヲ見ルハ横楕圓ナルモ之ヲ後面ヨリスル
ハ眞圓ナリトス是故ニ角膜ノ横直徑ハ一一、九「ミルリメートル」ニシテ其縱直徑ハ一
一「ミルリメートル」ナリ又角膜ノ厚サハ其周圍部ニ於テハ一一、二「ミルリメートル」ナ
ルモ其中心部ニ於テハ〇、九「ミルリメートル」ニ減少ス
角膜ハ分ツテ五層トナス第一層即チ上皮層重層狀トシテ前透明膜「ライヘルト」氏又「ボ
固實質」後透明膜「デセメツ」及ヒ前房ノ内皮是ナリ角膜固實質ノ組織ハ纖維性ニシテ其
元纖維ハ皆ナ同大ニシテ直交スル束狀トナシテ此束ハ排然併列ノ板トナリ
所謂接合質ニ依リテ一様ノ透明質ニ接合セラル此接合質中ニ空隙及ヒ小管ノ系統
アリ「フカイン」レク「リング」ハウセ中ニ透明ノ液、固定角膜細胞、游走細胞及ヒ散在セル

圖六十二第

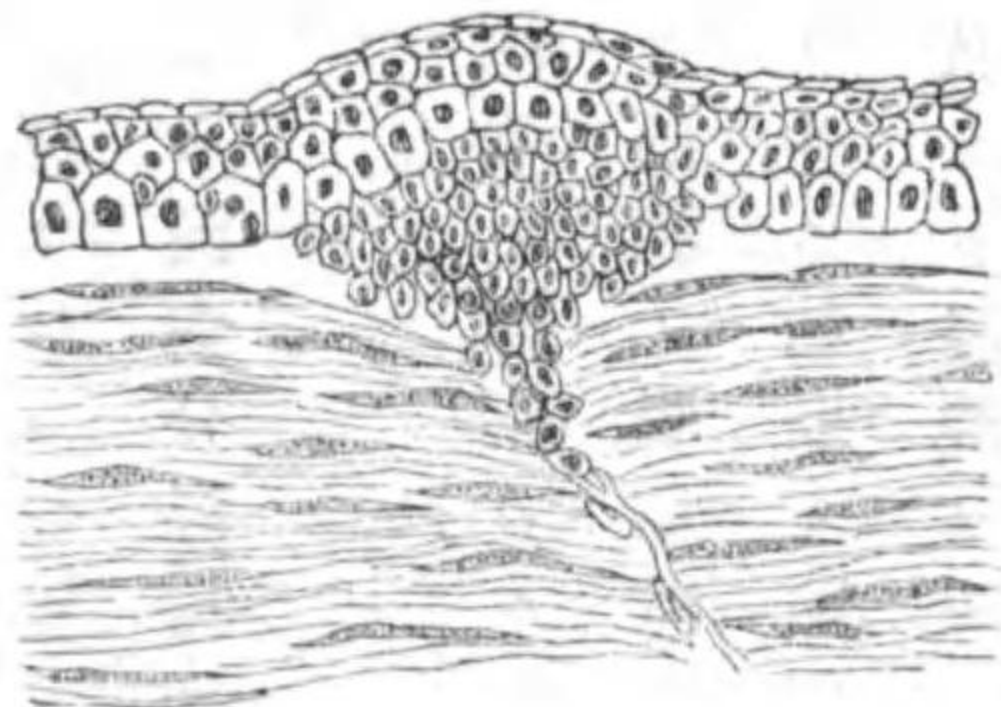


色素細胞ヲ含有セリ角膜ノ血管ハ鞏膜上動脈ニ依リ
テ結膜及ヒ眼瞼動脈ト吻合シ角膜ノ境界ニ於テ其位
置ヲ占メ茲ニ表在及ヒ深在ノ周縁係蹄網ヲ形成ス但
シ動脈ハ表在シ靜脈ハ深部ニ存ス而シテ靜脈ハ先ツ
鞏膜上靜脈ニ還流シ次チ前毛様靜脈ニ歸着ス角膜ノ
神經ハ半ハ前毛様神經ヨリ半ハ結膜神經ヨリ起首シ
鞏膜縁ニ於テ輪狀叢ヲナシ后チ四十乃至四十五條ノ
纖維ニ分岐シ角膜固實質中ニ進入ス而シテ其之ニ進入
スルヤ先ツ其髓鞘ヲ脱却シ裸体ノ軸索トナリ終ニ數
多ニ分岐シ角膜ノ前四分ノ三ノ處ニ於テ基底叢ヲ形
成ス此叢ヨリ再ヒ數多ノ纖維ヲ送り前透明膜ヲ穿孔シ
後透明膜ニ透入シ表皮下ニ密接シテ表層ノ上皮細胞間ニ終ル
復細纖維ヲ表皮中ニ送り數回分岐シ表皮下ニ密接シテ表層ノ
其他結膜ノ水脈管ハ細管トナリ表皮下ニ密接シテ表層ノ
ノ直ニ角膜ノ津液管ニ注入ス角膜ノ營養ハ其表層ニ於テハ結膜ヨリシ
テハ鞏膜ヨリス又津液ハ角膜周圍ヨリ其中心ニ向フテ流ル「プ
檢定セリ房水ハ直ニ血管ヨリ分泌セラル者ニシテ硝子体ヨリスル
膜ノ營養ニハ更ニ關係ナ有セス却テ液流ハ后房ヨリ「チン」氏帶ヲ
入ルト云フ「ヒル」氏

〔二〕角膜ヲ檢スルニ當リテハ其光澤、穹窿及ヒ透明ノ變化ニ注意スルヲ要
ス故ニ日光ヲ以テ之ヲ檢スルハ患者ニ窓ノ格子若クハ角膜計ノ其角膜面
ニ反射スルヲ得ル位置ヲ與フルヲ最佳トナス而シテ此反射像其透明性ヲ變ス

群ニ由テ貫通セラレ

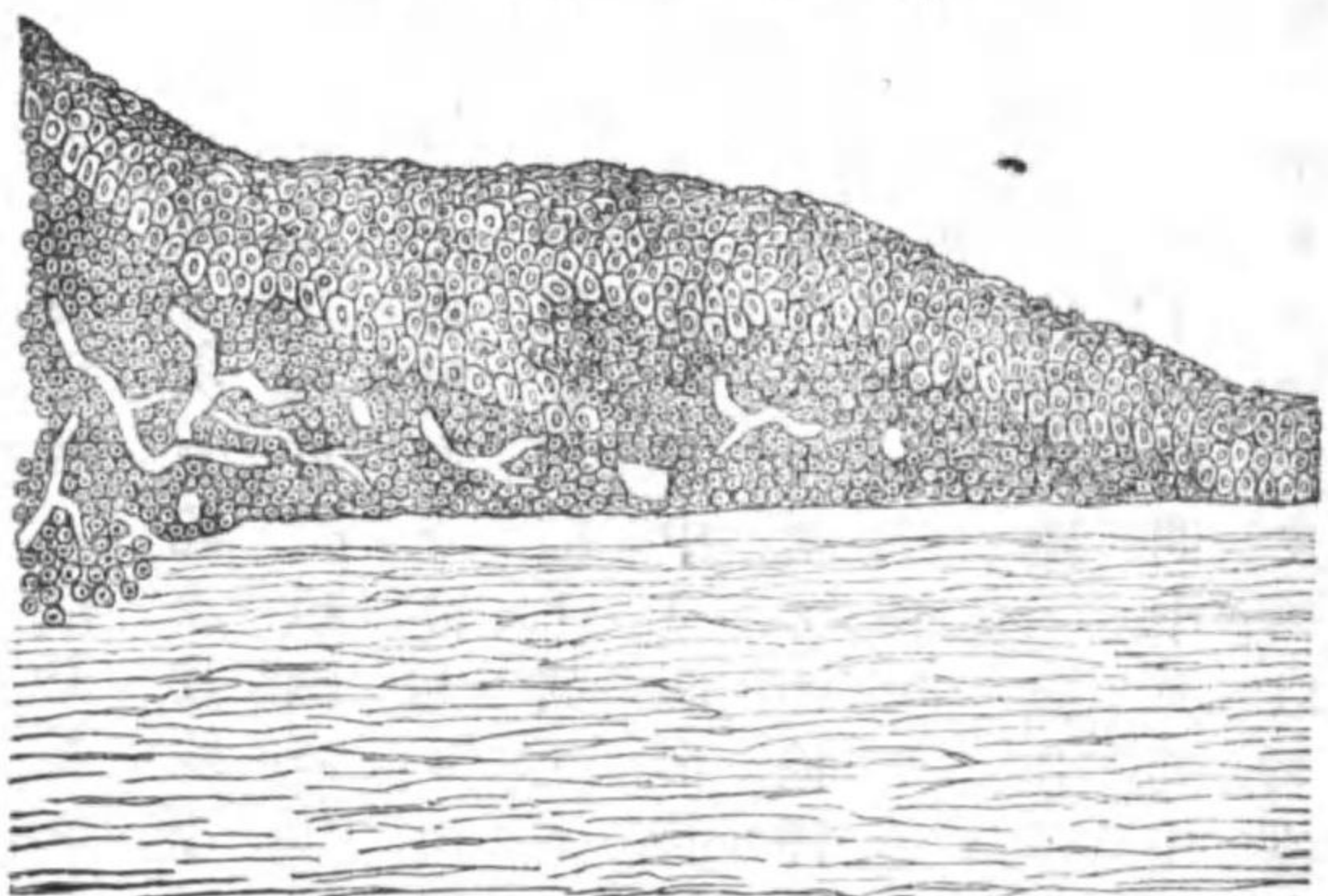
前上皮層ハ時トシテ上皮細胞ノ不正ナル増殖ニ由テ斑點ヲ呈ス又潰瘍或ハ損傷ニ由テ上皮層ノ所々ニ破壊ヲ生スルヲアリ然レモ角膜組織健康ナルトハ其欲損部周圍ノ上皮細胞分割増殖メ甚ク速ニ即チ二十四時間内ニ其破壊



圖七十二第

部ヲ補充ス又上皮層液質ノ爲メニ狭ク(角膜匍行疹)或ハ廣ク(丘疹狀角膜炎)剝離シ或ハ細胞ノ群集浸潤ニ由リテ剝離ス第二十圖ルヲ屢々之レアリ
「デッセメト」氏膜ハ炎症ノ作用ニ最モ久シク抵抗スルモ膿球ノ竄透ニハ毫モ抵抗ヲ爲サス終ニ板狀ニ破壊シテ死滅スルヲアリ屢々虹彩炎ノ爲メニ其後面殊ニ下部ニ斑點狀ノ溷濁ヲ三角形ニ呈シ爲メニ其上皮變化シ増殖シテ一分破潰シ其破壊セル上皮塊脂肪粒ト合シテ突出物ヲ生シ角膜ニ穿孔術ヲ施セハ水様液ト共ニ漏出ス又潰瘍或ハ損傷ノ爲メニ角膜穿孔スレハ「デッセメト」氏膜深ク角膜内ニ進入シ爲メニ角膜ノ后面陥没第三十三圖ス「シユ」氏又手術ヲ施シテ「デッセメト」氏膜ヲ滑澤ニ切斷シタル後チニ於テモ其創

圖八十二第



シテ角膜組織ニ送り其中ニ在テ中心ニ存スル部ト癒合シ之ニ由テ管ヲ成シ後チ其内裡ニ内皮ヲ生シ其外壁ニ含核ノ外膜ヲ生ス但シ突起ノ進行スル方向ハ細胞間質ニ於ケル線狀ノ變化ニ由テ生スルモノナリ「アル」氏而シテ新生血管ハ初メハ薄壁ヲ有シ血液恰モ細胞間ヲ流ル、カ如キモ又久シキヲ經ル

縁直ニ癒着スルヲナク數多ノ細纖維層ニ媒テ結合ス「子」氏

發炎セル角膜中ニ屢々血管ヲ新生ス其表面ニ新生スル血管ハ豫メ成形細胞結膜縁ヨリ上皮層ト彈力板トノ間ニ進入スルノ後チニ生成スル第二十八圖「イ」者ニシテ或ハ周縁血管縮ヨリ延長セル枝或ハ結膜輪中ニ存スル大血管ノ突起ニ外ナラスト雖モ角膜ノ深層ニ新生スル血管ハ深在鞏膜血管或ハ毛様叢靜脈ノ延長ニ由テ生ス蓋シ在來ノ血管ハ先ツ之ヨリ實シタル「プロトプラスマ」突起ヲ出

キハ其壁著シク肥厚ス又表存血管ハ角膜内ニ於テ「アルカデン」状ニ分岐シ深
 在周縁血管網ヨリ帚状ニ分岐シタル者ト相吻合シ動脈ハ常ニ靜脈ヲ伴フ「
 エ」氏又早ク既ニ隆起セル上皮層ノ肥大ヲ起シ后チ又上皮ト彈力板トノ間ニ
 結締織ヲ新生ス「イ」氏
 破壊セル角膜組織ノ補充セラル、ヤ先ツ缺損潰瘍ノ邊縁ヨリ上皮ヲ生シテ
 其上ヲ被覆シ次ニ此上皮膜下ニ在テ層々ニ組織ヲ新生ス此組織ハ纖維及ヒ
 細胞ヨリ成立シ角膜組織ニ類似スルモ透明性少ナク之ヲ以テ缺損ヲ補充ス
 レハ從テ上皮層漸々隆起シテ常度ニ達ス
 補充組織ノ角膜組織ト異ナルノ點ハ細胞ニ富ミ細胞間纖維束固ク結合シテ
 離解シ難ク屢々其中ニ圓形、橢狀或ハ扇狀ノ空隙ヲ呈シ又石灰或ハ金屬ノ分
 子其中ニ癒合スル「ア」リ前彈力板ハ新生セス上皮層ハ屢々甚ク不正ニシテ
 著シク肥厚ス「ヒ」氏
 切斷シタル角膜組織ノ癒合(手術後ノ)スルヤ初メニ在テハ上皮創管ノ壁ニ於
 テ下行シテ十二時間中ニ其中央ニ達シ次キノ二十四時間中ニ創ノ上半部角
 膜面ノ高サマテ上皮ヲ以テ補充セラレ四十八時間後ニハ只角膜中層ノミ直

水泡性角膜炎

ニ適合シ其上下ニハ兩境界膜ノ哆開ニ由テ各一個ノ漏斗狀腔ヲ生シ其上漏
 斗ニハ新生上皮ヲ充滿ス是レ即チ假リノ閉鎖期ニシテ幾ント二日間變化ス
 ル「ナ」ク此狀態ヲ保チ四日ヨリ上皮塊剝脱シテ代リニ結締織ヲ新生シ板間
 腔擴張シテ圓形細胞及ヒ紡錘狀細胞ヲ充滿シ創管、内漏斗、上皮塊ノ周邊等皆
 ナ亦ク夥シク此細胞ヲ充滿シ六日ニ至テ紡錘狀細胞非常ニ延長シ上皮排却
 セラレテ變性ス切斷シタル「デ」セメツト「氏」膜ハ既ニ論セシ如ク再ヒ癒合スル
 「ナ」シ
 今部位ニ從テ角膜炎ヲ左ノ如ク區別ス
 (一)主トノ表層ヲ侵ス所ノ炎即チ水泡性角膜炎、匍行性角膜炎、丘疹狀角膜炎
 及ヒ「バ」ンスス
 (二)主トノ角膜ノ實質ヲ侵ス炎即チ角膜實質炎又角膜間質炎
 (三)病ノ強弱ニ從フテ多少多クノ層ニ發スル炎即チ外傷性角膜炎、化膿性角
 膜炎
 (イ)水泡性角膜炎 Keratitis phlyctenulosa 此症ハ主ニ腺病家殊ニ小兒ニ發シ
 屢々眼瞼炎、顔面及ヒ頭濕疹ヲ伴フ者ナリ然レモ又年齡ニ關セス加之各種ノ

器械的、化學的若クハ理學的作用ニ依リテ強壯ノ體質ニ發スルヲアリ
 先ツ角膜ノ或ル部ニ於テ多クハ上皮ト前彈力膜トノ間ニ限局性淋巴細胞ノ
 群叢所謂滲潤 インフラトラー Infiltrat ナ生シ少シク其被蓋層ヲ周圍部ヨリ前方ニ隆起ス「ブ
 ルヒアルド」氏ハ此浸潤中ニ「ミクロコツケン」ヲ發見セリ而シテ此症ノ主徴ハ灰
 白色ニシテ稍、黃色ヲ含蓄スル帽子針頭大ノ濁濁ヲ呈スルニ在リ然レハ此滲潤
 ハ暫時ニ穿開シ后ニ小潰瘍ヲ遺殘ス但シ此小發炎部ノ大サ及ヒ數ハ甚ク
 各異ニシテ其數愈多キハ愈小ナリトス往々又群ヲナシテ發スルヲアリ角膜
 ノ中央ニ於テハ多クハ孤立シ結膜縁ニ於テハ通常互ニ相駢列セリ此症ハ常
 ニ結膜充血ヲ共發スルモ結膜ノ充血ハ既ニ滲潤即チ水泡ノ發スルニ先ツテ
 來ル者ナリ又此表在浸潤ハ他ノ深在浸潤ニ比スレハ劇シキ刺戟症候ヲ伴フ
 是レ表層ハ神經ニ富ムカ爲メナリト雖ハ浸潤シタル細胞屢々神經路ヲ沿フ
 テ蔓延シ「セミシニ」氏第二十七圖加之ス上皮ヲ槓起セシメテ神經ヲ牽引シ或ハ破裂スル
 ヲアリ

結膜充血ハ水泡ノ數ニ從フテ各異ナリ即チ孤立セル者ニアリテハ互ニ密
 接シ炎部ニ向フテ放線狀ニ行走スル鞏膜上血管ヨリナル而シテ此血管ハ角膜

縁ニ於テ卒然停止スルヲ以テ其全形恰モ圓形ノ三角ヲ形成シ水泡ハ則チ其
 尖端ニ在リ今増大「レンス」ヲ以テ之ヲ視ルハ細血管ハ卒然廻旋シテ再ヒ復
 歸スルヲ認知スルヲ得可シ又滲潤物多數ナルニ當リテハ角膜ノ全周縁結膜
 充血ヲ以テ周擁セラレ加之眼瞼結膜モ亦多小充血ノ粘液膿樣ノ分泌物ヲ
 分泌ス間々過多ノ滲潤集積スルニ當リテハ角膜自家ニ周密ノ血管網ヲ發シ
 「パンヌス」狀ヲ呈ス

結膜分泌多キトキハ時トシテ初學者誤テ結膜炎ト診シ其療法ヲ施ス「ア」リ
 殊ニ浸潤ハ屢々甚ク小ニシテ検査ヲ行ヒ難キ小兒ニ於テ看過シ易ケレハ宜
 シク角膜縁ニ於ケル血管ノ排列ニ注意セサル可カラズ
 多クハ虹彩充血ヲ伴フ羞明 フォトフォビ Photophobie ハ常ニ此症ト結合シ來リ殊ニ小兒
 ニ在リテハ屢、劇甚ニシテ該兒好シテ室隅ノ暗所ヲ求メ尙顔面ヲ以テ自体ニ屈
 伏ス而シテ此症持長スルハ頭部ノ前屈ハ終ニ習癖トナル「ア」リ多量ノ涙液
 ナ分泌シテ往々眼角ノ表皮剝脫ヲ起シ之ニ由テ強劇ノ眼瞼痙攣症 ブレファロ Blepharospasmus
 ナ併發シ小兒ハ爲メニ眼ヲ開哆スル「能」ハス
 小兒ノ眼ヲ檢スルニハ先ツ看護婦ヲ小兒ヲ其膝上ニ仰臥セシメ且ツ手足ヲ固

持セシム次テ醫師ハ自ラ其膝頭ヲ以テ小兒ノ頭部ヲ挟置シ手指若クハ開眼器ヲ以テ其眼ヲ開哆シ以テ角膜ノ皸裂間ニ現出スルヲ待ツヘシ時宜ニヨリテハ固定鑷子ヲ以テ眼球ヲ下方ニ廻轉スルヲ要スルヲアリ

經過 ハ各異ナリトス即チ表在浸潤、通例暫時ニシテ破開シ其破开后ニ呈出スル小潰瘍ハ或ハ新生組織ヲ以テ充實セラレ或ハ直ニ上皮ヲ以テ其底面ヲ被覆セラレ鏡様平滑トナリ所謂**角膜摩滅** Hornhautfaetten ホルンハウツァフアツェツテンヲ呈シ后漸々周圍ト同等ノ高サニ達ス此兩症ニ於テハ后来薄キ表層ノ溷濁ヲ遺殘スルヲアルモ只斜照法ニ依リテ漸ク之ヲ認知スルヲ得ルノミ然レモ角膜ノ組織甚クシク變性セサルヲ以テ該翳モ亦多クハ痕跡ヲ殘サスノ消失スル者ナリ屢又潰瘍ニ變セスノ漸々治癒スルヲアリ或ハ又組織漸々侵蝕セラレ眞ノ角膜潰瘍ニ傾向スルヲアリ然ルキハ潰瘍ノ治癒スルト同シク角膜縁ヨリ血管ノ新生スルヲ待ツテ治癒シ后永久性ノ溷濁ヲ遺殘ス又病機稀レニ深部ニ進ミ化膿ヲ誘起シ前房蓄膿及角膜ノ破潰ヲ來スヲアリ深ク角膜組織内ニ存スル溷濁ハ破開スルヲナク治スルヲアリ

水泡性角膜炎ハ甚ク再發シ易シ殊ニ同時ニ眼瞼縁炎及ヒ睫毛倒生等ノ存在スルキニ於テ然リトス而ノ腺病家若クハ衛生不充分ナルニ當リテハ時々

再發ノ月ヲ經、年ヲ閱シ終ニ過多ノ溷濁ヲ遺殘ノ治シ甚クシク視力ヲ損害スルヲアリ

芒把狀角膜炎

芒把狀角膜炎

Bischoferformige Keratitis

ハ即チ水泡性角膜炎ノ變形ニ先ツ角膜縁ニ水泡狀ノ溷濁物ヲ形成シ后其潰瘍狀ニ變スルヲ待テ漸々放線狀ノ向キニ於テ角膜ノ中心ニ進入シ此途上互ニ密接セル血管ノ帶狀線ヲ其後方ニ引キ而ノ溷濁若シ角膜ノ中心ヲ超ユルキハ屢馬蹄狀ニ屈曲ス又治癒ノ後線狀ノ痕跡ヲ遺殘スルモ時ヲ經テ消失スルヲ得ル者ナリ

治法 ハ先ツ「アトロピン」アトロピン、硫酸「アトロピン」硫酸者ヲ一日ニ三回乃至四回チ點入シ瞳孔ヲ散大セシムルヲ要ス硝酸銀或ハ黃降汞軟膏ノ如キ刺戟藥ハ炎症期ニ在テハ堅ク禁スヘシ發泡膏ハ効ナクノ却テ害アリ温罨法ハ小溷濁物ノ破開ヲ防禦スルノ効アリ又甚クシキ眼瞼痙攣症ニハ小兒ノ全顔面チ一日數回冷水ヲ盛りタル水盤中ニ浸入シ暫時其中ニ置カシムルヲ稱用セリ又ク眼瞼ノ腫脹甚クシキハ「コロザウム」ヲ塗布ス可シ若シ倒生セル睫毛再發ノ原因タルキハ之ヲ拔出スルカ時宜ニヨリテハ瞼裂ヲ開大セサルヲ得ズ他ノ眼瞼病ハ固ヨリ適當ノ療法ヲ施シ眼瞼糜爛スルキハ硝酸銀溶液百倍チ塗布シ顔面水泡疹殊ニ鼻患

アルキハ同シク可及的早ク之ヲ治スヘシ
 既ニノ刺戟症候弛ムキハ宜シク汞劑ヲ局所ニ使用スヘシ即チ甘汞ハ乾キタ
 ル毛筆ヲ以テ毎日一回之ヲ撒布シ又黃降汞ハ「ワセリン」ヲ以テ軟膏トナシ
 承〇、五、〇、〇一日一回眼瞼ノ間ニ塗抹シ輕ク上眼瞼ヲ按摩ノ之ヲ角膜面ニ分
 散シ后二三分時ヲ經テ再ヒ柔軟ノ海綿ヲ以テ眼ヲ洗滌スルヲ要ス病機既ニ
 治癒スルニ至レハ漸々其間歇時ヲ多クシ尙月餘又ハ年餘該治法ヲ持續スル
 キハ大ニ再發ヲ預防スルノ効アリト云フ若シ病機連綿持續ノ爲メニ結膜
 ノ充血及ヒ腫起等ヲ誘發スルキハ稀薄ノ倍鉛糖水若クハ硝酸銀水ヲ特ニ上
 眼瞼ノ結膜穹隆部ニ塗布スルヲ稱用セリ化膿及ヒ前房蓄膿ヲ發スルキハ多
 量ノ「アトロピン」點入、微温罌法及ヒ格魯兒水或ハ昇汞水「十萬倍」ノ防腐性洗滌
 「頻回」ヲ用ユルハ最モ適當ノ療法ナリ病機若シ腺病質ノ爲メニ持續スルキハ
 鐵劑、鹽浴、皮膚水滋法、空氣ノ交換等ニ依リ全身ノ改良ヲ試ム可シ

〔ロ〕角膜匍行疹又大水泡狀角膜炎 *Herpes cornuae ad Keratitis Vesiculosa*
 主徴ハ透明ノ水泡疹ノ發生スルニ在リ而シテ此水泡疹ハ多クハ角膜ノ縁ニ簇
 生シ暫時ニ破開シ次テ再ヒ消失ス故ニ之ヲ目撃スルハ甚タ稀レニ多ク

角膜匍行疹

ハ只先キニ水泡疹ノ占居スル部位ニ於テ固有ノ上皮缺損ヲ認知スルノミ此
 症ハ眼ノ帶狀匍行疹、鼻毛様神經ノ神經痛ト同時ニ來ルコアリ「フツチン」或ハ
 月經ノ時ニ於テ發スルコアリ「ランドス」或ハ既ニ「滲潤」パンヌス等ノ角膜病ア
 ル者ニ發シ又或ハ外傷後「ハッセル」及ヒ手術後ニ來ルヲ目撃セリ「シミット、リン
 痛性匍行疹」破開ハ必スシモ疼痛ヲ喚起セス屢、水泡ノ破開スル后チ其部廣
 大ニ「溷濁」シ或ハ潰瘍ニ轉歸シ後漸々再成及ヒ透明トナルアリ茲ニ最モ注意
 ス可キハ「眼球内壓」ノ減少、角膜ノ大部ニ蔓延スル知覺麻痺及ヒ網膜血管分岐
 ノ變化「ホル子」等ナリ再發ハ甚タ屢、ニノ數週間中毎日スルコアリ
 其他角膜匍行疹ハ劇性加苔兒性ノ呼吸器病肺炎后ニ發ス殊ニ高熱后ニ於テ口
 唇ノ匍行疹ト同時ニ來ル者ナリ「ホル子」氏ハ之ニ加苔兒性匍行疹ノ名ヲ付シ「ハ、
 此症ニ在リテハ劇痛及ヒ甚タシキ充血アリ而シテ上皮ノ再成ハ甚タ緩慢ニ屢、
 又甚タシキ角膜溷濁ヲ呈シ間々前房蓄膿ニ傾向スルコアリ然レモ再發ハ希
 有ナリトス

治法ハ先ツ水泡ノ破開ヲ促スカ爲メ甘汞ヲ撒布シ其他「アトロピン」ノ點入、壓
 抵綱帶、平流電氣等ハ皆稱用スル所ナリ疼痛アルキハ莫兒比濕チ皮下ニ注射

ス可シ

〔バ〕^{パンヌス} Pannus 又〔バ〕^{パンヌス} 性角膜炎 Keratitis pannosa トハ表層ノ血管新生ヲ兼發スル角膜炎ナリ此症ハ主トノ顆粒狀結膜炎ニ續發ス是レ畢竟顆粒ノ器械的刺戟ニ原由スル者ナリ其他内翳症及ヒ睫毛亂生症モ此症ノ原因トナルコアリ〔ト〕^{ラホーム} 性〔バ〕^{パンヌス} 性

症狀ハ先ツ後毛様動脈ヨリ分岐スル血管結膜ヨリノ角膜ノ表層ニ進入シ數回分岐ノ茲ニ稠密ノ網工ヲ形成ス而シテ此網目ノ間ニハ角膜ノ表層不平且灰白色ニ溷濁シ數多ノ小上皮缺損ヲ呈シ恰モ針ヲ以テ亂刺スルカ如キ狀ヲ呈シ間々又數多ノ小灰白色點ノ敷衍スルカ如キコアリ今溷濁及ヒ血管發生ノ多少ニ依リテ膜様〔バ〕^{パンヌス} Pannus tenuis 及ヒ肉様〔バ〕^{パンヌス} Pannus crassus sive carnosus ノ二種トナス然レモ此二症ハ判然區別スルコト難シ

本症ノ發生ニハ屢劇シキ炎症性候即チ眼瞼腫起充血及ヒ疼痛ヲ伴フ將來ノ經過ハ甚タ緩慢ニノ屢月ヲ閱スルニ至ル此經過中ニ於テハ小溷濁或ハ稀レニ^{睫毛亂生} 深層潰瘍ヲ發生スルコトアリ病機若シ久シク持續スルルハ角膜ノ實質モ亦發炎ス然ルルハ多クハ虹彩炎ヲ併發スル者ナリ毛様体炎若クハ

縁内障ヲ合併スルコト亦タ少ナカラスト爲ス

病機ノ消退スルニ從フテ溷濁漸々減少シ次テ血管消失シ遂ニ只其粗大ナル者一二ヲ遺殘スルノミ其治スルヤ常ニ雲片狀ノ溷濁及ヒ角膜面ノ不平ヲ遺殘シ或ハ角膜扁平トナリ或ハ痕痕組織ヲ以テ全角膜ヲ被覆ス

他種ノ〔バ〕^{パンヌス} ハ潰瘍ノ再成期ニ於テ發起ス之ヲ再成〔バ〕^{パンヌス} ト名ク

治法ハ先ツ結膜ノ姿様ニ注意スルヲ要ス特ニ〔ト〕^{ラホーム} 性〔バ〕^{パンヌス} ハ多ク

ハ〔ト〕^{ラホーム} 性結膜炎ト同時ニ治スルヲ以テ總テ該患ニ使用スル所ノ治法

〔硫酸銅〕ハ皆能ク之ヲ〔バ〕^{パンヌス} ニ用ユルヲ得可ク角膜病モ亦タ之ニ依リテ治

癒スルヲ得可キモ只急性ノ溷濁及ヒ潰瘍アルルハ宜シク之ヲ禁止スヘシ又

虹彩炎ニハ〔ア〕^{トロピン} ヲ點入シ眼ノ内壓亢進スルルハ角膜穿孔術ヲ施シ時

宜ニヨリテハ虹彩切除法ヲ要ス

再成〔バ〕^{パンヌス} ニ在リテハ刺戟藥ヲ使用ノ可ナリ^{甘菜及ヒ黃降} 膏^{チ一日一回宛} 軟 又結膜腫脹

スルルハ硝酸銀、鉛糖、單寧水若クハ格魯兒水等ノ使用ヲ要ス

頑固ノ症ニハ所謂角膜圍切開法 ^{Peritomie} ヲ稱用セリ是レ角膜ノ周圍ヨ

リ幅二三ミルリメーターノ結膜ヲ輪狀ニ切除スルノ法ナリ然ルルハ後來角

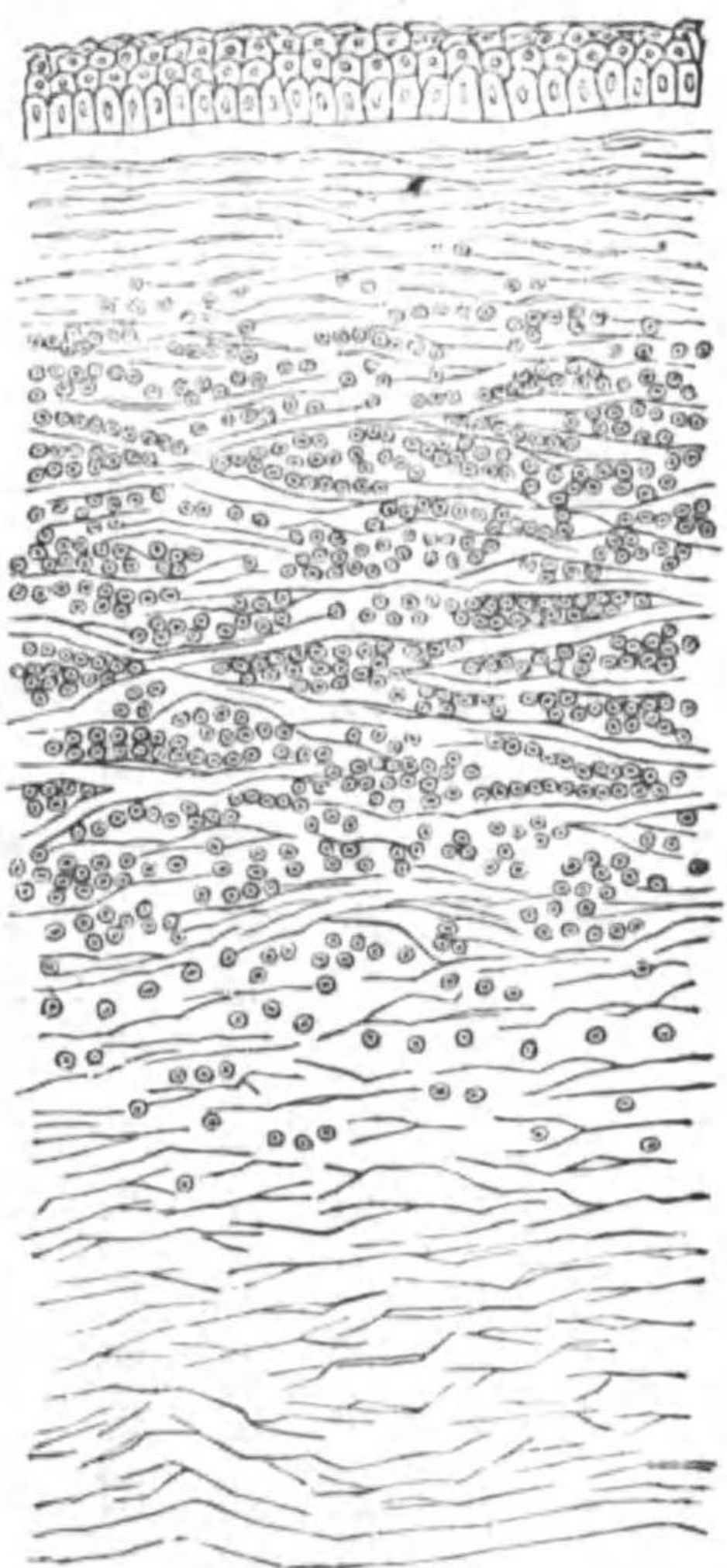
膜ノ周圍ニ輪狀ノ瘻痕ヲ結ヒ以テ「パンヌス」ニ進入スル血管ノ通路ヲ遏絶ス
 然レモ全治スルニハ尙二三ヶ月ヲ經過セサルヲ得ス
 「トラホーム」性「パンヌス」ノ終末療法ハ「化膿漏性分泌物」ヲ「結膜囊」ニ移
 植スル是レナリ然レモ此法ハ危險少ナカラス然レモ化膿性炎ヲ發スルキハ之
 ナ自然ニ放任シ只清潔法及ヒ眼ノ洗滌法等ヲ以テ之ヲ施治ス可シ全効ヲ奏
 スルハ亦一二年ノ后ニ於テ若シ角膜ノ一部透明ニ存スルキハ此療法ヲ
 廢ス可シ是レ動モスレハ此部化膿スルノ恐レアレハナリ

角膜實質炎

(二) 角膜實質炎

Keratitis Parenchymatosa ハ屢ニ全身病殊ニ遺傳梅毒ニ原由シ來
 ル者ノ如シ通常兩眼
 ノ交番ニ侵サル、所
 ナ以テ之ヲ推スモ亦
 タ證スルニ足ル該症
 ニ罹ル者ハ榮養不良
 體質虛弱ナル腺病家
 ニノ年齢六年乃至二

圖九十二第



十年ノ者ヲ尤モ多シトス然レモ亦全ク強健ノ人ニ來ルコトアリ
 病理解剖ハ角膜組織ノ諸層中ニ淋巴様細胞ノ遊走スルニ在リ第二十九圖
 從病ノ初期ニ於テハ先ツ眼ノ刺戟機増盛シ次テ角膜實質ノ局部若クハ全部
 ニ滲潤ヲ生ス而シテ其局部ニ生スルヤ角膜ノ中心ニ於テ其組織ノ各異ノ層ニ
 厚薄不同ノ溷濁ヲ生ス但シ角膜線ハ多少透明ニ存スルヲ常トス「實質性滲
 潤」Das parenchymatöse Infiltrat「セー」或ハ又鞏膜炎及ヒ鞏膜上炎ノ續發症トシ
 來ルコトアリ然ルキハ灰白色ノ溷濁ハ邊緣ヨリノ角膜中ニ進入シ其中心ニ向
 フテ進行シ而シテ尙一層緩慢ニ退行シ終ニ帶青灰白色ノ溷濁ヲ遺殘シ后恰モ
 鞏膜ノ角膜ニ延長スル如キ看ヲ呈ス「鞏膜様角膜滲潤」Sclerosierende Hornhaut
 Infiltrat

蔓延性角膜實質炎或ハ角膜實質炎ニ在リテハ初メ眼ノ刺戟機亢進シ后多クハ
 兩側同時ニ角膜實質ノ溷濁ヲ呈ス此溷濁ハ或ハ先ツ中心ニ初リ二三日乃至
 一週餘ニノ周圍ニ蔓延スルアリ或ハ邊緣ノ一部ヨリノ遂ニ全部ニ瀰蔓スル
 アリ初期ニハ角膜恰モ磨滅硝子ノ如ク溷濁シ次テ角膜ノ各層ニ雲片様ノ斑
 ナ生シ而シテ此斑ハ初メ甚ク菲薄ナルモ漸々稠厚トナリテ乳白色或ハ灰白色

ヲ呈シ屢、又中心ニ於テ小圓板狀若クハ輪狀ニ集合スルヲアリ病機最モ盛ナルキニ當リテハ溷濁ハ屢、虹彩ヲ全ク掩蔽ス又角膜ノ表面ハ單ニ肉眼ヲ以テ之ヲ見レハ平坦ニシテ異常ナキカ如シト雖モ斜照法及ヒ増大「レンズ」ヲ使用スルキハ其面粗糙ニシテ恰モ針尖ヲ以テ之ヲ亂刺セルカ如キ狀ヲナス

溷濁ト同時ニ**鞏膜上血管ノ充血**ヲ發ス是レ殊ニ角膜縁ノ近傍ニ於テ甚クシトナス而シテ角膜ニハ或ハ全ク血管ヲ新生セサルヲアリ或ハ細小ノ血管結膜輪ヨリ角膜中ニ侵入シ溷濁部ニ於テ各種ニ分岐シ角膜ノ各層ニ在屢、互ニ相密接シテ恰モ紅色帶ヲナスヲアリ或ハ又此血管全角膜ニ蔓延シテ肉紅色ヲ呈シ全ク不透明トナルヲアリ眼内壓ハ屢、減少ス

自覺症狀ハ視力減少シ且ツ眼ノ刺戟機充進ノ直ニ發赤及ヒ淚漏ヲ起シ易キ等ナリ是レ甚ク速カニ呈出スル者ニ例之只單其他又羞明及ヒ發作性疼痛ヲ發スルヲアリ

經過ハ甚ク緩慢ニ五ヶ月乃至八ヶ月往々又二三年ニ渡ルヲアリ概スルニ血管ノ發生愈、多キハ其經過モ亦愈、早シトス多クハ一眼ノ發病後二三週若クハ一ヶ月ヲ經テ第二眼亦同病ヲ發スル者ナリ

丘疹性角膜炎

角膜ノ化膿シ及ヒ崩潰スルハ甚ク希有ニ溷濁物ハ却テ邊緣ヨリノ再ヒ消散スル者ナリ然レ既ニ始メヨリ虹彩炎ヲ併發シ尙増劇ノ虹彩毛樣体炎ニ轉スルコト屢、之アリ通常症ノ強弱ニ從フテ多少各異ナル蔓延性ノ溷濁ヲ遺殘ス而シテ此溷濁ハ屢、稀薄ニ漸クニ之ヲ認知スルノミナルモ常ニ比較的ニ甚クシク視力ヲ損害スル者ナリ

甚ク稀レニハ實質溷濁週餘持續スルノ後チ劇痛ヲ發シテ角膜殊ニ其下半部ニ緊張セサル大水泡四乃至五ミヲ生スルヲアリ之ヲ**丘疹性角膜炎** *keratitis is bullosa* ト名ク此水泡ハ上皮透明ナル液ノ爲メニ剝離セラレテ生スル者ニシテ暫時ニシテ破開シ更ニ上皮ヲ新生シテ治ス如斯キ水泡不規律ノ間歇ヲ以テ數週乃至數月間反復スルヲアリ

治法ハ効驗甚ク少シ、只微温罨法ヲ施シ「アトロピン」ヲ點入シ、青色防護眼鏡ヲ裝シ時宜ニヨリテハ暗室ニ居リ、且ツ刺戟ヲ避クル等ニ止レリ主トシテ鎮劑ヲ與ヘテ全身ヲ改良シ、又液汁不良ノ存スルキハ沃度加里、昇汞或ハ水銀軟膏ノ塗擦等ヲ適用ス其他「ヤボラン」葉 每日四、〇ヲ浸劑トシ與ヘハ、ヤボラン 下ニ注入スル并ニ撒里智兒酸曹達一、二等モ亦稱用スル所ナリ 視學的ノ目的ニテ

虹彩切除法ヲ施スハ宜シク治後數月ノ後ニ於テスヘシ何ントナレハ之カ爲
メニ鎮靜セル病機復タ再發スルノ恐レアレハナリ

外傷性角膜炎

(ホ) Keratitis traumatica

ケラト、ス、トラウマチカ

凡ソ角膜ニ衝突シテ只之ヲ擦抓シ、或ハ

深ク之ニ竄入スル各種ノ異物ハ皆外傷性角膜炎ヲ發スルヲ得可シ而ノ異物
實ノ殼若シ單ニ表層ニ附着スルキハ直ニ眼瞼ノ摩擦并ニ異物ノ發スル輕微

ノ炎ニ依リテ自然ニ除却セラル、ヲ得可シト雖モ鏡片、硝子、石片、其他煙硝散
末ノ如キハ通常深ク角膜ノ實質ニ竄入スルヲ以テ永ク茲ニ遺殘スル者ナリ

症狀ハ先ツ損傷部ニ溷濁ヲ生シ角膜元織維ノ膨脹次テ其周圍ニ蔓延ス而ノ組織ノ

缺損只表層ニ存スルキハ該部ハ通常直ニ鮮明灰白色ヲナシ且ツ表層蔓延性

ノ暗灰白色ノ溷濁ヲ以テ圍擁セラル然ノ猶治癒ニ至ラサルキハ組織缺損部

帶黃白色トナリテ潰瘍ニ轉歸ス總テ角膜ノ大創傷手術創モ亦同一ナリ及ヒ劇烈ノ諸

角膜炎ニ在リテハ角膜ノ深層ニ線狀灰白色ニノ二乃至三、ミルリメーテル

長ノ溷濁ヲ呈ス是レ纖維樣組織中ノ空隙間ニ病的ノ細胞充實セラル、ニ

依リテ發スル者トス

微少ノ損傷ニモ亦通常烈シキ刺戟症狀ノ存スル者ナリ

穿孔性ノ角膜損傷ハ直ニ前房水ノ流出ヲ來シ而ノ其創ノ大小ニ從フ

テ虹彩ノ脫出ヲ誘起ス動モスレハ眼球深部ノ炎ヲ發シ遂ニ化膿及ヒ眼球萎

縮ニ轉歸スルコトアリ若シ角膜ト鞏膜ノ接合部及ヒ同時ニ毛樣体ヲ損傷スル

キハ特ニ危險ナリトス虹彩毛體炎然ルキハ交感性ニ他眼ノ疾患ヲ誘起スルヲ得

可シ下條ヲ參觀ス可シ

溶解セル礦屬、化學的ニ作用スル物質碳酸、生石灰等ニ原スル角膜ノ火傷ハ甚

ク危險ナリ何ントナレハ化膿多クハ漸々増進シ終ニ全眼球炎ヲ誘起シ得レ

ハナリ而シテ假令ヒ佳良ノ轉歸ヲ取ルモ猶角膜ニ大ヒナル溷濁ヲ遺殘ス

角膜ノ癥痕殊ニ外傷ニ因スル者ハ假令ヒ甚タ小ナルモ猶再發性炎

ヲ起スノ傾向アリ即チ微少ノ誘因又ハ寒胃等ニ依リテ少シク腫起溷濁シ次

テ其上皮ヲ失フ此癥痕角膜炎ナルベンケラト、ス、ナリ角膜炎變化ノ比例ニハ刺戟症狀

甚ク劇烈ナリ即チ眼瞼纖維カニ腫起スルニ當リテ甚シキ涙漏、眼内ノ疼痛、羞明

瞳孔縮小及ヒ結膜充血等ヲ發ス

治法先ツ異物ヲ除去スルヲ要ス而ノ之ヲ除去スルニハ左手ノ拇指及ヒ示

指ヲ以テ眼瞼ヲ開哆シ彎形ノ内障針ヲ使用スルヲ佳トナス患者若シ不穩ナ

ルキハ開驗器ヲ挿入シ又固定鑷子ヲ以テ眼球ヲ固定スルヲ要ス異物ヲ除去スルノ後一滴ノ「アトロピン」ヲ點入シ眼ヲ繙帶ス表層ニ附着スル所ノ烟硝散末ハ微温湯ヲ注キテ之ヲ去ルヲ得可シ

異物若シ角膜ヲ穿孔シ前房内ニ竄入スルキハ宜シク其近傍ニ於テ鋒形刀ヲ以テ角膜ヲ穿孔シ鑷子若クハ小鉤ヲ以テ之ヲ除去スヘシ而シテ異物若シ虹彩ニ固着スルキハ虹彩切除法ヲ要ス若シ異物ノ游離端前房ニ突出シ外部ヨリ之ヲ除去スルヲ能ハサルキハ宜シク鋒形刀ヲ前房内ニ刺入シ直ニ異物ノ後方ニ輸送シ之ヲ後方ヨリ壓出スヘシ凡ソ角膜ヨリ異物ヲ除去スルヤ五十倍ノ鹽酸「コカイン」溶液ヲ眼内ニ滴入スレハ甚タ容易ナリ此藥液ハ數分時間ニシテ角膜及ヒ結膜ノ知覺ヲ鈍麻セシメ且ツ結膜貧血、眼瞼開大、眼球突出、瞳孔散大及ヒ調節機衰弱ヲ起シ其諸作用十分乃至十五分時間ニシテ極度ニ達ス蓋シ本藥ハ末梢知覺神經及ヒ交感神經ニ働クモノトス「コルレル」ケニグスタイン氏

穿孔創ニハ直ニ壓迫繙帶ヲ施シ安靜ヲ命スヘシ而シテ創口ノ閉塞ヲ促シ兼テ虹彩ノ癒着ヲ預防スルカ爲メニ硫酸「エゼリン」若クハ鹽酸「ピロカルピン」百ノ點入ヲ稱用セリ虹彩脫出ニハ宜シク嚼囉保兒謨麻酔ニテ上眼瞼ヲ角膜面ニ抵當シ徐々ニ摩擦ヲ施シ以テ之カ復位ヲ試ムヘシ時宜ニヨリテ「ダウハール」氏匙ヲ以テ前房水ヲ前房内ニ復入スルノ后ニ於テス然レ復位スルキハ再ヒ「エゼリン」ヲ點入ス之ニ反シ若シ復位スルヲ能ハサルキハ反剪刀ヲ

以テ脫出部ヲ切除シ直ニ壓迫繙帶ヲ施ス可シ但シ二十四時ヲ經タル脫出ハ復位セスシテ切除スヘシ何者若シ之ヲ復位スレハ眼ニ化膿性炎ヲ起スカ故ナリ
角膜創傷ニシテ異物ノ存在セサルキハ單ニ安靜ヲ命シ「アトロピン」ヲ點入シ及ヒ壓迫繙帶ヲ施ス等ヲ以テ眼ノ刺激ヲ減シ且治癒ヲ促スニ充分ナル者トス然レモ角膜創潰瘍ニ轉スルカ或ハ化膿スルカ或ハ眼球内ノ炎ヲ發スルキハ固ヨリ此等ヲ施治スルヲ要ス

再發性癥痕角膜炎ニハ一般ニ外傷性ノ者ト同一ニ所置ス即チ劇痛アルキハ微温菴法ヲ施シ后療法トシ甘朮撒布一回ヲ持長ス

(一)化膿性角膜炎 ケラチス、ズフツト Keratitis suppurativaハ特ニ過大ノ切創、挫傷、裂創、火傷、化學的物質ノ襲入後等ニ發スルモノナレモ亦々往々小創ヲ放置スルカ或ハ他ノ角膜炎ヨリ發スルヲアリ例之ハ劇烈ノ加答兒性結膜炎、化膿性結膜炎、實扶的里性結膜炎、顆粒狀結膜炎、及ヒ淚囊膿漏ニ屢之ヲ續發スルカ如シ其他角膜ノ化膿ハ又徵ス可キ原因ナクノ榮養不良ノ勉強家若クハ老人ニ來ルヲアリ特ニ夏期ニ當リ或ハ危重ノ全身病即チ室扶斯、猩紅熱、痘瘡、產褥熱等ノ經過中ニ

於テ然リ又神經麻痺性角膜化膿ハ誠ニ稀有ナル者ニシテ三叉神經ノ麻痺ニ續發シ角膜結膜眼瞼皆ナ其知覺ヲ失ヒ之ニ依テ外物ノ刺戟ヲ防禦スルノ作用減少シ遂ニ化膿ニ至ル者ナリ又一種固有ノ症ハ間質性腦髓炎ニ併發シ來ル

近年ノ檢査「レール、ベル、シミット、リンプ」ニ據レハ化膿性角膜炎ハ輕少ノ角膜創ニ特異ナル傳染毒ヲ受クルニ由リ發スル者ニシテ即チ「ミクロコクケン」ヲ損傷器物ヨリ受ケ或ハ後ニ結膜若クハ淚囊ノ分泌物ヨリ受クルニ起因ス故ニ充分ノ防腐ヲ爲スルハ決シテ角膜化膿ヲ起スヲナシ但シ「スタヒロコクケン」アルブス「スタヒロコクケン」ス、アウレウス「ストレプトコクケン」ス、ピロゲチス「アスベルギルス」ス、グラウクス「レプトトリクス」ス、フツカリス「等ノ」「バクテリア」ハ其惡性ニ從テ或ハ劇シキ或ハ輕キ化膿性角膜炎ヲ誘起スヘシ

化膿性角膜炎ハ或ハ初メヨリ潰瘍トナリテ發スルヲアリ或ハ稀レニ膿瘍ヲ以テ初マルモ後多クハ潰瘍ニ變スル者アリ此兩症ハ細胞滲潤ノ他尙角膜元纖維及ヒ角膜固定小体ノ破潰ヲ兼テ爲メニ角膜組織ニ全ク再成ス可カラサル變化ヲ來ス

膿瘍ハ常ニ角膜中心ノ近傍殊ニ其深層ニ占居ス即チ先ツ該部ニ圓形ニ分畫セル深灰白色ノ溷濁ヲ呈シ其表層ニ存スル組織ハ蔓延性ニ溷濁シ又其上皮ハ缺損シ且不平粗糙トナル此溷濁ハ暫時ニ濃様黄色ヲ取り其表面ニ少許ノ組織缺損ヲ生シ屢、其根底鏡様平滑トナリ速ニ增大ノ終ニ其被蓋ヲ破潰ス又膿瘍ハ内方ヨリ外方ニ破開スルヲアリ前房内ニ破開スルハ甚タ稀レナリトス此二症ニ於テハ溷濁セル底面及ヒ帶黄灰白色ノ陷凹線ヲ有スル潰瘍ヲ發生ス又此症ハ前房内ノ蓄膿(前房蓄膿 ヒポトニオン Hypopyon)ヲ合併シ來ルヲ少カラス(蓄膿性角膜炎 ヒポトニオン Hypopyon-Keratitis「ローゼ」氏)

蓄膿ヲ形成スルニハ膿球先ツ化膿部ヨリ角膜ノ組織及ヒ「デセメット」氏膜ヲ後方ニ穿通シ次テ前房ニ流出シテ遂ニ其底ニ下降ス「ホルツ」氏故ニ前房水一樣ニ溷濁スルキハ膿瘍ノ后壁ニ附着スル稠密ノ凝結物ヨリ灰白色ノ細線角膜ノ後面ニ添フテ蓄膿部ニ下走スルヲ見ル蓄膿ハ間々甚タ纒少ニ非常ノ勞ヲ以テ「下眼瞼」ニテ「涙液」漸クニシテ前房底ニ白黄色ノ線アルヲ認知スルヲアリ或ハ又屢過大ニ前房ノ三分之一以上ニ達スルヲアリ膿ハ屢流動ニ頭部ノ位置ニ从フテ其位置ヲ變スルアリ或ハ屢凝泣塊ヲナシ鋒形刀ヲ以テ角膜

ヲ穿孔スルノ后錐子ヲ以テ之ヲ牽出スルヲ要スルヲアリ

角膜潰瘍ハ組織缺損ヲ呈出スル者ニシテ其大小深淺及ヒ形狀等ハ甚々各異

ナリ即チ圓形ナルアリ長形ナルアリ不正ナルアリ線狀ナルアリ弓狀ナルアリ又其底面ハ或ハ透明ニシテ平滑或ハ不平ニシテ灰白及ヒ黃色ニ溷濁ス又其縁ハ或ハ平滑直立シ或ハ犬牙狀ニ破潰シ或ハ剝離陷凹ス

茲ニ一種ノ角膜潰瘍アリ深部ノ滲潤若クハ角膜膿瘍ヨリ發スルモ多クハ特發シ來ルモノナリ是レ特ニ淚囊膿漏ノ存スルカ若クハ羸瘦ノ老人ニ於テ或ハ外傷ニ依リ或ハ原因ナクノ發生スル者ナリ其主徴ハ左ノ如シ即チ潰瘍ノ縁ハ膿ヲ以テ滲潤セラル、モ其底面ハ比較的ニ清潔ナル是レナリ而シテ此潰瘍ハ多クハ角膜中心若クハ其近傍ヨリ初マリ其周圍ノ一部ハ汚穢ノ灰白色ニシテ少シク腫起スル所ノ一線ヲ以テ圍擁セラル而シテ此線ハ暫時ニ崩潰スルモ既ニ他部若クハ同部ニ於テ新ニ線ノ滲潤ヲ呈出スル者ナリ此ノ如クニ潰瘍ハ一様ニ其面ニ蠶蝕進行シ速カニ全角膜ニ瀰蔓ス此症ハ通常前房蓋膿ヲ合併スル者ナリ此潰瘍ハ特ニ面ニ添フテ進行スル固有性アルヲ以テゼーミッシュ氏ハ之ニ**進行性潰瘍** *Ulcus corneae seipens* ノ名ヲ付與セリ

間質性腦髓炎ニ原スル**角膜潰瘍**ハフオーン、グレイフ、氏初メテ之ヲ記

載スル所ノ症ニシテ二月乃至六月ノ小兒ヲ侵シ而シテ此小兒ハ腦髓炎ニ依リテ致命スル者ナリ此症ハ多クハ兩眼ヲ侵スモ第二眼ハ大抵第一眼ニ後ル、一ニ二週ニシテ發病ス其症狀ハ患眼先ツ羞明流淚シ一二ノ結膜靜脈及ヒ上鞏膜血管ヲ發生シ角膜ハ其中心若クハ中心ノ近傍ニ於テ灰白黃色ニ溷濁シ其上皮ハ不透明トナル次テ此滲潤稠厚増大シテ潰瘍狀ニ破潰シ遂ニ化膿性虹彩炎及ヒ全眼球炎ヲ續發スルニ至ル而シテ結膜ハ此際乾燥ノ所謂**結膜乾燥症** *Xerosis* ヲ呈ス即チ結膜ハ其自然ノ滋潤及ヒ彈力ヲ失却シ乾燥不透明トナリ白色末狀ノ鱗屑ヲ以テ包被セラレ而シテ眼球ノ運動ニ依リテ弛縱スルキハ細微ノ皺襞ヲ生ス

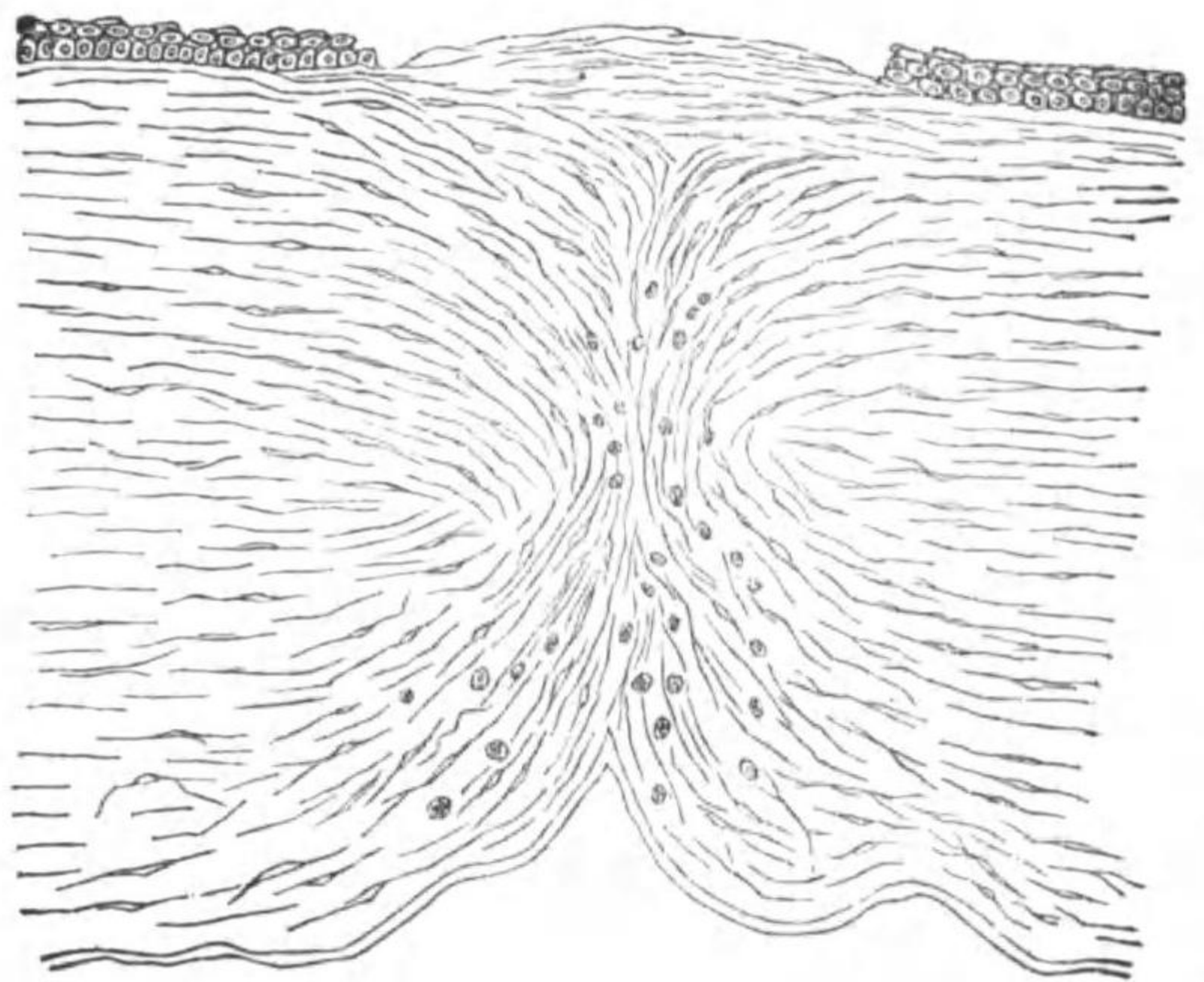
化膿性角膜炎ノ**反應症狀**ハ或ハ甚ク強劇ナルアリ或ハ甚ク纔微ナル

アリ即チ眼球結膜ハ多クハ甚ク充血シ屢々浮腫スルヲアリ羞明淚漏ハ必發ナルモ疼痛ハ或ハ非常ニ甚クシキアリ或ハ甚ク纔微ナルアリ虹彩炎ヲ發スルハ殆ント常ナリ

反應症狀ナキ**角膜潰瘍**ハ往々榮養不良ノ老人ニ來ル者ニシテ初メ角膜縁

ニ不明ノ潰瘍ヲ發生シ次テ此潰瘍ハ絶ヘズ漸々進行ノ角膜ノ全面ニ瀰蔓ス
 然レモ潰瘍ノ縁及ヒ底面ニハ膿狀ノ滲潤ヲ見ルナシ
 化膿性角膜炎ノ經過ハ多クハ甚タ緩慢コノ自然ニ治癒スルコト少ナシ潰瘍
 若シ進行ノ極度ニ達スルキハ先ツ清潔トナリ其底面ハ平滑トナリ次テ血管
 ハ角膜ヲ越ヘテ潰瘍面ニ進入シ來ル然各症皆但シ周圍ノ潰瘍ニハ其來ル速カ
 コノ中心ノ者ニハ緩徐ナリ「再成」パンヌス」然ノ遂ニ潰瘍ノ縁ヨリ其底面
 ニ向フテ上皮ヲ再生シ該部ハ再ヒ光線ヲ反射スルニ至ル「再成潰瘍」爰ニ於
 テ再ヒ元纖維及ヒ細胞組織ヲ新生シテ以テ該缺損部ヲ充實シ漸々上皮層ヲ
 舉上シテ周圍ト同等ノ高サニ達セシム然ルキハ眼ハ殆ント刺衝機ナク新生
 セル血管ハ消失ス然レモ缺損部ヲ充實スル所ノ組織ハ全ク透明トナルコトナ
 シ間々幼年ノ人ニ在リテハ透明トナリテ漸ク斜照法ヲ以テ發見スルヲ得ル
 ニ至ルコトアリ其他ハ皆ナ廣大ノ白斑ヲ遺殘スル者ナリ
 間々潰瘍ノ底面薄弱コノ眼内壓ノ増進ニ依リテ膨出セラレ所謂**角膜貌兒**
屈即チ角膜膨脹性 Keratocele^{ケラトセル}ヲ呈ス而シテ角膜ハ或ハ膨脹ノ儘存留シ**瘢痕組**
 織ヲ以テ包被セラル之ヲ**瘢痕性角膜擴張症** Keratoectasia^{ケラトエクタシー} 或ハ **Narbenectasie**^{ナハベンエクタシー}

第三十圖

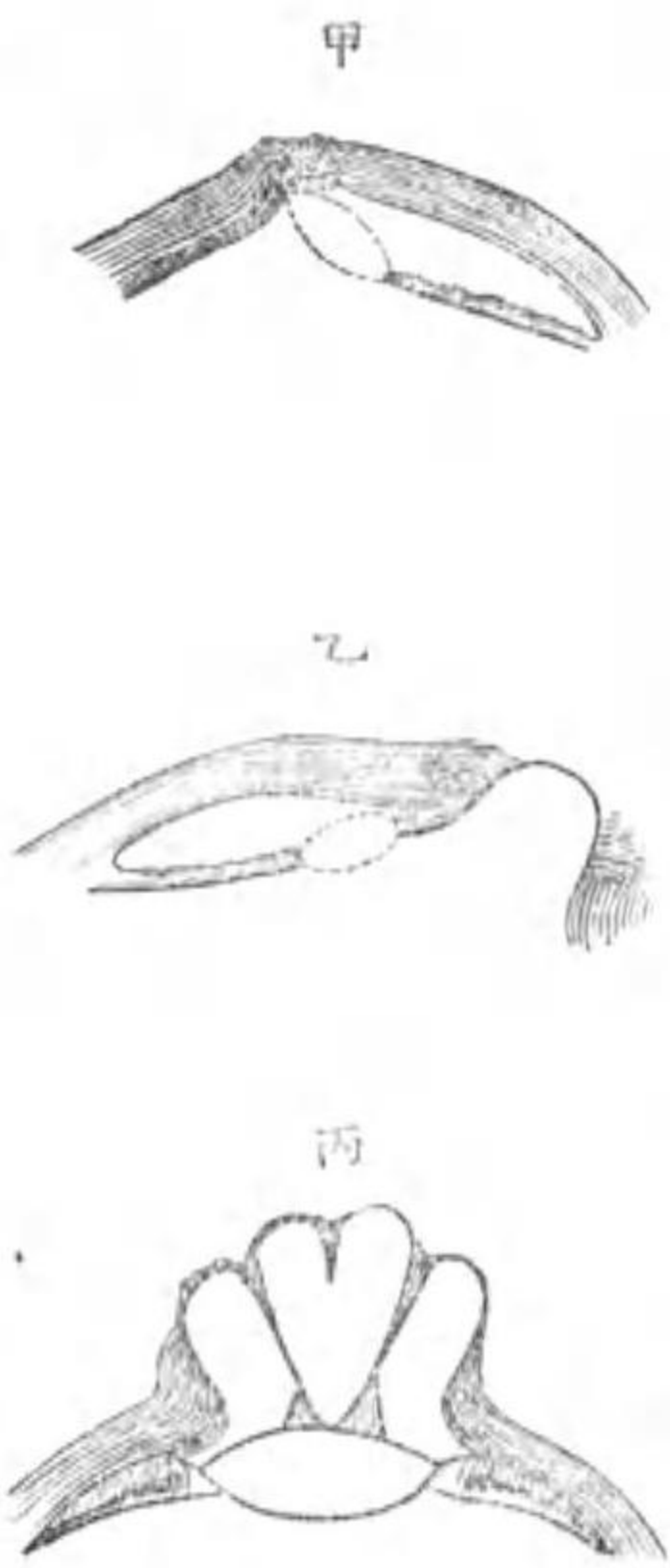


ト云フ或ハ膨脹セル角膜其菲薄部ニ於テ穿孔ス然ルキハ其后ノ經過ハ穿孔
 部ノ大小及ヒ位置ニ從フテ各異ナリ而シテ其穿孔スルヤ房水先ツ流出シ虹彩
 及ヒ水晶体角膜ノ后面ニ抵觸ス若シ穿孔口甚タ小ニシテ且ツ稍々虹彩面ニ對
 スルキハ直ニ再ヒ閉塞シ「デセメット」氏膜ノ裂片先ツ穿孔口ニ折入シテ癒合ス
 ルヲ得可シ第三十圖次テ組織ノ再生スル
 ニ從フテ多クハ再ヒ退却セラル、者
 ナリ「アル」氏然レモ瘢痕猶未タ堅固ナラ
 サルニ既ニ前房及ヒ眼ノ内壓舊ニ復
 スルキハ創口再ヒ穿孔シ次テ復タ閉
 塞ス此ノ如クスルコト數回ニノ遂ニ久
 時ヲ經テ漸ク堅固ノ瘢痕ヲ形成スル
 ニ至ルコトアリ這般ノ症ヲ名テ**角膜瘻**
 Hornhautstiel ト云フ
 然レモ穿孔口殊ニ瞳孔縁ノ近傍ニ存
 スルキハ虹彩ハ屢々角膜創ト癒合シ次

テ前房ノ再生スルニ當リテ虹彩ノ癒着部ハ猶前方ニ牽引セラレ終ニ絲狀ニ延長セラレ〔前虹彩癒着 *Synechia anterior*〕（第三十圖）（甲）先天ノ生活中ニ於テモ亦タ同一ノ轉歸ヲ取り小兒ハ則チ角膜穿孔ノ續症ヲ以テ出生スルコトアリ若シ穿孔口大ナルキハ虹彩ノ一部脫出シテ創縁ト癒着シ次テ房水ノ再溜スルニ依リテ水泡狀ニ膨出セラル〔虹彩脫出 *Prolapsus iridis*〕（第三十圖）此際水晶体ハ前方ニ轉位ス而シテ卒然穿孔スルニ當リテハ「チン」氏帶斷裂シ或ハ水晶體破裂スルヲ得ル者ナリ虹彩脫出ハ其深暗色及ヒ其周圍ノ角膜白灰色ニ溷濁スルヲ以テ了知セシム既ニ虹彩ハ外部ノ刺戟ニ依リテ發炎シ荒蕪ノ肉芽ヲ以テ包被セラレ或ハ化膿性毛様体脈絡膜炎ノ發生點トナルコトアリ或ハ肉芽性ノ虹彩組織ハ永久性癥痕組織ニ變シ所謂局部葡萄腫 *Staphylooma parziale* （第三十圖）（乙）チ形成スルコトアリ

若シ全角膜潰瘍狀トナリ咳嗽嘔吐等ノ如キ卒然強劇ノ運動ヲナスキハ乍チ過大ノ穿孔ヲ來シ直ニ水晶体及ヒ硝子体ノ一部脫出シ而シテ眼球ノ殘物ハ萎縮變小スルコトアリ又他症ニ在リテハ瞳孔既ニ穿孔前ニ新生組織ニ依リテ閉鎖セラレ全虹彩ハ穿孔口ニ接着シテ其后方ニ蓄積スル房水虹彩ヨリ多量ニ

第三十圖



分泌セラレニ依テ膨突セラレ遂ニ其元組織ヲ失フテ癥痕組織ニ變生シ而シテ全葡萄腫 *Staphylooma totale* （第三十圖）（丙）チ形成ス這般ノ全葡萄腫

ニハ屢中心ニ於テ或ハ瞳孔部ヨリシ或ハ又他部ヨリシテ葡萄腫壁ト水晶体トノ間ニ癒着チ呈シ其壁ヲ牽引スルカ爲メニ葡萄腫ハ凹凸不平ノ看ヲ呈スルコトアリ然ルキハ其一二ノ部ハ青色半透明又他部ハ「睫様白色」ニ絞斷セラレ此種ノ葡萄腫ハ其形狀覆盆子ニ類似スルヲ以テ名ケテ覆盆子狀葡萄腫 *Staphylooma racemosum* （第三十圖）（丙）

治法初期ニ於テハ「アトロピン」ヲ點入シ微温罨法ヲ防腐性壓抵帶ト交番ニ施用シ兼テ昇汞水、水一〇〇、一〇〇〇、格魯兒水、硫酸規尼涅水、硼酸溶液等ヲ數回點入シ且ツ安臥ヲ命ス可シ消炎法ハ病機ノ經過ニ對シテ却テ効ナシ劇痛アルキハ顛顛部ノ皮下ニ「モルヒチ」ヲ注入シ且ツ麻醉藥ヲ與ヘテ安眠セシムルヲ要ス病機若シ結膜病及ヒ淚囊病ト關係アルキハ先ツ主トノ之カ治法ヲ施サ、

ル可カラス爾他猶多クノ特別治法モ亦タ適示セラル
 角膜潰瘍若シ深部ニ進ミ兼テ表面ニ蔓延スルキハ先ツ主トノ硫酸「エゼリン」
 ノ溶液ヲ一日二回乃至三回點入シ以テ眼ノ内壓ヲ減少スルヲ勉ム可シ此時
 ニ當リテハ「アトロピン」ノ點眼ヲ禁止ス然レモ温罨法ハ依然持續ス可シ前房蓄
 膿ノ存スルキハ先ツ之ヲ排出セサル可カラス而シテ最モ便ナルハ或ハ角膜ヲ
 穿孔スルカ或ハ「ゼーミッシュ」氏法ノ如ク角膜潰瘍ヲ其全形ニ於テ切開スルニ
 在リ但シ其切開ノ兩端ハ健康ノ組織中ニ進入スルヲ要ス然レ前房蓄膿再發
 スルキハ每常細小ノ消息子ヲ以テ創口ヲ開哆セサル可カラス角膜ノ全層ヲ
 可及的速カニ切開スルノ法ハ角膜膿瘍ニモ亦稱用スル所ナリ潰瘍尙ホ進行
 スルキハ白色ニ熱スル斜視眼鉤或ハ電氣燒灼器ヲ以テ之ヲ燒灼スルヲ稱用
 セリ「ガトー」氏 又眼球結膜ノ一片ヲ切除シ防腐液ヲ以テ潰瘍面ヲ洗淨スル
 ノ後チ此一片ヲ其面ニ接スルヲアリ「グエン」
 潰瘍底既ニ穿孔セントスルキハ直ニ潰瘍底若クハ角膜縁ニ於テ角膜穿孔
 術ヲ施シ以テ預カシメ自然ノ破開ニ依リテ過大ノ穿孔ヲ生シ前虹彩癒着若
 クハ虹彩脫出ヲ續發スルヲ防禦ス可シ術式ハ先ツ眼球固定鑷子ヲ以テ眼球

ヲ固定シ角膜穿孔針ヲ以テ穿孔術ヲ施シ而シテ創口ヨリ徐々ニ房水ヲ排出セ
 シム次テ暫時ニ房水再溜スルキハ小匙ヲ以テ創口ヲ開哆シ尙一二回房水
 ヲ排出セシムルヲ得可シ后療法ハ特發ノ穿孔若クハ角膜癭ノ如ク安臥ヲ命
 シ「エゼリン」ヲ點眼シ及ヒ壓抵帶ヲ施スニ在リ
 虹彩脫出ニハ先ツ壓抵帶及ヒ「エゼリン」點眼ヲ以テ之カ復位ヲ試ム可シ然
 シテ若シ効ナキキハ「シューベル」氏缺ヲ以テ之ヲ其基底ヨリ切除シ后チ再ヒ壓
 抵帶ヲ施ス可シ后療法トシ「エゼリン」ヲ點眼ス

壓抵帶ヲ施スニハ長サ四「メーテル」幅二乃至三「センチ」チ「メーテル」ノ柔軟ナル「フ」ラ子
 ル「綿帶」或ハ「リント」ノ小片及ヒ撒里智兒綿ヲ要ス而シテ之ヲ施スニハ先ツ患者ヲシテ
 輕ク眼ヲ閉鎖セシメ其上ニ乾キタル「硼酸」リントヲ置キ撒里智兒綿ヲ以テ眼窩ヲ充
 タシ掌面ヲ以テ適宜ニ之ヲ壓迫スルモ眼球ノ凸形ヲ觸知スル能ハサルニ至リテ止
 ム若シ又温温ヲ要スルキハ此綿球ヲ浸濕シ護紙ヲ以テ之ヲ包被ス可シ是ニ於テ
 先ツ該側ノ耳下ニ於テ綿帶ヲ初メ眼上ヲ越ヘテ對側ニ進メ后頭及ヒ前額ヲ廻轉ス
 此ノ如クノ遂ニ眼上及ヒ頭圍ニ四箇ノ廻轉ヲナシ全綿球ノ一樣ニ包被セラレ且ツ
 一樣ニ眼ヲ壓迫スルニ注意ス可シ第二ノ眼上ニ上昇スル帶ハ稍々固キヲ要ス何シ
 トナレハ綿帶之レニ依リテ堅固ナルヲ得レハナリ適宜ノ部位ニ於テ帽針ヲ以テ縫
 着ス可シ綿帶ヲ正シク施スニハ注意習熟ノ二者最モ切要ナリ是ニ依リテ甚々壓迫
 ニ過キス而シテ又充分堅固ニシテ特ニ眼ニ向フテ一樣ニ壓迫スルヲ得レハナリ
 潰瘍既ニ再生期ニ至ラハ前條陳述スル所ノ刺戟藥ヲ使用シ以テ其再生ヲ促

ス可シ且ツ此時ニ當リ再ヒ「アトロピン」ヲ使用シ以テ瞳孔ニ生スル變化ヲ回復ス可シ

〔四〕**角膜翳** Hornhauttrübungen 角膜ノ潰瘍若クハ滲潤ノ後ニ再生スル新組織ニ

メ更ニ變質スルノ活機ナキキハ則チ角膜翳ヲ形成ス而シテ其質ノ厚薄及ヒ其色ノ濃淡ニ從フテ各異ノ名稱アリ即チ非薄雲樣ノ滲潤之ヲ**薄翳** Nubeculaト

云ヒ灰白半透明ノ者之ヲ**斑翳** Maculaト云ヒ又チ不透明ニシテ睫樣白色ノ者之ヲ**白斑** Leucomaト云フ又其大サハ必スシモ原病ノ居所ト同一ナラスノ或ハ

之レヨリ小ナルコトアリ或ハ組織ノ新生夥多ニシテ丘狀突出物ヲ形成スルコトアリ角膜翳ハ判然限局シ且ツ刺戟症狀全ク缺損スルヲ以テ滲潤ト診別スルヲ得ヘキナリ若シ先キニ角膜穿孔シ虹彩ノ瞳孔縁前癒着ヲ以テ癒痕ニ癒合ス

ルキハ之ヲ**癒着性白斑** Leucoma adhaerensト云フ若シ虹彩脫出シ其面ノ一部ヲ以テ白斑ニ癒合スルキハ此翳ハ其中心ニ於テ大小各異ノ色素ヲ含有ス此ノ如ク白色ノ滲潤ヨリ周擁セラル、角膜ノ暗色斑點ヲ舊時ハ名ケテ爪 *Clavus* 又**蚊頭** Myelokephalonト云フ

又特種ノ角膜翳ハ中等ニ開眼スルニ當リテ常ニ露出スル所ノ部位ニ相當シ

地平ノ向キニ於テ**帶狀**ニ角膜面ニ横走スル者是レナリ此症ハ慢性虹彩脈絡膜炎稀レニ強度ノ近視ニ合併シ或ハ特發スルコトアリ然ルキハ屢、緑内障性障害ノ續發症タリ「ボツ」氏ハ如斯キ翳ニ於テ細小ノ石灰粒列ヲ爲シテ「ボーマン」氏膜中其上皮ノ基礎細胞ト其結質トノ間ニ嵌入シ有ルヲ發見セリ

角膜翳ノ誘起スル視力損害ハ其大サ位置(瞳孔ニ關シ)及ヒ厚サニ關ス大ニメ且ツ稠厚ナル滲潤瞳孔領外ニ在ルキハ視力ヲ損害スルコトナシ又全ク不透明ニシテ限局セル混濁ハ假令ヒ瞳孔領ニ在ルモ只之ヲ狹小ニスルノミニシテ同シク視力ヲ損害スルコトナシ之レニ反シテ瞳孔領ノ一部若クハ全部ヲ蓋ヒ非薄ニシテ而カモ蔓延セル滲潤ハ光線ヲ分散スルニ依リテ甚クシキ障害ヲ來ス者ナリ

廣大ノ白斑ハ多クハ又角膜穹窿ノ不正ヲ合併ス然ルキハ角膜單一ノ燒距ヲ有セスノ各部ノ穹窿ニ从フテ數多ノ燒距ヲ有シ爲メニ網膜像ノ不明ヲ來ス此**不正ノ角膜穹窿** (即チ不正亂視上)ハ角膜反射像ノ不正及ヒ檢眼鏡上網膜像ノ變化等ヲ以テ了知スルヲ得可キナリ

其他癒着性白斑ハ眼球内病ノ誘因トナル

治法元來角膜翳ハ既ニ過去ニ屬スル症ナルヲ以テ之ヲ透明ニ復スル爲メニ
 使用スル局所ノ刺戟藥ハ其効甚ク顯著ナラス例之甘汞、黃降汞軟膏、テレベシ
 油ト草麻子油各々「ヒオス」油等ナリ殊ニ「パーゲンス」ステール氏ハ之ニ**眼球按**
摩法 マッサージ Massage ナ併用スルヲ稱賛セリ又「ロートムンド」氏ハ微温ノ食鹽水三〇ト
 比例ノヲ眼球結膜下ニ注入シ「ハンス、アドレル」氏ハ電氣分解法ヲ施シテ奏効
 ナ得シト云フ**狹孔眼鏡**ハ視力ヲ善良ニスルモ只讀書ニ使用スルヲ得ル
 ノミ狹孔眼鏡トハ不透明ノ板ニシテ又凹面眼鏡ハ調節機ヲ興奮スルヲ以テ瞳
 孔ヲ縮小シ狹孔眼鏡ト同一ノ作用ヲナス若シ溷濁瞳孔領ヲ蓋ヒ而シテ其全周
 圍部若クハ其大部分透明ニ存スルキハ其最モ透明ノ部ニ於テ可及的狹小ノ
虹彩切除法 ナ施ス可シ然レモ之ヲ施スニ先リ充分「アトロピン」ヲ點入シ
 以テ精細ニ檢スルヲ要ス然レモ若シ視力ヲ善良ニスルヲ能ハサルキハ聊カ醜
 形ヲ補フカ爲メニ宜シク**入墨法** インキ法 «Pavirung» ナ施ス可シ此入墨法ハ又角膜瞳
 孔領ノ一部ニ屬スル蔓延性ノ翳ニモ亦施ス者ニシテ之ヲ以テ其翳ヲ不透明
 トナシ光線ノ分散ヲ防クヲ得ヘシ「ウエッケ」氏 黒ヲ繙スルニハ細キ筒針ヲ以テ數
 回ニ施行ス手術後間々劇烈ノ炎症、虹彩毛樣体炎、交感性炎若クハ全眼球炎等

角膜葡萄腫

ヲ發セシマアリ又全白斑ニハ動物ノ角膜「ピツパル」氏 或ハ人体ノ角膜「ボーウ
 ナ移植スルヲ稱用セリ然レモ決ノ永久ノ奏効ヲ確定セス

五角膜葡萄腫

Saphyroma corneae

間々角膜ハ

特發性ニ膨脹シ此際全ク

透明ニ存スルヲアリ而シテ此膨脹ハ主トシテ角膜ノ中心ヲ侵シ角膜之レカ爲メ

ニ圓錐狀ヲナス此症ヲ名テ **圓錐角膜** コニカ cornea conica, s. Keratoconus ト云フ是レ
 畢竟中心ノ漸々非薄トナルニ原スル者ニシテ分ニ減スルヲアリハ四該部ハ遂
 ニ通常ノ眼球内壓ニ堪フルヲ能ハスノ漸々膨脹スル者ナリ

此膨脹ハ多クハ十五年ヨリ二十五年ニ至ル年齢ノ間ニ形成スル者ニシテ通常
 前後ニ兩眼ヲ侵ス然レモ多クハ各異ノ度ニ於テ又各期ニ於テ停止シ后再ヒ
 進行スルヲ得ル者ナリ末期ニ至レハ膨出部ノ尖頂灰白色ノ溷濁ヲ呈ス又非
 薄ノ角膜破裂スルハ絶ヘテ之レナシ**視力ノ障害**ハ一ハ角膜中心前進シ且
 ツ其穹窿增多スルニ近視即チ 因リ一ハ其穹窿不正ナルニ原ス即チ 近視ニ於テハ
 患者猶大ナル活字ヲ讀得ルモ遠所ニ於テハ其視力甚ク減少ス凹面ヒペ
 ルボロイト眼鏡ニテハ視力只纔ニ佳良トナルノミ「レール」氏
穹窿ヲ減少スル爲メニ圓錐ノ尖頂ヨリ組織ノ一片ヲ割去シ弱硝酸銀桿

チ以テ毎二日乃至三日ニ之ヲ腐蝕ス「フオノン、グ」レ、フエ、氏 后其癥痕収縮ノ爲メニ角膜ノ扁平ヲ來ス然レモ視力善長トナルマテハ常ニ二月乃至三月ヲ要スル者ナリ容易ニ角膜ヲ割去スル爲メニ「ボーム、ン」氏ハ直徑四分ノ一乃至二「リ、コ、ー」ノ有刃ノ圓柱所謂眼圓鋸ヲ稱用セリ是レ創ノ深淺ニ从フテ隨意ニ裝置ヲ以テ固定スルヲ得ル者ナリ「ア、ウ、エ、ベル」氏ハ「エ、セ、リ、ン」點眼ニ依リテ長効ヲ得シト云フ

角膜葡萄腫トハ角膜ノ一部若クハ全部擴張性癥痕組織ニ變化スル虹彩ニ依リテ充實セラル、ノ症ヲ云フ故ニ局部及ヒ全葡萄腫ノ二種ヲ區別ス局部葡萄腫ハ屢再發性ニ發炎シ且破裂スルアリ或ハ又綠内障性眼内壓ノ亢進ヲ來ス「ア、リ」是レ特ニ水晶体遺殘脫位シテ異物ノ如ク作用シ以テ炎性ノ分泌ヲ誘起スルキニ然リトナス此時ニ當リテハ虹彩切除法又時宜ニ依リテハ水晶体摘去法若クハ切除法等ヲ要スル「ア、リ」

全葡萄腫ノ切除法若クハ眼球摘出法ノ適症ハ一ハ其増大ニ依リテ眼瞼ノ閉鎖ヲ妨ケ一ハ炎ノ持續ニ依リテ他眼ノ交感病ヲ誘起スルノ恐アルキニ於テス

角膜ノ腫瘍

葡萄腫ヲ切除スルニハ先ツ内障眼刀ヲ送入シテ其半部ヲ切離シ次テ鑷子ヲ以テ鑷子ヲ箱挿シ剪刀ヲ以テ之ヲ切除ス而シテ若シ水晶体ノ存フルキハ之ヲ除去シ二三日間両眼ニ壓迫繃帶ヲ施シ以テ之ヲ擁護ス「ハ、イ、ル、ト、ク、リ、チ、エ、ット」氏ハ葡萄腫ノ切除前ニ其根底ニ絲ヲ貫穿シ后直ニ之ヲ縫合ス然レモ此方法ハ毛様体ヲ損傷スルヲ以テ危險ナキニ非ス「ク、ナ、ツ、プ」氏ハ葡萄腫ノ上下ニ於テ結膜ニ縫合ヲ施ス「フ、オ、ン、ウ、エ、ツ、ケ、ル」氏ハ初メ結膜ヲ鞏膜ヨリ廣ク輪狀ニ剝離シ葡萄腫ヲ切除スルノ后所謂囊狀縫合ヲ施シ以テ其創口ヲ縫合ス

〔六〕角膜ノ腫瘍 角膜ニ發生スル腫瘍ハ先天性皮膚樣囊腫其他上皮癌色素瘤含色素性肉腫等ナリ這般ノ腫瘍ハ固有ノ角膜組織ヨリ發生セスノ角膜ノ粘膜炎ノ縁部ヨリ根基シ或ハ稀レニ結膜組織ヨリ角膜ニ延長ス「ゼ、イ、ミ、ツ」

治法 ハ可及的早ク切除スルニ在リ

第八章

虹彩 Iris

〔解剖要領〕虹彩ハ中膜又葡萄膜或ハ脈ノ前部ニシテ毛様体ニ依リテ脈絡膜ト連接ス是レ即チ毛様体及ヒ毛様筋被覆物ノ延長スル者ニシテ鞏膜溝ニ對向シ此部ニ於テ角膜ノ末端ヨリ虹彩ノ基底ニ緊張シ網狀組織ヨリ構成セラレタル鞏膜帶狀ニ依リテ固定セラレ眼軸ト角度ヲ形成シ而シテ中央ニ少ク偏位ス一孔瞳ヲ呈ス其前面ハ上皮ヲ以テ包被セラル是レ「デ、セ、メ、ット」氏膜内皮ノ延長物ナリ又其後面ニハ色素層アリ是

六角形細胞層ノ延長スル者ニ細胞ノ成形原ハ色素ヲ以テ充實セラルル而シテ此層ハ瞳孔線ヲ包ミ毛様線ヲ越ヘテ毛様体ノ色素層ト連接ス又前上皮層ノ後方ニ網狀層アリ吻合シタル細胞ヨリ成リテ淋巴細胞ヲ含メリ虹彩ノ組織ハ筋脈管及ヒ神經ヨリ構成セラレト者ニシテ此三者ハ結締組織維及ヒ色素細胞ヨリ構成セラレタル元組織中ニ埋没セリ虹彩括約筋ハ其環狀組織ヲ以テ瞳孔領ニ在リ又虹彩散大筋ハ放線狀ニ瞳孔線ヨリ毛様線ニ行走ス但シ此筋ハ括約筋及ヒ其後面ニ於テ集積シ弓狀ニ組成セラレタル筋束ヨリ發生ス然レドモ此組織ハ毛様線ニ於テ再ヒ弓狀ニ屈曲シ輪狀ノ筋叢ヲ形成ス虹彩ノ血管ハ虹彩大動脈環ヨリ發生ス而シテ此動脈管ハ二箇ノ長毛様動脈及ヒ短后毛様動脈ノ分枝ヨリ形成セラルル是レ殊ニ稠厚ノ脈壁及ヒ強大ノ外壁ヲ有シ虹彩前面ニ接近シ放線狀ニ瞳孔線ニ向フテ走行シ二三ノ分枝ヲ以テ小虹彩動脈環ヲ形成ス多數ノ動脈枝ハ瞳孔線ニ於テ係蹄狀ニ屈曲シ靜脈管ノ端緒トナル靜脈ハ虹彩ノ後面ニ接近シ走り夥多ノ網叢ヲ形成シ周圍ニ至テ毛様突起ノ靜脈ト吻合シ終ニ盤渦狀靜脈ニ還流ス虹彩ノ神經ハ毛様神經ノ分枝ニシテ虹彩ノ周圍部ニ於テ樹枝狀ニ分歧シ且ツ弓狀ヲナシ次テ網叢ヲ形成シ其纖維ヲ互ニ交換ス此神經網ヨリ半透明ノ交感神經纖維發生シ虹彩散大筋ニ行キ有髓知覺神經纖維ハ虹彩ノ前面ニ於テ稠厚ノ網狀ヲナシ而シテ運動神經ハ虹彩括約筋ニ網狀ニ分佈セリ「メルケル」氏「イソノツ」氏

先天異常

(一)先天異常 間々先天性ニ虹彩全ク缺亡スルコトアリ之ヲ虹彩缺亡 Iridar-entia ト云ヒ或ハ先天性ニ虹彩ノ破裂スルコトアリ之ヲ虹彩缺損 Coloboma Iridis ト云フ是レ常ニ下方ニ來ル者ニシテ或ハ偏側ハ左側ナリ或ハ兩側ニ來ル而シテ此等ノ症ハ屢ニ脈絡膜缺損ト合併シ來ルモ多クハ視力ヲ損害スルコトナシ其

瞳孔散大及ヒ縮小

他瞳孔先天性ニ轉位スルコトアリ之ヲ瞳孔轉位 Corectopia ト云フ
 瞳孔遺殘膜 Membrana pupillaris perseverans ハ胎生ノ瞳孔膜ノ殘物ニシテ瞳孔ニ於テ細網狀ノ纖維ヲ形成スル者ナリ此膜ハ小虹彩動脈環ヨリ首起シテ或ハ水晶囊面ニ終リ或ハ之ヲ越ヘテ再ヒ瞳孔ノ他側ニ存スル小虹彩動脈環ニ達ス然レドモ瞳孔ハ之レカ爲メニ其運動ヲ制限セラル、ナシ

(二)瞳孔散大 Mydriasis 及ヒ瞳孔縮小 Miosis 異常ノ瞳孔散大ハ動眼神經ノ麻痺、實扶的里質斯ノ后、眼球ノ打撲后、脈絡膜ノ牽制其他偏側ニハ精神病ノ前徵トナリ又人工的ニハ「アトロピン」「ホムアトロピン」「ヂュボアソン」及ヒ「ヒュチナスチエ」アミン「コカイン」ノ點入ニ依リテ來ル又異常ノ瞳孔縮小ハ脊髓病ニ來ルコトアリ又タ人工的ニハ「エゼリン」「ピロカルピン」及ヒ「ムスカリン」溶液ノ點入ニ依リテ發起スルヲ得

虹彩充血

(三)虹彩充血 Hyperaemia der Iris 是レ總テ眼球前半部ノ劇性炎症及ヒ刺戟ニ依リテ發シ或ハ虹彩炎ノ前驅症タルコトアリ其症候ハ虹彩ノ變色、運動ノ遲滯、瞳孔縮小及ヒ角膜周擁充血等ナリ又結膜、眼瞼及ヒ眼窩等ノ劇性炎症其他斜視手術ニ因スル刺戟機ハ同シシ虹彩ノ充血及ヒ運動遲滯ヲ併發スル者ナリ

切創、裂創ノ類及ヒ根起部ヨリノ斷裂即チ虹彩等ニ依リテ發スル虹彩ノ外傷ハ通常全ク發炎セサルアリ或ハ只僅カニ之ヲ發スルアリ然レモ再ヒ癒合スルハ甚ク稀ナリ蓋シ組織ノ弾力性アルガ爲メニ多クハ分離シ存スル者ナリ

虹彩炎

〔四〕虹彩炎 イリチス 虹彩ノ發炎ハ特發ニ證ス可キ原因ナクノ最モ多ク二十年及ヒ四十五年ノ間ニ發シ通常感冒及ヒ癩麻質斯ヲ以テ之カ原因ト看做ス又一定ノ惡液質即チ腺病及ヒ蜜尿病ヨリ發生ス第二期稀レニ第三期梅毒ニ於テ皮膚及ヒ粘膜炎ト共ニ特異性ノ虹彩炎ヲ發ス癩病ニ於テ稀ニ癩毒性癩麻質斯ト同時ニ虹彩炎ヲ起スコアリ其他虹彩面ニ附着シ或ハ其實質中ニ竄入スル異物ハ虹彩炎ヲ特發ス又近隣ノ劇性發炎即チ角膜炎、鞏膜炎、毛様体炎、脈絡膜炎、網膜炎、網膜剝離及ヒ白內障手術後ノ水晶体ノ膨脹等ハ皆能ク虹彩炎ヲ續發スル者ナリ

〔病理解剖〕虹彩炎ニ於テハ初期ニ在テ其組織血管ノ充血、圓形細胞ノ滲潤及ヒ滲出物ノ浸出等ニ依リ腫起スルヲ見ル此滲出物ハ或ハ成形性ニシテ〔成形性虹彩炎〕主ニ虹彩ノ前後兩面及ヒ瞳孔領ニ積集ス或ハ漿液性〔漿液性虹彩炎〕ニシテ

〔彩炎〕ニノ前房ニ游出シ且角膜ノ后面ニ沈着ス又或ハ化膿性〔化膿性虹彩炎〕ニノ虹彩ノ組織内ニ浸淫シ且ツ前房蓄膿ヲ形成ス

成形性虹彩炎ニ在テハ屢々虹彩ニ麻實大ノ小水泡ヲ生シテ忽チ破開消散ス或ハ膠様灰白ノ大塊前房ノ大部ニ生シテ脫位溷濁セル水晶体ト誤認スルコアリ此塊ハ二三日ニシテ消散スルヲ常トス若シ成形性ノ滲出物虹彩縁ニ生スレハ之ヲ水晶体前囊ト癒着セシメ〔後癒着〕若シ虹彩ノ后方ニ浸出スルキハ其面水晶体ト癒着ス而シテ后癒着ヲ起セル虹彩炎持續スルキハ虹彩組織ノ纖維性變質、動脈ノ壓迫、硝子様變性、血管内ノ色素形成及ヒ組織内ノ脂肪集積ヲ來シ遂ニ虹彩漸々萎縮シ兼テ色素層増息ノ間々索狀ニ新生組織中ニ牽引セラル、コアリ血管ハ上皮ノ増殖ニ由テ其口腔狹窄シ屢々全ク不通トナリテ硬索ニ變シ其中心ニ色素塊ヲ呈スルコアリ

成形性虹彩炎

〔甲〕成形性虹彩炎 イリチス 成形性虹彩炎ノ症候ハ上眼瞼縁ノ浮腫狀腫起、角膜ヲ周擁スル深在ノ結膜充血、虹彩ノ不明及ヒ變色、瞳孔ノ縮小及ヒ其運動ノ減少若クハ廢絶等ナリ上眼瞼縁ノ浮腫狀腫起ハ多少急性ノ虹彩炎ニハ必發スル者ニシテ特ニ白內障手術後ニ於テ虹彩炎ノ發生ヲ診定ス

ルニ切要ノ症候ナリ結膜ノ充血ハ初期ニハ微少ニシテ動モスレハ看過シ
 易シ而シテ只視力纒ニ不良ナルヲ以テ疾患アルヲ認知セシム然レモ纒時ニ
 著明トナリ暗褐赤色ニ變シ全眼球結膜ニ蔓延シ加之尙表在ノ結膜血管ヲ侵
 ス甚クシキニ至リテハ結膜浮腫ヲ呈スルヲアリ此時ニ當リ眼ハ甚クシク光
 線ニ向フテ過敏トナリ且ツ甚クシキ涙漏ヲ發ス而シテ同時ニ發スル者ハ
劇痛ノ發作是レナリ是レ通常眼ニ限局セスノ上方ハ前頭ニ又下方ニ向テ
 放散スル者ナリ抑モ眼球ハ只直達ノ壓迫ニテ發痛スルモ患側ノ前頭及ヒ顳
 顳部ノ疼痛ハ却テ強劇ニシテ患者ハ之ヲ以テ主病トナシ眼病ハ只其附加病ナ
 リト誤認スルヲアリ此疼痛ハ夜間増劇シ日中ニ至リテ鎮靜ス炎ノ強劇ト同
 比例ニ霧狀ノ角膜溷濁ヲ呈ス而シテ斜照法ヲ以テ之ヲ檢スルキハ小點狀ノ不
 平面散在シ且ツ屢線狀ノ溷濁ヲ以テ填充セラル、ヲ見ル
 虹彩組織形態ノ不明ハ虹彩ノ充血及ヒ滲潤ニ原因スル者ニシテ虹彩ノ變色
 ナ併起ス此變色ハ原色ニ從テ一様ナラス青色ノ虹彩ハ綠色トナリ鮮綠色ノ
 者ハ溷濁シ褐色ノ者ハ帶赤褐色トナルト同一ノ虹彩ノ變色ハ亦結膜下出
 血ニ於テ見ル所ナリ但シ變色ハ先ツ小虹彩動脈環ヨリ初マリ次テ大虹彩動

脈環ニ及ホス

往々血斑様ヲ成ス所ノ稠密ナル血管充血ヲ認メ或ハ又屢強大ノ虹彩血管甚
 クシク注血スルヲアリ其他血管破裂ニ依リテ大出血斑ヲ呈シ或ハ前房内ニ
 溢血スルヲアリ

虹彩ノ運動限制ハ一ハ虹彩組織ノ滲潤ニ原由スト雖モ主トシテ其瞳孔縁前
 水晶囊ト癒着スルニ在リ之ヲ**后虹彩癒着症** *Synechia posterior* ト云フ而シテ此

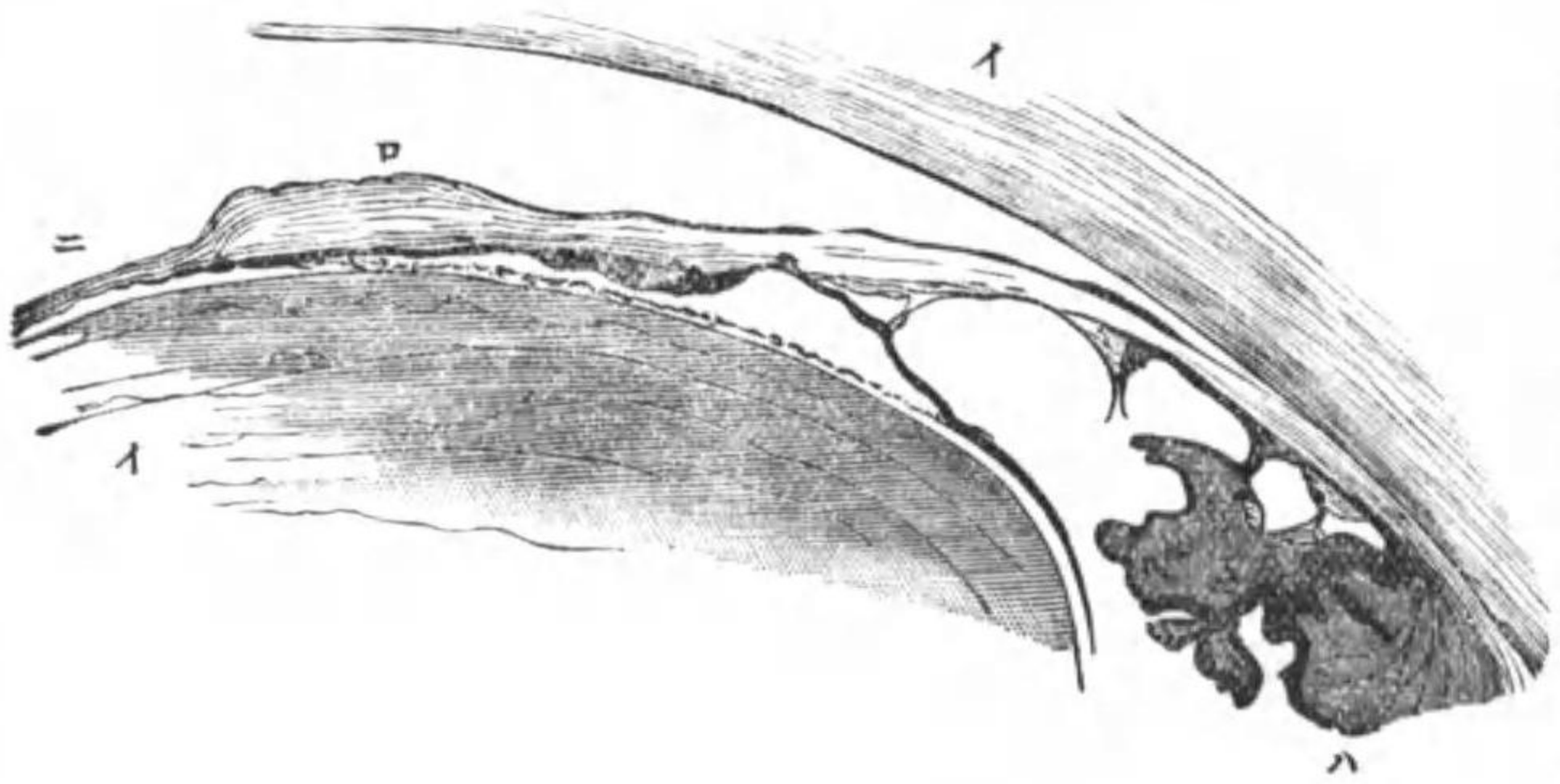
癒着ハ虹彩炎ニ在リテハ既ニ甚ク速カニ形成スル者コト「アトロピン」ヲ點入
 シ瞳孔ヲ散大セシムルニ依リテ尤モ著明トナル即チ癒着部ハ散大セズ瞳孔
 縁之レカ爲メニ圓ヲナスノ不正トナリ稍々花形ヲナス癒着ハ屢細小ニ斜
 照法ニ依テ漸ク之ヲ認知スルヲ得ルヲアリ而シテ其纖維ハ多クハ色素ヲ含有
 シ暗色ヲ呈スルヲ以テ黒色ノ眼底ト只纒ニ異ナルノミ然レモ亦屢廣幅ナル
 ヲアリ然ルキハ通常中心ニ向フテ尙色素ニ乏シキ灰白色ノ一帯ヲ有ス其他
 全瞳孔領ハ前房水ノ沈澱物ニ依リ溷濁シテ見ユ

〔經過〕單純ノ虹彩炎ハ適當ノ治法ヲ施スニ當リ四週乃至六週間ヲ持長シテ
 通常治癒ニ趣ク者ナリ新鮮ノ癒着ハ此際剝離シ而シテ其固着セシ水晶囊ノ部

位ニ於テハ通常暗色ノ色素斑ヲ遺殘ス陳舊ノ癒着ハ之ニ反シテ剝離セズ而
 ノ幸ニ延長スルヲ得ルモ癒着ハ依然トシテ存シ新ニ發スル虹彩炎ノ癒着ナ
 ルヤ將タ舊來ノ殘物ナルヤ判然區別スルヲ能ハザルヲ屢之レアリ
 然レモ虹彩炎ハ屢再發スルノ恐レアリ〔再發性虹彩炎〕是レ或ハ初病ノ際
 遺殘スル處ノ癒着絶ヘス牽引シテ以テ之ヲ誘發スルカ或ハ又全ク癒着ナク
 シテ發スルヲアリ然ルモ再發ノ發病毎ニ適當ノ治法ヲ施新癒着ヲ遺殘シ
 年月ヲ經ルノ后遂ニ全瞳孔縁前水晶囊ト癒着スルヲアリ〔輪狀癒着〕又水
 晶囊前面ニ滲出物集積シ永久消失セス而シテ瞳孔縁之カ爲メニ一様灰白色ノ
 膜ヲ以テ被覆セラレ之ニ虹彩ノ瞳孔縁輪狀ニ固着ス〔瞳孔閉鎖〕第三十二圖
ル氏
ル氏此時ニ在テハ虹彩〔ロ〕ハ殊ニ其瞳孔縁ニ於テ著シク肥厚シ之ヨリ薄膜
 〔ニ〕全瞳孔縁ニ蔓延シ其綠此膜共ニ水晶囊ニ固着ス爾他ノ虹彩部ハ色素ヲ有
 スル薄索ニ由テ薄キ色素ヲ被フル水晶囊ト結合ス〔イ〕ハ水晶體〔ハ〕ハ毛様體〔イ〕
 角膜其他瞳孔甚タシク縮小シテ其綠ヲ以テ互ニ觸合スルヲアリ〔瞳孔癒合〕
 此等ノ症ニ在リテハ甚タ失明ノ恐レアリ何ントナレハ前房及ヒ后房ノ通路
 全ク退絶セルヲ以テ房水及ヒ滲出物ノ混合液水晶囊ト虹彩后面トノ間ニ鬱

梅毒性虹彩炎

第三十二圖



境界層中ニ血管ニ伴フテ中等ノ圓形細胞浸潤ヲ生シ兼テ限畫性ノ細胞集積
 小結節狀ヲ爲シ好シテ虹彩根ニ生スルヲ發見セリ第三十三圖〔ロ〕ハ角膜〔ハ〕ハ虹彩
〔ホ〕ハ鞏膜〔ニ〕ハ毛様體〔イ〕ハ梅毒

滯シ虹彩ノ周圍之カ爲メニ不正ニ前方ニ膨
 突セラレ而シテ瞳孔縁ハ却テ陷凹ヲ呈ス茲ニ
 於テカ急性強劇ノ炎ヲ發シ通常脈絡膜モ亦
 タ共ニ疾患ヲ受ク〔虹彩脈絡膜炎〕下條ニ
詳ナリ

乙 梅毒性虹彩炎 *Iritis syphilitica* 全身梅毒

ニ續發スル虹彩炎ノ主徵ハ特ニ大ナル成形
 ナ呈スルニ在リ是レ廣幅ノ癒着水晶及ヒ瞳
 孔縁ノ滲出物形成等ニ依リテ徵知セシム是
 故ニ先キニ陳述セル固有ノ水泡疹形成及ヒ
 前房内ニ過多ノ滲出物集積スル等ハ屢々本
 患ノ梅毒性未タ判然診定スルヲ能ハサルモ
 ニ於テ注目スル所ナリ之ニ反シテ前房蓄膿
 ハ甚タ稀有ナリ〔フッホス〕氏ハ虹彩組織殊ニ前

〔丁〕化膿性虹彩炎

Iritis suppurativa

此症ハ前房内異物竄入、角膜損傷兼虹彩脱出、白内障手術等ニ依リテ特發シ化膿性角膜炎及ヒ脈絡膜炎ニ續發ス其主徵ハ虹彩組織、瞳孔領及ヒ前房内初房ニ膿性ノ滲潤ヲ生スルニ在リ此他尙一般虹彩炎ニ來ル徵候ハ皆ナ強劇ニ發ス前房蓄膿ハ其膿稀薄ナルキハ其面水平ニシテ稠厚ナルキハ不正ナリトス

〔治法〕初期ニ於テハ暗室ニ居ラシメ少ク昇騰セル不變ノ温度ニ注意シ「アトロピン」ヲ點眼ス療法ノ初メニ當リテハ每五分時ニ百倍ノ硫酸「アトロピン」溶液ヲ眼内ニ點入シテ瞳孔ノ散大スルマテ持長シ以テ可及的之ヲ散大セシムヘシ其後ニ至リテハ只此散大ヲ維持スルニ要スルヲ度トナシテ點眼ス又總テ近隣部ノ炎症ニ於テ虹彩之ニ與リ其運動緩慢ナルキハ同シク散大セシムルヲ要ス疼痛アルキハ微温罨法ヲ稱用セリ是レ殊ニ「アトロピン」ノ作用ヲ補助スル者ナリ「モルヒチ」ノ皮下注射ヲ顳額部ニ施スモ亦タ特效アリ又此部ニ於テ水蛭ヲ貼用シ或ハ之ヲ同側ノ鼻孔ニ貼スルモ屢効アリ之ニ反シテ寒罨法ハ總テ虹彩炎ニハ甚タ害アリ

内服ニハ殊ニ甘汞一日ノ量〇・一ヲ稱用セリ若シ其原因癩麻質斯性ニシテ慢性

ナル者ニハ特ニ撒里智兒酸曹達毎日二、〇ヲ内服セシム可シ漿液性虹彩炎ニハ「アトロピン」ノ點眼ハ眼内壓ヲ亢進スルヲ以テ極メテ注意ヲ要スルモ角膜穿孔術ハ數回反覆スルヲ稱用セリ又梅毒性虹彩炎ニハ速ニ水銀療法即チ水銀軟膏ノ塗擦法若クハ昇汞ノ皮下注射法一日ノ量〇・〇五ヲ施スヘシ化膿性虹彩炎ニ在リテモ亦同シク急速ニ水銀療法ヲ施シ兼テ温罨布ヲ貼用ス可シ

這般ノ治法ヲ施スキハ疼痛緩解シ炎勢消退シ先キニ形成セル癒着モ亦剝離スルヲ得可シ又彩虹炎ノ再發ハ常ニ同一ノ療法ヲ以テ之ヲ施治ス可シ

然リト雖凡既ニ數多ノ癒着ヲ形成シ加之癒着廣幅且ツ固着シテ「アトロピン」ヲ點入スルモ之ヲ剝離スルヲ能ハス爲メニ瞳孔縁ノ環狀癒着ヲ來スノ患目前ニ在ルカ若クハ既ニ此症ヲ發スルキハ今ハ則チ可及的廣幅ノ虹彩切除法ヲ施シ以テ前房ト後房トノ通路ヲ再成スルノ他亦法ナシ凡ソ此手術ハ視力ヲ善良ニスルヲ幾許ナルヤ或ハ只現在ノ視力ノミヲ保存シ且ツ之ヲ保全シ得ルヤノ問題ハ既ニ存スル所ノ眼内合併症ノ度ニ關係スル者ナリ

「マサラント」氏ハ虹彩剝離法 *Cordlyae* Plaque ナ以テ虹彩切除法ニ代用スルヲ稱用セリ術式ハ先ツ鋒形刀ヲ以テ前房ヲ穿開シ鈍鉤若クハ鑷子ヲ以テ癒着ヲ箝撮シ而シテ之ヲ剝離ス此法ハ更ニ危險ナキ者ニシ屢良効アルヲ枚舉セリ然レモ瞳孔縁ノ環狀癒

虹彩ノ新生物

着アル症ニハ適用スルコト能ハザル者ナリ
〔五〕虹彩ノ新生物 *Zenbildungen der Iris* 睫毛若シ角膜創口ヨリ前房内ニ竄入
スルキハ則チ腫瘍ノ形成チ虹彩ニ促スチ得可シ而シテ此腫瘍ハ囊腫ニ類似シ
白色圓形ニ中ニ脂肪及ヒコレステアリンチ混有スル糜粥様ノ物質チ含蓄
ス

虹彩ノ囊腫ハ多クハ只穿孔性角膜創ノ后ニ發生スル者ニ「ロートムン」
分中八三三 此際虹彩ノ損傷セラルト否ヤトニハ關セサル者ナリ又「ロート
ムンド」氏ニ从ヘハ尙真正漿液様膠様及ヒ皮膚様囊腫チ區別スルチ得可シ而
シテ其發生ノ原因ハ今尙不明ナリ最良ノ治法ハ小匙チ以テ全ク囊腫チ除去
スルニ在リ只單ニ囊腫チ穿刺スルノ后ニハ多クハ再發ノ患アルチ實驗セリ
其他稀レニ來ル虹彩ノ腫瘍ハ肉芽腫、含色素腫瘍、尿管腫及ヒ含色素肉瘤等ナ
リ虹彩ノ結核ハ局所病トシテ發シ全身ニ及サズノ再ヒ消失スルチ得ル者ナ
リ「ハ」氏而シテ其發スルヤ虹彩炎ノ症狀チ合併ス然レモ輕症ニ在リテハ其結節
以上漸々消失シテ治癒ニ趣クチ得可キモ重症ニ在リテハ引テ一年ニ至リ或
ハ慢性ノ虹彩毛様体炎チ併發シ眼球萎縮ニ轉歸スルコトアリ

虹彩切除法

〔六〕虹彩切除法

Iridectomy

虹彩切除法

人工瞳

ハ左ノ症ニ施行ス

- 〔一〕瞳孔領ニ存スル角膜翳 虹彩ノ一部チ切除シテ新ニ眼内ニ光線ノ通路
チ構成スルカ爲ナリ
- 〔二〕后癒着アル慢性虹彩炎、瞳孔縁ノ環狀癒着并ニ瞳孔閉鎖、虹彩炎性滲等ノ
諸症 是レ一ハ視學的ノ目的ヨリシ一ハ前房ト后房トノ通路チ再成スル
カ爲メナリ
- 〔三〕層白內障ニハ視學上ノ目的チ以テ行フ
- 〔四〕局部角膜葡萄腫

〔五〕緑内障 是レ眼球内壓チ減スル爲メニス

小歴史 人工ノ瞳孔形成法ハ一千七百二十八年ニ於テ「ヘーセルデン」氏始テ之チ
施行セリ然レモ其手術ハ只虹彩チ切開スルノミナリ〔虹彩切開法 *Iridotomy* 而シテ「ハ
ーセルデン」氏ハ針チ以テ鞏膜ヨリ施術シ「ホルマン」
角膜チ穿孔シテ之チ施セリ后チ「ギリ」氏ハ虹彩ニ十字形ノ切開チナシ「ヤ」氏ハ
「ル」氏ハ之チ切開スルニ剪刀チ使用セリ「ワ」氏ハ初メテ虹彩ノ一部チ切除ス
ルノ法チ施セリ其法ハ先ツ内障眼刀チ以テ角膜及ヒ虹彩チ同時ニ穿開シ次テ若
カク形成スル所ノ虹彩瓣チ切除スルナリ一千七百八十六年ニ於テ「アザリ」ニ
「ル」ツツ井「スカ」ルバ「シ」ミツト「ノ」諸氏ハ虹彩チ其附着部ヨリ離斷シ以テ人工ノ瞳孔
チ形成セリ〔虹彩離斷法 *Iridodialysis*〕一千八百十七年ニ於テ「ランゲン」マック「氏」始メテ
虹彩ノ一部チ角膜創ニ癒合セシムルノ方法チ公布セリ〔虹彩箝置法 *Iridenklasis*〕前

房内ニ於テスル固有ノ虹彩切除法ハ一千八百六六年「ペール」氏初メテ之ヲ施行シ且ツ之カ適症ヲ確定セリ「フオーン」「グレイ」氏ハ既ニ一千八百五十五年頃ヨリ該手術ヲ炎症ヲ鎮靜シ若クハ消除スルニ使用シ又一千八百五十七年ヨリ眼内壓ヲ減スルニ使用セリ

角膜翳ニ在リテハ角膜ノ最透明部ニ於テ其虹彩ヲ切除ス而シテ選擇自由ナルキハ内下方ニ於テ施スチ最モ佳トナス若シ其目的視學的ナラスノ消炎的ナルキハ上方ニ施スチ最良トス是レ手術ノ爲メニ生スル缺損上眼瞼ニテ掩蔽セラレ爲メニ眼内ニ射入スル光線ノ放散ニ依リテ網膜像ノ不明チ來サバ爾ヲ以テナリ然レモ瞳孔領若シ滲出物ニ依リテ閉鎖セラル、キハ先ツ初メニ上眼瞼ハ通常新瞳孔ノ充分ニ開放シ置クノ力チ有スルヤ否ヤヲ確定セサル可カラス若シ否ラサルニ於テハ同シク之チ下内方ニ施ス

虹彩切除法ニ使用スル器械ハ左ノ如シ即チ開瞼器、固定鑷子、直若クハ曲鋒形刀、曲鋒形刀、内方ニ施スル刀、ニ要スルモナリ細形ノ直若クハ彎曲有鉤虹彩鑷子及ヒ小反剪刀、是ナリ五十倍ノ「ゴカイン」溶液チ毎五分時ニ數回點眼シテ眼ノ知覺チ鈍麻ナラシムヘシ

術式ハ先ツ開瞼器ヲ挿入シ固定鑷子ヲ以テ眼球ヲ固定スルノ后角膜縁チ去ル「三」分「一」リ「ニ」ノ處ニ於テ鋒形刀ヲ鉛直ニ鞏膜中ニ穿入シ前房ニ達セシム次チ刀柄チ下行セシメ鋒形刀チ地平ニ虹彩及ヒ角膜間ニ刺入シ創痕適宜ノ大サチ有スルニ至リテ止メ然ル后刀面チ角膜後面ニ密接シ徐々ニ之チ拔去シ以テ前房水ノ卒然流出

スルチ妨ク可シ要用ノ際ニハ刀チ拔去スルニ當リテ尙創口チ開大スルチ得可シ爰ニ於テ固定鑷子チ介者ニ與ヘテ固持セシメ而シテ術者ハ左手チ以テ虹彩鑷子チ執リ之チ閉鎖シ其凸側チ眼球ニ向ケテ注意シテ角膜創ヨリ切除ス可キ虹彩片ノ稍、瞳孔縁近傍ニ達シ次チ之チ開瞼器再ヒ閉鎖シテ以テ虹彩チ切除ニ要スルノ幅ニ指撮シ注意シテ之チ牽出ス此際少許ノ慮着ハ剝離セラル、者ナリ次チ右手チ以テ反剪刀チ執リ之チ開キ其凸側チ輕ク眼球面ニ抵當シ角膜創ニ密接シテ虹彩チ切除ス但シ之チ缺切スル際ニハ其柄チ少シク舉上シ以テ單ニ之チ直線ニ切離セスノ各部トモ弓狀ノ角膜創ニ密接ニ切離スヘシ

若シ虹彩切除法チ眼内壓若クハ血行違常チ規正スルノ目的ニテ施行スルキハ虹彩チ其周邊部ニ至ルマテ切除スルハ甚ク切要ナリトス而シテ此目的ニハ虹彩チ可及的多ク牽出シ且ツ缺面チ可及的密ニ眼球ニ抵當セザル可カラス視學的ノ目的ニハ可及的細狭ノ虹彩切除法チ行フヘシ

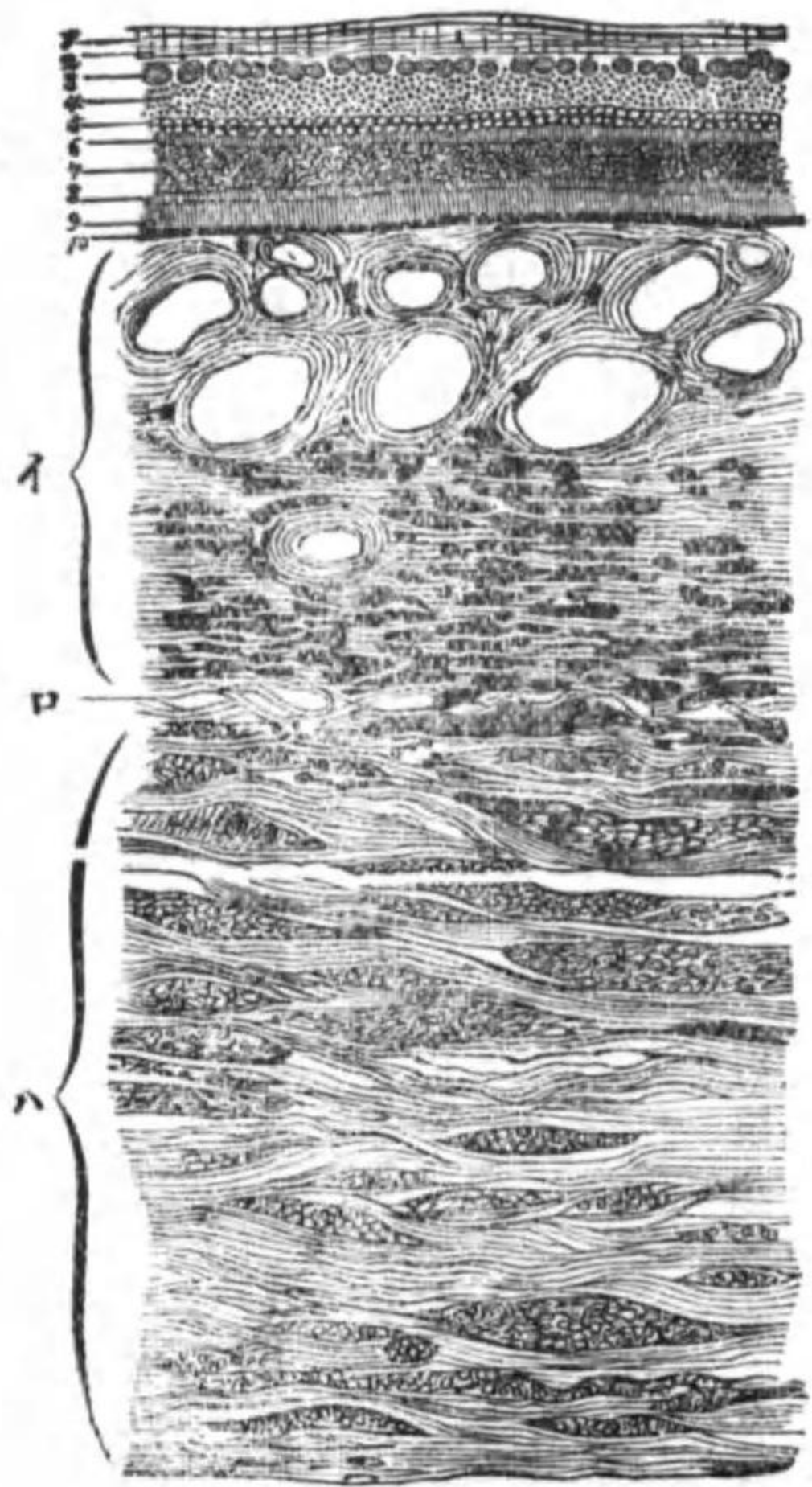
第九章

脈絡膜 Choroides

〔解剖要領〕脈絡膜ハ葡萄膜ノ后部ニシテ内眼器官ノ營養ノ主原ナリ此膜ハ薄弱ニシテ甚ク血管ニ富ミ二所ニ於テ鞏膜ト固着ス即チ后方視神經穿入部ニ於テハ該膜ノ層環狀纖維トナリ狹輪チ形成ス脈絡膜視是レ視神經チ周擁スル者ニシテ往々視神經ニ其纖維チ送ル「ア」リ又前方ハ毛様體ニ依リテ鞏膜溝ト接續ス其他脈絡膜ハ尙血

管及ヒ神經ニ依リテ鞏膜ト結合ス今脈絡膜ニ於テ左ノ四層ヲ區別ス(一)硝子膜ハ薄弱無構造ノ被膜ニ直チニ網膜ニ隣接ス(二)脈絡毛細管膜ハ無構造質中ニ細小ノ血管ヲ具有ス(三)血管膜ハ粗大ノ血管及ヒ色素ヲ具有ス(四)上脈絡膜ト褐色層トハ共ニ密ニ組成セラレタル細維ノ網狀組織ヨリナリ而シテ其纖維ハ數多ノ含色素性又少數ノ無色素性ノ細胞ヲ有スル無構造ノ原質ニ依リテ接合セラルル脈絡膜ノ基礎質ハ纖維ノ細網井ニ含色素性ノ網膜及ヒ脈絡膜ノ血管周圍腔ニ穿孔シ前方ニ行走スルニ從フテ愈小枝トナリ其枝別ニ血管層及ヒ脈絡毛細管層ニ分配シ終ニ網叢ヲ形成ス又之ヨリ發生スル靜脈ハ先ツ盤渦狀靜脈六箇乃至ニ會流シ次テ鞏膜ヲ穿孔シテ外面ニ達シ眼窩靜脈ニ還流ス此血管ハ平滑筋纖維束ヨリ誘伴セラ

圖 四 十 三 第



ル脈絡膜ノ神經ハ腦ノ第三對及ヒ第五對神經及ヒ交感神經ナリ長毛様神經ニ違般ノ神經ハ視神經ノ近傍ニ於テ鞏膜ヲ穿孔シ鞏膜脈絡膜間ヲ前方ニ走リ毛様體ニ達ス而シテ途上數多ノ分枝主トシテ灰白色ヲ上脈絡膜ニ送り之ト密着スル網叢ヲ形成ス此網叢ヨリ數多ノ細纖維アリテ中等大ノ血管ニ沿フテ脈絡膜組織中ニ進入シ而シテ

先天變常

(一)先天變常

Bildungsanomalien

脈絡膜缺損

Coloboma chorioideae

ハ多クハ虹

彩缺損ト合併シ來ル者ニ或ハ兩側ナルアリ或ハ偏側ナルアリ而シテ乙ニ於テハ多クハ左側ニシテ常ニ脈絡膜ノ下半部其縱經線ノ向キニ存ス故ニ其成立ノ理由ハ胎生時的眼裂ノ閉鎖不全ニテ説明ス可キナリ即チ胎生上ノ状態ニ在リテハ當初頭板ノ組織ハ眼胞裂ヨリノ硝子體腔内ニ進入ス此裂隙若シ后来通規ノ如ク閉鎖ニ至ルニハ此組織先ツ消失セザル可カラズ蓋シ之ニ依リテ

第二眼胞ノ前板及ヒ后板ノ縁互ニ相癒合スルヲ得ル者ナリ發育機若シ此ノ如クナラサルキハ網膜及ヒ色素層ノ缺損依然ト存ス然レモ組織ノ消失局部ニ來ルキハ内板ノ縁尙幸ニ癒合スルヲ得テ網膜ハ元來頭板ヨリ發生スル無色素性ノ脈絡膜組織面ニ展張ス(リイナル氏)脈絡膜ノ裂隙ハ視神經或ハ其上部ヨリ起首シ前方各異ノ部ニ至リテ停止ス抑モ該部ハ只透明ノ網膜及ヒ尙纔ニ遺殘スル不整ノ脈絡膜色素ヨリノ被覆セラル、ノミナルヲ以テ此裂隙ヨリノ直チニ鞏膜ヲ色素線ヲ有スル白線ノ

形狀ニ認知ス可キナリ又鞏膜ハ該部ニ於テ少シク擴張シ而シテ網膜血管ハ或ハ橋狀ニ其上ヲ行走シ或ハ擴張部ニ沿フテ前進ス脈絡膜缺損ノ只黃斑部ノミニ限局シ來ルハ只少數ノ患者ニ於テ之ヲ見シノミ

當今マテ施行シ來リシ虹彩及ヒ脈絡膜缺損ノ組織學上ノ檢査ニ從ヒハ脈絡膜缺損部ハ多クハ菲薄透明ノ膜ヲ以テ補給セラル而シテ此膜ハ細胞及ヒ核ヲ有シ密ニ組成セラレタル結締織ヨリナル者ニシテ缺損部ノ縁ニ於テハ連綿遂ニ脈絡膜ノ基礎質ニ移行ス然レモ其小部分ハ亦網膜ニ移行ス色素層及ヒ硝子膜ハ缺損部ノ縁ニ於テ卒然消失ス又網膜ハ缺損部ノ縁ニ於テ或ハ缺亡シ或ハ「アルト」^{「マシツ」}其成形分皆存スルモ互ニ相牽引セラレ網膜恰モ該部ニ於テ甚クシク菲薄トナルカ如キ狀ヲナス其他該部ニ當ル鞏膜ハ菲薄擴張シ而シテ其縁ニ於テハ少シク肥厚ス

缺損部若シ正サニ黃斑部ニ占居セサルキハ中心視力ハ正規ナルヲ得可シ然レモ若シ黃斑部ニ存スルキハ着視スルニ黃斑部以外ノ網膜ヲ使用ス又視野ハ缺損部ニ相當ノ缺損ヲ呈ス然レモ二名ノ患者ニハ缺損部ニ於テ猶光覺ヲ證シ「シミット」^{「ハ」}一名ニハ色覺ヲ證左セリ「ハ」

老人變化

脈絡膜組織之斷裂

(二)老人變化トシテ脈絡膜ニ菌狀透明ノ新生物硝子膜ノ肥厚加之石灰沈着ヲ來ス檢眼鏡上ニハ此新生物黑色ノ縁ヲ有スル白斑トナリテ尋常ノ脈絡膜ニ出現ス而シテ此物若シ黃斑部ニ占居スルキハ視力ヲ減殺スト云フ「ヒルシユ」

(三)脈絡膜組織之斷裂ハ外傷的ニシテ眼球ヲ壓迫スル鈍力即チ打撲突衝等ニ原因シ又電撃后ニ來ル「ア」^{「ライ」}抑モ彈力性ノ鞏膜ハ主トシテ其赤道部ニ於テ擴張スルヲ得ルモ脈絡膜ハ之ト共ニ擴張スルヲ能ハス而シテ脈絡膜ハ其盤渦狀靜脈ヲ以テ鞏膜ト結合スルヲ以テ遂ニ同部ヨリ中心ニ向フテ破裂シ后極ニ達ス然レモ網膜ハ只二所ニ於テ鞏膜ニ附着スルノミナルヲ以テ此際能ク移動シテ此危害ヲ避クルヲ得ルト云フ「アルト」^{「ベツケル」}氏ニ從ヘハ凡ソ眼球ノ壓迫セラレ、ヤ視神經ノ之ニ陷沒スルヲ猶林檎ノ其莖蒂ニ於ケルカ如ク之カ爲メニ遂ニ眼球壁ノ近心性屈曲ヲ誘起シ之ニ依リテ彈力膜、富脈ノ脈絡膜及ヒ網膜ノ外層等破裂スト云フ動物ニ在リテハ視神經ノ附着人ト異ナルヲ以テ試驗的ニ脈絡膜破裂ヲ發起スルハ能ハサル所ナリ

是故ニ破裂ハ通常黃斑視神經間ノ部位ニ存シ多クハ固有ノ形狀ヲ呈ス即チ白色ニシテ上方ヨリ下方ニ行走屈曲シ乳頭縁ト多少近心性ノ線狀ヲ形呈ス屢

尙周圍部ニ於テ第二破裂ヲ呈スルコアリ總テ破裂ハ只脈絡膜ノミニ存スル
 ヤ否ハ網膜ノ血管連綿其面ヲ通過スルヲ以テ了知スルヲ得可キナリ
 打撲后コハ多少出血ヲ生シ纔時ハ視力全ク減殺セラレ、モ后直チニ消失ス
 ル者ナリ屢、褐色層ノ一部分尙鞏膜ニ附着シ存スルコアリ然ルキハ線ハ稍、黃
 色ヲ帶フ外傷性瞳孔散大症ハ多ク脈絡膜破裂ト合併シ來ル者ナリ
 將來ノ經過中ニ於テ多クハ一時ノ炎症ヲ發スルヲ得可シ是レ則チ網膜ニ色
 素發生ノ原因タリ破裂ノ一部ハ后漸々閉鎖スルアリ或ハ全ク癍痕組織ヲ以
 テ充填セラレ、アリ

視力ノ全ク回復スルハ稀レニ見ル所ナリ且視力設令初メハ佳良トナルモ后
 再ヒ減少スルヲ得ル者ナリ又脈絡膜癍痕ノ収縮及ヒ之ト癒着スル網膜ノ牽
 引セラレ、ヨリノ網膜剝離ヲ續發シ、「グナツプ」氏「ヘ
 ルジン」氏又物体ヲ彎曲歪斜視スルコアリ

〔四〕脈絡膜剝離 鞏膜ハ剖見ノ際數回之ヲ見シモ檢眼鏡上ニテハ稀レナリト
 ス即チ一症ハ局部ノ鞏膜葡萄腫ニノ脈絡膜該部ニ於テ滲出物ノ爲メニ前方
 ニ壓出セラレ又他ノ一症ハ急性若クハ慢性若クハ化膿性脈絡膜炎或ハ硝子

脈絡膜剝離

體脫出ヲ兼テタル白內障摘出等ナリシ檢眼鏡上ノ所見ハ固有ナラスノ直チ
 ニ之ヲ以テ剝離ヲ確然診定スルコ能ハサル者ナリ

〔五〕脈絡膜充血 Hyperemia chorioideaeハ能ク特發ス、特ニ幽暗暮或ハ燦爛タル光
輝瓦斯ニ對シ眼ヲ過勞スルノ后細小ノ物体ヲ甚クシク近所ニ於テ久時注目
 スルノ后、不適當ノ眼鏡ヲ使用スルノ后等ニ於テ又虛性充血即チ心臟病ニ
 續發スル頭部ノ鬱血、腹部ノ血行障害等ニ於テモ亦之ヲ發スルコアリ然レモ
 脈絡膜諸病ノ症候トナリテ發スルハ最モ屢、見ル所ナリ

症候ハ深在ニ玫瑰色ノ角膜周擁充血、虹彩ノ色澤不明、瞳孔ノ運動緩慢、纔微
 ノ視力減少、所謂蚊虻飛動症 Mouchus volantesノ發生并ニ暗黒或ハ火樣或ハ
 有色ナル各種ノ物形ヲ見ル等ナリ檢眼鏡上ノ所見ハ甚クタ不分明ニ直チニ
 之ヲ以テ充血ヲ診定スルコ能ハス

治法ハ先キニ陳述スル所ノ諸原因ヲ去リ兼テ暗青色若クハ灰色ノ眼鏡ヲ裝
 用セシメ且ツ顫顫部ニ於テ「ホルテル」「プ」人工蟻針ヲ以テ瀉血法ヲ數回反復
 スル等ナリ

〔六〕脈絡膜出血 Hämorrhagia chorioideaeハ分明ノ誘因ナクノ特ニ強度ノ進行

脈絡膜出血

脈絡膜充血

脈絡膜炎

性近視或ハ急性脈絡膜炎等ニ來ルコト少ナカラズ然レモ亦屢々外傷ニ依リテ發
スルコトアリ檢眼鏡ヲ以テ之ヲ檢スルキハ大小不同及ヒ各異ノ形狀ヲナス所
ノ紅斑ヲ認知ス網膜出血トノ區別ハ主トシテ網膜ノ血管連綿出血部ノ面ヲ通
過スルニ在リ視力減少ハ網膜ノ變化及ヒ硝子体ノ混濁等ニ依リテ差等アリ
〔七〕脈絡膜炎 Chorioiditis ハ或ハ獨立症トナリ或ハ葡萄膜ノ他部即チ虹彩及
ヒ毛様体ノ炎症ト合併シ或ハ近隣ノ膜即チ鞏膜及ヒ網膜ノ炎症ト共ニ發ス
ルコトアリ是故ニ單純脈絡膜炎ノ他尙虹彩脈絡膜炎、虹彩毛様体炎、鞏膜脈絡膜
炎及ヒ脈絡網膜炎等ノ特異症ヲ論述スルヲ要ス

單純脈絡膜炎

○單純脈絡膜炎 Chorioiditis simplex ハ特別ノ誘因ナクノ各年齢ニ於テ來
リ往々梅毒之カ原因タルコトアリ婦人ニハ特ニ其月經閉止期ニ於テ發スルコ
ト屢々ナリトス

主徴ハ脈絡膜充血ノ症候、深在ノ角膜周擁充血、デセメット氏膜ノ微細ノ混濁、虹
彩ノ充血、硝子体混濁及ヒ深部ノ疼痛等ノ他尙脈絡膜ノ滲出物ヲ產生スルニ
在リ此滲出物ハ虹彩炎ニ於ケルカ如ク或ハ漿液性或ハ成形性又或ハ化性膿
ナリトス

漿液性脈絡膜炎

〔甲〕漿液性脈絡膜炎

Chorioiditis serosa

此症ニ在リテハ脈絡膜ヨリ漿液性滲

出物ヲ產生シ網膜ハ之カ爲メニ浸潤セラレテ白色ニ混濁シ其血管ハ各所ニ
於テ沉沒ス混濁消失スルノ后ニ多クハ二週ノ后主トシテ乳頭ノ周圍ニ於テ恰
モ黃斑部ノ如ク脈絡膜ノ色素變常ヲ認ム而シテ該部ハ或ハ脫色シ或ハ黒色素
集積ス硝子体ノ混濁ハ通常之ナキモ或ハ只纔ニ存スルコトアリ

視力障害ハ主トシテ光量ノ減少スルニ當リテ視力比較的ニ多ク減少スルニ

在リ是レ畢竟網膜ノ浸潤セラル、カ爲メニ其知覺痴鈍 Torpor retinae 來スニ

原由スル者ナリ爰チ以テ網膜ハ唯強烈ノ光線ニ依リテ刺戟セラル、ヲ得ル

ノミ但シ知覺痴鈍ハ主トシテ網膜ノ周圍部ニ來ルヲ以テ光量ノ減少スルニ當

リ速カニ視野ノ狭小ヲ呈ス

〔乙〕成形性脈絡膜炎

Chorioiditis plastica

概スルニ脈絡膜諸病ノ百分中其一

四、二、フエツツ氏ハ多ク中年ニ發シ且両眼ヲ侵シ曾テ炎ノ諸症ヲ呈セサル者ナリ

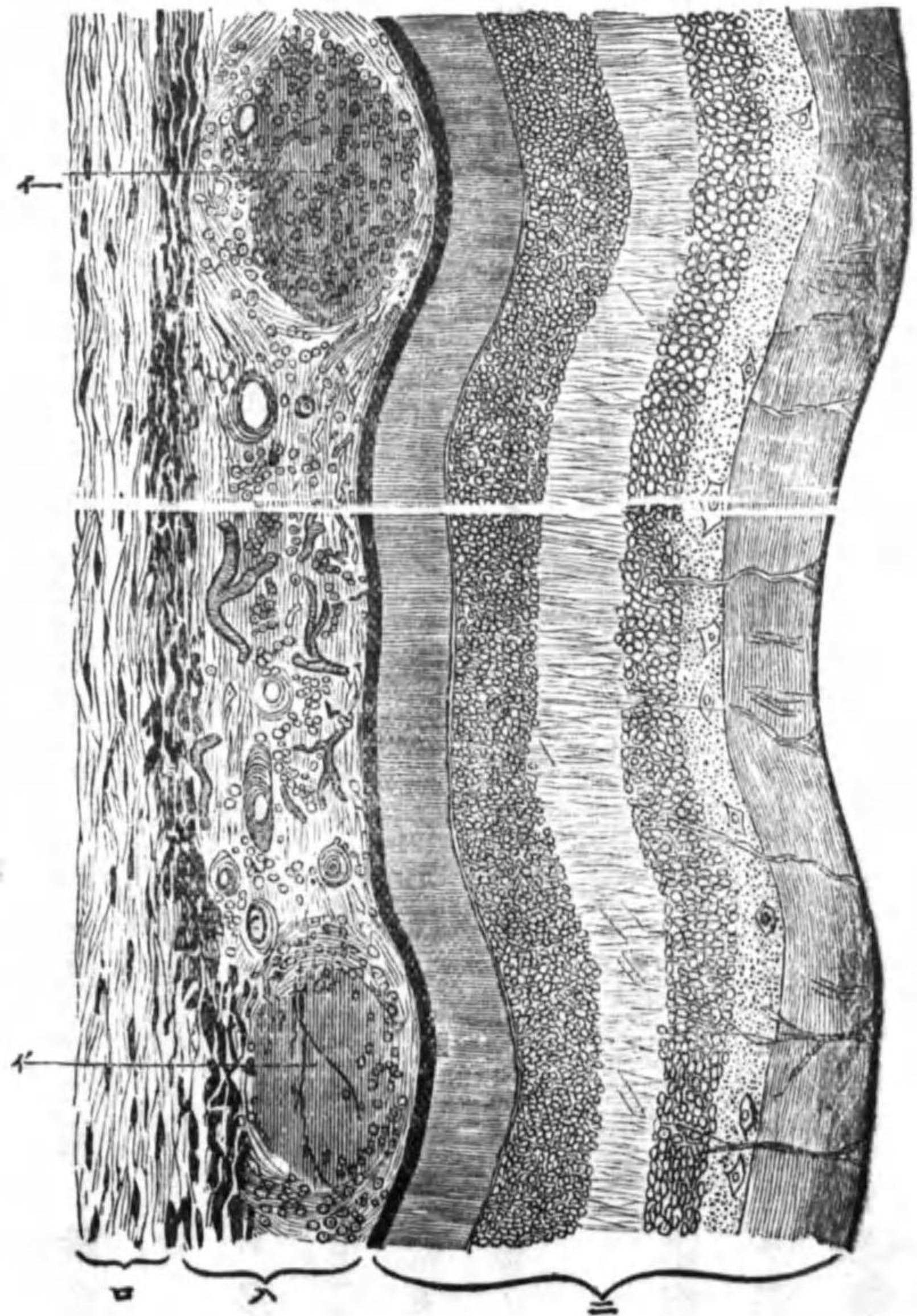
〔散在性脈絡膜炎 Chorioiditis disseminata〕故ニ該症ハ只檢眼鏡上ノ所見ニ依

リテ之ヲ診定スルヲ得ルノミ

〔病理解剖〕此症ニ於テハ脈絡膜ノ基礎質ニ滲出物堆積シ結節狀ヲ呈スル

成形性脈絡膜炎

ヲ見ル而ノ此結節ハ恰モ結核ノ如ク一ハ稠密ノ無色細胞一ハ無形ノ塊質ヨ



ニ輕ク隆起スル網膜ハ時ニ「シヨイ」氏結節部ニ於テ纔ニ脈絡膜ト癒合シ且血管
外壁ニ細胞滲潤ヲ呈ス后期ニ至テハ此結節消失且萎縮シ加之網膜ハ患部ニ

リ成リ只纔
少ノ纖維ア
リテ存ス第
十五圖ハ「イ
ノツ」氏ニ從
フ「ロ」ハ「紫
ハ脈絡膜(ニ)
ハ網膜(イ)及
「イ」ハ結節ニ
テ白細胞及ヒ
無形滲出塊ヨ
リ成リ二三ノ
纖維ヲ雜ユ
含色素上皮
ハ此際全ク
變化スルコ
ナシ結節上

第三十五圖

向フテ牽引セラレ屢又脈絡膜ノ組織中ニ牽合セラレ而ノ遂ニ之ト癒着ス該
部ニ存スル柱狀層ハ潰死シ上皮層ヨリ色素細胞増息ノ網膜ノ外層中ニ進入
ス此散在セル滲出部ハ某症ニハ眼底ノ周圍部ニ占位シテ黃斑ニ向フテ前進
ス〔單純散在性脈絡膜炎 Choroiditis disseminata simplex〕又某症ニ在リテハ
滲出部乳頭ヲ周擁シ而ノ此部ハ網膜ニ對スル側方ニ於テ數多ノ纖維網及ヒ
厚キ色素層ヲ呈ス〔輪狀脈絡膜炎 Choroiditis areolaris〕「フオイル」氏
其第三症ニ在
リテハ病機只黃斑部及ヒ其周圍ヲ侵シ結節網膜中ニ増息シ該膜ハ此局所ニ
於テ實ニ菲薄纖維様ノ組織ニ變化セラル、ニ至ル〔中心脈絡膜炎 Choroio-
ditis centralis〕「フケル」氏

檢眼鏡上ノ所見ハ甚タ多シ先ツ初期ニハ疾患ノ占位スル部ニ从フテ多
ク圓形不明ノ小斑ノ眼底ニ散在スルヲ見又后期ニハ各異ノ形狀ヲ有スル帶
黃白色ノ萎縮部ヲ見ル此萎縮部ハ不正ノ色素線ヲ以テ判然境界セラレ且ツ
萎縮部間ニハ尙不正ノ色素集積及ヒ色素増息アリテ黑色圓形或ハ紡錘形ヲ
呈シ屢々突起ヲ有スル小斑ヲナス往々脈絡膜組織ノ萎縮甚タシクノ只一二ノ
脈絡膜血管橙黃色ノ線條トナリテ帶青白色ノ鞏膜面ヲ行走スルノミナルコ

アリ屬、只周圍部ニ於テ狹小ノ脈絡膜縁ヲ遺殘シ或ハ更ニ健康ノ脈絡膜組織ヲ見出スルヲ能ハサルヲアリ之ニ反シテ病機若シ黃斑部ノミニ限局シ來ルキハ紅綠ヲ有スル白色點狀ノ小斑ヲ見ル是レ多クハ梅毒ニ原因スル者ナリ然レモ這般ノ黑色綠ヲ有スル白色斑ハ亦能ク脈絡膜ノ新生物、限局結節、硝子膜ノ菌狀透明ノ増息若シハ老人變性ニ依リテ發スルヲ得ル者ナリ然ルキハ散在性脈絡膜炎ト同一ノ現象ヲ呈ス

視神經乳頭ハ通常炎症ノ初期ニハ異常ニ發赤スルモ尙判然限界セリ末期ニハ其細小血管消失スルヲ以テ全ク萎縮性ノ白色ヲ呈ス

硝子体濁濁ハ上脈絡膜硝子体ヲ營養スル血管ハ此ノ侵サル、ニ於テ只例外ニ來ルノミ、ゴルドチ然ルキハ多クハ皺襞ヲ有スル膜狀ヲナシ且ツ再ヒ消失スルヲ得ル者ナリ只梅毒ニ原スル脈絡膜炎ハ既ニ初期ヨリノ可動塵埃狀ノ硝子体濁濁ヲ呈ス而シテ此濁濁ハ全硝子体往々又主ニ其后部ニ充足シ后期ニ至リテハ眼底ヲ見ルヲ能ハサルニ至ル「フオイル」氏

虹彩ハ只稀レニ多クハ梅毒性疾患ニ罹リ一二ノ絲狀癒着ヲ形成ス

視力障害ハ患部ノ位置及ヒ大小ニ關ス通常ハ既ニ初メヨリ著シトス抑モ

疾患ノ部位ニ於テハ感覺ス可キ網膜ノ原質先ツ結節ノ壓迫ニ依リ后其牽合ニ依リテ侵サル、ヲ以テ該部ニ於テハ固ヨリ視機消失シ而シテ視野ニ小缺損ヲ生ス然レモ此缺損若シ周圍部ニ存スルキハ更ニ視力ヲ障害スルヲナク只周圍瞻視ニ當リテ漸ク之ヲ自覺スルヲ得ルノミ之ニ反シテ若シ黃斑部ニ存スルキハ中心視力甚クシク障害セラル然レモ全ク失明スルハ甚ク稀レナリ何ントナレハ只周圍性瞻視ノミニテ猶獨行スルニ足レハナリ

散在性脈絡膜炎ノ經過ハ甚ク緩慢ナリ通常患者ハ一般ニ其視力不良ナルヲ以テ初メテ其疾患ニ注意スル者ニシテ發病ハ既ニ之ニ先ツ七月餘ナルヲアリ病機ハ屢、停止性トナリ暫時ニシテ再ヒ増悪シ斯ノ如ク經過シテ終ニ年餘ニ亘ルヲアリ

治法以上陳述スル脈絡膜諸症ノ初期及ヒ尙其炎症ノ持續ヲ證明スルヲ得ル間ハ必ス嚴密ノ消炎法ヲ施スヲ要ス「ホイテ」ル、「ブ」氏人工蟻針ニテ局所瀉血ヲ施スハ各症ニ於テ皆稱用スル所ナリ

瀉血法ヲ施スニハ二三分時間ニ三十乃至五十瓦蘭碼ノ血液ヲ瀉出スルヲ要ス抑モ這般ノ瀉血后ニハ全身ノ興奮及ヒ毛様神經痛等ヲ發スルヲ以テ宜シ

ノ夜間ニ於テ之ヲ施シ直ニ寢ニ就カシムヘシ術后患者ハ少クモ二十四時間
暗室ニ静臥スルヲ要ス瀉血后若シ視力ノ善良トナルヲ認ムルキハ毎週一回
之ヲ施シ六週間持長ス可シ若シ否ヲサルキハ再回ノ瀉血ハ暫ラク之ヲ休止
ス可シ其他強劇ノ水銀療法ヲ瀉血法ト兼用スルヲアリ該法ハ梅毒性ナラサ
ルモ亦ク効アリト云フ而シテ若シ急速ノ効ヲ見ント欲セハ水銀塗擦法ヲ施シ
又漸次久遠ノ作用ヲ望ムキハ昇汞ノ内服ヲ命ス設令ヒ炎症ノ持續スルヤ否
判然セサルモ猶能ク該法ヲ瀉血法ト共ニ施用スルヲ得可シ

總テ中療養ハ眼ヲ安靜ニシ且ツ有害ノ感應強烈ノ光線等ハ避ケサル可カラ
ス青色
眼鏡

諸炎症既ニ消退スルキハ「ストリヒニン」ノ皮下注射法能ク視力ヲ回復スルノ
奇効アリ又硝子体溷濁ノ遺殘スルニ當リテ發汗療法鹽酸「ピロカルピン」一日ノ量皮下注射トシテ
ニ沃度加里ノ内服ヲ兼用シテ良効ヲ見シコアリト云フ

化膿性脈絡膜炎

〔丙〕化膿性脈絡膜炎 Choroiditis purulenta ハ主トシテ外傷后ニ發ス特ニ此際
異物ノ眼内ニ殘留スル時ニ然リトス又不幸ニ經過スル手術出過多ノ硝子体脱
壓久時或硝子体ノ腐敗性傳染并ニ硝子体脱出ヲ兼發スル角膜穿孔創ノ后ニ

之ヲ發ス其他眼内膜ノ慢性炎症即チ脈絡膜炎、網膜剝離等ニ罹リ或ハ胞虫ヲ含
藏スル眼ハ輕微ノ外傷或ハ手術ニ依リテ容易ニ此症ヲ發スルヲ得ル者ナリ
又此症ハ栓塞ノ續發症タルヲ甚ク少カラズ即チ諸般ノ膿毒症及ヒ敗血病ノ
后特ニ產婦病、初生兒ノ臍帶炎ニ傍發シ來ル危重ノ室扶斯症后、癩麻質斯后等ニ於テス其他腦膜炎
ニ續發シ來ルヲ亦之アリ脈絡膜下腔ハ視神經ノ鞘間ニ依リテ頭蓋腔ト交通ス

化膿性脈絡膜炎ハ眼病中劇烈ノ炎症ニノ通常ハ只脈絡膜ノミニ限局セスノ
速カニ眼ノ全部ヲ侵襲ス故ニ亦之ヲ名ケテ**全眼球炎** Panophthalmitisト云フ

〔病理解剖〕數多ノ脈絡膜血管ヨリノ多量ノ膿球速カニ滲出シ乍チ全脈絡
膜ヲ滲潤スルニ至ル色素ヲ含有スル基礎細胞ハ初メハ壓排セラレ而シテ后ニ
ハ脂肪變性ニ依リテ潰死ス之ト同シク脈絡膜ノ爾餘ノ細胞様原質モ亦ク末
期ニ至リテ初メテ崩潰ス甚ク速カニ毛様体、虹彩、角膜ニ膿ノ滲潤ヲ來シ且ツ
大ナル前房蓄膿ヲ生ス網膜モ亦同シク膿ヲ以テ滲潤セラレ且ツ軟化シ或ハ
血水様ノ滲出物ニ依リテ脈絡膜ヨリ剝離セラル硝子体ハ既ニ炎ノ初期ニ於
テ膿球及ヒ雲片様ノ溷濁ヲ呈シ末期ニ至リテハ全ク膿ヲ以テ滲潤セラル鞏
膜ハ初期ニ於テハ多ク變化セサルモ末期ニ至リテハ滲潤セラレ且ツ屢、非常

ニ肥厚シ或ハ所々ニ軟化ス

〔症候〕屢、全身症狀、嘔吐及ヒ發熱ヲ以テ前驅シ多クハ劇痛ヲ以テ初マリ眼瞼及ヒ結膜ハ甚クシテ發赤且浮腫狀ニ腫起シ角膜及ヒ前房水ハ速カニ濁濁ヲ呈シ虹彩ハ黃色ニ變シ硝子体ハ濁濁且ツ滲潤ヲ呈ス多クノ症即チ磨産性ノ者ニ在リテハ疼痛或ハ缺如シ或ハ只纔微ナルヲアリ視力ハ暫時ニ二十四全ク消失スル者ナリ

結膜ハ非常ニ浮腫及ヒ腫脹スルヲ以テ屢、稠厚ノ赤色物トナリテ險裂間ニ突出シ眼球ハ眼窩組織ノ腫脹ニ依リテ突出シ而シテ其運動ハ制止セラレ末期ニ至レハ膿ハ終ニ穿開ス但シ角膜損傷スルカ或ハ化膿ニ依リテ各所ニ破潰スルキハ直チニ之ヨリスルモ若シ角膜健全ナルキハ鞏膜ヨリス然ルキハ眼筋附着點ノ部位ヨリスルヲ常トナス既ニ穿開スルニ至レハ劇甚ノ炎症殊ニ疼痛先ツ緩解ス然レモ膿膜ハ依然持長シテ眼球ノ萎縮スルニ至リテ止ム

此症ハ又屢、輕微ノ炎症狀ヲ以テ發シ慢性ニ經過スルヲアリ然ルキハ屢、穿孔セスノ眼球ハ終ニ漸々萎縮ニ轉歸スル者ナリ

〔治法〕

全眼球炎若シ眼球后半部ニ存スル異物ニ原由スルキハ先ツ鞏膜切開ニ依リテ鐵片ハ電氣磁除去セサル可カラス何ントナレハ其存在ハ炎勢ヲ増劇スル者ナレハナリ疑ハシキ症ニハ磁石針ノ方向ヲ以テ鋼鐵或ハ鐵片ノ存在ヲ證憑スルヲ要ス若シ到底異物ヲ見出スルコト能ハス且ツ疾患猶初期ナルキハ直チニ**眼球摘出法**ヲ稱用セリ何ントナレハ眼ハ既ニ救助ス可カラサル者ニ却テ手術ニ依リテ患者ニ數多ノ患苦ヲ減シ而シテ最モ恐ル可キ他眼ノ交感病ヲ未發ニ防禦スルヲ得レハナリ又眼球内容除去法眼球前部ヲ切除内容ヲ除去シ膿膜ヲ縫合スル法ハ大ニ經過ヲ短縮シ且ツ僞眼ヲ入ル、ニ適宜ノ片ヲ殘留ス「ア、グ」氏ルノ益アリト雖モ施術後一時腦症ヲ起スヲアリ「グ、ナ」氏然レモ若シ既ニ化膿スルニ至レハ眼球摘出法ヲ禁ス此期ニ於テハ摘出后腦膜炎ヲ續發シ死ニ至リシヲ實見セシヲアリ若シ摘出法適症ヲラサルキハ宜シク初期ニ於テ少量ノ甘汞ヲ毎半時ニ内服セシメ流涎ヲ來スマデ持續シ以テ之ヲ鎮壓スルヲ試ムヘシ然レモ之ヲ鎮壓若クハ消退セシムルハ能ハサル所ナリ其他ハ對症的ニ阿片、莫兒比涅注射下及ヒ温濕布ヲ持長ノ眼上ニ貼スル等ノ方法ニ依リテ疼痛ヲ鎮靜スルヲ要ス

若シ眼球小癍痕ニ萎縮シ而ノ異物猶其中ニ存在スルキハ固ヨリ之ヲ摘出セサル可カラス何ントナレハ中ニ存在スル異物ハ永久刺戟ヲ與ヘ加之他眼ノ交感病ヲ誘起スルノ恐アレハナリ下章ヲ參照ス可シ

脈絡膜腫瘍

[八]新生物 *Neubildungen, Neoplasma* 脈絡膜結核 *Tuberculose der Choroides* ハ急性ノ粟粒結核ト同時ニ來ルヲ殆ンド常ナリ「コリン」ハ是レ結核症ヲ窒扶スト鑒別スルニ甚タ緊要ノ件ナリ通常ノ肺癆ニ在リテハ脈絡膜ニ結核ヲ生ゼザル者ナリ試驗的ニ乾酪様ノ結核質ヲ兔ニ注射シ全身粟粒結核ノ他尙脈絡膜ニ結核ノ發生セシヲ實見セリ「コリン」ハ脈絡膜ノ結核ハ最モ屢黃斑部ニ存ス「フナイン」ガ然レモ亦屢眼底ノ周圍部ニ在ルヲアリ其數ハ各異ニ二三箇ヨリ五十箇ニ内外ス又其發生ハ通常甚タ速カニ僅々二三日診セザル間ニ既ニ其出現ヲ認ムルヲ得ル者ナリ此物ハ〇五乃至三〇「ミルリメーテル」大ノ斑點ニシテ其形ハ圓ク其色ハ帶紅黃色ニ而シ其綠ハ漸々健康ノ脈絡膜ニ移行ス初期ニ於テハ屢猶脈絡膜色素ノ爲ニ被覆セラレ漸ク之ヲ透見スルノミナルモ其發育スルニ从フテ其上ニ存スル色素消亡シ結核ハ黃色トナリ而シテ脈絡膜面ヨリ隆起セル小突出物ヲ形成ス是レ檢眼鏡上ニ於テ其假性移動并ニ網

膜ノ血管其上ニ於テ弓狀ニ行走スルヲ以テ認知スルヲ得可シ結核ニハ黑色ノ色素綠缺亡スルヲ以テ他ノ脈絡膜變化ト區別ス
結核ハ毛細管層并ニ脈絡膜ノ中層ニ發生ス而シテ其成立ノ模様ハ猶明確ナラス其構造ハ全ク他ノ粟粒結核ニ同シ多少ノ巨胞及ヒ結核、パチナルレ視力障害ハ脈絡膜結核ノ發生ト比例セス
其他時トシテ慢性結核性脈絡膜炎ヲ起スヲアリ此症ハ脈絡膜ニ大結核腫ヲ生シテ眼内ニ發育シ屢々又鞏膜ヲ穿通シテ更ニ増大ス宜クシテ眼球摘出法ヲ施サ、ルヘカラス
脈絡膜ノ腫瘍ハ多ク三十年以上ノ人ニ來リ十五年ヨリ三十年ノ間ニハ稀レニ之ヨリ幼年ノ人ニ來ルハ殆ント之ナシ腫瘍ハ多ク含色素肉腫ニ初期ニハ一般ニ猶認視帶褐紅色ノ隆起ヲナシ硝子体中ニ突出ス而シテ健康ノ脈絡膜ヨリハ血管ノ位置不正ナルヲ以テ區別ス
[診斷] 眼内ノ腫瘍ハ多ク網膜剝離ヲ合併スルヲ以テ檢眼鏡上ニ之ヲ診定スルヲ得ルヲ極メテ稀ニシテ只眼球ノ緊張及ヒ綠内障性ノ症狀等ノ如キ單純網膜剝離ニ缺損スル所ノ諸症候ヲ以テ之ヲ察スルノミ疑ハシキ症ニハ内障針

チ以テ鞏膜ヨリ穿試シ其抗抵ニ依リテ腫瘍ト網膜剝離トヲ判決スルコトアリ
 「フレン」腫瘍若シ毛様部ニ占居スルキハ容易ニ之ヲ認知ス可シ若シ又毛様体
 ヨリノ前方ニ發スルキハ先ツ水晶体ヲ脱位シテ前房内ニ突出シ尙進ンテ眼
 球ノ被膜ヲ穿透スルヲ得可シ是レ通常角膜縁ニ於テスルモ往々又鞏膜ヨリ
 シ遂ニ黑色菌狀ノ塊質トナリテ益々蔓延ス然レモ腫瘍ハ或ハ視神經ニ沿フ
 テ蔓延シ加之尙頭蓋内ニ進入スルコトアリ其他腫瘍ハ鞏膜中又ハ眼窩組織中
 ニ孤立ノ肉腫性結節ヲ形成シ而シテ後眼窩内ニ増息スルコトアリ
 腫瘍ノ經過中稀レニ角膜ノ潰瘍及ヒ全眼球炎ヲ續發シ眼球遂ニ萎縮ニ陥ル
 コトアリ然レモ腫瘍ノ發育ハ更ニ之カ爲メニ妨害セラル、コトナシ**眼球殘物**
 中ニ腫瘍ノ存在スルハ其形狀ノ固有梨子狀ニシテ且ツ過大ナルト強劇ノ疼痛
 發作ヲ發起スル等ヲ以テ推知ス可キナリ
 脈絡膜腫瘍ハ通常速カニ肝臟等ニ**轉移**シ或ハ屢同時ニ來ル他器官ノ多數
 性疾患ト共發ス

〔治法〕腫瘍ノ診斷明確ナルキハ可及的速カニ眼球摘出法ヲ行フ可シ然レモ
 速カニ轉移ヲナスヲ以テ摘出法ヲ行フコト尙一層早キモ猶患者ノ性命ヲ保全

スルコト難シトス腫瘍若シ眼窩組織ヲ侵スキハ只切除法ノ一法アルノミ

眼球摘出法

Enucleatio bulbi 「ボニ」先ツ囁囁保兒眼ヲ以テ患者ヲ麻醉セシメ開眼器
 用スルモ可ナリ代ナリテ眼ヲ閉シ鉤子ヲ以テ外直筋附着部ノ上ニ於テ結膜ヲ地
 平ニ撮ミ剪缺ヲ用テ之ヲ鉛直ニ切開ス鉤子若クハ鈍鉤ヲ以テ筋ヲ牽上シ少シク附
 着部ヲ隔離シ之ヲ切離ス然ル後剪缺ノ一枝ヲ結膜下ニ送り次ノ筋附着部ニ達セシ
 メ結膜ヲ切り尙此筋ノ附着部ヲ切離ス此ノ如クニ終ニ全筋ヲ切去ス斜筋ノ附着
 部ハ今ヤ容易ニ鉤子ヲ以テ牽シ且切離スルヲ得可シ但シ視神經ヲ切斷スルノ后之
 ナ行フモ亦可ナリ爰ニ於テ鉤子ヲ以テ外直筋ノ切斷端ヲ箝撮シ眼球ヲ強ク内方稍
 ヲ前方ニ廻轉シ強彎ノ剪缺ヲ閉鎖シ眼球窩腔面ニ沿フテ后力視神經ニ到達セシメ
 次テ之ヲ開キ以テ視神經ヲ可及的後方ヨリ切斷ス然ル後眼球ヲ破裂ヨリ牽出シ尙
 之ヲ他ノ結合部ヨリ切離ス

眼球若シ甚ダシク増大スルキハ摘出前ニ外骨地平ニ眼窩骨壁ニ至ルマテ切開ス
 ルヲ要ス而シテ摘出後ニハ再ヒ其創口ヲ縫合スヘシ
 出血ヲ止メ且凝血ヲ除去スルノ后ヲ結膜ヲ縫合シ壓迫綿帶ヲ施ス可シ往々止血ス
 ルコト能ハサルカ爲メニ眼窩ノ栓塞ヲ要スルコトアリ術后二三日ニシテ癢痕形成ヲ初ム
 ル者ナリ然ルキハ綿帶ヲ除却スルヲ得可シ
 眼瞼ハ漸次内陷短縮シ屢ニ内翻スルコトアリ若シ幼年ノ人ニ摘出法ヲ施シ后人工眼ヲ
 挿入セサルキハ眼窩ハ發育ニ遲レテ狭小トナリ顔面ノ醜形ヲ將來ス
 摘出ノ后炎勢及ヒ疼痛等全ク消退スルキハ人工眼ヲ挿入スルヲ得可シ

人工眼挿入

Prothesis oculi 「オクリ」ハ管ニ眼球缺損ノ爲メニ生スル醜形ヲ補フノミ

ナラス兼テ又治療上ニ於テ緊要ナリ即チ人工眼ハ過度ノ眼瞼短縮及ヒ内陷

ヲ防キ并ニ眼窩ノ變小ヲ妨ケ眼瞼ノ位置ヲ規正シ涙液ノ流通ヲ便ニシ從フテ不快ノ流涙ヲ去ルノ効アリ然レモ貧者ニシテ人工眼ヲ裝スルヲ能ハサルハ眼瞼内縁ニ新創ヲ作リテ眼瞼縁ヲ縫合シ以テ其内瞼ヲ防クヲ得ヘシ此手術ニ在テハ内眦及ヒ外眦部ニ一孔ヲ殘シ食塩水ニテ洗滌シテ分泌物ノ蓄積ヲ防カサルヘカラス

人工眼ハ其大サ眼窩ノ廣サ并ニ瘰癧ノ大サニ相當セザル可カラス蓋シ過大ナレハ壓迫及ヒ炎ヲ誘發シ過小ナレハ滑脫スルノ恐アリ其他着色ハ固ヨリ他眼ト同一ナラサル可カラス

人工眼ヲ挿入スルニハ先ツ之ヲ上眼瞼ノ下ニ送入シ次テ下眼瞼ヲ牽下シテ一推以テ之ヲ挿入ス又除去スルニハ之ト反對ノ方法ヲ以テス人工眼ハ毎夜除脱シ以テ之ニ附着スル粘液等ヲ清潔ニス可シ

眼球切除法 *Enucleatio bulbi* 術式ハ左ノ如シ即チ先ツ眼球ヲ腫瘍ト共ニ「ムゼー」氏箱子ヲ以テ確執且ツ牽出シ刀ヲ以テ之ヲ周圍ノ結合ヨリ離解シ然ル后諸他ノ病的物ヲ除去ス必要ノ際ニハ尚銳匙ヲ以テ之ヲ剔掘シ時宜ニ依リテハ鑿ヲ以テ骨縁ノ一部ヲ除去スルヲアリ是ニ於テ冷水ヲ注キ以テ止血シ時宜ニ依リテハ沃度保兒膜栓球ヲ以テ之ヲ栓塞スルヲアリ術后ノ所置ハ總テ尋常創傷ノ如クス可シ

虹彩脈絡膜炎

〔九〕虹彩脈絡膜炎

Iridochorioiditis ハ或ハ環狀癒着アル虹彩炎ヨリ發シ或ハ虹彩炎ヲ傍發スル脈絡膜炎ヨリス多クハ兩側性ナリ

〔病理解剖〕〔甲〕若シ成形性虹彩炎初發ニノ瞳孔縁ノ環狀癒着ヲ形成スルハ

ハ流動ノ滲出物虹彩ノ后方ニ集積シ虹彩之カ爲メニ堤狀ニ膨出セラレ而シテ瞳孔ハ臍狀ニ内陷ス虹彩此ノ如ク持續牽引セラレハニ依リテ炎勢脈絡膜ノ前部特ニ上脈絡膜ニ傳波シ「ゴルド」氏而シテ之ヨリ產生スル所ノ炎性滲出物ハ硝子体溷濁トナリテ出現シ瞳孔幸ニ不透明滲出物ノ爲メニ閉鎖セラレサルニ於テハ猶能ク檢眼鏡ヲ以テ之ヲ診定スルヲ得可シ后期ニ至リテ變色セル虹彩面ニ一二ノ血管ヲ新生ス是レ瞳孔ニ向フテ行走スル者ナリ虹彩ノ后面ニ存スル滲出物ハ硬固ノ肥厚物ニ變性シ之ニ依リテ虹彩ノ面ハ水晶嚢ト膠着セラル爰ヲ以テ虹彩ハ再ヒ陷凹シ彼是ニ黑色ノ點即チ萎縮部ヲ其面ニ生シ而シ終ニ全ク萎縮スルニ至ル之ト同時ニ尙毛様体炎ヲ併發スル者ナリ

〔乙〕脈絡膜ヨリ發スル所ノ症ハ屢月經閉止期ノ婦人并ニ月經違常アル幼婦ニ來ル此症ニ於テハ先ツ硝子体前部ノ溷濁脈絡膜網膜間ノ滲出物形成網膜剝離及ヒ白內障等ヲ發シ末期ニ至リテ初メテ虹彩炎ヲ發シ癒着ヲ形成ス后来水晶体ニ石灰沈着ヲ來シ最后ニハ終ニ白堊様ノ石灰質ニ萎縮スルヲアリ

〔症候〕疼痛及ヒ充血ハ兩症トモ甚ク著シカラス只成形性虹彩炎ニ續發スル

虹彩脈絡膜炎ニハ偶々少シ強劇ナル一時ノ充血ヲ來スノミ故ニ患者ハ多ク視力ノ漸々不長トナルヲ以テ初メテ其疾患ニ注意シ醫ニ就テ眼鏡ノ處方ヲ乞フニ至ル獨リ成形性虹彩炎ノミ存スル間ハ視力障害ハ瞳孔領ニ沈着スル滲出物ノ量ニ比準スルモ病機脈絡膜ヲ侵シ硝子体ニ溷濁ヲ生スルキハ弱視性ノ障害甚タ著明ニ獨リ瞳孔領ノ溷濁ノミヲ以テ説明スルコト能ハズ眼球ノ緊張ハ眼球壓ノ亢進ニ依リテ屢増盛シ后チ毛様体炎ヲ發スルニ及ンテ初メテ強劇ノ疼痛及ヒ充血ヲ發シ眼球異常ニ柔軟トナル

脈絡膜炎ヨリ發フル虹彩毛様体炎ニ於テモ亦甚ク速カニ弱視性障害ヲ來シ且ツ網膜剝離アルニ當リテハ光覺力ニ於ケルモ亦視野狹小ス故ニ光覺ヲ以テ精細ニ其視野ヲ檢セサル可カラフ何ントナレハ水晶体及ヒ瞳孔領ノ溷濁ハ屢眼内ノ檢査ヲ妨クレハナリ

〔經過〕虹彩脈絡膜炎ハ甚タ慢性ニ經過シ數月ニ渡ルコトアリ而シテ病機若シ停止セサルキハ終ニ毛様体炎ヲ合併シ眼球癆ニ轉歸ス下章ヲ參照ス可シ

〔治法〕一般ニ治法ヲ施スト愈々速カナルキハ從フテ愈々効アリ初期ニ於テハ水銀療法及ヒ局所瀉血法ヲ施シ尙可及的過大ノ瞳孔散大ヲ起シ且ツ屢週

餘之ヲ維持スルカ爲メニ「アトロピン」ノ強溶液ヲ點入ス此際常ニ一二ノ癒着ヲ剝離ス然レハ一タヒ瞳孔閉鎖ヲ形成スルキハ先キニ虹彩炎ノ治法ノ條下ニ論述スル如ク虹彩切除法ニ依リテ瞳孔閉鎖ヲ除却シ前房及ヒ前房ノ聯絡ヲ再ヒ造爲スルノ他亦タ法ナシ然レハ永久性ノ一孔ヲ形成スルハ常ニ易カラス屢、虹彩ノ組織ハ萎縮軟化シテ小片ニ破碎シ易ク又幸ニ一孔ヲ形成スルヲ得ルモ復タ再ヒ閉鎖シテ新ニ反對ノ側方ニ於テ虹彩切除法ヲ要スルコトアリ

若シ視力障害ト現在ノ溷濁ト相比準スルキハ手術ニ望ム所ノ成績ハ稍々善長ニ少クモ現在ノ視力ヲ保存スルノ効アリ之ニ反シテ視力障害ト溷濁トノ不等并ニ視野狹小等アリテ内眼病ノ存在ヲ指示シ且眼球異常ニ柔軟トナルキハ虹彩切除法ノ効用甚タ少ク硝子体溷濁ニハ發汗療法「ヒロカ」并ニ水銀劑及ヒ沃度加里ノ内服等ヲ稱用セリ

若シ既ニ白内障ヲ續發スルキハ白内障摘出法ヲ以テ虹彩切除法ニ代用スルヲ得可シ然ルキハ通常水晶体ノ碎片ト共ニ亦流動ノ硝子体多量ニ流出ス然レハ此方法ニ依リテ猶能ク視力ヲ佳長ニスルヲ得可シ

〔十〕鞏膜脈絡膜炎 Scleritochoroiditis ハ脈絡膜并ニ鞏膜ヲ同時ニ侵ス所ノ
炎ニ其眼球ノ前部及ヒ后部ニ占居スルニ從テ左ノ如ク之ヲ區別ス「フシ、
ウエック
ル」氏

〔甲〕前鞏膜脈絡膜炎 Scleritochoroiditis anterior ハ原因不明ナルアリ屢々痲
質斯ヨリ來ルアリ屢々又月經異常ト關係シ各年齢ニ之ヲ發スル者ナリ此症ハ
脈絡膜及ヒ鞏膜ノ局所疾患ニ多クハ上外方ニ當リテ虹彩根基部ノ近傍ニ
占居ス

〔症候〕鞏膜上組織ハ汎發ニ潮紅及ヒ腫起シ且ツ隣接セル角膜組織ハ過大ニ
溷濁ス而シテ此症ノ單純鞏膜上炎ト異ナル所ハ虹彩炎ヲ發シ過多ノ癒着形成、
血管新生及ヒ虹彩ノ變色其他前房水ノ溷濁及ヒ前房ノ深奥等ヲ兼發スルコ
在リ炎勢消退スルノ后炎部ノ廣狹ニ從テ角膜ノ鞏膜様變性ヲ來シ屢々全角
膜之ニ罹ルコトアリ加之鞏膜青色トナリ鞏膜及ヒ角膜ノ境界不明トナリ遂ニ
眼球前半部ノ扁平及ヒ癆ヲ來ス
又患急性及ヒ慢性ニ經過シ漿液性虹彩炎ヲ兼發スルノ症ハ眼内壓亢進シ及
ヒ視神經乳頭陷凹ニ陥リ終ニ葡萄腫ノ形成ニ終ル

急性症ニ在リテモ其經過ハ甚ク緩慢ニ且ツ間歇性ナリトス若シ幸ニ未
ダ葡萄腫ヲ形成セサルハ猶病機ヲ鎮靜スルヲ得ル者ナリ

〔治法〕消炎法、水銀療法、甘汞及ヒ撒里智兒酸曹達ノ内服「ホルテール」氏人工
蟻針、發汗劑「ヒロカ」等ヲ稱用セリ緊張ノ増加スルニ當リテハ角膜穿孔術若ク
ハ速カニ廣幅ノ虹彩切除法ヲ行フヲ要ス又角膜ノ鞏膜様變性ニハ角膜周擁
切開法ヲ稱用ス是レ猶發炎期ニ於テ施ス可キ者ナリ

〔乙〕后鞏膜脈絡膜炎 Scleritochoroiditis posterior 是レ眼球ノ后極殊ニ視神經
穿入部ノ近傍ニ占居スル鞏膜及ヒ脈絡膜ノ慢性炎ニノ畢竟兩膜ノ他働的擴
張ニ依リテ發起シ且ツ持續セラル、者ナリ此擴張ノ原因ハ既ニ近視眼ノ條
下ニ於テ之ヲ詳論セリ故ニ茲ニ之ヲ贅セス固有ノ炎結果ハ兩膜ニ缺損シ而
ノ病機ハ殆ント外見上著明ノ炎症狀ヲ發セスノ經過ス

〔症候〕只檢眼鏡ヲ以テ認知ス可キノミ即チ乳頭ノ外側ニ於テ灰白色ノ半月
狀輪アリテ存ス是レ視神經ニ密接スル者ニシテ多ク黒色素線ヲ以テ圍擁セ
ラル第二十圖其發生ノ原因ハ擴張ノ爲メニ脈絡膜ノ色素消亡スルニ在リ半月
狀輪ノ視神經ニ接スル境界ハ往々判然タルアリ或ハ不明ナルアリ又他ノ眼

底ニ對向スル境界ハ病機ノ進行期ニハ多少不明ナルモ其停止スルニ當リテ判然限畫セラル半月狀輪ノ大サハ或ハ微小ニ顯著ナラス或ハ又后眼球半部ノ大部ニ蔓延スルコアリ擴張部ノ増加スルト共ニ半月狀輪廣幅トナリ而シテ全乳頭ヲ圍擁ス然レモ外方ニ對向スル部ハ内方ニ比スレハ廣幅ナルヲ常トス擴張部ノ陷凹ハ一定ノ高低検査法ニ從フテ認知スルヲ得可キナリ又這般ノ半月狀輪ハ先天ニ乳頭ノ下縁ニ來ルコアリ然ルモ多クハ先天ノ近視眼或ハ弱視ヲ合併セリ^{「フツ」氏}乳頭ハ進行期ニ於テ屢充血ヲ呈ス又經過中全脈絡膜特ニ黃斑部ニ於テ散在性ノ炎ヲ發シ或ハ白色ノ萎縮部ヲ呈ス此時ニ當リテハ硝子体多クハ融解シ微細有形ニ且ツ浮動スル溷濁ヲ呈ス末期ニ至リテハ水晶体ノ后極ニ纒少ノ溷濁ヲ生ス網膜ハ延長及ヒ牽引セラル、ニ依リテ弱視性トナル自覺症狀ハ眩暈、眼ノ疲勞、^{就業}眼内ノ疼痛及ヒ蚊虻飛動等ナリ

經過ハ甚ク緩慢ナリ續發トシテ眼球ノ形狀變化シ其圓形ヲ失フテ楕圓トナル又眼ノ矢狀軸延長スルニ依リテ近視ニ傾向ス^{上章ヲ參照ス可シ}經過中屢脈絡膜出血及ヒ網膜出血ヲ來スコアリ

病機ハ各期ニ於テ停止性トナルヲ得可シ是レ擴張部ノ境界判然タルト半月狀輪ノ境界ニ多量ノ色素集合スルトヲ以テ確定ス可キナリ^{「后葡萄腫」}
phyloma posticum

〔治法〕脈絡膜充血及ヒ近視眼ノ療法ニ同シ

第十章

毛様体 Corpus ciliare

〔解剖要領〕毛様体ハ竊齒狀線虹彩根基部間ニ存スル葡萄膜ノ一帯ニシテ^{「四」}乃至五^{「五」}ルテ毛様突起及ヒ毛様筋ノ二部ヨリナル脈絡膜ハ前方ニ至リテ其層ノ秩序ヲ亂シ^{「一」}脈絡毛細管ハ卒然消失シ血管ハ前方ニ向フテ直行シ膜ノ外面ニ筋纖維重積シ内面ニハ放線狀ノ皺襞ヲ形成ス此毛様突起^{「七」}乃ハ前方ニ至ルニ從フテ漸次增高シ水晶体ノ縁ニ於テ屈曲シ再ヒ虹彩ノ根起部ニ回走ス此物ハ脈絡膜基礎質及ヒ細小血管ノ群叢ヨリナリ硝子膜ヲ以テ包被セラル此部ニ於テハ硝子膜白色稠厚トナリ^{「小網」}Retenium^{「小網」}内方ハ一層ノ多角形色素細胞ヨリ包被セラル毛様筋ハ毛様体ヲ輪狀ニ圍擁シ經線ノ切断面ニハ三角ノ形狀ヲ呈ス即チ其勾側ハ前方虹彩ノ毛様体縁及ヒフオンターナ^{「フ」}氏腔其股側ハ鞏膜其弦側ハ毛様突起ニ向フ但シ毛様突起ハ尙三角ノ前内縁ヲ圍繞スル者ナリ此筋ハ上脈絡膜板及ヒ褐色層ノ菲薄ノ延長物ニ依リテ鞏膜ヨリ隔離セラル、モ前方ハ節狀靱帶ニ依リテ^{「シ」}レンム^{「シ」}氏管^{「フ」}オンターナ^{「フ」}氏腔間ニ於テ之ト固結ス筋纖維ハ總テ此腱樣ノ附着部ヨリ發生シ三種ノ方向ニ併列ス^{「三」}第十六

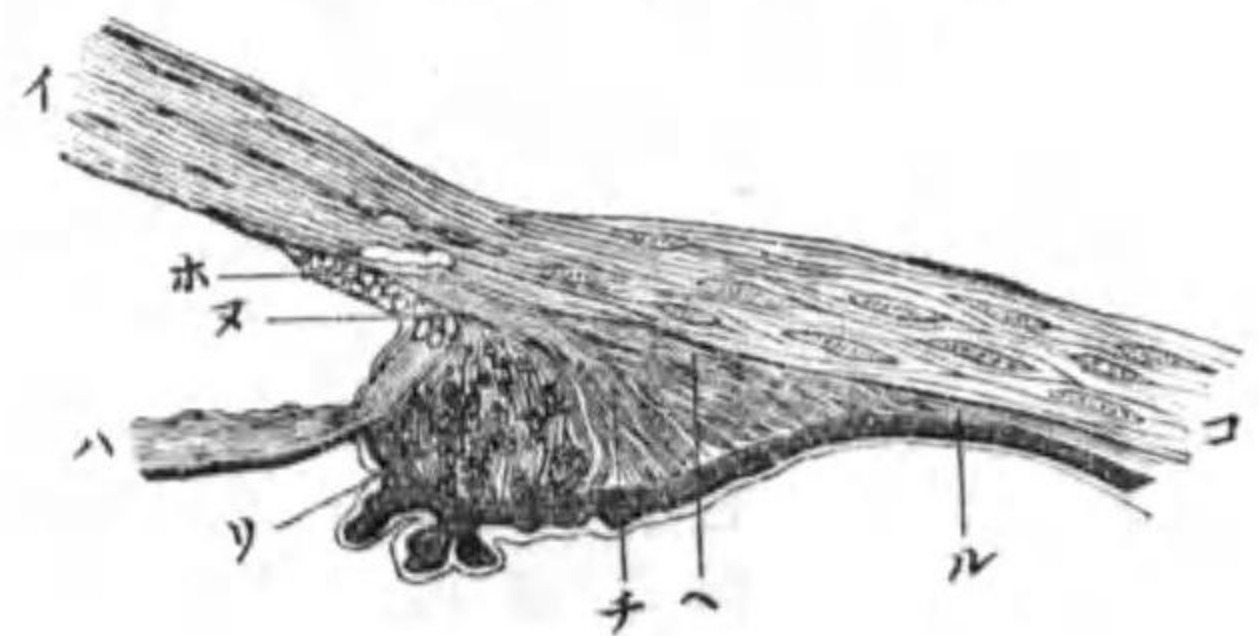
圖六十三第



圖七十三第



圖八十三第



〔イ〕ハ角膜〔ロ〕ハ輪〔コ〕ハ鞏膜
 〔ハ〕ハ虹彩〔ホ〕ハフオンタナ
 氏腔〔ヘ〕ハ毛様筋ノ經線狀部
 〔チ〕ハ放線狀部
 〔リ〕ハ「ミユル」氏輪狀筋
 〔ヌ〕ハ毛様筋ノ前腔〔ル〕ハ其後腔

圖 其外部ハ稍大ニシテ、三乃至六「ミ」經線ノ向キニ行走シ開散シテ脈絡膜ニ向フテ進
 ミ茲ニ滑平筋纖維ノ網叢ヲ形成シ疊々層ヲナス夫レヨリ突起アリテ脈絡膜ニ進向
 シ而シテ上脈絡膜中ノ彈力組織ノ纖維ニ走行ス又其中部ハ放線狀ニ開散シ而シテ其前
 内部ハ「ミユル」氏筋之ヲ形成ス是レ獨立ノ筋ニシテ其纖維ハ環狀ヲナシ角膜縁ニ併
 行シ密ニ虹彩ノ毛様体附着ノ下ニ在リテ毛様突起ノ全前面ヲ行走ス毛様筋ニハ二
 種ノ異常アリ即チ近視眼ニ在リテハ概子經線狀纖維ノミニシテ輪狀筋ハ殆ント缺亡
 セリ故ニ此筋ハ延長セラレ前側ハ外側ト正角ヲナスノ銳角ヲナス七圖三十又遠視
 眼ニ在リテハ經線狀纖維殆ント全ク缺亡シ而シテ輪狀筋ハ屢々筋ノ三分一ヲ占ム故ニ

此筋ハ短縮セラレ前側ハ外側ト鈍角ヲ形成ス第三十毛様体ノ血管ハ二條ノ后長毛
 樣動脈ノ枝別ニシテ此血管ハ稍前方眼球ノ内側及ヒ外側ニ於テ鞏膜ヲ斜ニ穿孔シ更
 ニ分岐セス前方毛様筋ニ達ス是ニ於テ小枝ヲ分與シ屈曲シテ大動脈環ヲ形成ス
 夫ヨリ小枝ヲ生シ毛様突起ニ分佈ス此長后毛様動脈ハ前毛様動脈ト吻合ス是レ筋
 枝ノ枝別ニシテ恰モ毛様筋ノ上ニ於テ鉛直ニ鞏膜ヲ穿孔シ毛様突起及ヒ虹彩ニ分佈
 シ向後走スル分枝ヲ以テ毛様筋及ヒ脈絡膜ニ分佈ス是レ短后毛様動脈ト網叢ヲ形
 成スル者ナリ毛様突起ニ於テ靜脈ハ數多ノ小枝ニ分裂シ紛亂シテ群叢ヲナシ終ニ
 靜脈ニ移行ス夫レヨリ血液ハ后方星形靜脈ニ還流ス又神經ハ毛様体ニ於テ數多ノ
 枝別トナリ其大ナル者ハ表面ニ存シ其他ハ皆筋内ニ進入ス此神經ハ概子夥多ノ小
 神經結節ヲ有スル纖維ヲ有ス「イッソン」氏

毛様体炎

(一)毛様体炎

Cyclitis

ハ猶ホ虹彩及ヒ脈絡膜ノ炎ニ等シク充分特發病トナ
 リ諸種ノ素質ニ基キ若クハ再歸熱后ニ流行シ「ロ」ゲストツニ「ユ」氏 若クハ毛
 樣体ノ損傷后ニ起ルモ多クハ虹彩炎及ヒ脈絡膜炎ト併發ス

病理解剖ハ左ノ如シ即チ炎ノ初期ニハ毛様体ノ充血及ヒ腫起ヲ發シ滲出
 物ヲ醸生ス而シテ此滲出物ハ猶ホ虹彩炎及ヒ脈絡膜炎ニ均シク成形性若クハ
 漿液性若クハ膿性ニシテ沈氏帶領硝子体前部及ヒ硝子体水晶体間ニ生シ
 之ニ由テ硝子体ヲ少シク后壓ス而シテ成形性滲出物ハ屢々富脈ノ厚膜ヲ造
 リテ水晶体硝子体間ニ竄入シ其萎縮ニ由テ間々虹彩ノ周圍帶ヲ后牽シテ前

房ヲ深廣ナラシム將來ノ經過ニ於テハ硝子体及ヒ水晶体ノ榮養病ミテ硝子体溶解及ヒ后極白内障ヲ起シ毛様体及ヒ網膜ノ剝離、角膜ノ萎縮、鞏膜孔ノ變小ヲ致シ終ニ眼球癆下章ヲトナル單純毛様体炎ノ症候ハ角膜ヲ周擁スル所ノ微小ナル前毛様動脈ニ注血シ虹彩靜脈ハ鬱血シ往々著シク怒脹シテ虹彩面ヲ走行シ房水ハ溷濁ス試ニ壓スレハ毛様体部ニ方テ知覺頗ル過敏ナリ故ニ其壓迫ノ際患者極メテ特異ニ頭ヲ后投ス眼緊張ハ初メ亢進スルモ后ニ著シク減少ス其他虹彩ノ炎症症候ハ毛様体炎ノ著シク進歩セル時期ニ在テモ全ク發起セス或ハ發起スルモ甚ク輕易ナリトス

漿液性毛様体炎ハ漿液性虹彩炎及ヒ脈絡膜炎ト併發スルコト多ク亦ク此兩症ノ如ク綠内障性壓障害、乳頭陷凹若クハ鞏膜葡萄腫ヲ誘起ス而シテ漿液性滲出物ハ毛様体ノ筋束間ニ集積ス又細胞、硝子体ノ前部ニ逍遙シ水晶体ノ后面ニ沈着シテ極白内障ヲ惹起ス

此症ニ在テハ角膜周圍ノ充血及ヒ疼痛弱ク瞳孔ハ散大シ甚ク速ニ硝子体ノ前部ニ微細ノ溷濁ヲ生シテ視力ヲ甚ク減少ス

虹彩毛様体炎

化膿性毛様体炎ハ主ニ損傷殊ニ異物ヲ殘留スル損傷、手術即チ水晶体撥下法、周邊線狀摘出法ニ於テ切開周邊ニ過クル時ニ於テ發起ス而シテ其發症ハ極メテ劇烈ナル炎症症候ノ前驅スル后チ卒然前房内ニ蓄膿ヲ生ス此膿ハ一二日后ニ再ヒ消散スルモ后チ尙ホ一二回反復且ツ消散ス但シ此病ハ治癒スルコトアリ殊ニ異物ヲ抽除シ得ル時ニ然リトス

療法ハ成形性及ヒ化膿性毛様体炎ニハ強力ナル消炎法即チ「アトロピン」瀉血、殊ニ水銀療法ヲ行ヒ漿液性毛様体炎ニハ水銀療法ニ兼テ發汗法鹽酸「ピロカルピン」ノ皮下注入若クハ「ヤボラン」ヲ浸ノ内服甚ク効驗アリ眼球ノ緊張ハ數檢査シテ若シ亢進セハ直ニ廣ク虹彩ヲ切除スヘシ

(一) **虹彩毛様体炎** *Iridocyclitis* (虹彩脈絡膜炎及ヒ毛様体炎)ハ眼内ノ腫瘍及ヒ綠内障ノ軟化期ニ起ルコトアレモ通常眼ノ損傷即チ異物石片、摺附本ノ頭等ヲ殘留シ或ハ之ヲ殘留セサル裂創及ヒ穿創殊ニ角膜鞏膜接合部ノ創傷ニ於テ發起ス其他前房内ニ脫出セル水晶体ハ間斷ナク壓迫シテ虹彩毛様体炎ヲ喚起ス又虹彩、水晶囊若クハ毛様体ノ箝頓アル創傷、周邊線狀摘出法、虹彩結紮法后ニハ間斷ナキ牽引ニ由テ此等ノ部ヲ損害シ以テ虹彩毛様体炎ヲ誘發ス

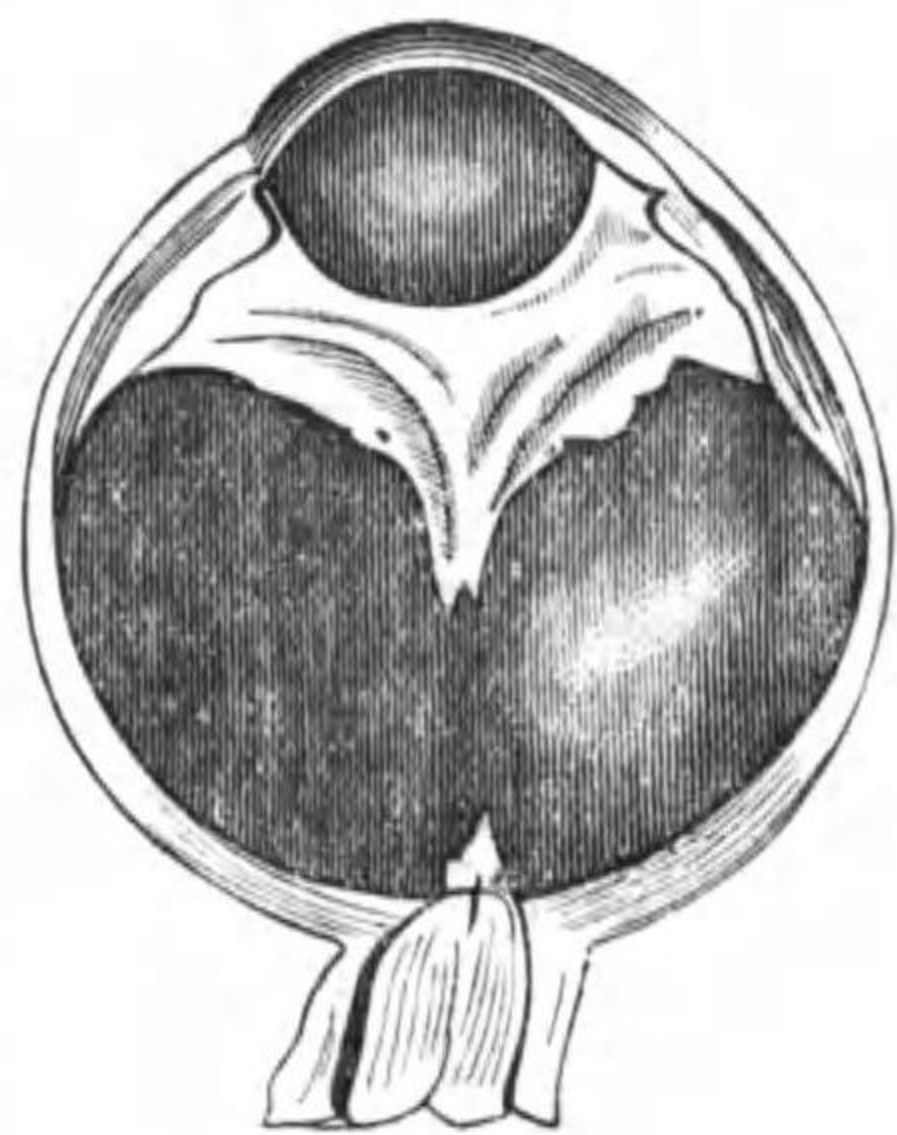
又瞳孔縁ノ輪狀癒着ニ於テ虹彩ノ后方ニ集積セル液固キ膜ニ變シ以テ虹彩面ト水晶囊面トヲ膠着スレハ同一ナル理ニ由テ虹彩脈絡膜炎ニ毛様体炎ヲ合併ス

〔病理解剖〕既ニ論載セル成形成性虹彩炎及ヒ脈絡膜炎ノ諸變化ノ外ニ己ニ初期ニ於テ上脈絡膜ノ神經纖維間ニ細胞ヲ増殖シ他ノ上脈絡膜部ニ淋巴細胞ヲ浸淫シ或ル部ニ於テハ神經上ニ坐スル所ノ細胞群ヲ形成シテ之ヲ壓迫ス然レハ爾他ノ脈絡膜層ハ充血ノ外全ク健全ナル觀ヲ呈ス然レハ「ドイツマン」氏ハ顯微鏡検査ヲ爲シテ全脈絡膜膿球ヲ以テ浸潤セラレ「殊ニ視神經ノ周圍部ニ於テ著シ且ツ」ミクロコッケン「スタヒロコツクス、ピロゲチス、アルブス」ノ竈ヲ含ムヲ發見セリ之カ爲メニ上脈絡膜、睫様ノ膜ニ變シテ遂ニ猶ホ鞏膜ノ如ク肥厚シ内ニ萎縮セル神經ノ一分、極メテ薄細ナル動脈、色素塊及ヒ細胞崩潰物ヲ有ス「ブライレ」及「ヒ」又虹彩及ヒ水晶囊前面ノ膠着ト同時ニ毛様体ヨリ一種ノ滲出物ヲ分泌シ此滲出物水晶体后面ト硝子体トノ間ニ竄入シテ恰モ皿ノ如ク水晶体ヲ盛り速ニ結締織ニ變化シテ大ニ収縮シ之ニ由テ遂ニ毛様体ヲ剝離ス又内障眼手術后ノ虹彩毛様体炎ニ於テハ虹彩、水晶囊及ヒ毛様

体炎性滲出物ト共ニ収縮シテ固キ膜トナリ此膜萎縮シテ常ニ手術創ニ向テ牽引ヲ爲ス又損傷ニ在テモ同シク萎縮セル滲出物常ニ損傷部ニ向テ牽引ヲ爲ス

此時期ニ於テ病ノ停止スルヲ屢之レアリト雖ハ最屢ナル歸轉ハ全然タル眼球癆是レナリ即チ水晶体周圍ノ膜次第ニ萎縮シテ脈絡膜ヲ鞏膜ヨリ剝離シ今ヤ亦タ水晶体溷濁シ全葡萄狀膜萎縮ノ爲ニ房水消失シテ虹彩及ヒ水晶体前進シ前房狭小トナリ角膜ハ變小且ツ扁平トナル時トシテハ前房蓄膿症交番性ニ發生シ亦タ再ヒ消散シ或ハ鬱血セル或ル靜脈破綻シテ前房内ニ小出血ヲ起ス之ヲ前房蓄血症 Hyphaema ト云フ又炎性產生物ノ萎縮ト同時ニ硝子体ハ溶解シ網膜ヲ貫通シテ散蔓シ網膜ハ全ク剝離セラレテ細薄ナル索ニ収縮シ前方鋸齒狀縁ノ方ニ漏斗狀ニ擴張ス網膜脈絡膜間ノ液ハ一半ハ吸収セラレ一半ハ纖維素様物ニ濃縮シテ脈絡膜ノ表面ニ附着ス是ニ於テ眼球ハ直筋ノ牽引ニ由テ四角形扁平ナル小片ニ萎縮ス時トノハ脈絡膜殊ニ其后圍ニ於テ其内層ヨリ纖維狀結締織ヲ新生シ之ヨリ遂ニ骨質ヲ生スルヲアリ「グナツ」如斯ク新生セル骨殼ハ往々頗ル厚クノ鞏膜上ヨリ感觸

第三十九圖



第三十九圖「パーゲンス」氏ニ從フハ虹彩毛様体炎後ノ眼球勢ヲ示ス即チ前房ハ全ク消滅シ虹彩ハ瞳孔領ニ膜ヲ形成シテ角膜ニ密接シ毛様体ハ只櫛狀韌帶ニ由テ鞏膜ト連繫シ他部ニ於テハ脈絡膜ト共ニ赤道部マテ剝離シ水晶体ハ顛側ニ於テ硬キ結締織ノ爲メニ毛様体ヨリ排却セラレ毛様体ハ水晶体ノ後面ヲ圍擁シ硝子体内ニ球狀ニ突出シテ其後面剝離セル網膜ヲ被フリ網膜ハ視神經穿入部ヨリ離斷シテ其部ニ一小片ヲ殘シ向ホ二個ノ小出血ヲ呈シ爾他ノ硝子体腔ハ膠塊ヲ含メリ

ス可ク且ツ解剖スルニ一種固有ナル菱形ヲ呈シ間々「センチメートル」長ク且ツ廣ク其中央索狀ニ收縮セル網膜ニ由テ貫通セラル又脈絡膜ノ表面ニ多少加爾基ヲ沈着スルヲアリ

〔症候〕損傷ニ在テハ通例甚タ劇烈ナリ速ニ虹彩炎ノ諸症候ヲ發スルノ外直ニ毛様体ニ劇痛ヲ發ス殊ニ其部ヲ觸接スレハ然リ若シ異物ノ侵入セルキハ試ニ消息子頭ヲ以テ毛様体部ノ諸點ヲ觸ルニ異物ノ存スル部ハ殊ニ感覺過敏ナルヲ以テ往々其所在ヲ了知シ得可シ其他疼痛ヲ特發シテ患側ノ顛頂部ニ放線ス殊ニ夜間ニ於テ然リ又視力ハ常ニ甚タシク減衰スルハ固ヨリ論ヲ

竣タス

若シ虹彩脈絡膜炎ニ毛様体炎ヲ合併スルキハ其表徴トシテ毛様体部ヲ觸ルレハ疼痛ヲ發シ眼球ハ異常ニ柔軟トナル而シテ虹彩面ノ癒着アレハ「アトロピ」ヲ點眼シテ連綿瞳孔ヲ散大スルニ虹彩恰モ堤防狀ニ前方ニ膨出セス却テ滑平ナリ前房ハ今尙ホ深幽ナルヲ往々尠ナカラス是レ萎縮セル滲出物ノ爲ニ虹彩ノ後方ニ牽引セラル、カ故ナリ然レモ後ニハ房水ノ乾涸スルカ爲ニ淺表トナリ終ニ全ク消失ス若シ網膜剝離スレハ固ヨリ各視力亡失ス

經過 ハ損傷後ニハ常ニ急性ニシテ虹彩脈絡膜炎ヨリ起ル所ノ症ニ在テハ大抵慢性ナリトス

各種ノ虹彩毛様体炎殊ニ異物ヲ殘留スル損傷後ニ起ル所ノ者ハ交感作用ニ由テ他眼ヲ侵襲スルノ傾向大ナリ而シテ此傳搬ハ毛様神經ニ由テ上脈絡膜ヨリ媒介セラル、カ如シ是レ管ニ解剖的檢査「デ、マートツ」「イッノツフ」及ニ由テ明カナルノミナラス間ニ交感性感ハ初メ病ミタル眼ノ損傷セラレシ部ト恰モ同一ナル部ニ發スルニ由テ証ス可シ

小歴史 「マケンチ」氏ハ一千八百四十三年ニ於テ初メテ交感性感眼炎ノ記事ヲ充